国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2013年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001224

国立国語研究所

年報

2013 NINJAL YEARBOOK

国立国語研究所の活動（2013年度）

国立国語研究所研究成果発表会 2014
（2014 年 2 月 2 日：於学術総合センター）

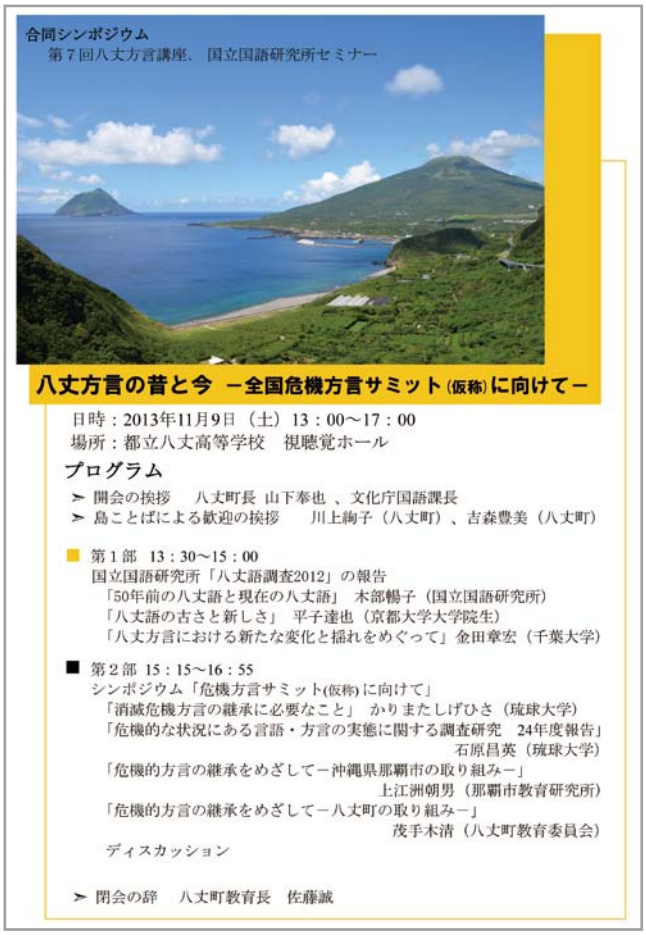
台湾・中央研究院語言學研究所との
研究連携協定署名式典
（2014 年 3 月 7 日：於中央研究院）

国際シンポジウム
"International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages"
（2014 年 2 月 20 日～ 21 日：於国語研）

国際学会
"The 8th International Conference on
Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ8)"
（2014 年 3 月 22 日～ 23 日：於国語研）

国際シンポジウム
"Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages"
（2013 年 12 月 14 日～ 15 日：於国語研）

国際シンポジウム
"The 3rd International Conference on
Phonetics and Phonology (3rd ICPP)"
（2013 年 12 月 20 日～ 22 日：於国語研）



「久米島・島ことば調査のつどい」
（2013 年 12 月 4 日：於久米島町）

「八丈方言の昔と今
－全国危機方言サミット（仮称）に向けて－」
（2013 年 11 月 9 日：於八丈町）

第 7 回 NINJAL フォーラム
「近代の日本語はこうしてできた」
（2014 年 3 月 30 日：於一橋大学一橋講堂）

人間文化研究機構
第 21 回公開講演会・シンポジウム
「海を渡った日本語」
（2013 年 9 月 1 日：於一橋大学一橋講堂）

「国語研の一般公開」
（2013 年 10 月 19 日：於国語研）

「ニホンゴ探検 2013―1 日研究員になろう！」
（2013 年 7 月 20 日：於国語研）

目　　次

2013 年度年報の発刊にあたって …… 1

Ⅰ．概要…… 3
1．国立国語研究所のめざすもの…… 4
2．組織…… 6
⑴　組織構成図…… 6
⑵　運営組織…… 7
運営会議…… 7
外部評価委員会…… 7
所内委員会組織…… 8
⑶　構成員…… 9
専任教員・特任教員…… 9
客員教員…… 10
名誉教授…… 11
プロジェクト PD フェロー…… 11
外来研究員…… 11

Ⅱ．共同研究と共同利用…… 13
1．国語研の共同研究プロジェクト…… 14
基幹型…… 15
領域指定型…… 33
独創・発展型…… 38
萌芽・発掘型…… 40
2．人間文化研究機構の連携研究等…… 44
連携研究…… 44
アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明…… 44
大規模災害と人間文化研究…… 44
日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散…… 45
日本関連在外資料の調査研究…… 45
研究資源の共有化…… 45
3．外部資金による研究…… 46
4．刊行物…… 48
『国語研プロジェクトレビュー』…… 48
『国立国語研究所論集』…… 50
NINJAL フォーラムシリーズ …… 51
5．2013 年度公開中のコーパス・データベース …… 53
6．研究成果の発信と普及…… 56
A．国際シンポジウム…… 56
B．研究系の合同発表会…… 68
C．プロジェクトの発表会…… 79

Ｄ．NINJAL コロキウム …… 92
Ｅ．NINJAL サロン …… 93
Ｆ．その他…… 95
７．センター・研究図書室の活動…… 97
研究情報資料センター…… 97
コーパス開発センター…… 97
研究図書室…… 98

Ⅲ．国際的研究協力と社会貢献…… 99
１．国際的研究協力…… 100
オックスフォード大学との提携…… 100
マックスプランク研究所との提携…… 100
アメリカ議会図書館との研究連携…… 100
台湾中央研究院語言學研究所との研究連携…… 100
国際シンポジウム・国際会議の開催…… 100
英文日本語研究ハンドブック刊行計画…… 100
海外の研究者の招聘…… 101
各国のオーラルヒストリー資料の書き起こしおよびデータのデジタル化…… 102
２．社会貢献…… 102
消滅危機方言の調査・保存・分析…… 102
日本語コーパスの拡充…… 102
多文化共生社会における日本語教育研究…… 102
地方自治体との連携…… 102
訪問者の受入…… 103
学会等の後援…… 103
一般向けイベント…… 103
NINJAL フォーラム …… 103
NINJAL セミナー …… 104
人間文化研究機構関係　公開講演会・シンポジウム…… 104
国語研の一般公開…… 104
児童・生徒向けイベント…… 105
職業発見プログラム…… 105
ジュニアプログラム…… 105
ニホンゴ探検…… 105
３．大学院教育と若手研究者育成…… 105
⑴　連携大学院…… 105
⑵　特別共同利用研究員制度…… 105
⑶　NINJAL チュートリアル …… 106
⑷　優れたポストドクターの登用…… 106

Ⅳ．教員の研究活動と成果…… 107
略歴，所属学会，役員･委員，受賞歴，2013 年度の研究成果の概要，研究業績（著書･編書，論文･

ブックチャプター，データベース類，その他の出版物・記事)，講演・口頭発表，研究調査，学会等の企画運営，その他の学術的・社会的活動，大学院教育・若手研究者育成

Ⅴ．資料…… 191
１．運営会議…… 192
2013 年度の開催状況 …… 192
運営会議の下に置かれる専門委員会…… 193
⑴ 所長候補者選考委員会…… 193
⑵ 人事委員会…… 194
⑶ 名誉教授候補者選考委員会…… 194
２．評価体制…… 194
自己点検・評価委員会…… 194
外部評価委員会…… 195
共同研究プロジェクトの評価…… 196
３．広報…… 196
４．所長賞…… 196
５．研究教育職員の異動…… 198

Ⅵ．外部評価報告書…… 199
平成 25 年度業務の実績に関する外部評価報告書 …… 201
１．評価結果報告書…… 205
平成 25 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果 …… 206
平成 25 年度「組織・運営」,「管理業務」に関する評価結果 …… 233
２．資料…… 245

2013 年度年報の発刊にあたって

独立行政法人から大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移行してから丸 5 年が過ぎた今，1 年前を振り返って 2013 年度の年報をここに発行いたします。

大学共同利用機関としての国立国語研究所（略称「国語研」）は，日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として国内外の大学・研究機関と広範な共同研究プロジェクトを実施し，言語研究の観点から人間文化について理解と洞察を深めることを研究目的としています。国語研は古くから，膨大な量の言語データを収集し大型電子計算機で統計的・数理的に処理する研究手法を先駆的に開拓してきました。この研究方法は現在では，主として〈時空間変異研究系〉における消滅危機言語や全国諸方言の詳細な調査研究と，〈言語資源研究系〉における現代及び過去の日本語資源をコーパス化する研究へと発展しています。これらは日本語の具体的な運用・使用の実態を明らかにし，日本語の多様な姿を示すことを主眼とした研究です。他方，国語研の歴史の中で新しい観点の研究とは，主として〈理論・構造研究系〉における一般言語学を背景とする日本語の仕組みに関する研究と〈言語対照研究系〉における世界諸言語と日本語との比較研究で，これらは日本語話者が脳内に持っている抽象的な言語能力の解明と結びつきます。〈日本語教育研究･情報センター〉は，4 研究系と連携しながら，国語研の伝統的な日本語教育研究に新しいコミュニケーション研究を融合し，外国人への日本語教育の改善に資する成果を提供しています。このように，創設からの長い伝統の中で培ってきた研究と，大学共同利用機関としての新しいアプローチを織り合わせることによって，従来にはない幅広い研究プログラムを展開し，新たな成果を生み出すことが可能になりました。

共同研究と表裏一体となるもうひとつの重要なミッションは，共同利用です。これは，大規模な共同研究から得られた研究成果や，関連する研究文献情報を研究者コミュニティ及び一般社会に広く発信・提供し，研究を促進させることです。そのため，各種の刊行物やコーパス・データベースをオンラインで公開するとともに，一般講演会や地方自治体でのセミナーなどのイベントを開催しています。

2013 年度は，第 2 期中期計画期間の 4 年目にあたり，文部科学省が全国の国立大学及び大学共同利用機関に対して，それぞれの強みや特色を明確化することによって「ミッションの再定義」（機能強化）を行うことを求めた年でした。機能強化は，新生の国語研にはとりわけ重要な課題であり，国際化や社会貢献などの諸活動を充実させるとともに，具体的な成果物を数多く産出することを一年の目標としました。第 2 期の成果は，これから 2015 年度にわたって出てきますが，この年報では 2013 年度に出された成果をご報告いたします。この年報を通じ，国語研の諸活動への忌憚のないご意見，幅広いご支援をお願いする次第です。

2014 年 12 月

国立国語研究所長

影　山　太　郎

I

概　要

I 概　要

1 国立国語研究所のめざすもの

沿革

国立国語研究所は，国語に関する総合的研究機関として 1948（昭和 23）年に誕生した。幕末・明治以来，国語国字問題は国にとって重要な課題であり，様々な立場からの議論が行われてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり，戦後，我が国が新しい国家として再生するに当たって，国語に関する科学的，総合的な研究を行う機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が 1948 年 12 月 20 日に公布施行され，国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後，明治時代から大正，昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や，文語と口語の違いなど）を収拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国語研は廃止され，2009（平成 21）年 10 月 1 日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在，国立歴史民俗博物館，国文学研究資料館，国際日本文化研究センター，総合地球環境学研究所，国立民族学博物館に次ぐ 6 番目の研究機関として再発足し，日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国語研は，日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として，国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し，共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで，日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため，大学共同利用機関への移行にあたっては研究所の英語名称に “linguistics”（言語学）という言葉を加え，National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」，略称 NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは，日本語を人間言語のひとつとして捉え，ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり，そこには，当然のことながら，「国語及び国民の言語生活，並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

とりわけ，第 2 期中期目標期間においては，「日本語研究の国際化」と「社会連携・社会貢献」を大きな目標として種々の活動を展開している。日本語の研究を深めることは，究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ，発展させていくことが国語研の役割である。

2013 年度の活動の概略

国語研では，国内外の諸大学・研究機関と連携して，個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開している。それらの土台となるのは「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて，各研究系・センターで研究テーマを定め，数々の共同研究プロジェクトを実施している。

国際的研究協力では，外国人研究者を専任教員，客員教員，共同研究員として招聘するとともに，オックスフォード大学日本語・日本語学研究センター，ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所との学術提携や，アメリカ議会図書館との研究連携を通して，日本語の国際的研究拠点としての活動を進めている。また，2013 年度にはアジアとの連携を強化するため新たに，台湾中央研究院語言學研究所との研究連携協定を締結した。

社会貢献では，学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきと考え，多くの成果物を電子化し，ウェブサイト上で無償提供している。専門家向けに『国語研プロジェクトレビュー』，『国立国語研究所論集』，『国立国語研究所共同研究報告』などの刊行物，一般向けに『NINJAL フォーラムシリーズ』，『こくごけん・こどもパンフレット』などの冊子，研究資料・研究材料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』，『明六雑誌コーパス』，『日本語歴史コーパス 平安時代編』などのコーパス群，あるいは日本語教育者・学習者向けには『日本語学習者発話コーパス』，『寺村誤用例集データベース』，『複合動詞レキシコン（国際版）』などのデータベース類と，多岐にわたる。さらに対象者別に，国際シンポジウム，コロキウム，チュートリアル，フォーラム，セミナー，ニホンゴ探検など，各種イベントを多数開催した。

また 2013 年度は，大学共同利用機関として発足し 5 年目を迎える節目として，国語研が蓄積してきた共同研究及び共同利用の学術的・社会的成果および国語研の現在の姿を披露する研究成果発表会を開催した。国内外における言語研究の中核機関としての国語研の着実な歩みに多くの方々からお褒めの言葉をいただくことができた。

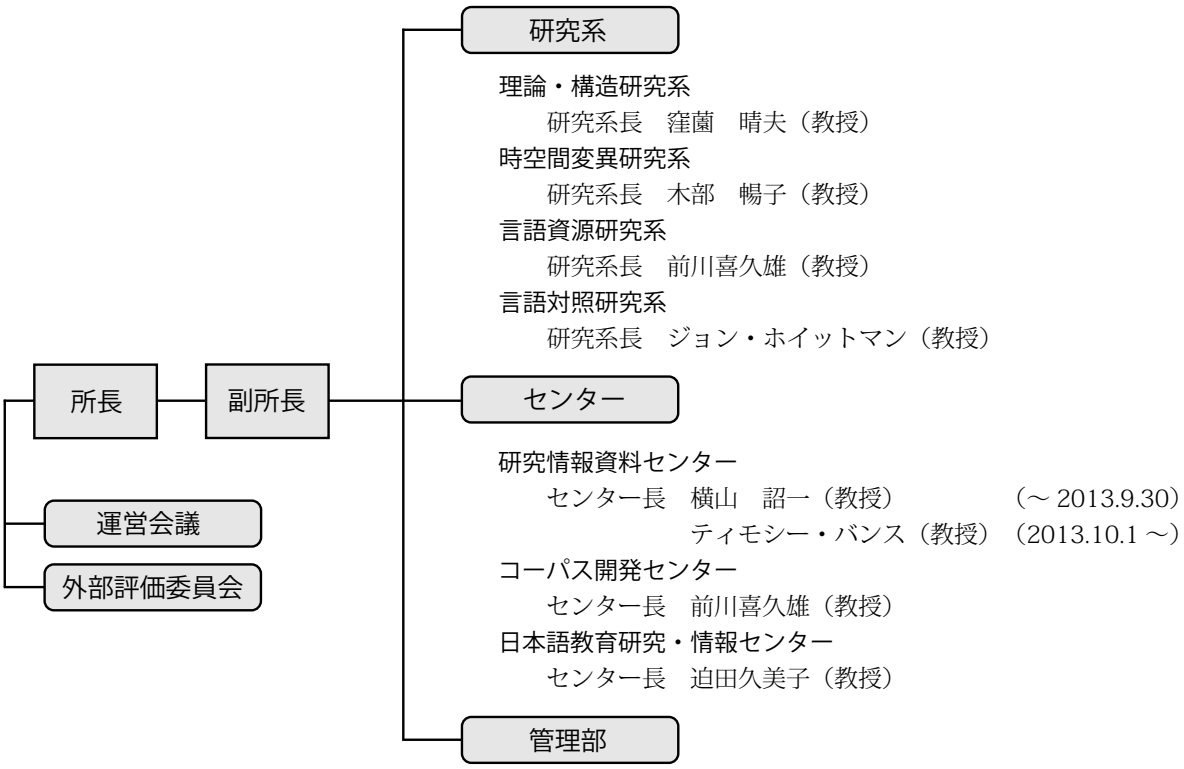
いずれも詳細については各項目をご覧いただきたい。

2 組織

（1）組織構成図

2013 年度

所長　　影山　太郎
副所長　　相澤　正夫（～ 2013.9.30），前川喜久雄（2013.10.1 ～）
　　木部　暢子
管理部長　　山本日出夫



（2）運営組織

運営会議

（外部委員）

梶　　茂樹　　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長 / 教授
工藤眞由美　　大阪大学大学院文学研究科教授
斎藤　　衛　　南山大学人文学部教授
砂川有里子　　筑波大学人文社会系教授
月本　雅幸　　東京大学大学院人文社会系研究科教授
東倉　洋一　　国立情報学研究所名誉教授
仁田　義雄　　関西外国語大学外国語学部教授，大阪大学名誉教授
日比谷潤子　　国際基督教大学学長 / 教授

（内部委員）

相澤　正夫　　副所長 / 時空間変異研究系教授（～ 2013 年 9 月 30 日）
木部　暢子　　副所長 / 時空間変異研究系長 / 教授
窪薗　晴夫　　理論・構造研究系長 / 教授
迫田久美子　　日本語教育研究・情報センター長 / 教授
ジョン・ホイットマン　　言語対照研究系長 / 教授
前川喜久雄　　言語資源研究系長 / 教授 / コーパス開発センター長
横山　詔一　　理論・構造研究系教授 / 研究情報資料センター長（～ 2013 年 9 月 30 日）
ティモシー・バンス　　理論・構造研究系教授 / 研究情報資料センター長（2013 年 10 月 1 日～）

任期：2011 年 10 月 1 日～ 2013 年 9 月 30 日（2 年間）
任期：2013 年 10 月 1 日～ 2015 年 9 月 30 日（2 年間）

外部評価委員会

樺山　紘一　　印刷博物館館長，東京大学名誉教授，元国立西洋美術館館長
林　　史典　　聖徳大学言語文化研究所長 / 教授，筑波大学名誉教授，元筑波大学副学長
仁科喜久子　　東京工業大学名誉教授
門倉　正美　　横浜国立大学名誉教授，日本語教育学会副会長
後藤　　斉　　東北大学大学院文学研究科教授
渋谷　勝己　　大阪大学大学院文学研究科教授，日本学術会議連携委員
早津恵美子　　東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
峰岸　真琴　　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

任期：2012 年 10 月 1 日～ 2014 年 9 月 30 日（2 年間）

所内委員会組織

連絡調整会議（所長，副所長，研究系長，センター長，専任教授，管理部長）
連絡調整会議のもとに，各種委員会を設置

＜管理運営関係＞

〇自己点検・評価委員会
〇情報システム・セキュリティ委員会
〇知的財産委員会
〇情報公開・個人情報保護委員会
〇ハラスメント防止委員会
〇研究倫理委員会
〇施設・防災委員会
〇将来計画委員会

＜学術関係＞

〇共同研究展開委員会
〇成果刊行物編集委員会
・プロジェクトレビュー編集部会
・論集編集部会
・英文ハンドブック編集部会
〇研究図書室運営委員会
・選書部会

＜発信・普及関係＞

〇広報委員会
〇情報発信委員会
・研究資料・データベース部会
・ウェブサイト部会
・展示作業部会
〇NINJAL プログラム委員会
・NINJAL 国際シンポジウム
・NINJAL コロキウム
・NINJAL サロン
・NINJAL チュートリアル
・NINJAL フォーラム
・NINJAL 職業発見プログラム
・NINJAL ジュニアプログラム
・人間文化研究機構公開シンポジウム
・大学共同利用機関協議会関連事業

●安全衛生管理委員会

（3）構成員

所長

影山　太郎　　言語学，形態論，語彙意味論，統語論

専任教員・特任教員

○理論・構造研究系

教授

窪薗　晴夫　　言語学，日本語学，音声学，音韻論，危機方言

ティモシー・バンス（Timothy Vance）　言語学，音声学，音韻論，表記法

横山　詔一　　認知科学，心理統計，日本語学

准教授

小磯　花絵　　コーパス言語学，談話分析，認知科学

高田　智和　　日本語学，国語学，文献学，文字・表記，漢字情報処理

助教

三井　はるみ　　日本語学，社会言語学，方言文法

○時空間変異研究系

教授

木部　暢子　　日本語学，方言学，音声学，音韻論

相澤　正夫　　社会言語学，音声学，音韻論，語彙論，意味論

大西　拓一郎　　言語学，日本語学

准教授

朝日　祥之　　社会言語学，言語学，日本語学

井上　文子　　言語学，日本語学，方言学，社会言語学

熊谷　康雄　　言語学，日本語学

新野　直哉　　言語学，日本語学

特任助教

竹田　晃子　　日本語学，方言学，社会方言学

○言語資源研究系

教授

前川　喜久雄　　音声学，言語資源学

准教授

小木曽　智信　　日本語学，自然言語処理

柏野　和佳子　　日本語学

田中　牧郎　　言語学，日本語学

丸山　岳彦　　言語学，日本語学，コーパス日本語学

山口　昌也　　情報学，知能情報学，科学教育・教育工学，言語学，日本語学

山崎　誠　　言語学，日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

○言語対照研究系

教授

ジョン・ホイットマン（John Whitman）　言語学，歴史比較言語学，言語類型論

プラシャント・パルデシ（Prashant Pardeshi）　言語学，言語類型論，対照言語学

特任准教授

アンナ・ブガエワ（Anna Bugaeva）　言語学，アイヌ語学，言語類型論

○研究情報資料センター

教授（兼任）

横山　詔一（～ 2013.9.30）

ティモシー・バンス（Timothy Vance）（2013.10.1 ～）

特任助教

籠宮　隆之　　音声科学

石本　祐一　　音響音声学，音声工学

○コーパス開発センター

教授（兼任）

前川　喜久雄

特任准教授

淺原　正幸　　自然言語処理，計算言語学，コーパス言語学，心理言語学

○日本語教育研究・情報センター

教授

迫田　久美子　　日本語教育学，第二言語習得研究

野田　尚史　　日本語学，日本語教育学

准教授

宇佐美　洋　　日本語教育，評価論，言語能力論

野山　広　　日本語教育，社会言語学，多文化・異文化間教育

研究員

福永　由佳　　日本語教育学，社会言語学，リテラシー，バイリンガリズム

客員教員（2013 年度在籍者）

客員教授

［理論・構造研究系］

上野　善道　　東京大学名誉教授

中山　峰治　　オハイオ州立大学教授

益岡　隆志　　神戸市外国語大学教授

岸本　秀樹　　神戸大学教授

宮川　繁　　マサチューセッツ工科大学教授

［時空間変異研究系］

井上　史雄　　東京外国語大学名誉教授

狩俣　繁久　　琉球大学教授

金水　敏　　大阪大学教授
真田　信治　　奈良大学教授
田窪　行則　　京都大学教授
［言語資源研究系］
近藤　泰弘　　青山学院大学教授
伝　康晴　　千葉大学教授
ビャーケ・フレレスビッグ（Bjarke Frellesvig）　オックスフォード大学教授
［言語対照研究系］
柴谷　方良　　ライス大学教授
ピーター・フック（Peter Hook）　ミシガン大学名誉教授
ジェームズ・アンガー（James Unger）　オハイオ州立大学教授
［日本語教育研究・情報センター］
白井　恭弘　　ピッツバーグ大学教授
鳥飼　玖美子　　立教大学特任教授
南　雅彦　　サンフランシスコ州立大学教授
客員准教授
［時空間変異研究系］
青木　博史　　九州大学准教授
［言語対照研究系］
ハイコ・ナロック（Heiko Narrog）　東北大学准教授
下地　理則　　九州大学准教授

名誉教授

角田　太作　　2012.4.1 称号授与

プロジェクト PD フェロー（2013 年度在籍者）

高橋　康徳　　理論・構造研究系
黄　賢暻　　理論・構造研究系
小川　晋史　　時空間変異研究系
乙武　香里　　時空間変異研究系
長崎　郁　　言語対照研究系
加藤　祥　　コーパス開発センター
今田　水穂　　コーパス開発センター
中北　美千子　　日本語教育研究・情報センター

外来研究員

中島　和子（トロント大学（カナダ）名誉教授）　受入教員：野山　広
「継承語教育文献データベースの開発―継承日本語教育を中心に―」（2012.10 ～ 2013.9）
Irena SRDANOVIC（リュブリャーナ大学（スロベニア）助教授）　受入教員：迫田　久美子
「日本語教育における語の共起関係」（2012.10 ～ 2013.9）
John PHAN（日本学術振興会外国人特別研究員）　受入教員：ジョン・ホイットマン
「ベト・ムオン語派の歴史比較研究」（2012.11 ～ 2014.11）

津田　智史（日本学術振興会特別研究員（PD））　受入教員：木部　暢子
「新たな視点と調査法に基づく日本語諸方言アスペクトの研究」（2013.4 ～ 2016.3）
儀利古　幹雄（日本学術振興会特別研究員（PD））　受入教員：木部　暢子
「アクセントの平板化現象から見た日本語の韻律的特性の解明」（2013.7 ～ 2014.4）
李　炫雨（国立昌原大学（韓国）教授）　受入教員：野田　尚史
「「から」と「ので」の異同に関する研究」（2013.7 ～ 2014.4）
Patrizia ZOTTI（ナポリ東洋大学(イタリア)エディターアシスタント）　受入教員：浅原　正幸
「コーパスに基づく日本語事象表現の意味論的研究」（2013.9 ～ 2015.8）
Bor HODOSCEK（日本学術振興会外国人特別研究員）　受入教員：田中　牧郎
「コーパスによる日本語のレジスターモデルの研究」（2013.10 ～ 2014.3）
Razaul Karim FAQUIRE（ダッカ大学 現代言語研究所（バングラデシュ）教授）　受入教員：ジョン・ホイットマン
「日本語とベンガル語における関係節の対照的研究：形態統合論的分析」（2013.10 ～ 2014.9）
東　照二（ユタ大学（アメリカ）教授）　受入教員：相澤　正夫
「グローバル化は，日本語コミュニケーションのスタイルを変えているのか？：日本における政治・ビジネスリーダーたちのスピーチ・スタイルの分析」
Elga STRAFELLA（日本学術振興会 外国人特別研究員）　受入教員：前川　喜久雄
「日伊辞典のための「現代日本語書き言葉均衡コーパス」からのコロケーション抽出」
（2013.11 ～ 2015.11）

Ⅱ

共同研究と共同利用

Ⅱ 共同研究と共同利用

本章では，共同研究活動として，(1) 各種の共同研究プロジェクト，(2) 人間文化研究機構の連携研究等，および (3) 外部資金による研究をまとめるとともに，共同利用のための成果として (4) 研究所からの刊行物，(5) 平成 25 年度公開中の各種コーパス・データベース，および (6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム，研究系の合同発表会，プロジェクトの発表会，コロキウム，サロンなどの催しを掲げる。

1 国語研の共同研究プロジェクト

第 2 期中期計画における国語研全体の研究課題は「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」である。これを達成するため，4 研究系と日本語教育研究・情報センターは，それぞれの総合研究テーマを定め，各種規模の共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは，プロジェクトリーダーを中心とし，国内外の共同研究員の参画によって成り立っており，研究系・センター間，プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。

研究課題「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」
各研究系・センターの総合研究テーマ

理論・構造研究系	日本語レキシコンの総合的研究
時空間変異研究系	日本語の地理的・社会的変異及び歴史的変化
言語資源研究系	現代語および歴史コーパスの構築と応用
言語対照研究系	世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明
日本語教育研究・情報センター	多文化共生社会における日本語教育研究

共同研究プロジェクトの類別と主要な成果

共同研究プロジェクトとして，基幹型（17 件），領域指定型（6 件），独創・発展型（3 件），萌芽・発掘型（5 件）の 4 タイプを実施した。

【基幹型】17 件

基幹型プロジェクトは，国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで，日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。4 研究系の専任教授および客員教員のリーダーシップのもと，国内外の研究者・研究機関との協業により全国的，国際的レベルで展開している。

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	**所長**	**影山　太郎**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

本プロジェクトは，語彙の仕組みを，辞書における静的な項目列挙としてではなく，意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え，日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。そのため，理論的分析だけでなく，外国語との比較，心理実験，歴史的変化，方言，コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチを採る。具体的には，ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れるような現象として，(1) 動詞の自他交替と項の変化，(2) 動詞＋動詞型の複合動詞の意味的・統語的特性，(3) 事象表現と属性表現の対比における語彙と文法の係わり，(4) 複雑な語における意味と形のミスマッチや統語構造における語形成など形態論と意味論・統語論の相互関係，という 4 つの事項に着目し，これらを解明することで，日本語から世界に発信できるような一般理論を開発する。

・国語研の事業として提案されている Mouton de Gruyter 社の Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズの一巻として，共同研究メンバーを主要な執筆者とする Taro Kageyama and Hideki Kishimoto（eds.）*The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* を企画し，同社と出版契約を結んだ（2012 年 4 月）。この書物を 2013 年度以降に出版する。

《2013 年度の主要な成果》

2013 年度の成果を，①国際シンポジウム等の研究集会，②印刷出版物，③電子成果物に分けて整理する。いずれも，「国際化」，「成果発信」，および「若手研究者育成」を目指すものである。

① <u>国際シンポジウム等の研究集会</u>

2013 年 12 月 14・15 日に，言語対照研究系と共同で，NINJAL 国際シンポジウム Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages（日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎）を開催し，招待発表（15 件，うち海外から 7 件）と一般公募ポスター発表（15 件，うち海外から 5 件）を開催した。参加者は初日 144 名，二日目 88 名（欧米，アジア，豪州を含む）で，多くの聴衆から “well structured and well organized”，「大変勉強になった」，「刺激を受けた」という評価を得た。また，二日目に，本会議と並行して開催したパネルセッション「複合動詞の習得 ―なぜ日本語学習者は複合動詞で悩むのか―」（発表 5 件，司会　玉岡賀津雄）では，日本語教育関係・応用言語学関係の参加者が約 60 名にのぼった。他に，通常の研究発表会も開催した。

② 印刷出版物

(a) 共同研究者（10 名）の論文に一般公募による若手研究者・大学院生（3 名）の論文を加えた論文集を，影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端 ―謎の解明に向けて―』として，ひつじ書房から出版した（2013 年 12 月）。本書は，日本語の特徴のひとつである動詞連用形＋動詞型複合動詞の諸特性を，言語理論・日本語史・言語対照の観点から総合的に解明しようとする世界初の試みである。本書には，研究の啓蒙・普及の目的のため，従来の日本語研究で等閑視されている外国語文献として Charles Kenneth Parker: *A Dictionary of Japanese Compound Verbs*（Maruzen, 1939）を解題するとともに，オンラインデータベース「複合動詞レキシコン」の解説も掲載した。

(b) 論文集 *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*（他動性と項交替：日本語研究を超えて）を Mouton 社から出版するため，Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen（ハーバード大学，共同研究者）の共編により，現代日本語の統語論・レキシコン・語彙意味論・形態論，日本語史，方言，言語習得，言語類型論の観点から日本語の項交替現象を総合的に論じた論文集（英文 17 編）の原稿をとりまとめ，内部審査と編集を行った。現在最終的な編集および英文校閲を行っている段階である。本書は，一言語の自他と項交替に関する総合的研究書としては他に類のないものである。

(c) Taro Kageyama and Hideki Kishimoto（神戸大学，共同研究者）の共編により，Mouton 社英文ハンドブックシリーズの *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*（合計 21 論文）の執筆･内部審査･編集の作業を進め，一部については既に英語の校閲も済ませた。年度内には，全論文について内部審査を終える。

(d) Max Planck 進化人類学研究所との研究協力による論文集（Bernard Comrie and Andrej Malchukov（eds.）*Valency Classes: A Comparative Handbook. Mouton*）について，日本語に関する論文（Hideki Kishimoto, Taro Kageyama, Kan Sasaki の共著）が審査に合格した（2014-2015 年に出版予定）。

③ 電子成果物

(a) 2012 年度に試験公開したオンラインデータベース「複合動詞レキシコン（開発版）」に所収の「動詞連用形＋動詞型」の複合動詞（いわゆる統語的複合動詞は除外）2,756 語すべてについて，誤植等の訂正を行うとともに，語義定義と用例の外国語訳（ネイティブスピーカーによる英語訳，中国語訳，韓国語訳）を完成させ，2014 年 1 月～ 3 月にかけて全面公開する。本データベースは，プロジェクトリーダーの最新の言語学的分析に基づく内容を提供するもので，日本語研究の専門家と外国人の日本語学習者の両方をターゲットとした，他に類のないものである。

(b) 本プロジェクトが Max Planck 進化人類学研究所に協力した項交替データベース（ValPaL［Valency Patterns Leipzig］Online Database）が 2013 年 11 月に同研究所のウェブサイトで試験公開された。

(c) Oxford Bibliographies in Linguistics に “Word Formation in Japanese” を寄稿し，江戸時代から現在までの日本語形態論に関する国内外の文献解題を行った。

参加機関名	茨城大学，愛媛大学，岡山大学，九州大学，群馬大学，慶応義塾大学，甲南大学，神戸市外国語大学，神戸大学，大阪大学，筑波大学，東京大学，東北大学，同志社大学，富山大学，名古屋大学，北海道大学，北京外国語大学，インディアナ大学，ハーバード大学，ウォーリック大学
共同研究員数	32 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語レキシコンの音韻特性	**理論・構造研究系教授**	**窪薗　晴夫**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

本研究は促音とアクセントの２つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し，世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。いずれのテーマについても広領域の研究者に共同研究者として参画してもらうことにより，通言語的かつ学際的な研究を推進する。本研究は理論・構造研究系が推進する「日本語レキシコンの総合的研究」の一翼を担う一方で，時空間変異研究系が主導する「消滅危機方言プロジェクト」の調査を音韻論的に分析し，また言語対照研究系のプロジェクト研究を音声面から補完する役割を果たす。促音の「っ」は日本語に特徴的な音声要素であるが，本研究は促音が頻出する外来語に着目して分析することにより，日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを，音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明する。本研究では促音を研究している広領域（音声学，音韻論，国語史，言語獲得，日本語教育）の専門家を集め共同研究を推進する。

アクセントについては日本語を特徴づけているアクセント体系の多様性を通言語的視点から考察することにより，（ｉ）日本語諸方言のアクセント研究が一般言語学におけるアクセント研究，類型論研究にどのような知見を与えるか，（ii）逆に一般言語学のアクセント研究が日本語のアクセント分析にどのような洞察を与えるかを明らかにする。

《2013 年度の主要な成果》

①年度初めに今年度の重点テーマを「アクセント・トーンの変化」と定め，年間スケジュールとあわせてプロジェクトメンバーに周知した。この重点テーマを国際シンポジウム（3rd ICPP）スペシャルセッションおよび日本言語学会 147 回大会ワークショップのテーマとして設定し，プロジェクトの成果として多数の研究発表を行った。

②年 5 回の研究成果発表会と国際シンポジウム（3rd ICPP）（計 11 日）を東京（3 回），関西，北陸，東海の各地（各 1 回）で開催した。すべてを公開とした結果，第 1 ～ 3 回発表会だけで合計 246 名（うち共同研究員以外 150 名, 61％）の参加を得た。また発表を公募とした結果, 合計 78 件（全 5 回＋国際シンポジウム）の研究発表のうち 47 件（60％）が共同研究員以外（主に若手研究者）の発表であった。

③アクセントと促音に関する国際会シンポジウム（3rd ICPP）を実施し，国内外から合計 143 名（3 日間で延べ 304 名）の参加を得て，国内の研究成果（合計 25 件の発表，うちプロジェクトから 13 件（口頭 4 件＋ポスター 9 件））を英語で発信した。

④前々年度に開催した国際ワークショップ（GemCon 2011）の成果を編集し，*Journal of East Asian Linguistics* 22 巻 4 号に特集号（Special issue on Japanese Geminate Obstruents）として公刊した。また前年度の重点テーマ（アクセント・トーンの変化）に関して合計 7 本の英文論文を取りまとめ，出版社との交渉に入った。さらに前年度に開始した *The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*（Mouton de Gruyter）については全 19 章の編集作業をほぼ完了し，2014 年度中に刊行される見通しを立てた。

⑤ Oxford University Press のオンライン誌 *Oxford Bibliographic Online*（OBO）に Japanese Accent と題する英文論文を出版し，これまで海外に知られていなかった江戸末期～平成の優れたアクセント研究（約 80 点）を海外の研究者コミュニティーに向けて紹介した。

⑥合計5回(計8日)の研究発表会と3日間の国際シンポジウムにおいて,合計23名の若手研究者(大学院生および非常勤）に発表の機会を提供し，うち20名に対し旅費の支援を行った。また国際シンポジウムでは全国の大学院生を多数アルバイトとして雇用し,参加のための旅費を支援した。 ⑦アクセントおよび促音に関する研究を行っている若手研究者に対して調査旅費・成果発表旅費の募集（公募）を行い，合計3名の大学院生に対して旅費支援を行った。	
参加機関名	青山学院大学，大妻女子大学，大阪大学，大阪保健医療大学，金沢大学，京都産業大学，京都大学，九州大学，神戸市外国語大学，神戸大学，上智大学，筑波大学，東京大学，同志社大学，日本女子大学，広島大学，別府大学，北海道大学，北星学園大学，松山大学，室蘭工業大学，法政大学，立命館大学，早稲田大学，理化学研究所，情報通信研究機構，カリフォルニア大学，慶応義塾大学，愛知学院大学，中央大学高校
共同研究員数	41名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語レキシコン ―連濁事典の編纂	**理論・構造研究系教授**	**Timothy J.Vance**	2010.11-2016.3

《研究目的及び特色》

本プロジェクトの最終目的は，連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は，(1）連濁の由来と史的変化，(2）ライマンの法則，(3）右枝条件，(4）連濁と形態・意味構造，(5）連濁と語彙層，(6）他の音韻交替と連濁の相互作用，(7）アクセントと連濁の相互作用，(8）連濁と表記法，(9）連濁に関する心理言語学研究，(10）方言の連濁，(11）連濁と日本語学習，(12）連濁研究史，等々である。事典には，包括的な参考文献一覧も含める。

本共同研究は，定期的に開催する研究発表会と国際シンポジウムを中心に推進する。研究発表の内容をそのまま事典に取り入れるわけではなく，スタイルの統一性を保証するために，プロジェクト・リーダーは各寄稿者と協力する。なるべく多くの言語学者に本プロジェクトの成果が利用できるように，日本語版と英語版に分割し，別々に出版する予定である。連濁研究に役立つ語彙のデータベースも作成し，公開する。

《2013年度の主要な成果》

1．国際シンポジウム（3rd ICPP）において連濁や有声性に関するセッションを設け，ポスター発表8件および口頭発表3件により本プロジェクトの活動について国内外に普及するように努めた。

2．研究成果発表会を会津若松と金沢で，国際シンポジウム（3rd ICPP）を東京で開催した。研究成果発表会を一般公開した結果，合計43名（うち共同研究員以外14名）の参加者を得た。また国際シンポジウムにおける連濁及び有声性の発表者は，共同研究員以外の10名を含め，12名であった。

3．プロジェクトの最終目的である『連濁事典』の各章の担当者が執筆に着手し，ドイツのMouton社に提出する英語版の原稿を作成中である。

参加機関名	大同大学，千葉大学，山形大学，名古屋大学，神戸市外国語大学，山口大学，金沢大学，文京学院大学，神田外国語大学，国際教養大学，千葉大学，会津大学，京都外国語大学，慶応義塾大学，愛知淑徳大学，常葉大学，カリフォルニア大学，シェフィールド大学，ボルドー第３大学，モンタナ大学，マカオ大学
共同研究員数	26 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	**理論・構造研究系教授**	**横山　詔一**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

日本語の文字表記について，文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に役立つ基礎研究をおこなう。文字環境のモデル化には，(1) 新聞・雑誌・書籍，市販辞書，文字コード規格，各種文字表などによって物的文字環境の実態を明らかにすること，(2) 文字表記を扱う人間の認知機構を精査すること，の双方向のアプローチが必須である。そこでは，文字政策，歴史的背景，出現頻度，接触意識，なじみ，好み，文字使用など，さまざまな要因を考慮しなければならない。たとえば，人間は日常生活において「出現頻度」の高い文字に高い確率で接触する。ある文字に対する「接触頻度」の高低によって，その文字に対する「接触意識」が生じ，それが「なじみ」，ひいては「好み」を形成し，社会的な「出現頻度」に影響を与えると考えられる。さらに，それらの要素以外に，未知の字を既知の字体との類似性判断によって渡りをつける一種の推論作用のほか，文字の規範意識によっても文字生活が影響される可能性がある。このような文字表記の使用実態と使用意識に対する基礎研究は，日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか，日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また，言語行動・意識のデータを解析するための理論等について，統計数理研究所との連携研究をおこなう。海外や理系分野の研究動向にも目を配り，言語変化研究のほか統計科学などにも貢献できる方法論を開拓する。その際に文字環境のモデル化研究で得られた知見を援用する。

このような学術的挑戦は，文字論だけではなく，社会言語科学や計量言語学にも新たな発展をもたらし，既存の分野の枠を超えた学際領域の創出につながる。

《2013 年度の主要な成果》

【共同研究の国際的な推進】

① JIS コードや Unicode など既存文字コードで表現できない仮名・漢字・表記符号について調査をおこなった。国際文字コード標準化活動（コンピュータの文字に関するもの）に関する国際会議（ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG，2013 年 5 月 20-24 日第 40 回香港会議，2013 年 11 月 18-22 日第 41 回東京会議）に高田智和が出席し，古典籍等の未符号化文字（漢字）について，各国の文字符号専門家と意見交換を行った。

②ベトナムのハノイ大学で開催された国際シンポジウムにヴォロビヨワ＝ガリーナ（共同研究員）と横山詔一が招待されて基調講演をおこない，共同研究プロジェクトの成果の一部を紹介・解説した。これが契機となってハノイ大学とのネットワークが新たに形成された。また，ハノイ国家大学外国語大学からもヴォロビヨワ＝ガリーナ（共同研究員）は招待を受け，共同研究プロジェクトにかかる研究発表を行った。

③国立台湾大学に横山詔一と高田智和が招待され，共同研究プロジェクトの成果を紹介・解説したほか，異体字選好実験の予備調査を実施した。共同研究プロジェクトの成果に関する紹介・解説は，現地の大学院生や大学教員を対象に（学部生も参加可能）講義形式で行われた。受講者数は約 130 名。

【電子化資料の基盤整備と共同利用】

①米国議会図書館アジア部との連携により「米国議会図書館『源氏物語』画像（桐壺･須磨･柏木）」を一般公開する（須磨・柏木を追加公開，2014 年 3 月予定）。そのために，原本画像と翻字本文を対照表示させるビュアーの拡張開発を行った。

②研究情報資料センターとの連携により，研究図書室所蔵の日本語史研究資料（文字資料）のうち『明六雑誌』，『古今文字讃』，『聖遊郭（雪月花）』，『傾城買二筋道』，『河東方言箱枕』，『潮来婦誌』などの公開を行った。

【共同研究の学際的な推進】

①統計数理研究所との連携により，言語行動・意識のデータを解析するための理論等について研究を進め，日本行動計量学会の特別セッションにおいて一連の成果発表を行った。

【地域社会への文化的貢献】

①地域社会への貢献として立川市歴史民俗資料館と国立国語研究所の共同企画で「立川の板碑 文字に込められた想い」という講演を高田智和が立川市歴史民俗資料館でおこなった。

②立川市市民交流大学講座で高田智和が「変化する漢字文化」という講演を行った。

【マスメデイアによる研究成果の紹介・解説】

①『古今文字讃』に関する紹介が朝日新聞で報道された。

②中国の新聞「泉州晩報」で立川市の板碑に関する記事が掲載された。

【研究体制の改善】

①横山プロジェクトは鶴岡調査の担当をすべて終了し，2013 年 10 月から井上史雄プロジェクトに研究体制を引き継いだ。

参加機関名	愛知教育大学，帝塚山大学，弘前大学，法政大学，明海大学，東京大学，立命館大学，富山大学，専修大学，大阪大学，名古屋大学，統計数理研究所，岐阜工業高等専門学校，国際交流基金日本語国際センター，キルギス国立民族大学，国立台湾大学，ペンシルベニア大学，ヴィクトリア大学
共同研究員数	24 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	**時空間変異研究系教授**	**木部　暢子**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成された

か，という点でも注目される。

本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行う。

《2013 年度の主要な成果》

・本年度は研究期間の 4 年目に当たる。鹿児島県喜界島（2010 年度），沖縄県宮古島（2011 年度），東京都八丈島，鹿児島県与論・沖永良部島（2012 年度）の言語調査に続き，2013 年度は沖縄県久米島で言語調査を実施した（2013 年 12 月 1 日～ 5 日）。その他，沖縄県与那国島等の言語調査を実施した。

・『八丈方言調査報告書』を刊行し，同時に HP で公開した。すでに公開済みの『喜界島方言調査報告書』，『南琉球宮古方言調査報告書』に次ぐ 3 冊目の調査報告である。

・音声データの公開，ならびに英語での発信の準備を行った。音声データについては，喜界島の基礎語彙の音声データの整備を行った。英語での発信については，『喜界島方言調査報告書』の英訳を行った。公開は来年度の予定である。

・本年度から，調査研究対象を琉球語・八丈語から本土方言へ広げることとした。2013 年度は，宮崎県椎葉村で基礎語彙調査を実施。また，Mouton 社の Japanese Dialects の巻の執筆者を対象とした合同シンポジウム「危機方言を記述する ―記述の枠組みとグロス付け（本土方言向け）―」を開催した。

・本年度から，中央資料庫の未公開データの公開準備を始めた。『日本言語地図』（LAJ）データに関しては，今年度末にウェブで公開（http://www.lajdb.org/TOP.html），談話音声データに関しては，7 地点の音声，方言テキスト，共通語訳の整備を行い，検索システムの試作版を作成した。2 年後を目安に公開する予定である。

・大学院生 2 名を特別共同利用研究員として採用し，方言調査指導を行った。

参加機関名	岡山大学，沖縄国際大学，金沢大学，九州大学，京都大学，首都大学東京，千葉大学，一橋大学，広島大学，別府大学，日本女子大学，琉球大学，東北大学，関西大学，大分大学，広島経済大学，北星学園大学，オークランド大学，フランス国立科学研究所
共同研究員数	32 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	**時空間変異研究系教授**	**相澤　正夫**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

【目的】20 世紀前半から 21 世紀初頭（昭和戦前期から現在まで）の「現代日本語」，特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して，そこに見られる変異の実態，変化の方向性，すなわち「動態」を，従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明することを目的とする。あわせて，現代日本語の的確な動態把握に基づき，言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。

【特色】時空間変異研究系の基幹プロジェクトの一つとして，「時間的変異」と「社会的変異（空間的変異も含む）」の双方の観点からサブテーマを設定し，変化して止まない現代日本語の研究に，従来の枠組みを超えた融合的な新領域を開拓することを最終目標として進める。そのため，近接領域で類似の言語現象を研究していながら，従来は一堂に会して議論をする機会の少なかった国語学，日本語学，言語学，社会言語学など様々な背景を持つ所内外の研究者に，情報交換や相互啓発のための「場」を提供する。

《2013 年度の主要な成果》

・2013 年度は，全体としてほぼ順調にプロジェクトを実施することができた。次の①に示すとおり，過去 4 年間の取りまとめを行うとともに，②③に示すように，今後の研究活動に繋がる全国調査や探索的研究を行うことができた。

①共同研究の成果としてまとめた論文集『現代日本語の動態研究』（相澤正夫編）を 2013 年 10 月 10 日に出版社（おうふう）から刊行した。

②調査会社（中央調査社）に委託し，2014 年 2 月に，世論調査型の全国調査として，2003 年前後に実施した外来語定着度調査を継承する 10 年後の経年調査を実施した。

③「SP 盤貴重音源資料」の文字化資料を分析するためのサブ・プロジェクトを立ち上げ，探索段階の研究発表会を 2 回開催した。

・研究成果の公表については，論文 26 件，図書 2 件，発表･講演 16 件（海外での発表 1 件を含む）があった。

・社会貢献については，医療・福祉，法律・法廷の分野のコミュニケーション向上に資する活動に参加・協力するとともに，関連するマスコミ等の企画にも協力した。

参加機関名	日本大学，大阪大学，神戸松蔭女子学院大学，ノートルダム清心女子大学，横浜国立大学，立命館大学，東京外国語大学，愛知教育大学，千葉大学，愛知学院大学，統計数理研究所，NHK 放送文化研究所，ユタ大学
共同研究員数	17 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
方言の形成過程解明のための全国方言調査	**時空間変異研究系教授**	**大西拓一郎**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

本研究は，日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に，全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進めるものである。日本の方言学においては，言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を 50 年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方，大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は，中心から分布が広がると考える「方言周圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり，現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する，世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。

本研究においては，調査結果ならびに先行研究言語地図（書誌と項目）のデータベースを作成する。これらは，分布変動をとらえるための基盤データであるとともに21世紀初頭の日本全国の方言分布情報として，また，20世紀後半に世界的にも類を見ない大きな展開を示した日本の言語地理学の足跡の記録として大きな意義を有する。

分布を分析した研究成果は論文集として出版する。このことで，伝統を礎としたかつ新たな言語地理学の展開をリードすることになる。

《2013年度の主要な成果》

・方言の形成過程解明のために計画した全国方言分布調査について，全国500地点の調査を達成した。

・研究の基盤となる言語地図項目書誌情報をウェブ上で公開した。
（http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/index.html）

・アジアで開催された言語地理学に関する国際学会で多数の発表（中日理論言語学国際フォーラム；2013年7月1本，台日言語地理学学術交流ワークショップ：2013年8月8本，アジア言語地理学会：2013年6月1本）を行った。

参加機関名	岩手県立大学，岡山大学，金沢大学，関西大学，共愛学園前橋国際大学，岐阜大学，熊本大学，群馬県立女子大学，県立広島大学，呉工業高等専門学校，実践女子大学，広島大学，弘前学院大学，甲南大学，高知大学，滋賀大学，鹿児島大学，秋田大学，松山東雲女子大学，信州大学，新潟県立大学，神戸女子大学，神田外語大学，椙山女学園大学，千葉大学，大阪大学，大分大学，東北大学，徳島大学，日本大学，尾道市立大学，富山大学，福岡教育大学，福岡女学院大学，福島大学，文教大学，琉球大学，仙台高等専門学校
共同研究員数	47名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語変種とクレオールの形成過程	**時空間変異研究系客員教授**	**真田　信治**	2009.10-2013.9

《研究目的及び特色》

アジア･太平洋の各地には，戦前･戦中に日本語を習得し，現在もその日本語能力を維持する人々が数多く存在する。特に台湾やミクロネシアの一部では，母語を異にする人々の間でのリンガフランカとして用いられ続けている。また，台湾宜蘭県には，日本語を上層とするクレオール語が形成されている村がある。本プロジェクトでは，これらの地域（台湾･パラオ･マリアナ諸島･サハリン･中国東北部など）を対象としたフィールドワークによって，現地での日本語変種，およびクレオールの記述・記録を行い，海外における日本語を交えた異言語接触による言語変種の形成過程，ならびにそこに介在した社会的な背景を究明する。なお，台湾宜蘭県における「宜蘭クレオール（Yilan Creole）」は，各世代を通して使用されているが，それを除けば，各地域の日本語話者は現在そのほとんどが75歳以上の高齢に達しており，その日本語運用に関するデータの蓄積と記述は，まさに急務である。

本プロジェクトでは，各地域に居住するかつての日本語学習者がどのような種類の日本語を維持し，運用しているのかを明らかにする。その研究結果は，言語の習得・維持・消滅にかかわる研究に幅広く貢献するはずである。特に，半世紀以上にもわたる第二言語の維持といった事象を取り上げて研究対象としたものは世界的にもほとんど例を見ない。その点でも，本プロジェクトの研究課題は学術的・社会的に重要な意義を持っている。なお，研究成果を，学術的・社会的にアピールするために，「海外の日本語シリーズ」として単行本の形で出版する。また，調査データを「資料集」として刊行する。

《2013 年度の主要な成果》

居住していた日本人の出身地とのかかわりで，台湾日本語は九州方言をベースとしたものに，マリアナ諸島日本語はウチナーヤマトゥグチをベースとしたものに，また，サハリン日本語は東北北海道方言をベースとしたものになっていることが明らかになった。台湾で新しく形成された日本語系クレオール語（「宜蘭クレオール」）に関しては，アタヤル語が基層言語であり，日本語は上層言語（語彙供給言語）として位置づけられることを詳細に解明した。そして現在，傍層言語としての中国語が影響を及ぼしつつある実態を把握した。

なお，本年度の成果の一部として，英文による報告書 *The Japanese Language in Palau*（国立国語研究所）を電子版で公開した。

参加機関名	奈良大学，京都工芸繊維大学，首都大学東京，天理大学，延辺大学，国立東華大学，佳木斯大学
共同研究員数	7 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	**時空間変異研究系客員教授**	**井上　史雄**	2012.4-2016.3

《研究目的及び特色》

国語研では半世紀以上にわたり，山形県鶴岡市，愛知県岡崎市，北海道富良野市において，共通語・敬語の使用に関する追跡調査（経年調査）を行ってきた。同一の調査内容を用いて同一の対象地域・対象者を長期間にわたって調査する，世界に類のないオリジナルな調査研究である。これにより，話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができ，実時間（調査年）と見かけの時間（年齢）の変化や，同一人物の加齢による変化なども知ることができる。ここから得られた共通語化や敬語変化の動向についての豊かな知見は，言語変化一般についても有意義な理論的貢献を行うことができる。本研究は，これらの大規模経年調査の多様なデータを総合的に分析することにより，実証的データに基づいて日本語の変化と日本語の将来を統計的に予測することのできる理論の構築を目指している。

【研究目的】鶴岡第 4 回調査は，2012 年春に終了したが，その電子化とデータベース化は，これからの仕事である。また国立国語研究所の以前の鶴岡・岡崎・富良野などの定点・経年調査による結果も，すべてデータベース化する必要がある。本研究の目的は，これらのデータベース・各種言語資料を高度学術利用することにより，現代日本の地域社会における言語使用・言語意識の実態を記述するとともに，言語の変化と将来予測に関する実証的な研究を行うことにある。また国際的発信，国内一般人への啓発にも配慮する。

【研究の意義】鶴岡・岡崎・富良野の経年調査は，同一の調査内容で，同一の対象地域・対象者に対する大規模な調査であり，世界に誇るべき成果である。話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができる。言語部門ではギネスブックものの，世界にまれな貴重な大規模データである。ただ，これらのデータの分析には，長期間にわたる大勢の協力を必要とするため，未分析のまま保存されている貴重な資料も少なくない。これらを公開して，研究の進展に寄与できる体制を今後，整える必要がある。また各地の調査項目には共通項目があるにも関わらず，これまで相互に結果を参照して比較することがなかった。これらの多様な調査を相互に関連づけて，報告書で扱われた以外の観点からの分析を行う必要がある。

以上のような観点から，本研究では大規模経年調査のデータの整理，分析を行い，その成果や国語研の所有するデータの価値について，国際的に公表，発信する。

《2013 年度の主要な成果》

【全体の見通し】

4 年計画のうち 2 年近くが経ち，全体としては，5 合目にさしかかった状態である。

【調査データの分析】

国立国語研の経年調査データは，原データに簡単にアクセスできないという障害があった。このプロジェクトでは，まず①データを電子化し，関係者に配布した。また論文，学会発表，講演などで，データの有用性を宣伝した。さらに②プロジェクトのメンバーに，多様な分析が可能であることを知らせて，各自が独自の観点から分析できるように企画した。

3 回の時期のずれた調査の結果を生年の「絶対年代移動法」によって，適切に表示できた。また敬語の「成人後習得」late adoption の現象を指摘できた。言語変化論にとって重要な変革を迫るモデルである。世代差という見かけ時間調査と半世紀以上を経た実時間調査とを組み合わせてはじめて得られた知見だった。

【成果の公表】

プロジェクトリーダーの指揮のもと，非常勤研究員の手で集計作業を行って，多くのグラフを作り，口頭発表を経て論文にした。他に資料図集の形で，基礎データを公表した。また，海外での国際会議や現地および近隣諸国の大学，日本語教育関係機関で成果発表を行った。

参加機関名	明海大学，弘前大学，宇都宮共和大学，滋賀大学，神戸松蔭女子大学，大阪府立大学，日本大学，福島大学，ノートルダム清心女子大学，神戸学院大学，立命館大学，京都工芸繊維大学，徳島大学，統計数理研究所
共同研究員数	24 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	**時空間変異研究系客員教授**	**金水　敏**	2013.4-2016.3

《研究目的及び特色》

時空間変異研究系では，空間的変異の研究は進んでいるが，時間的変化の研究は未だ十分でなかった。この点に鑑み，本研究では日本語を中心として時間的変異と空間的変化の両方をつなぐような研究プロジェクトの構築を目指す。そのために，疑問文という日本語研究の中でも必ずしもバランスのとれた研究が進んでいない領域を取り上げ，歴史的研究の充実を目指すとともに，空間的変異

研究との連携の活性化をめざすものである。また疑問文にとって関連の深い名詞節の研究を取り上げている，言語対照研究系の「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」との連携も深めていく。

具体的成果物としては，テーマに関わる論文集の刊行を目指す。

《2013 年度の主要な成果》

①さまざまな方言・言語の研究者をメンバーに加えた。

②種々コーパスを利用したデータの収集・整理を推進した。

③フィールドワークや研究発表に対して支援を行った。

④プロジェクト HP を立ち上げて研究成果の公開を促進した。

参加機関名	大阪大学，琉球大学，大阪府立大学，青山学院大学，麗澤大学，鶴見大学，龍谷大学，関西大学，福岡大学，神戸松蔭女子学院大学，オックスフォード大学，デラウェア大学
共同研究員数	19 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
コーパスアノテーションの基礎研究	**言語資源研究系 教授**	**前川喜久雄**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

共同利用研国立国語研究所においては，コーパスの開発作業はコーパス開発センターにおいて実施するが，そのための基礎研究とコーパスを利用した応用研究は言語資源研究系において実施する。本研究では，コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行う。

先に述べたようにコーパスの価値は代表性とアノテーションの積として定まるが，日本語コーパスの場合，形態素よりも上位の階層に属するアノテーションに関する研究を進展させる必要がある。アノテーションは基本的には言語学の範疇に属する知識に立脚した作業であるが，我が国ではこれまで言語学者（日本語研究者）がコーパスのアノテーションに関与することが少なく，主に自然言語処理研究者の手によってアノテーションの研究が進められてきた。そのため，言語学の観点からすると，仕様に一貫性が欠けていたり，単位の斉一性に問題が生じていたりすることがあった。一方，言語学者の考案する「理論」は品詞分類のような具体的な問題まで含めて，現実の用例をどの程度まで説明しうるかが不明であることが多かった。

本研究の目的は，自然言語処理研究者と言語学者とが協力して，現代日本語を対象とする各種アノテーションの仕様を考案し，検討することにある。

《2013 年度の主要な成果》

①本プロジェクトについては査読論文（国際会議予稿集以外）が少ないことを外部評価委員等から指摘されていたが，本年度は査読論文 3 本が『自然言語処理』に掲載され，さらに『自然言語処理』特集号においてプロジェクト内外 11 篇の論文が査読中である。指摘された問題は解消されたものと考える。また国際誌への投稿も準備中である。

②アノテーションデータの重ね合わせ技術の開発も予定通りに進めることができた。

③サーベイ情報，アノテーションマニュアルの公開も予定通りに実施した。

参加機関名	東北大学，奈良先端科学技術大学院大学，東京工業大学，筑波大学，岡山大学，立命館大学，慶應義塾大学，京都大学，山梨大学，情報通信研究機構，統計数理研究所，科学技術振興機構
共同研究員数	19 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
コーパス日本語学の創成	**言語資源研究系 教授**	**前川喜久雄**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

日本語を対象としたコーパス言語学（コーパス日本語学）は，『日本語話し言葉コーパス』，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の構築によって研究インフラが整いつつあるが，一連のコーパスを徹底的に解析して，コーパス日本語学ならではの研究成果を挙げることは今後に残された課題である。 本研究の目的は，各種コーパスを利用した定量的かつ実証的な日本語研究を幅広く推進して先進的な成果を得，それを学界に周知させることによって，日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることである。この点で本研究は科研費特定領域研究「日本語コーパス」の活動を戦略的に継承するものであり，一種の学会に相当する機能を提供することを目指している。

《2013 年度の主要な成果》

①講座日本語コーパス第 1 巻を刊行した。同 2 巻 3 巻の刊行準備を進めた。
②『音声研究』の特集「大規模コーパスを利用したデータ駆動型音声研究」の企画を進めた。
③第 4 回コーパス日本語学ワークショップを実施し，第 5 回も開催準備中である。
④コーパス日本語学ワークショップの全論文をダウンロード可能とした。
⑤ BCCWJ 関連研究文献リストを公開し，CSJ 関連研究文献リストを拡張した。
⑥ BCCWJ に関する論文の *Language Resources and Evaluation* への掲載が決定した。
⑦予定どおりにコーパス検索技術の講習会を開催した。

参加機関名	愛知学院大学，愛知淑徳大学，大阪大学，千葉大学，上智大学，広島大学，山形大学，神戸大学，早稲田大学，大東文化大学，筑波大学，東京学芸大学，東京女子大学，同志社女子大学，同志社大学，日本大学，法政大学，鳴門教育大学，立正大学，立命館大学，お茶の水女子大学，湘南工科大学，名古屋大学，埼玉大学，北海道教育大学，理化学研究所，統計数理研究所
共同研究員数	42 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
通時コーパスの設計	**言語資源研究系 客員教授**	**近藤　泰弘**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

日本語の史的研究に用いることができる本格的な「通時コーパス」を構築する準備段階として，コーパスの設計にかかわる諸問題について研究する。①コーパスの対象に含める文献資料をどのよ

うにして選定するか，②選定した資料をどのように電子化しどのような情報を付与するか，③古典テキストに対応した形態素解析をどのように行うかなど，通時コーパス設計のための重要問題を中心に，基礎的な研究を展開する。こうした研究は，日本語史上のいくつかの時点の主要資料についてコーパスを試作し，これを活用した日本語史研究を実践することを通して行う。また，コーパスの構築作業における他機関との連携の可能性を探り，コーパス公開のために不可欠な著作権処理の問題についての検討も行い，通時コーパスの構築・公開に向けた諸課題に見通しを付ける。

言語資源研究系の現代語コーパスにかかわる研究と連携を取り，コーパス開発センターで実施中の現代語コーパスの構築作業，著作権処理業務などとも関連付けて研究を進めていく。

《2013 年度の主要な成果》

・研究及びコーパスの試作は順調に進んでおり，計画は十分に達成されている。
・昨年度まで別プロジェクトで実施していた近代語コーパスの活動を取り込むことにも成功し，古代から近代までの「通時」的な研究に展開できている。
・学会，学会誌，図書などバランスよく成果を発表できている。特に，共同研究者が執筆する論文集『コーパスと日本語史研究』の編集と刊行は，本プロジェクトの現段階での到達点を示すものとなり，今後のこの分野の発展に大きく資するものと考える。
・試作中のコーパスも，平安時代の和文がほぼ完成し一般公開できたことで，コーパスを使った日本語史研究が普及していくと予想される。
・鎌倉時代以後のコーパス試作についても作業が進み，通時コーパス構築上の論点は，次第に明確になってきており，次期中期計画で「通時コーパス」を本格的に構築する準備は整いつつある。

参加機関名	群馬大学，恵泉女学園大学，埼玉大学，就実大学，千葉大学，東京外国語大学，東京工業大学，福井大学，青山学院大学，東洋大学，科学技術振興機構，国立情報学研究所，オックスフォード大学，（株）はてな
共同研究員数	21 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究	**言語対照研究系 教授**	**John Whitman**	2012.4-2016.3

《研究目的及び特色》

本研究の目的は日本語とその周辺の言語を主な対象とし，その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を，言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって，東北アジアを一つの「言語地域」として位置づけることである。統語形態論の観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て，日本語に於いても見られる名詞修飾形（連体形）の多様な機能を周辺の言語と比較しながら，その機能と形と歴史的変化を究明する。歴史音韻論の観点からは，日本語周辺諸言語の歴史的再建を試み，東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。平成 25 年からは，アンナ・ブガエワ准教授が中心となる「アイヌ語班」を加え，日本列島において唯一日本語族と共存するアイヌ語族の言語類型論的研究を積極的に行う。

上記の 3 つのテーマに沿って，プロジェクトを「形態・統語論班」「音韻再建班」「アイヌ語班」に分ける。このプロジェクトの大きな特徴は（1）類型論的観点と通時的言語学観点を組み合わせること，（2）言語類型論，国語学（日本語学），言語学理論（統語理論・音韻理論），記述言語学にわたる，幅広い理論・方法論的観点を代表する研究者を共同研究に取り入れることにある。

当然のことながら，研究成果の公表もプロジェクトの目的である。各班別に，年に１回ずつの共同研究発表会（アイヌ語班の場合には２回），３つの国際ワークショップ・シンポジウムと，言語対照研究系の合同研究発表会を行う。そのほか，「形態・統語論班」「音韻再建班」「アイヌ語班」のメンバーはそれぞれ主に下記の４点の海外出版企画で研究成果を公表する。

・*Nominalizations as a source of main clause grammar*（John Benjamins社に提出する予定）　形態・統語論班のメンバー
・*Handbook of Japanese Historical Linguistics*（Mouton 社と契約済）　形態・統語論班，音韻再建班のメンバー
・専門誌 *Korean Linguistics*（Brill 社）の特集号　音韻再建班のメンバー
・*Handbook of the Ainu Language*（Mouton 社に提出する予定）　アイヌ語班のメンバー

《2013 年度の主要な成果》

研究成果公開計画は順調に進んでいるが，*Nominalizations as a source of main clause grammar* と *Handbook of Japanese Historical Linguistics* への，国内の学者の寄稿には相当校閲の時間がかかることが予測される。*Handbook of the Ainu Language* に関しても同様の可能性が予測される。

参加機関名	茨城大学，岡山大学，九州大学，甲南女子大学，札幌学院大学，新潟大学，千葉大学，北海道大学，神戸大学，青山学院大学，静岡県立大学，早稲田大学，大阪大学，筑波大学，東京外国語大学，東京大学，東北大学，富山大学，福井大学，明治学院大学，琉球大学，和歌山大学，和光大学，北海学園大学，オックスフォード大学，オハイオ州立大学，ハワイ大学，フランス国立科学研究所，啓明大学校，北海道立アイヌ民族文化研究所
共同研究員数	50 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	**言語対照研究系 教授**	**Prashant Pardeshi**	2009.10-2016.3

《研究目的及び特色》

述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性が（1）出来事の認識，（2）その言語表現および（3）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約 40 言語を詳細に比較・検討し，それを通して，日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく，言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。さらに，理論研究の成果を日本語教育に還元する目的で，基本動詞の統語・意味的なふるまいを詳細に記述するハンドブックを作成し，インターネットに公開することを目指す。

《2013 年度の主要な成果》

本プロジェクトは，意味的他動性が（1）出来事の認識［「言語・社会心理学班」］，（2）その言語表現および［「言語類型論・対照研究班」］（3）言語習得（日本語学習者による日本語の自動詞と他動詞の習得）［「第二言語習得班」］にどのように反映されているのかを解明することを目標とし，それぞれの目標を班ごとに共同研究を進めた。さらに，理論研究の成果を日本語教育に還元する目的で，基本動詞の統語・意味的なふるまいを詳細に記述するハンドブックの作成・インターネットでの公開作業を進めた。

(1) は研究成果の一部が国際学会での発表，国際雑誌での論文掲載という成果が上がり，次の課題に向けて，引き続きデータ収集を行っている。
(2) は共同研究会での議論等を踏まえ，成果を論文集の形でまとめるところまで進んだ。
(3) インドでのデータ収集，「なたね」の platform で分析・公開が実現できた。類型論の方法論に基づく第 2 言語習得研究は新しい研究分野であり，その方法論について今後も引き続き研究を続ける予定である。
(4) 基本動詞をネットで公開した（http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/，見出し数：17 語）。

また，当初の目標に加えて，言語類型論班のメンバーを中心に，Mouton 社 *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* の英文原稿の執筆計画作成を開始した。

参加機関名	愛知教育大学，筑波大学，大阪大学，岡山大学，小樽商科大学，神戸夙川学院大学，青山学院大学，東京大学，北海道大学，札幌学院大学，京都大学，新潟大学，金沢大学，神戸大学，神田外語大学，東京外国語大学，熊本大学，岐阜大学，拓殖大学，慶応義塾大学，美作大学，滋賀大学，東北大学，同志社大学，龍谷大学，防衛大学校，名古屋大学，麗澤大学，東洋大学，国立民族学博物館，神戸市立工業高等専門学校，大阪女学院大学，三重大学，東亜大学，東京海洋大学，山口大学，武庫川女子大学，東北学院大学，九州大学，亜細亜大学，サンフランシスコ州立大学，ピッツバーグ大学
共同研究員数	83 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
多文化共生社会における日本語教育研究	**日本語教育研究・情報センター教授**	**迫田久美子**	2010.4-2016.3

《研究目的及び特色》

2012 年の国際交流基金の調査では，世界の日本語学習者の数は 398 万人を超え，日本政府は 2020 年を目処に留学生 30 万人計画を発表，近年では看護･介護士の労働力を外国人に期待しており，日本社会の多言語化，多文化化がさらに進むことが見込まれる。

このような現状をふまえ，本プロジェクトでは，第二言語習得研究，対照言語学，社会言語学，心理言語学，コーパス言語学等の幅広い学問領域の連携により，多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐるさまざまな問題について，実証的な研究を行う。特に 2012 年度以降は，日本語教育研究・情報センターに立ち上げられたもう一つの基幹型プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」と共に，センター全体の目標である「日本語学習者に求められるコミュニケーションの要因の解明」を追究する。

《2013 年度の主要な成果》

本プロジェクトの各研究班の年次計画に沿って，成果を総括する。

【非母語話者の日本語の第二言語習得研究】

①国際シンポジウムにおいてコーパスに基づく習得研究の成果発表

2014 年 3 月 22 ～ 23 日，国立国語研究所で開催された第 8 回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ8）において，企画パネル「コーパスと日本語教育研究」を設定し，研究成果を発表した。同時に，一般発表において，本プロジェクトの共同研究者 7 名が学習者コーパスに関連する研究成果を発表した。

②学習者コーパスに基づく習得研究の成果を Mouton 社の英文ハンドブックに提出

Mouton 社の *Handbook of Japanese Applied Linguistics* に 1 章の原稿を提出し，現在，原稿を推敲中である。

③ 7 つの異なる言語を母語とする日本語学習者の調査を 10 地域で実施

2013 年 5 月から 2014 年 3 月にかけて，ロシア語，ドイツ語，トルコ語，タイ語，インドネシア語，英語，中国語の 7 言語を母語とする日本語学習者のデータ収集調査を実施した。各国･地域において，50 名前後の各言語を母語とする大学生に参加を依頼し，日本語能力レベル測定を含む，対話調査，ロールプレイ等の調査を各地域 5 日間，延べ 50 日間，実施した。その結果，収集した学習者は年度末で約 500 名程度となる（2014 年 1 月段階で約 400 名）。

今年度の残り 8 地域および国内の日本語学習者の調査と併せて，来年度は部分的公開の準備に取り掛かる予定である。

【定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究】

既存の学習者データの分析と新たなデータ収集を実施し，研究会を開催した。

散在地域の定住外国人の縦断調査に関しては，N 市において予定通り実施した。また，新たなフィールドである S 市においては，市役所や地元の関係者の支援より，調査を行った。

参加機関名	広島大学，大阪大学，横浜国立大学，広島修道大学，学習院大学，実践女子大学，上智大学，東洋学園大学，名古屋外国語大学，日本女子大学，広島国際学院大学，麗澤大学，筑波大学，サンフランシスコ州立大学，タマサート大学，ピッツバーグ大学
共同研究員数	22 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
コミュニケーションのための言語と教育の研究	**日本語教育研究・情報センター教授**	**野田　尚史**	2013.4-2016.3

《研究目的及び特色》

日本語能力は現実のコミュニケーションの観点から「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの能力に分けられる。しかし，非母語話者の日本語能力についての研究は，これまではこの 4 つを明確に分けず，語彙に関する能力や文法に関する能力というように伝統的な言語学の分類に従って進められることが多かった。

この共同研究プロジェクトでは，「聞く」「話す」という話しことばに関する能力と，「読む」「書く」という書きことばに関する能力を分け，また，「聞く」「読む」という理解能力と，「話す」「書く」という使用能力を分けて非母語話者の日本語能力を研究する。特に研究方法の開発が遅れていて，これまで研究が盛んではなかった「聞く」「読む」という理解能力に焦点を当て，非母語話者の理解過程や理解困難点を解明することを目的とする。

日本語教育研究・情報センターでは日本語非母語話者のコミュニケーション能力を明らかにすることを大きな課題の一つとしているが，この研究は現実のコミュニケーションの中での非母語話者の日本語能力を解明するという新しい方向性を持ったものになっている。

《2013年度の主要な成果》 ・計画どおり，日本国内だけではなく，ヨーロッパを中心に海外でも日本語非母語話者の読解過程についての調査を行った。従来の日本語非母語話者に対する調査は，「発話」や「作文」を使ったものが大半で，非母語話者の日本語産出能力を解明するものであった。このプロジェクトでは，産出能力ではなく理解能力を解明するために，非母語話者に日本語を読んでもらいながら，理解した意味や理解できなかった点などを母語で話してもらい，理解内容を確認する質問にも答えてもらう調査を行った。読解では日本語を学習する前から個々の漢字が表す意味をどれだけ知っていたかによって大きく異なるため，もともと漢字についての知識が豊富な中国語話者と，もともと漢字についての知識がないヨーロッパ諸語の話者などを分けて調査を行った。調査で得られたデータは日本語に翻訳する必要があるなど，研究成果をまとめるのに時間がかかるが，ヨーロッパ日本語教育シンポジウムなどで少しずつ成果を発信しはじめている。 ・コミュニケーションのための言語と教育の研究に関するさまざまな成果を『日本語教育』『ヨーロッパ日本語教育』『日本語学』などの専門雑誌に発表した。また，日本語実用言語学国際会議，OPI国際シンポジウム，スペイン日本語教師会，日本言語学会，関西言語学会，計量国語学会，専門日本語教育学会，小出記念日本語教育研究会などの学会等で講演や研究発表を行い，東北師範大学（中国）や釜山大学（韓国），東京外国語大学などでも講演を行った。さらに，ボランティア日本語教師などに向けて，横浜市国際交流協会，いわき市国際交流協会，ヤマガタヤポニカ，アクラス日本語教育研究所などで講演や研修を行った。	
参加機関名	福井大学，大阪大学，京都教育大学，東京大学，一橋大学，お茶の水女子大学，群馬大学，政策研究大学院大学，首都大学東京，金沢大学，津田塾大学，名古屋外国語大学，関西学院大学，跡見学園女子大学，いわき明星大学，帝塚山大学，情報通信機構，ミュンヘン大学，プリンストン大学，オックスフォード・ブルックス大学，國立政治大學，チュラロンコン大学，パリディドロ第7大学，バルセロナ自治大学
共同研究員数	25名

【領域指定型】6件

国語研が指定した特定のテーマを扱うプロジェクトで，外部の研究者をリーダーとする公募型の共同研究。

<table>
<tr><th rowspan="2">領域指定型プロジェクト</th><th colspan="2">プロジェクトリーダー</th><th rowspan="2">研究期間</th></tr>
<tr><th>所属・職名</th><th>氏　名</th></tr>
<tr><td>言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究</td><td>南山大学教授</td><td>村杉（斎藤）恵子</td><td>2010.11-2013.10</td></tr>
<tr><td colspan="4">《研究目的及び特色》
日本語獲得に関する研究は，過去に優れた記述的研究が行なわれているものの，その多くは，理論的研究の成果に基づいたものではないため，生得的な言語獲得機構がもたらす言語の普遍性に対し新たな知見を与える成果が限られている。また，理論的研究において中心的な役割を果たしてきた研究課題（格，複合名詞句構造，移動規則，削除など）は，これまでの獲得研究においては個別に扱われ，それらの獲得段階にみられる関係についての考察や分析はほとんど行なわれていない。本プロジェクトは，日本語に関する理論研究の成果を詳細に検討し，それを踏まえ，言語知識の普遍的属性を反映していると思われる現象の獲得過程を横断的かつ実証的に分析することを主な目的とする。さらに，日本語を母語とする幼児１名（1歳～３歳）の新たな縦断的発話コーパスの構築も行い，記述的な側面での貢献も目指す。本研究の主な意義は，以下の３点である。①日本語に関する理論研究を踏まえた実証的研究を行なうことにより，これまで明らかにされていない現象の獲得過程を明らかにし，言語獲得理論の構築に寄与する。②日本語に関する理論研究を獲得の観点から考察することにより，言語理論研究に対して示唆を与える。③広く知られている幼児の誤用（格の誤用，自動詞と他動詞・使役動詞の代替誤用，複合名詞句内の「の」の過剰生成等）に対し，理論的研究の成果に基づいた新たな示唆を与える。</td></tr>
<tr><td colspan="4">《2013年度の主要な成果》
言語知識の普遍的属性を反映していると思われる現象の獲得過程について，(1) 横断的実験研究として，日本語における項削除，wh疑問文，かき混ぜ文について，ならびに，(2) 縦断的観察研究ならびにコーパス分析として日本語を母語とする幼児によく観察される「の」の過剰生成，格助詞の誤用，複合述語文の構造と誤用，幼児の主節不定詞現象について，理論的研究・獲得研究を実施し，それらにみられる統語的性質と獲得過程を解明した。成果物として「Linguistic Variations within the Confines of Language Faculty: Studies in the Acquisition of Japanese and Parametric Syntax」及び「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」としてまとめた。</td></tr>
<tr><td>参加機関名</td><td colspan="3">神戸大学，神戸大学，東北大学，南山大学，三重大学，福岡大学，金城学院大学，大阪大学，横浜国立大学</td></tr>
<tr><td>共同研究員数</td><td colspan="3">11名</td></tr>
</table>

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発	**東京大学教授**	**峯松　信明**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本研究は，日本語音声教育の発展に寄与することを目的とする。学習者は上級になるほど自然なアクセント・イントネーション習得を望んでいるが，従来体系的な教育が多くの機関で行われず，教材が不足し，教授法が未確立である。我々は，少なくとも共通語（東京方言話者の）アクセントに関する情報を学習者に与えるべきとの立場に立ち，比較的変形が規則的な用言のアクセント教育を支援する。なお既存のアクセント辞書は，辞書形のアクセント型が主たる記述で，アクセント変形は規則の例示があるのみで学習者にとって理解しにくく，また高価である。そこで基本活用形に関して，アクセント変形を視覚的，網羅的，聴覚的に呈示する無償のオンラインアクセント辞書を開発する。次に，基本活用形以外の複雑な後続語表現に対しても，そのアクセント型を示すモジュールを開発する。更に，用言以外の任意の文入力に対して，それを読み上げた時に予想されるピッチパターンを，アクセント変形を考慮した上で呈示する韻律読み上げチュータも開発する。この韻律読み上げチュータの開発には高精度なアクセント変形予測モジュールが必要となるが，これは，機械学習を用いて実装する。これらの辞書やモジュールは，東京方言話者ではない母語話者，非母語話者教師自身の参照用としても有用である。本辞書は規範となるアクセント情報を提供するが，アクセントは揺れを有するのも事実である。日本語話し言葉コーパスを用いた揺れの実態調査を行ない，辞書記載に反映させる。最終的には，本アクセント辞書・読み上げチュータを用いた音声教育に関する講習会を国内の地方大学，更には海外の日本語教育機関にて行ない，音声教育・韻律教育の普及に務める。

《2013 年度の主要な成果》

2012 年度までに構築した辞書・ツールの教育利用に関して，地方大学，更には海外の日本語教育機関など 10 都市，海外 17 都市で講習会を実施した。また，辞書・ツールの拡張として，(1) 要望の高い教科書についても採択した，(2) 用言だけでなく，名詞のアクセント情報も検索できるようにした，(3) Web 辞書・ツールの多言語化，(4) アクセント変形やアクセント揺れに関する情報提供を行なうページを追加した。OJAD へのアクセス数は公開以来約 8 万に達した。

参加機関名	東京大学，東京外国語大学，早稲田大学，東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校
共同研究員数	9 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化	**宇都宮大学 准教授**	**森　大毅**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

音声が伝達するパラ言語情報および非言語情報は，音声学・語用論を含む言語学だけでなく，音声認識・理解・合成を含む知能情報学，心理学・行動科学などの多彩な学問分野において強い関心が向けられており，パラ言語・非言語情報のアノテーションを含む音声言語資源の整備は極めて重

要である。しかし，このような言語情報を超えたアノテーションの研究は未成熟であり，研究コミュニティ（学問分野・流派）や個別のコーパス開発の枠を超えた共通のディシプリン構築が喫緊の課題である。

本研究は，発話の意図・態度，話者の感情状態，話者の個人性などに代表される，パラ言語情報および非言語情報に関与する基本概念として，(1) 何が含まれ，(2) それらの本質は何か，を整理し体系化することを目的とする。

《2013 年度の主要な成果》

基本概念タグ入力支援ツールを，Ajax 技術およびダイナミック HTML 技術に基づく Web アプリケーションとして開発し，本共同研究プロジェクトのウェブサイト上（http://nvc.speech-lab.org/taghelper/）に構築した。本ツールは，リレーショナルデータベースシステムをバックエンドとして備えるため，作業者が追加した属性はただちにデータベースに反映され，他の作業者にも利用できるタグとなる。本ツールにより生成された基本概念タグを，文献管理システム Mendeley を利用して文献データに記録し，共同研究プロジェクトメンバー間で共有できるシステムを構築した。

本プロジェクトの研究成果を，書籍「音声は何を伝えているか ―感情・パラ言語情報・個人性の音声科学―」（日本音響学会 編，森 大毅，前川喜久雄，粕谷英樹 共著，コロナ社音響サイエンスシリーズ，2014 年刊行）としてまとめた。本書籍の第 1 章「音声による情報伝達」では，本プロジェクトの主要テーマである「パラ言語情報・非言語情報の体系化」の検討の成果を，非専門家にもわかりやすく解説した。第 2 章「感情」，第 3 章「パラ言語情報」，第 4 章「話者の個人性」は，パラ言語情報および非言語情報に関する個別研究課題についてより深く掘り下げ，当該分野の研究の初学者から専門家までの広い読者の理解を深める内容となっている。

参加機関名	宇都宮大学，京都大学
共同研究員数	5 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究	**神戸大学教授**	**松本　曜**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

今までの移動表現の類型論的研究においては，ダイクシス動詞が果たす役割について正当な注目がなされてこなかった。しかし，日本語などの言語の移動表現の性質はダイクシスを無視しては明らかにできない。本研究の目的は，そのダイクシス動詞の役割に注目することにより，日本語の性質がうまく捉えられるような，移動表現の新しい類型論を打ち立てることにある。

本研究の特色として，通言語的な実験的研究を行うことが挙げられる。このような手法は Max Planck Institute などで意味の類型論的研究において用いられてきたものであるが，日本国内ではあまり例を見ないものである。その調査をもとに，各言語（特に日本語）が，(1) どのような場合にダイクシスを表現し，どの場合に無視するか，(2) 表現する場合に，移動の要素（様態，経路）との競合の中で，どの要素によって表現するのか，の二点を明らかにする。このような詳細な研究は，日本語の特色に迫る上で重要な意味を持つ。

最終的には，日本語，英語のどちらか，あるいは両方で研究書を出版することを目標とする。取りまとめ期間終了前には，少なくとも一部の論文の初稿を完成させ，出版を具体化させる。そのような出版は，日本における恐らく最初の本格的な実験的データに基づく類型論研究の成果として，

学術的に大きな意味を持つと思われる。

《2013 年度の主要な成果》

世界の 18 の言語の移動表現の比較研究（今までの研究とは異なり，様態，経路，ダイクシスの三つについて，ビデオを用いた実験研究）を行った結果，(1) 経路・ダイクシスの表現位置による類型，(2) 様態，経路，ダイクシスの表現頻度による類型，について考察した。たとえば，様態，経路，ダイクシスの表現頻度に関して諸言語に大きな差異が見出された。英語は様態に言及する頻度が高いのに対して，日本語はダイクシスに言及する頻度が高い。このような差は，従来言われていたようなレトリックの問題と言うよりも，言語化に課せられた条件と表現手段の違いの反映と考えられる。これらの成果は国際学会などで発表した。また，移動表現に関する膨大な文献目録をプロジェクトの Web サイトに掲載した。

参加機関名	上智大学，大阪大学，神戸大学，東京大学，東京外国語大学，鳴門教育大学，防衛大学校，神田外語大学，神戸市立工業高等専門学校，滋賀大学，慶應義塾大学，岐阜大学，関西大学，内蒙古大学，リヨン第 2 大学，西アフリカ・カトリック大学，ナポリ東洋大学
共同研究員数	17 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究	**北星学園大学 教授**	**柳町　智治**	2011.10-2014.9

《研究目的及び特色》

人々の実際の会話には数多くの，発話の繰り返し，言いさし，言いよどみ，重なり，ポーズといった現象が見られる。こうした現象は，本来完全であるはずの発話が不完全な形で産出された際の「ノイズ」などではない。むしろこれらは，近年の相互行為，会話分析の研究が明らかにしているように，「参加者間の会話への参加が微妙に調整されながら組織されていること」を強い形で示している。本プロジェクトの目的は，以上の視点から，人々がどのように他者と協働的に個々の相互行為に参加し，社会的実践を行っているのかを明らかにすることにある。

さらに，近年では，人々の相互行為を発話以外のリソースも含め捉えることの重要性も議論されている。「言語，非言語，人工物は，並列しお互いに意味を与え合いながら人間の行動をかたち作っている」（C. Goodwin 2000）という「マルチモダリティ」の分析視点である。本プロジェクト研究においても，文脈中の諸リソースがどのように母語話者および第二言語話者による相互行為の組織化に関わっているのかを日本語のデータをもとに解明していく。

本プロジェクトでは，以上のような視点から母語話者や第二言語話者のコミュニケーションを分析考察し，その成果を学会発表，公開研究会，論文発表等を通して，コミュニケーション研究者や日本語教育関係者に対して発信していく。これにより，日本語によるコミュニケーションの実態の実証的な解明につなげていくとともに，第二言語としての日本語の教育・学習に関する具体的方策の提言を行っていく。

《2013 年度の主要な成果》

・2012 年度に比べ，国内外の査読付き学会誌に採択された論文数を増加させることができた。
・教育関係者に対する情報の発信，相互の連携も，各種発表，ワークショップ等を通して増加強化することができた。

参加機関名	大阪大学，名古屋大学，関西学院大学，関西大学，近畿大学，東京国際大学，北星学園大学，北海道大学，早稲田大学，大月市立大月短期大学
共同研究員数	8 名

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築	**実践女子大学 教授**	**山内　博之**	2011.10-2014.9

《研究目的及び特色》

現在の日本語教育における文法シラバスでは，初級で助詞や活用などの日本語の基本的な文型に関わる要素をひと通り教え，中級以降では複合辞や機能語を教えるという文法観があると言われている。この文法観の影響が大きいのは，現時点でもっとも普及している『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）や，世界で 50 万人以上が受験する日本語能力定試験の文法観でもあるからである。ただ，この文法観は必ずしも客観的なデータに基づいて導かれたものとは言えないのが実情である。また，一部の研究者からは，受身形などは初級の文法項目では難しすぎるという批判も出ている。データの整備が進み，比較的規模の大きい学習者コーパスが利用できるようになった今，学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙･文法シラバスを構築する意義は大きい。さらには，BCCWJ など日本語母語話者コーパスも援用して，日本語母語話者の使用実態も考慮に入れた語彙・文法シラバスの構築を目指す。その具体的な成果として，新たな語彙・文法シラバスの提案を含む「（仮）現場に役立つ日本語教育研究シリーズ」を出版する。

学習者コーパスは，第二言語習得分野ではよく用いられているが，使用者が限られており，日本語文法研究や実際の日本語教育に役立つところまでの広がりは十分とは言えない。学習者コーパスによって見出された日本語習得の難易度は，現実の日本語教育に貢献されるべきであり，また，貢献してこそ「日本語学習者会話データベース」など学習者コーパスの意義が広く認知されると言える。本共同研究では，日本語教育文法，第二言語習得，日本語教育方法論，学習ストラテジー，学習ビリーフなど，日本語教育における幅広い分野の研究者が共同で学習者コーパスを用いて研究を行う。目標は，日本語習得の難易度を考慮した語彙・文法を収集し，それらを基に日本語教育における初級・中級・上級シラバスを構築することである。

《2013 年度の主要な成果》

・共同研究発表会は，海外も含め年 4 回と積極的に開催している。
・2013 年度は 2 月 22 日に公開シンポジウムを開催し，当日の発表などをもとに，2015 年春にはシリーズ第 1 巻の刊行が予定されている。本プロジェクトの成果として，第 2 巻以降も順次刊行を進めていく予定である。

参加機関名	埼玉大学，関西学院大学，北見工業大学，首都大学東京，一橋大学，東洋大学，岡山大学，関西学院大学，金沢大学，群馬大学，広島市立大学，広島大学，山口大学，実践女子大学，神戸女学院大学，相模女子大学，筑波大学，帝塚山大学，福岡女子大学，名古屋外国語大学，明海大学，鳴門教育大学，京都教育大学，香港中文大学文学部，チュラロンコン大学
共同研究員数	36 名

【独創・発展型】3件

独創性に富む斬新なテーマを扱う中小規模プロジェクト。

<table>
<tr><td rowspan="2">独創・発展型プロジェクト</td><td colspan="2">プロジェクトリーダー</td><td rowspan="2">研究期間</td></tr>
<tr><td>所属・職名</td><td>氏　名</td></tr>
<tr><td>複文構文の意味の研究</td><td>理論・構造
研究系客員教授</td><td>益岡　隆志</td><td>2010.11-2013.10</td></tr>
<tr><td colspan="4">《研究目的及び特色》
日本語の複文の研究は単文の研究に比べ個別的な研究に偏りがちな傾向にあり，その進展は十分なものとは言いがたい。その現状を踏まえ，本研究では，日本語の複文研究に携わっている研究者の共同研究により，複文の総合的研究を行う。
本共同研究は，様々な分野・地域の研究者をつなぐ「交流・対話の場」とし，個別的なテーマに絞り込むのではなく，総合的なテーマを設定し，多様な研究の方向へ発展させることを目指す。</td></tr>
<tr><td colspan="4">《2013年度の主要な成果》
本プロジェクトの活動の成果をプロジェクトの班に対応する4つの部（第1部「連用複文・連体複文編」，第2部「文法史編」，第3部「コーパス言語学・語用論編」，第4部「言語類型論・対照言語学編」）で構成した論文集（『日本語複文構文の研究』（ひつじ書房））の形で刊行した。</td></tr>
<tr><td>参加機関名</td><td colspan="3">学習院大学，首都大学東京，筑波大学，名古屋大学，神戸市外国語大学</td></tr>
<tr><td>共同研究員数</td><td colspan="3">6名</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">独創・発展型プロジェクト</td><td colspan="2">プロジェクトリーダー</td><td rowspan="2">研究期間</td></tr>
<tr><td>所属・職名</td><td>氏　名</td></tr>
<tr><td>日本語文法の歴史的研究</td><td>時空間変異
研究系
客員准教授</td><td>青木　博史</td><td>2010.11-2013.10</td></tr>
<tr><td colspan="4">《研究目的及び特色》
本プロジェクトは，日本語の歴史に正面から取り組む研究である。歴史的変化という観点から日本語のしくみを考え，言語の構造を明らかにすることを目的とする。
言語のしくみを考えるにあたって歴史的観点からの研究は必要不可欠なものであるが，中でも文法に関する研究は，現代語の記述に対しても有効にはたらくものとして重要である。本プロジェクトは，古典語における単なる観察・記述にとどまらず，現代語（もちろん方言も含む）までを視座に収めながら歴史変化を描く研究，あるいは現代語との対照を意識しながら理論的にも有用な研究を目指していく。
これらの研究成果については，国内外の学界に向けて広く発信していくものとする。</td></tr>
<tr><td colspan="4">《2013年度の主要な成果》
・研究発表会を1回，研究成果報告会を1回，開催した。
・『日本語文法史研究2』（ひつじ書房）の編集を行なった。刊行は，2014年10月の予定。</td></tr>
<tr><td>参加機関名</td><td colspan="3">愛知県立大学，國學院大學，九州大学，実践女子大学，成城大学，聖心女子大学，千葉大学，東洋大学，名古屋大学，福岡大学，早稲田大学</td></tr>
<tr><td>共同研究員数</td><td colspan="3">10名</td></tr>
</table>

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化	**言語資源研究系 客員教授**	**伝　康晴**	2011.11-2014.10

《研究目的及び特色》

近年の電子化文書の普及により，書き言葉コーパスの構築は飛躍的な発展を見せている。言語資源研究系・コーパス開発センターでは，1億語を超える規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を開発し，さらに100億語を超える規模のWebコーパスの開発を目指している。これに対して，話し言葉コーパスは，音声収録・転記など開発の初期段階での負担が大きく，学会講演や模擬講演などの独話を中心とする『日本語話し言葉コーパス』を除いて，大規模なものは存在しない。とくに我々の日常の言語行動の中心である会話に関しては，個々の研究プロジェクトごとに小規模なデータを独自に収集・利用している状態を脱していない。

本研究では，これに対する一つの解決策として，既存の会話コーパスの共有化という方式に着目する。小規模データを所有する研究プロジェクトは多くあり，それらは音声収録・転記の段階を終え，負担の大きい初期のハードルをクリアしている。しかし，転記基準は不統一であり，韻律情報や発話機能など会話研究に必要な基本情報は必ずしも完備していない。そこで，これらの基本情報に関する共通のアノテーションを施し，相互利用可能な形でデータを共有することを目的とする。

将来的には，より大規模な会話コーパスの開発を目指し，言語資源研究系･コーパス開発センターが推進しているKotonoha計画の「対話・雑談」コーパスの構築へとつなげたい。

《2013年度の主要な成果》

①『千葉大学3人会話コーパス』『日本語話し言葉コーパス(対話)』『宇都宮大学音声対話データベース』に対して，CSJ方式・会話分析方式の転記を作成した。

②隣接ペア・遡及的連鎖のタグ付けを試行し，仕様を策定した。

③以上の成果，および，メンバー各自の保有するコーパスの分析に基づく研究成果を国内外の論文10編，図書の章1編，発表・講演29件として公表した。

④若手研究者3名を参画させ，13件の研究成果を得た。

⑤公開発表会によって成果を公表するとともに，他のプロジェクトと共催で公開シンポジウムを開催した。

参加機関名	宇都宮大学，関西学院大学，追手門学院大学，慶應義塾大学，広島国際大学，広島女学院大学，三重大学，早稲田大学，千葉大学
共同研究員数	10名

【萌芽・発掘型】5件

研究系・センターの枠を超えた新たな研究領域の創成が期待されるプロジェクト。

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
会話の韻律機能に関する実証的研究	**理論・構造 研究系准教授**	**小磯　花絵**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本研究の目的は，音声コーパスに基づく定量的分析を通して会話相互作用における韻律の特徴・機能を実証的に解明することである。会話における韻律の特徴や機能を検討する際，会話音声のみを分析対象とする従来の研究方法に限界があることを踏まえ，本研究では，同一話者による会話と独話を対象に韻律（句末音調や声の高さ・大きさ・速さ・ポーズ・言い淀みなど）の傾向を比較し，両者の類似点・相違点などを明らかにした上で，会話における韻律機能を会話固有の機能（話者交替や相槌など話者間の相互作用に関連する機能）と，会話・独話を含む話し言葉一般に見られる機能（統語構造や談話構造など多様なレベルの情報の終了性・継続性に関する表示機能など）に分けて捉え直す。具体的には，(1) 主に統語構造（従属度の異なる3種類の節単位情報や挿入構造・統治構造など）・談話構造（数段階の切れ目の強さで認定される談話境界情報）との関係から会話と独話の韻律の比較を行い，両者の類似点・相違点を体系的に明らかにすると同時に，(2) 会話研究の中で指摘されてきた個別現象（例：発話権保持のために文末のあとポーズを置かず文末から次の文頭まで発話速度を上げて発話する現象など）に着目して会話と独話の比較を行うことによって，韻律の機能について総合的に検討する。また分析に利用する『日本語話し言葉コーパス』のうち対話関連情報を中心に一部拡張・修正した上で，各種情報を統合したRDB形式のデータを構築して一般に公開する。

《2013年度の主要な成果》

最終年度の成果取りまとめとして，シンポジウム「コーパスに基づく日本語自発音声の韻律研究の展開」（音声学会第328回研究例会，2013年12月7日，日本大学）を企画し，次の成果について報告した。

①上昇調・上昇下降調などの複合句末境界音調の発言継続表示機能

②複合句末音調のピッチレンジ制御に関わる要因

③発話中のF0に関わる主に統語的要因

④日本語話し言葉コーパス』のリレーショナルデータベース（CSJ-RDB version 1.0）の設計
（分析の基盤として本プロジェクトが主体となり構築し2012年度末に一般公開したデータベース）

またCSJ-RDBの一般公開を受け，利用に関する講習会を，独創・発展型共同研究プロジェクト「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」（リーダー：伝康晴）との共催で次の通り2回開催した。

① CSJ-RDB 講習会 初級編 2013年6月7日 13:00 ～ 18:00

② CSJ-RDB 講習会 中級編 2013年6月8日 13:00 ～ 18:00

参加機関名	京都大学，広島大学，早稲田大学
共同研究員数	5名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
首都圏の言語の実態と動向に関する研究	**理論・構造研究系助教**	**三井はるみ**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

首都圏の言語は多様性・多面性に富むが，研究対象としては，それぞれの方法論にしたがった角度から部分が切り取られ，分析が行われてきた。これまでの代表的な研究は，(1) 近世期の江戸語から東京語がどのように成立したかを捉える「東京語」研究，(2) 伝統的地域方言としての関東方言・東京方言を記述し，分布と変化を捉える「東京方言」研究，(3) 社会調査の手法を用いた大規模調査による「都市言語」研究，に大別される。さらに 1990 年代後半以降は，「首都圏」という地域を措定して，その内部における言語の実態と動向を，背後にある言語意識とともに捉えようとする「言語動態」研究が現れた。

これらの研究はそれぞれに成果を挙げ，知見を蓄積してきた。しかし，多様・多面的である首都圏の言語の全体像を見通すためには，個々の研究がそれぞれに精緻化を図るだけでなく，再びそれらを総合する必要がある。そのためには，それぞれの方法論による研究成果を相互に参照し，取り入れ，首都圏の言語の実態と動向を総合的に捉えることが求められる。

本研究では，言語構造と動態の両面にわたって，首都圏の言語の実像を多角的重層的に把握し，この地域の言語を対象とした，記述的研究，言語地理学的研究，社会言語学的研究，計量的研究の相互乗り入れを図り，首都圏の言語の総合的研究の基盤を築くことを目的とする。

首都圏の言語の多様性がどのように存在し，生まれつつあるか，具体的なケースから明らかにする。そのための一つの観点として，現代首都圏における地域差がどのような言語項目・言語意識に見られるか調査により把握する。

《2013 年度の主要な成果》

・2013 年 6 月 30 日に，プロジェクト成果公開サイト（http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/）を開設し，「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」（Web 言語地図），「東京のことば研究者インタビュー」（文字起こし付き動画），「首都圏の言語に関する研究文献目録」（検索機能付き），「東京語アクセント資料 データ版」（検索機能付き），「研究成果」の五つのコンテンツを公開した。

・Urban Language Seminar 11（第 11 回国際都市言語セミナー，広島市文化交流会館，2013 年 8 月 17-18 日）において，首都圏言語に関するパネル発表を企画し，4 件の口頭発表と 2 件のポスター発表を行った。

・2014 年 2 月に，論文集『首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 首都圏言語研究の視野』（国立国語研究所共同研究報告 13-02）を，冊子体と pdf 版で刊行した。別冊として，吉田雅子・三樹陽介（編）『首都圏の言語に関する研究文献目録（稿）』を作成した。

参加機関名	國學院大學，日本大学，文教大学，実践女子大学
共同研究員数	5 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
方言談話の地域差と世代差に関する研究	**時空間変異研究系准教授**	**井上　文子**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本プロジェクトは，将来，方言談話の類型と変容に関する大規模な調査・研究を実施することを前提として，そのためのパイロット調査的な役割を果たすものである。重点地域において必要な諸データを得ること，次の点に関わる仮説や枠組みを明確にすることを目的とする。

1．方言談話の収集・分析を通じて，文法研究および談話分析の観点から，実際の文脈の中における言語事象の使用実態や機能を把握する。
2．地域間比較をおこない，方言談話の類型を記述する。
3．世代間比較をおこない，その変容の方向を明らかにする。

本プロジェクトは，時空間変異研究系が目標とする「現在および過去における地理的・社会的変異，歴史的変化の様相を解明する」研究として位置づけられ，「方言の全国調査，琉球など消滅危機方言の調査，現代日本語の動態の解明，日本語変種の形成過程といった共同研究」を補完するデータを提供するものである。収録した方言談話は，研究者に活用されることを想定し，研究情報資料センターにも保存する。

《2013 年度の主要な成果》

研究成果を国立国語研究所共同研究報告 13-04「方言談話の地域差と世代差に関する研究」成果報告書として刊行（http://hougen-db.sakuraweb.com/pdf/NINJAL_CRPR_13-04.pdf）するとともに，方言ロールプレイ会話データベース（ペア入れ替え式ロールプレイ会話及びリーグ戦式ロールプレイ会話）を公開した（http://hougen-db.sakuraweb.com/）。

参加機関名	関西大学，群馬県立女子大学，東京女子大学，広島大学，別府大学
共同研究員数	6 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
近現代日本語における新語・新用法の研究	**時空間変異研究系准教授**	**新野　直哉**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

本研究は，近現代日本語の新語・新用法について，いつごろ，なぜ，どのように発生・拡大し，現在はどのような状況にあるのを，文献調査に加え，アンケート調査や統計的手法などを用いて明らかにしていく。また，言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し，言語の変異そのものの記述的研究に加え，これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

本研究で扱う現在進行中の変化は，古代語や中世語の言語変化の事例に対し，そのプロセスの観察や，背景にある言語意識の調査がリアルタイムで可能である，というメリットがある。その成果として，日本語史上の言語変化一般の研究に応用できるような理論を得ることを目的とする。以上の点で，本研究は，現在の時空間変異研究系のプロジェクトに不足している分野を補うものである。

《2013 年度の主要な成果》

研究成果を国立国語研究所共同研究報告 13-03「近現代日本語における新語・新用法の研究」成果報告書として刊行（http://www.ninjal.ac.jp/research/project/c/newlycoinedw/AStudyofOngoingChanges.pdf）するとともに，「副詞“全然”研究のための主要文献目録」を公開した（http://www.ninjal.ac.jp/research/project/c/newlycoinedw/MainBibliographyForResearch-zenzen-Adverb.pdf）。

参加機関名	京都府立大学，相模女子大学，花園大学，二松学舎大学
共同研究員数	4 名

萌芽・発掘型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏　名	
統計と機械学習による日本語史研究	**言語資源研究系 准教授**	**小木曽智信**	2010.11-2013.10

《研究目的及び特色》

言語資源研究系で基礎研究を行っている通時コーパスの構築には，さまざまな技術開発や研究手法の発展が必要とされる。技術開発の面では，形態素解析用の辞書こそ開発が進んでいるものの，文節・長単位の解析は手つかずとなっている。また，歴史的資料は現代語と異なり，表記や語法の面で極めて多様であるため，濁点の自動付与や仮名遣いの整備などの形態素解析前のテキスト処理が必要となるほか，辞書の分野適応が必要になっている。本プロジェクトの目的の一つは，自然言語処理技術を用いてこのような通時コーパス構築に必要な基盤を整備することである。また，ここから進んで，Oxford VSARPJ Corpus のアノテーションを活用し機械学習による構文情報の自動付与の可能性を探る。

研究手法の面では，従来の手作業による用例収集をベースとした方法を超えて，タグ付きコーパスから引き出した大量の用例をもとに統計的な処理を行う新しい研究手法が必要とされている。「茶器」などのコーパス利用ツールを歴史的資料に対応させて人文系研究者に利用しやすくするとともに，多変量解析等の手法を用いて実際の記述研究の成果としてまとめていくのがもう一つの目的である。

《2013 年度の主要な成果》

最終年度のため 6 ヶ月間であったが，プロジェクトの最終成果物として，自然言語処理の研究（「統計的機械学習による通時コーパス用ツールの開発」）と，日本語史の研究（「コーパスと統計を活用した日本語史研究」）の両面から，次のような研究成果をあげた。

【統計的機械学習による通時コーパス用ツールの開発】

・濁点の自動付与を研究し論文として発表し，自動付与ツール AYTK を開発し公開した。

・長単位・文節の情報を付与する解析器について論文を発表し，ツール Comainu, ver.0.7 を公開した。

・中古の和文系資料および近代文語文の形態素解析の研究を行い論文として発表し，「中古和文 UniDic」「近代文語 UniDic」をバージョンアップして公開した。

【コーパスと統計を活用した日本語史研究】

日本語史研究においてコーパスを用いた日本語史研究自体が稀な存在である中，本プロジェクトでは日本語史研究にコーパスを積極的に取り入れた研究活動を行った。“Oxford Corpus of Old Japanese” を用いた上代語の従属節の研究，「日本語歴史コーパス」を用いた「枕草子」の語彙研究，

指示詞系複合語の研究，多変量解析を用いた中古和文の文体差の研究，「今昔物語集」の文字研究等を研究論文として発表したほか，多数の学会発表を行った。	
参加機関名	首都大学東京，成城大学，東洋大学，情報通信研究機構，昭和女子大学，立命館大学，奈良先端科学技術大学院大学，オックスフォード大学
共同研究員数	9 名

2　人間文化研究機構の連携研究等

人間文化研究機構では，人間文化研究の新たな領域を従来の枠組を超えて創出し，先端的・国際的研究を展開するために，機構に所属する諸機関の間での連携研究など各種の事業を実施し，国立国語研究所もそれらの事業に参画している。

連携研究

人間文化研究機構を構成する個々の機関が培ってきた研究基盤と成果を，機関の枠を超えてつなぎ，補完的，有機的に結合させることで，新たな視座を開拓し，より高次なものに発展させようと企画，実施してきたのが連携研究である。東日本大震災を契機として，新たに「大規模災害と人間文化研究」というテーマの研究を，国語研を拠点としてスタートさせている。

アジアにおける自然文化の重層的関係の歴史的解明

日本を含むアジア地域には，歴史的に形成された多様な文明と文化が存在する。とくに，文化はいわゆる自然とのかかわりのなかから生まれてきた。人間は自然からどのような恩恵を受け，あるいは災害や自然の脅威にどのように対処してきたのか。この問いに，国語研では言語世界から見た自然への認識と思想，言語表現の多様性と普遍性という側面から研究を推進している。

研究課題：言語分析による自然観・自然思想の研究

研究期間：2010 ～ 2014

・昔がたりにみる自然観・自然思想の解明（木部暢子，時空間変異研究系教授）

・河川流域の自然・人間社会と方言の分布（大西拓一郎，時空間変異研究系教授）

・鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査（窪薗晴夫，理論・構造研究系教授）

・Rendaku across Dialects（Timothy J. Vance，理論・構造研究系教授）

大規模災害と人間文化研究

国語研が総括班となって，「大規模災害と人間文化研究」と題する連携研究を 2012 年度に開始した。これは，東日本大震災以降，人間文化研究機構内で各機関やグループが行ってきた復興支援活動の成果に基づき，それぞれのグループの連携・協力を図ることにより，人間文化という大きな視点から地域の復興を支援するとともに，今後，起きると予想される大規模災害に対して人間文化研究の立場からどう向き合うかについて検討することを目的とする研究で，「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」，「B. 大規模災害とミュージアムの連携，活用の研究」，「C. 大規模災害と資料保存・活用の研究」に分かれる。このうち，「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」の下に下記を実施している。

・方言をとおした災害時の地域社会支援と方言の保護・活用に関する研究

研究代表者：木部暢子（時空間変異研究系教授）

研究期間：2012 ～ 2014

1. 医療活動や自治体活動に必要な言語情報の整備，2. 多言語社会における地域言語，3. 地域社会の基盤としての方言の保存に関して研究を進めた。

日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散

研究代表者：John Whitman（言語対照研究系教授）

研究期間：2012 ～ 2014

「農耕言語拡散仮説」（Farming/Language Dispersal Hypothesis）に焦点をあて，人間文化研究機構諸機関における言語学・植物遺伝子学・考古学・人類学・歴史学の人材と知的資源を結集して，アジアにおける諸言語族の分布と農耕の伝播の相関関係を調べることを目的とする。国際シンポジウム Dispersion of People, Crops, and Language: Focusing on Millets in Asia「ヒト・穀物・言語の拡散―アジアにおけるミレット（millet）を中心に」を開催した（2014.3.20-21）。

日本関連在外資料の調査研究

日本関連在外資料の国際共同研究は，欧米などにおける日本文化研究の比重低下の打開と，日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざしている。本研究はオーラルヒストリー研究をはじめとする音声資料のデジタル化，ならびにその資料の書き起しを行った上でアノテーションを作成するのと同時に，その資料を所蔵する機関との合意のもとに資料を公開することを目的としている。

・近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究

音声資料チーム「ハワイと北米へ渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」（朝日祥之，時空間変異研究系准教授）

研究資源の共有化

人間文化研究機構を構成する 6 研究機関のデータベースを横断検索が可能な統合検索システムに次のデータベースを提供している。

・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
・蔵書目録（図書）データベース
・蔵書目録（雑誌）データベース
・日本語研究・日本語教育文献データベース
・『日本言語地図』画像データベース
・『方言文法全国地図』画像データベース

3　外部資金による研究

○科学研究費補助金

研究種目	研究代表者	研　究　課　題　名	交付額（千円）（直接経費）
基盤研究（A）一般	窪薗　晴夫	日本語のアクセントとアクセント類型論	7,300
基盤研究（A）一般	大西拓一郎	方言分布変化の詳細解明 ―変動実態の把握と理論の検証・構築―	9,800
基盤研究（A）海外	迫田久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築 ―研究と構築の有機的な繋がりに基づいて―	9,700
基盤研究（B）一般	高田　智和	漢字字体変容の原理 ―敦煌文献から現代日本戸籍漢字まで―	2,400
基盤研究（B）一般	野田　尚史	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	2,000
基盤研究（B）一般	田中　牧郎	和漢の両系統を統合する平安・鎌倉時代語コーパス構築のための語彙論的研究	5,200
基盤研究（B）一般	浅原　正幸	言語コーパスに対する読文時間付与とその利用	2,900
基盤研究（B）一般	木部　暢子	方言話し言葉コーパスの構築とコーパスを使った方言分析に関する研究	3,500
基盤研究（B）一般	宇佐美　洋	言語運用に対する個人の評価価値観の形成とその変容に関する研究	3,000
基盤研究（C）一般	前川喜久雄	自発音声データの定量的解析による日本語韻律構造理論の再構築	900
基盤研究（C）一般	藤本　雅子	促音の発声・調音に関わる音声生理学的研究	800
基盤研究（C）一般	柏野和佳子	コーパス分析に基づく辞書の位相情報の精緻化	1,300
基盤研究（C）一般	籠宮　隆之	聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能を評価するための尺度の構築	1,400
基盤研究（C）一般	渡辺美知子	日英語話し言葉コーパスにおける言い淀み分類の精緻化と機能の対照分析	1,100
基盤研究（C）一般	山崎　誠	語彙分類の理論的整備に基づくシソーラスの改良に関する研究	1,300
基盤研究（C）一般	小木曽智信	近世口語文を対象とした形態素解析辞書の開発	1,100
基盤研究（C）一般	丸山　岳彦	自発的な話し言葉に見られる節連鎖構造の研究	1,000
基盤研究（C）一般	上野　善道	日本語危機方言アクセントの再調査による研究の深化	1,600
基盤研究（C）一般	小磯　花絵	自発音声における発話の継続・終了の予測に関わる韻律情報の解明	1,000
基盤研究（C）一般	井上　史雄	公共用語の地域差に関する社会言語学的総合研究	1,300

基盤研究（C）一般	鑓水　兼貴	多様な方言資料の横断的分析による新たな方言分布研究	1,600
基盤研究（C）一般	井上　文子	方言ロールプレイ会話における談話展開の地域差に関する研究	1,300
挑戦的萌芽研究	窪薗　晴夫	「呼びかけイントネーション」に関する萌芽的研究	700
挑戦的萌芽研究	三井はるみ	新規言語事象の集中的多角的調査による首都圏の言語状況の把握	1,600
若手研究（B）	アンナ・ブガエワ	コーパスに基づいたアイヌ語動詞範疇についての類型論的研究	500
若手研究（B）	今田　水穂	Ruby と MSXML による日本語名詞述語文の実例調査とコーパス分析ツールの構築	500
若手研究（B）	朝日　祥之	サハリンで形成された日本語樺太方言の多様性に関する社会言語学的研究	700
若手研究（B）	石本　祐一	音響的特徴に基づく話者交替に関する発話単位の認定基準の構築	900
若手研究（B）	小西　光	近代口語文翻訳小説コーパスの構築と計量的文体研究	1,400
若手研究（B）	冨士池優美	中古中世歌合コーパスに基づく和歌評論の語彙論的研究	1,200
研究活動スタート支援	高橋　康徳	自然発話に基づいた北京語音声の定量的研究	900
研究成果公開促進費	木部　暢子	日本語危機方言データベース	4,400
研究成果公開促進費	宇佐美　洋	「非母語話者の日本語」は，どのように評価されているか	1,000
特別研究員奨励費	儀利古幹雄	アクセントの平板化現象から見た日本語の韻律的特性の解明	1,000
特別研究員奨励費	津田　智史	新たな視点と調査法に基づく日本語諸方言アスペクトの研究	1,100
特別研究員奨励費	ジョン・ホイットマン（PHAN,J.D.）	ベト・ムオン語派の歴史比較研究	1,000
特別研究員奨励費	田中　牧郎（HODOSCEK.B.）	コーパスによる日本語のレジスターモデルの研究	500
特別研究員奨励費	前川喜久雄（STRAFELLA.E.L.）	日伊辞典のための「現代日本語書き言葉均衡コーパス」からのコロケーション抽出	700

○受託研究

「言語学・言語教育学分野に関する学術研究動向調査研究」（野田　尚史）日本学術振興会 1,690 千円

4 刊行物

『国語研プロジェクトレビュー』（NINJAL Project Review）

個々の共同研究プロジェクトの研究活動の総体を展望することによって国語研全体の動向を展望する。年 3 回程度，オンラインで刊行し，まとめたものを冊子体で発行している。オンライン版は国語研ウェブサイトで公開し，冊子体は全国の大学図書館等で利用できる。

○第 4 巻第 1 号（2013 年 6 月）

〈共同研究プロジェクト紹介〉

熊谷康雄

「『日本言語地図』のデータベース化が開く新たな研究」pp.1–9.

朝日祥之

「言語変容の類型化に向けて」pp.10–17.

田中牧郎

「『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』から見る近代語彙」pp.18–27.

プラシャント・パルデシ

「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成 ―研究成果と今後の展望―」pp.28–35.

高田智和

「訓点資料の電子化について」pp.36-42.

柏野和佳子

「書籍サンプルの文体を分類する」pp.43-53.

山崎 誠

「テキストにおける語彙の分布と文章構造」pp.54-60.

山口昌也

「複合動詞用例データベースの構築と活用」pp.61-69.

〈受賞紹介〉

大滝靖司

「父称 Mac-/Mc- で始まる姓の借用語における促音化：つづり字と音節構造」pp.70-72.

〈著書紹介〉

野田尚史

三宅和子，野田尚史，生越直樹 編『「配慮」はどのように示されるか』，ひつじ書房，pp.73-74.

○第 4 巻第 2 号（2013 年 10 月）

〈共同研究プロジェクト紹介〉

益岡隆志

「複文構文プロジェクトにおけるいくつかの話題」pp.75-81.

青木博史

「日本語文法史研究の射程」pp.82-88.

伝 康晴

「会話コーパスの共有化に向けて：転記方式の自動変換」pp.89-99.

野山 広

「地域に定住する外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的研究」pp.100-109.

小磯花絵

「日本語話し言葉における複合境界音調の役割」pp.110-117.

三井はるみ

「地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向の一側面」pp.118-126.

井上文子

「方言ロールプレイ会話におけるコミュニケーション機能について」pp.127-135.

新野直哉

「国語学者浅野信の言語規範意識 ―昭和 10 年の「全然このお菓子好きだわ」について―」pp.136-143.

小木曽智信

「歴史的日本語資料のアノテーションと自動濁点付与」pp.144-150.

〈受賞紹介〉

儀利古幹雄

「町名のアクセント：アクセントの平板化と言語内的要因」pp.151-153.

〈著書紹介〉

影山太郎

影山太郎 編『レキシコンフォーラム No. 6』, ひつじ書房, pp.154-155.

前川喜久雄

前川喜久雄 編 / 監修, 辻井潤一, 投野由紀夫, 徳永健伸, 丸山岳彦, 山崎 誠, 小木曽智信, 中村壮範, 山口昌也 著『コーパス入門』, ひつじ書房, pp.156-157.

〈論文紹介〉

窪薗晴夫

Lingua Vol. 122, Issue 13, Special Issue on Varieties of Pitch Accent Systems, Edited by Haruo Kubozono, Elsevier, October 2012, pp.158-160.

上野善道

Zendo Uwano, “Three types of accent kernels in Japanese”, *Lingua* Vol. 122, Issue 13, Special Issue on Varieties of Pitch Accent Systems (October 2012), 1415-1440. pp.161-163.

○第 4 巻第 3 号（2014 年 2 月）

〈共同研究プロジェクト紹介〉

村杉恵子

「生成文法理論に基づく第一言語獲得研究」pp.164-173.

峯松信明

「オンライン日本語アクセント辞書 OJAD の開発と利用」pp.174-182.

森 大毅

「話し言葉が伝えるもの」pp.183-190.

松本 曜

「日本語の空間移動表現：通言語的実験から捉える」pp.191-196.

山内博之

「シラバス作成に客観性を持たせる試み」pp.197-204.

柳町智治

「日常的実践を組織する能力とその評価」pp.205-210.

〈Research by Invited Scholars〉

J. Marshall UNGER

"No Rush to Judgment: The Case against Japanese as an Isolate", pp.211-230.

〈著書紹介〉

山崎 誠

Yukio Tono, Makoto Yamazaki, Kikuo Maekawa, A Frequency Dictionary of Japanese: Core Vocabulary for Learners, Routledge, pp.231-234.

柏野和佳子

柏野和佳子，平本智弥 著 『10 分でわかる！四字熟語』，実業之日本社

柏野和佳子，市村太郎，平本智弥 著『よんだ 100 人の気持ちがよくわかる！百人一首』，実業之日本社，pp.235-236.

木部暢子

木部暢子，竹田晃子，田中ゆかり，日高水穂，三井はるみ 編著『方言学入門』，三省堂，pp.237-238.

田中牧郎

田中牧郎 著『近代書き言葉はこうしてできた』，岩波書店，pp.239-240.

相澤正夫

相澤正夫 編『現代日本語の動態研究』，おうふう，pp.241-242.

『国立国語研究所論集』（NINJAL Research Papers）

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として，各年度に 2 回（5 月と 11 月），オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

○第 5 号（2013 年 5 月）

崔 文姫

「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価 ―日本語教師と非日本語教師の因果モデルを中心に―」pp.1-26.

小島聡子

「宮沢賢治と浜田広介の語法に見る方言からの影響」pp.27-41.

松田真希子，宮永愛子，庵 功雄

「超級日本語話者の談話特性 ―テキストマイニングを用いた分析―」pp.43-63.

中野真樹，渡辺由貴

「国立国語研究所「日本語研究・日本語教育文献データベース」の有用性」pp.65-76.

沖 裕子

「談話論からみた句末音調形式の抽出」pp.77-94.

ポリー・ザトラウスキー

「食べ物を評価する際に用いられる「客観的表現」と「主観的表現」について」pp.95-120.

上野善道

「喜界島方言のアクセント資料（1）」pp.121-154.

○第 6 号（2013 年 11 月）

鄧 牧

「大正期における外来語の増加に関する計量的分析」pp.1-18.
HIRAMOTO Mie and ASAHI Yoshiyuki
"Pronoun Usage of Japanese Plantation Immigrants in Hawai 'i" pp.19-28.
小林雄一郎，小木曽智信
「中古和文における個人文体とジャンル文体 ―多変量解析による歴史的資料の文体研究―」pp.29-43.
久屋愛実
「現代書き言葉における外来語の共時的分布：「ケース」を事例として」pp.45-65.
松森晶子
「宮古島における３型アクセント体系の発見 ―与那覇方言の場合―」pp.67-92.
鳴海伸一
「副詞における程度的意味発生の過程の類型」pp.93-110.
大滝靖司
「日本語借用語における２種類の促音化」pp.111-133.
イレーナ・スルダノヴィッチ
「大規模コーパスを用いた形容詞と名詞のコロケーションの記述的研究 ―日本語教育のための辞書作成に向けて―」pp.135-161.
須永哲矢，堤 智昭
「『日本語歴史コーパス』のための書籍活字の電子化 ―小学館新全集『今昔物語集』を事例として―」pp.163-181.
上野善道
「喜界島方言のアクセント資料（2）」pp.183-216.
鑓水兼貴
「首都圏若年層の言語的地域差を把握するための方法と実践」pp.217-243.
朱 京偉
「在華宣教師の洋学資料に見える四字語 ―蘭学資料の四字漢語との対照を兼ねて―」pp.245-271.
高田智和，斎藤達哉
「米国議会図書館蔵『源氏物語』について ―書誌と表記の特徴―」pp.294（1）-272（23）.

NINJAL フォーラムシリーズ

一般の方向けの講演会として「NINJAL フォーラム」を年に数回開催し，その内容を「NINJAL フォーラムシリーズ」として公開している。

○NINJAL フォーラムシリーズ３『日本語新発見 ―世界から見た日本語―』（2013 年 6 月 21 日）
（2012 年 3 月 24 日に開催された国立国語研究所第 5 回 NINJAL フォーラムでの講演を文字化したもの）
世界には多くの言語がある。これら多くの言語と日本語を比べてみると，これまで気がつかなかった日本語の新しい面が見えてきたり，意外な言語が日本語と同じ特徴をもっていることを発見したりする。日本語を外から見ることで，日本語をもう一度見直してみる。
《目次》
あいさつ　影山太郎　p.1
基調講演　角田太作（国立国語研究所）

「世界の言語から見た日本語・日本語から見た世界の言語」pp.2-13.
講演 1　片桐真澄（岡山大学）
「近くて遠い，遠くて近い，フィリピンのことばタガログ語と日本語」pp.14-20.
講演 2　金 廷珉（韓国 慶一大学）
「日本語と韓国語，どこが似ている，どこが違う」pp.21-28.
講演 3　アンナ・ブガエワ（早稲田大学）
「アイヌ語は日本語に似たようなものか？」pp.29-36.
講演 4　河内一博（防衛大学校）
「日本語に特有と言われる現象はアフリカにもある：シダーマ語（エチオピア）の場合」pp.37-45.
パネルディスカッション
（司会：ジョン・ホイットマン，パネル：角田太作，片桐真澄，金 廷珉，アンナ・ブガエワ，河内一博）pp.46-56.

○NINJAL フォーラムシリーズ 4『グローバル社会における日本語のコミュニケーション ―日本語を学ぶことはなぜ必要か―』（2013 年 6 月 28 日）
（2013 年 3 月 10 日に開催された国立国語研究所第 6 回 NINJAL フォーラムでの講演を文字化したもの）
現在，日本には約 200 万人の外国人が住んでいる。統計によると，この 30 年で国内の留学生の数は 13 倍, 海外の学習者数は 30 倍に増加している。世界で多くの人々が日本語を学んでいると同時に，国内で多くの外国人の人々が日本語を使って生活している。最近，労働力の不足している社会福祉施設では，日本語を学んで看護・介護の資格を取得する東南アジアの人々に，将来の労働力として大きな期待を寄せている。
外国の人々は日本語を学ぶことが必要なのか？彼らが日本語を学ぶことで何が変わるのか？日本人も外国人も互いに日本で生きる隣人同士として社会を作っていくために，外国人と日本人のコミュニケーションを題材として，外国語・日本語を学ぶことについて共に考える。
《目次》
あいさつ　影山太郎　pp.1-3
講演 1　鳥飼玖美子（立教大学，NHK『ニュースで英会話』監修およびテレビ講師）
「共通語としての英語，そして日本語」pp.4-9.
講演 2　迫田久美子（国立国語研究所）
「日本語を教えることの楽しさと難しさ」pp.10-16.
講演 3　莫 邦富（作家，ジャーナリスト）
「道草だった日本語と共に泣き笑いしながら歩んできた道」pp.17-25.
講演 4　西原鈴子（国際交流基金日本語国際センター）
「2050 年の日本語はどうなる？」pp.26-36.
講演 5　ダニエル・カール（山形弁研究家，タレント）
「オラの愛する元気な日本・大好きな日本語」pp.37-43.
パネルディスカッション
（司会：野田尚史，パネル：鳥飼玖美子，迫田久美子，莫 邦富，西原鈴子，ダニエル・カール）pp.44-54.

5　2013 年度公開中のコーパス・データベース

Web サイトにおいて，共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベースを公開しているが，2013 年度は下記資料の公開（ないし公開の継続）を行った。

データベース

・Web データに基づく複合動詞データベース（開発版）

動詞連用形＋動詞型の複合動詞の使用例を Web から収集し，共起する格関係などが分かるようにしたデータベース。

・Web データに基づくサ変動詞用例データベース

・Web データに基づく形容詞用例データベース（2013.9）

・複合動詞レキシコン（開発版）

日本語研究者および外国人日本語学習者を対象として，約 2700 語の動詞連用形＋動詞型複合動詞の言語学的な分析に基づいて内部構造，格パターン，意味・用例などの情報を付与したもの。

・寺村誤用例集データベース

寺村秀夫『外国人学習者の日本語誤用例集』（1990 年，科研費研究報告，大阪大学）を電子化し，各種の検索ができるようにしたもの。

・ことばに関する新聞記事見出しデータベース

1949 年から 2009 年 3 月までの新聞記事の切り抜きを電子化し，検索できるようにしたもの。

・米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課との研究協力により，同図書館が所蔵する『源氏物語』（全 54 冊）の翻字本文を電子化したもの。

国立国語研究所の研究図書室が所蔵する資料の画像公開・研究文献情報等

・米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』のうち，「桐壺」，「須磨」，「柏木」の原本画像を閲覧できる。

・『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』画像

・『明六雑誌』画像（2013.7）

・『古今文字讃』画像（2013.10）

・聖遊郭（雪月花）『傾城買二筋道』『河東方言箱枕』『潮来婦誌』画像（2013.11）

・国立国語研究所 刊行物データベース

過去に国立国語研究所から発行された各種資料・書誌情報等を電子化したもの。

・日本語研究・日本語教育文献データベース

2009 年以前に刊行された『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』の中から研究論文文献の情報を抜き出してデータベース化するとともに，2009 年以降の学術雑誌，大学紀要，論文集などに掲載された日本語学・日本語教育に関する論文情報を毎年追加し，年 3 回程度更新している。

・雑誌『国語学』全文データベース

国語学会（現在, 日本語学会）の機関誌『国語学』全巻（第 1 輯（昭和 23 年）～終刊第 219 号（平成 16 年））の全文テキストデータベース

・国立国語研究所蔵書目録データベース

日本で唯一，日本語及び日本語教育に関する研究文献をほぼ網羅的に収集している本研究所の研究

図書室に所蔵された全図書が検索できるデータベース。

KOTONOHA 計画によるコーパス等

日本語の書き言葉や話し言葉を，その実態を調べることができるように電子化したコーパス（言葉のデータベース）。豊富な情報を付加し，検索ツールとともに提供している。

・現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）

現代の書き言葉の縮図となるように設計された 1 億語をおさめる。次の検索方法を提供している。

・少納言（オンライン利用。登録不要）

文字列検索で，簡単な検索ができる。例文や出典情報は，500 件まで表示。

・中納言（オンライン利用。要登録）

本文を単語に区切り見出し語や品詞などの情報が付与されたコーパスが検索できる。前後の単語や品詞などを指定した高度な検索も可能。

・DVD 版（要申し込み。アカデミック利用または一般利用）

コーパスのすべてのデータを収録。プログラムを組んで分析する専門家向き。

・日本語話し言葉コーパス（CSJ）

講演やスピーチなどの独話について，音声，転記テキスト，それらへの豊富な付加情報を収める。

・日本語歴史コーパス（平安時代編）

平安時代を中心とする古典作品に，単語の情報を付けたもの。『中納言』によるオンライン公開。今後も増補の予定。

・近代語のコーパス

・太陽コーパス

明治後期から大正期によく読まれた総合雑誌『太陽』を対象としたコーパス。CD-ROM による市販。『ひまわり』による検索。

・近代女性雑誌コーパス

太陽コーパスと同じ時代の，女性を読者とする雑誌 3 誌を対象としたコーパス。ダウンロード公開。『ひまわり』による検索。

・明六雑誌コーパス

明治初期の学術啓蒙雑誌『明六雑誌』全文に，単語の情報を付与したコーパス。ダウンロード公開。『ひまわり』による検索。原本画像参照機能付き。

・形態素解析辞書 UniDic

コーパスに形態論情報（単語の情報）を付与するための，コンピュータ用の辞書。解析器とともに用いることで，電子テキストに自動的に単語情報を付与することができる。対象とするコーパスの時代別に 3 種を公開。

UniDic-MeCab（現代語用），中古和文 UniDic，近代文語 UniDic

・コーパス検索ツール

・全文検索システム『ひまわり』

コーパスを高速に検索し，前後の文脈や出典の情報とともに，閲覧できるシステム。パソコンにインストールして利用。

・『ひまわり』支援ツール

既存の電子テキストや自作のコーパスを，『ひまわり』で検索できるようにするツール。

・『たんぽぽ』，『プリズム』

構造化された電子テキストから情報を抽出し検索するツール。

・作文支援システム TEachOtherS

学習者と教師が教え合いながら作文するのを支援する，添削システム。

・『分類語彙表増補改訂版』（研究用データ）

語を意味によって分類した『分類語彙表』の電子データ。見出し語や分類番号などを，データベースソフトに取り込める CSV 形式で公開。

方言・言語生活の調査研究

・日本言語地図

1966 年～ 1974 年にかけて刊行した『日本言語地図』に掲載された全地図の画像を PDF 形式で公開したもの。

・方言文法全国地図

1989 年～ 2006 年に刊行した『方言文法全国地図』所載の全地図の画像を PDF で公開したもの。

・方言研究の部屋

・全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」

日本語教育に関する研究・資料等

・日本語学習者発話コーパス『C-JAS』（2013.1）

日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者の発話コーパス（要会員登録）

・研究用データ（要会員登録）

・日本語学習者会話データベース

・日本語学習者会話ストラテジーデータ

・言語行動意識調査

・名大会話コーパス

・日本語学習者会話データベース 縦断調査編

・日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究

その他

・外来語言い換え提案

・「病院の言葉」を分かりやすくする提案

・現代雑誌 200 万字言語調査語彙表

・「学校の中の敬語」調査（アンケート調査）のデータ公開

・国際社会における日本語についての総合的研究（新プロ「日本語」）

・X 線映画「日本語の発音」

・基礎日本語活用辞典（インドネシア語版）

・「簡約日本語」に関する研究

6　研究成果の発信と普及

国語研では，研究成果を社会に発信・還元するために，各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは専門家向けのものを挙げる。

A．国際シンポジウム

国語研が主体となって実施する研究や，他機関との連携研究による優れた研究成果のうち，時宜を得た課題を取り上げ，海外からの専門家も交えて，論旨を深めながら学術界に公表するため，国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をしている。

Ⅰ．NINJAL 国際シンポジウム

○MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES
「日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎」
2013 年 12 月 14 日～ 15 日（国立国語研究所）
12 月 14 日：Featuring the languages of Japan

Opening address and keynote lecture

Taro Kageyama (NINJAL)
“Mysteries of Verb-Verb complexes in Japanese”

Yoko Yumoto (Osaka University)
“Motivations and restrictions of lexical V-V compounding in Japanese”

Yo Matsumoto (Kobe University)
“What the V-te V complex predicates can say that the V-V compound verbs can't”

Bjarke Frellesvig (University of Oxford)
“V-V complexes in Old Japanese”

Masayoshi Shibatani (Rice University/NINJAL)
“V-V and V-te V verb complexes in Ryukyuan”

Anna Bugaeva (NINJAL) and Hiroshi Nakagawa (Chiba University)
“V-V complexes in Ainu”

Poster presentations

Alan Hyun-Oak Kim (Southern Illinois University at Carbondale)
“On the terminal stage of a verb's action pathway: Korean taa toy-n N contrasted with the Japanese tate-no N”

Bo Sen (University of Tokyo, graduate student)
“A Blending-based account of Japanese lexical aspectual compound verbs”

So Miyagawa (Kyoto University, graduate student)
“Iconical explanation on imperfective and iterative reduplications in Sumerian verbs”

Kohei Nakazawa (University of Tokyo, graduate student)
“Accentual varieties of V-V complexes in Japanese dialects”

Netra Prasad Paudyal (University of Zurich, Switzerland, graduate student)
“The Compound verb in Chintang”

Yoshiki Ogawa (Tohoku University) and Fumikazu Niinuma (Morioka University)

"What determines the (un) ergativity of emission verbs: A view from Japanese V-V compounds"

Renuka Ozarkar (University of Mumbai, India, graduate student)

"Deixis in the light verbs in Marathi"

Hiroko Koto and Nerida Jarkey (University of Sydney, graduate student/faculty)

"The nature of V1 in the -te oku construction in Japanese"

Evguenia Malaia (University of Texas at Arlington)

"Verb-verb predicates in Bangla and Russian: Morpho-semantic event structure analysis"

一色舞子（北海道大学大学院生）

「日本語の「- ておく」と韓国語の「-e twuta/-e nohta」における史的対照研究」

韓 京娥（釜山大学，非常勤）

「文法化に見る「ていく / くる」と「e kata/ota（テイク / クル）」」

高山林太郎（東京大学大学院生）

「高知市の複合動詞の有標アクセントについて」

劉 洪岩（九州大学大学院生）

「漢文訓読における複合動詞の特徴および和文への影響」

澤田 淳（青山学院大学）

「ダイクシスの観点からみた日本語の複合動詞の歴史」

日髙晋介（東京外国語大学大学院 / 国立国語研究所）

「日本語「ておく」とウズベク語 -（i）b qo'y- の対照」

Plenary talk

Miriam Butt（University of Konstanz）

"Complex predicate puzzles"

12 月 15 日 : Featuring languages outside Japan and acquisition of Japanese as a second language

Keynote lecture

Peter Hook (University of Virginia/NINJAL)

"From lexical amplifier to aspectual alternant: A descriptive typology of South Asian verbal extension"

E. Annamalai (University of Chicago)

"The Variable Relation of Verbs in Sequence in Tamil"

Prashant Pardeshi (NINJAL)

"Synchronic exploration in search of diachronic paths: A contrastive study of the grammaticalization of "PUT/KEEP" in Japanese and Marathi"

Hisanari Yamada (Otaru University of Commerce)

"V1 (perfective converb)+ V2 compound verbs in Standard Avar"

Bettina Zeisler (University of Tubingen)

"Non-contextually-triggered verb-verb sequences in Tibetan and Ladakhi"

Shen Li (Doshisha University)

"A comparative analysis of resultative verbal compounds in Chinese and Japanese: Compounding in lexicon and syntax"

Yu Kuribayashi (Okayama University)

"Verb-Verb compounds in Turkish and Turkic Languages"

Andrey Shluinsky (Institute of Linguistics, Russian Academy of Sciences, Moscow)
“Verb-verb complexes in Turkic languages”
John Whitman (NINJAL)
“Bare Stem V-V Compounding in Korean, with Reference to Japanese”
Parallel session
パネルセッション＜複合動詞の習得＞「なぜ日本語学習者は複合動詞で悩むのか」
司会：玉岡賀津雄（名古屋大学）
許 臨揚（名古屋大学大学院生）
「中国語との対照の観点から見た日本語複合動詞の習得 ―完了を表す類義語「～切る」「～抜く」「～通す」を例にして―」
田辺和子（日本女子大学）
「複合動詞の後項における第２次的アスペクト機能のコーパス分析」
杉村 泰（名古屋大学）
「中国人日本語学習者の日本語複合動詞・複雑述語の V1＋V2 結合意識 ―「～疲れる」「～慣れる」,「～てならない」「～てたまらない」を例に―」
谷内美智子（国際交流基金日本語試験センター）
「日本語学習者は複合動詞の意味をどの程度正確に推測できるか ―記述式の調査方法の場合―」
玉岡賀津雄（名古屋大学）
「日本語学習者の複合動詞の習得における背景要因と因果関係 ―決定木分析と構造方程式モデリングによるアプローチ―」

○第８回 日本語実用言語学国際会議（ICPLJ8）
2014 年３月 22 日～ 23 日（国立国語研究所）
３月 22 日（土）
開会挨拶：影山太郎（所長）
招待講演
Catherine E. Snow (Harvard University)
“Extended discourse in first and second language acquisition : A challenge and an opportunity”
ポスター発表
Sayaka Sugiyama
“Demonstratives and Discourse Structure in the Language of Fiction”
Yuichi Suzuki
“Measuring automaticity in second language Japanese: Real-time predictive sentence processing with the Japanese case-marker wa and ga”
Rika Yamashita
“Pragmatics of children's desu/masu style in a small community classroom”
陳 明涓，陳 育琳
「読解授業における Facebook 利用の実践」
儲 舒瑋，白勢彩子
「とりたて詞の韻律的特徴 ―日本語話し言葉コーパスの分析―」

濱田瑠利
「中南米出身日本語学習者のアクセントにみられる母語の影響」
長谷部陽一郎，李 在鎬
「日本語教育のための文章難易度測定の試み」
喜古正士（Masashi Kiko）
「教科書と問題集で使われる日本語は同じか ―専門語教育の観点から―」
甲田直美
「語りにおける節連鎖構造とターン交替」
髙 雅妃
「日本語と韓国語代名詞が示す心的距離の分析」
望月圭子，申 亜敏，菊島和紀，福田 翔
「日本語 / 中国語作文学習者コーパスにみられる誤用と日本語の特質」
西内沙恵
「多義語学習教材開発のための基礎的研究：スペイン語母語話者を対象として」
西坂祥平
「中国語話者による従属節中のテンスの習得 ―時を表す副詞節を例に―」
ラッタナセリーウォン・センティアン
「タイ語を母語とする日本語学習者のための「テイル」に関する文法説明」
富谷広男，北村達也，川村よし子
「単語レベル判定機能を有するエディタの開発」

口頭発表 Session I

加納千恵子
「漢字に関する Can-do statements 調査と漢字力 ―漢字圏，非漢字圏，韓国の学習者による評価の違い―」
稲葉みどり
「JSL カリキュラム実践のための教授法授業のシラバスデザイン」
峯布由紀
「Processability Theory の日本語発達段階認定について ―受動文習得の位置付けをめぐって―」
Oresta Zaburanna
「依頼の場面に用いられる許可求めの表現について」
范 一楠
「JFL 上級学習者と日本語母語話者の「のだ」の使用に関する研究 ―談話構造と発話行為からの分析―」
佐藤響子
「美貌をほめる：ほめと応答の交渉プロセスを可視化することから見えてくること」
Cade Bushnell
“A time to laugh: Audience laughter at a rakugo performance for foreign students in Japan”
Paul Ganir
“Language learners' use of the Japanese particle ne inside and outside classrooms”
Nina Azumi Yoshida
“How "things" inhibit control in Japanese clausal connective constructions”

口頭発表 Session II

野山 広，今村圭介

「日本語学習者のスピーチスタイルの形式的特徴 ―定住外国人の縦断調査結果と KY コーパスの OPI データから―」

山岡政紀，牧原 功，小野正樹

「現代日本語配慮表現の記述方法の確立に向けて ―配慮表現データベース構築の基礎論として」

奥野由紀子

「「じゃないですか」にみる結束性の発達 ―インプットにおける卓立性に着目して―」

安原正貴

「使役の意味を持つ非対格構造の生起について：日英比較からの考察」

吉村紀子

「形容詞の名詞化と無形代名詞 ―九州方言からの考察」

田村早苗

「証拠推量表現としての接尾辞クサイ」

汪 南雁

「中国語話者を対象とする日本語漢字の音読み教育のための一考察 ―日本語能力試験 2 級語彙表の音読み語の分析から―」

ヴォロビヨワ・ガリーナ，ヴォロビヨフ・ヴィクトル，横山詔一

「新常用漢字の意味的クラスター化と日本語教育の漢字教材開発への応用」

山森良枝

「「語用論的括弧」について」

3 月 23 日（日）

口頭発表 Session III

魏 娜，酒井たか子，小林典子

「TTBJ（筑波日本語テスト集）個人受験における SPOT90 の分析 ―日本語学習歴と日本滞在歴との関連を中心に―」

李 在鎬

「コーパスに基づく学習者の話し言葉と書き言葉の比較」

宇佐美まゆみ

「NCRB（Natural Conversation Resource Bank）の開発とその意義について ―これからのコーパスのあり方とその研究・教育への活用法への一提案―」

橋本ゆかり

「言語習得理論を研究の視点としたコーパス分析 ―第一，第二言語習得の幼児・成人の三者間の比較―」

クリングス・ザビーネ

「音符知識が非漢字圏日本語学習者の漢字学習に与える利点についての一考察」

田中真一（Shin'ichi Tanaka）

「大阪方言における特殊モーラへのアクセント回避と音韻構造」

福永由佳

「外国人の言語能力からみる日本の多言語状況」

下谷麻記，遠藤智子

「会話における「思って」を使った語りの構築パターンについて」

副島健作

「人為的事態の結果の表現 ―日本語とロシア語の受動文とアスペクト―」

ポスター発表

Nobuyoshi Asaoka

"Connecting the Interaction Hypothesis and Noticing Hypothesis through Technology to Develop Communicative Competence among Beginning Japanese Learners"

Atsuko Onuma

"How Tame-Keigo (Tameguchi-Keigo) language system in Japanese contemporary novels is translated in English? : From the aspect of pedagogy and cognitive linguistics"

Chika Yoshida, Tomohiko Shirahata, Mitsuko Hisano

"How the Interface Hypothesis explains wa acquisition in near-native speakers of Japanese"

今井新悟

「コンピュータテストと Can-do の関連付け」

井上次夫

「様式的位相の統一的表示法について」

木林理恵

「基本的な情報の算出から見る会話の特徴」

高 智子

「「役割語」を教える授業の実践」

京野千穂

「授受補助動詞テクレル・テモラウの使用条件 ―母語話者調査による分析―」

李 欣

「広東語を母語とする日本語学習者の促音の知覚についての考察 ―三音節語を中心に」

宮西由貴，山本和英

「使いやすくカスタマイズ可能なテキスト解析ツールの開発」

森 篤嗣，中島明則，岩田一成

「テキスト評価ツール「やさ日チェッカー」の開発と指標の有効性の検証」

中井陽子，大場美和子，寅丸真澄，増田将伸

「日本国内と米国における会話データ分析を行う論文の特徴の分析 ―論集『社会言語科学』『日本語教育』『日本語教育論集』『JLL』の比較―」

Fumiko Nazikian

「オンライン新聞のブログメッセージにおける「よね」のディスコース機能とメタプラグマティック機能について:「でしょう」との比較から」

白石優子

「「名前」「愛称」を使用する女子大学生の自己意識」

口頭発表 Session IV

Haruko Minegishi Cook

"Rethinking of strategies and discernment: Superiors' directives in a Japanese workplace"

Mineharu Nakayama, Noriko Yoshimura, Koichi Sawasaki

"Sensitivity to the continuity in speech time: Acquisition of TE IRU by JSL learners"

Margaret Thomas

"'Air writing' as a technique in the acquisition of Sino-Japanese characters by second language learners"

鈴木綾乃

「日本語学習者はどのような文法的コロケーションを形成しているか ―中心語の意味との関わりから」

林 洋子，国吉ニルソン，東條加寿子，小山敏子，野口ジュディ

「コーパス JECPRESE と OnCAL からみた科学日本語の諸相」

堀内 仁

「日本語学習者の非標準的丁寧体動詞のパラダイムの発達 ―縦断的発話コーパスデータの場合―」

矢野和歌子

「卒業論文作成支援を目的とした人文社会学系優秀卒業論文の分析 ―ディスコース展開における引用の目的に着目して―」

高森絵美

「学習者自然会話コーパスに見られる助詞「は」と「が」の誤用分析とその指導に向けて ―スペイン人中級学習者の場合―」

歌代崇史

「教室内言語調整の練習が教室外で可能な学習支援システムの開発」

Ⅱ．研究系主催の国際会議

○3rd International Conference on Phonetics and Phonology (3rd ICPP)

2013 年 12 月 20 日～ 22 日（国立国語研究所）

Session 1 [Chair: Hiroaki Kato (NICT), Commentator: Yukari Hirata (Colgate University)]

Keynote lecture 1

Reiko Mazuka (RIKEN Brain Science Institute/Duke University)

"Learning that duration can be phonemic: Acquisition of duration-based vowel and consonant phonemic contrasts in Japanese"

Poster session 1

1. Masako Fujimoto (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

   "Timing differences in articulation between single and geminate voiceless stop consonants: An analysis of cine-MRI data"

2. Haruka Fukazawa, Shigeto Kawahara, Mafuyu Kitahara and Shin-Ichiro Sano (Keio University/Keio University/Waseda University/Okayama Prefectural University)

   "[p] causes devoicing of geminates in Japanese"

3. Mahjoub Zirak and Peter M. Skaer (Hiroshima University)

   "Phonetic implementation of lexical and post lexical geminates in Persian"

4. Toshio Matsuura and Kumiko Sato (Hokusei Gakuen University/Nagasaki University of Foreign Studies)

   "Tonal change in Nagasaki Japanese"

5. Emiko Kaneko, Ian Wilson, Naomi Ogasawara, Younghyon Heo (University of Aizu)

   "Differentiation of yes/no and wh-questions in the Aizu dialects"

6. Jeroen Breteler (University of Amsterdam)

"A Stratal OT typology of lexical tonal melodies"

7. Donna Erickson, Shigeto Kawahara, Jeff Moore, Atsuo Suemitsu,Yoshiho Shibuya (Showa Music University/Keio University/Sophia University/Japan Advanced Institute of Science and Technology/Kanazawa Medical University)

"Effect of vowel height and position on jaw opening patterns in Japanese"

8. Ayat Hosseini (The University of Tokyo)

"Phonetic differences between pre-nuclear and nuclear accents in Persian"

9. Tatsuyuki Mimura (Muroran Institute of Technology)

"Notes on the origin and the development of secondary stress in Danish"

10. Shin'ichi Tanaka (Kobe University)

"Tonal change of loanwords in Osaka Japanese"

11. Albert Lee, Yi Xu and Santitham Prom-On (University College London/University College London/King Mongkut's University of Technology Thonburi)

"Predicting single-word F0 contours of Tokyo Japanese using PENTAtrainer2"

12. Yizhou Lan and Sunyoung Oh (City University of Hong Kong)

"Impact of L1 tone on L2 segments: Evidence from Cantonese and Mandarin speakers' production of English consonant clusters"

13. Brigitta Keij and René Kager (Utrecht University)

"Early acquisition of word-level accent: A cross-linguistic infant study"

14. Shiho Yamamoto (University of Arizona)

"Pitch patterns of Japanese traditional verses"

Session 2 [Chair: Michinao Matsui (Osaka Health Science University)]

Keiichi Tajima (Hosei University/RIKEN Brain Science Institute)

"Are phonemic length contrasts in Japanese exaggerated in infant-directed speech?"

Hyunsoon Kim (Hongik University)

"Korean speakers' perception of Japanese geminates: Evidence for the role of L1 grammar"

Session 3 [Chair: Ray Iwata (Kanazawa University), Commentator: John Phan (JSPS/NINJAL)]

Keynote lecture 2

Larry Hyman (University of California Berkeley)

"Towards a typology of tone system changes"

Session 4 [Chair: Yosuke Igarashi (Hiroshima University)]

Mitsuaki Endo (Aoyama Gakuin University)

"Bidirectional change in tone: Evidence from Chinese"

Pittayawat Pittayaporn (Chulalongkorn University)

"Contour change as restructuring of tonal variation: The case of Tone 4 in Thai"

Session 5 [Chair: Zendo Uwano (NINJAL)]

Jonathan Evans (Academia Sinica)

"Tone reduction processes in Sino-Tibetan languages"

Haruo Kubozono (NINJAL)

"Accent changes in Kagoshima Japanese due to dialect contact"

Poster session 2

1. Adam Jardine and Amanda Payne (University of Delaware)

"Expanding StressTyp2: Integrating pitch accent and tone"

2. Seunghun J. Lee and Clementinah Burheni (Central Connecticut State University/University of Venda)
   "Revisiting H tone spreading and depressor consonants in Xitsonga"
3. Hang Zhang (George Washington University)
   "The realization of Chinese sentence prominence in L2 studies"
4. Tetsuo Nishihara (Miyagi University of Education)
   "On the condition of application in Rendaku"
5. Takayo Sugimoto (Tokoha University)
   "The role of pitch accent in the acquisition of Rendaku"
6. Shinri Ohta and Satoshi Ohta (The University of Tokyo/Yamaguchi University)
   "Rendaku "enthusiasts" and rendaku "indifferents": Classification of compound nouns based on the frequency of rendaku"
7. Hiromi Onishi (Grinnell College)
   "Identification of Japanese contrasts by Korean learners"
8. Manami Hirayama (Ritsumeikan University)
   "A preliminary study on boundary effects in vowel devoicing in Japanese"
9. Michinao Matsui (Osaka Health Science University)
   "On the perceptual cue of devoiced vowels and voicedness of obstruents"
10. Mafuyu Kitahara and Kiyoko Yoneyama (Waseda University/Daito Bunka University)
    "The effect of postvocalic voicing on durational characteristics of vowels in Japanese and L2 English"
11. Kiyoko Yoneyama and Mafuyu Kitahara (Daito Bunka University/Waseda University)
    "Acquisition of word-final English voiced stops by Japanese learners of English: A case voiced alveolar stops"
12. Kentaro Suganuma, Nicola Stranbini and Baris Kahraman (Kyushu University/Kyushu University/The University Tokyo)
    "Experimental study on sound symbolism between "size" and "consonantal voicing" in Japanese and Turkish"
13. Jeremy Perkins (University of Aizu)
    "Distinct lexical strata in Thai consonant-tone interaction"
14. Ruoyang Shi and Qing Zhang (Kyoto University/Tianjin Normal University)
    "Tone—the exaptation of music"

Session 6 [Chair: Shigeki Kaji (Kyoto University)]

Carlos Gussenhoven (Radboud University Nijmegen)
"On the origin and development of the Central Franconian tone"

Jeffrey Heinz (University of Delaware)
"StressTyp2: A database for the accentual patterns in the world's languages"

Session 7 [Chair: Emiko Kaneko (University of Aizu), Commentator: Mark Irwin (Yamagata University)]

Keynote lecture 3

Laurence Labrune (University of Bordeaux/CNRS)

"A cross-linguistic approach to rendaku-like compound markers, with special reference to Korean and Basque"

Session 8 [Chair: Katsuo Tamaoka (Nagoya University)]

Mieko Takada (Aichi Gakuin University)

"Regional differences in voicing patterns during the closure of Japanese voiced geminates"

Sin-ichiro Sano and Shigeto Kawahara (Okayama Prefectural University/Keio University)

"Testing rendaku experimentally: Rosen's Rule"

○国際シンポジウム「世界の言語における複統合性」

2014 年 2 月 20 日～ 21 日（国立国語研究所）

2 月 20 日（木）

Invited talk

マイケル・フォーテスキュー（コペンハーゲン大学），マリアンヌ・ミスン（カリフォルニア大学サンタバーバラ校），ニコラス・エヴァンス（オーストラリア国立大学）

"What are the limits of polysynthesis?"

アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）

"Polysynthesis in Ainu"

佐藤知己（北海道大学）

"A classification of Ainu noun incorporation and its implications for language typology"

宮岡伯人

"Complex transitive verb in Yupik"

マリアンヌ・ミスン（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）

"Chasing the essence of polysynthesis"

渡辺 己（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

"The polysynthetic nature of Salish"

中山俊秀（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

"The role of polysynthesis in Nuuchahnulth morphosyntactic structure"

堀 博文（静岡大学）

"Polysynthesis" in Haida"

2 月 21 日（金）

Invited talk

ジョハンナ・ニコルス（カリフォルニア大学バークレー校）

"Explaining the geography of polysynthesis"

影山太郎（国立国語研究所）

"Noun incorporation-like phenomena in Japanese: At the crossroads of polysynthesis and agglutination"

ジョン・ホイットマン（国立国語研究所），ケリ・ラッセル（オックスフォード大学），柳田優子（筑波大学）

"Was Old Japanese a polysynthetic language?"

永山ゆかり（北海道大学）

"Polysynthesis in Alutor"

エカテリーナ・グルズジェワ（ヘルシンキ大学）

"Nivkh polysynthetic features within and across clauses"

エドワード・ワイダ（ウェスタン・ワシントン大学）

"Ket polysynthesis"

ロベルト・ザヴァラ・マルドナド（CIESAS）

"Polysynthesis in Mixe-Zoquean languages."

ニコラス・エヴァンス（オーストラリア国立大学）

"Polysynthesis in Northern Australian languages"

Discussion

Ⅲ．その他の国際会議

○9th Workshop on Altaic Formal Linguistics

August 23-25, 2013, Cornell University, Ithaca, NY

Friday, August 23

Opening Remarks: John Whitman

Session: 1, Chair: Mats Rooth

Invited Speaker: Susumu Kuno (Harvard University) & Soo-Yeon Kim (Sejong University)

"How Much Do Islands Matter in Sluicing?"

Jiwon Yun (Stony Brook University)

"The influence of sentence-final intonation and phonological phrasing on the interpretation of wh"

Session: 2, Chair: John Bowers

Changguk Yim (Chung-Ang Universi) & Yoshi Dobashi (Niigata University)

"Recursive ι -phrasing and Yo-particle in Korean: A Derivational Approach"

Bonnie Krejci (Stanford University) & Lelia Glass (Stanford University)

"The Noun/Adjective Distinction in Kazakh"

Toru Ishii (Meiji University)

"Evidential Markers in the Nominal Right Periphery: The Japanese Hearsay Marker "Tte""

Session: 3, Chair: Wayne Harbert

Yinji Jin (Yokohama National University)

"Nominative-Genitive Conversion in Late Middle Korean"

Lina Bao (Osaka University), Megumi Hasebe (Yokohama National University), Wurigumula Bao (Gifu University) & Hideki Maki (Gifu University)

"Accusative Subject Licensing in Modern Inner Mongolian"

Yoshiyuki Shibata (University of Connecticut)

"Object movement and its implication for A-scrambling in Japanese"

Session: 4, Chair: Miloje Despic

Jaklin Kornfilt (Syracuse University) & Omer Preminger (Syracuse University)

"Nominative as no case at all: An argument from raising-to-accusative"

Hanzhi Zhu (Stanford University)

"Raising in Kazakh: Case, Agreement, and the EPP"

Faruk Akkuş (Boğaziçi University)

"Light Verb Constructions in Turkish: A Case for DP Predication and Blocking"

Mikhail Knyazev (St. Petersburg State University)

"Verbal complementizers in Kalmyk"

Saturday, August 24

Session: 1, Chair: John Whitman

Hideki Kishimoto (Kobe University)

"Exclamatives and Nominalization in Japanese"

Asya Pereltsvaig (Stanford) & Ekaterina Lyutikova (Moscow State University)

"Functional Structure in the Nominal Domain: A View from Tatar"

Noriko Yoshimura (University of Shizuoka) & Shoichi Iwasaki (UCLA)

"Cross-dialectal patterns of focus marking in Japanese cleft constructions"

Session: 2, Chair: Jaklin Kornfilt

Nil Tonyalı (Boğaziçi University)

"Should Turkish be categorized as a high or low applicative language?"

Kyumin Kim (University of Calgary)

"Phases and idioms"

Poster Session

Bilge Palaz (Boğaziçi University, Yıldız Technical University)

"On the Structure of Postpositional Phrases in Turkish"

Hyun Kyoung Jung (University of Arizona)

"The Double Functions of Korean Benefactive Suffix"

Feyza Balakbabalar (Boğaziçi University)

"Can non-active morphology be a reliable indicator of external causation in anti-causativestructures? Evidence from Turkish"

Takashi Nakajima (Toyama Prefectural University)

""Weak" Projection, Conflation and the Lexical Transitivity Alternations"

Lan Kim (University of Delaware) & Satoshi Tomioka (University of Delaware)

"Decomposing the Give-type Benefactives in Korean and Japanese"

Sergei Tatevosov (Moscow State University)

"Manner-result dichotomy and light verb constructions in Karachay-Balkar"

Sungsoo Ok (Sejong University)

"A Predicate Approach to Korean Sluicing-like Constructions"

Naoyuki Akaso (Nagoya Gakuin University)

"On the Subject Position of Unaccusatives in Japanese: the Kageyama-Kishimoto Puzzle"

Takeru Suzuki (Tokyo Gakugei University)

"Not so Simple as Ik-Sounds: Verbs of Motion and Purpose Ni in Japanese"

Theodore Levin (MIT)

"Successive-Cyclic Case Assignment: Korean Case Alternation and Stacking"

Kenshi Funakoshi (University of Maryland)

"Silent Possessors in Korean"

Yuta Sakamoto (University of Connecticut/Tohoku University)

"Absence of Case-matching Effects in Mongolian Sluicing"

Ayşe Büşra Yakut (Boğaziçi University)

"The Logophoric Nature of the Bound Anaphor "kendi" in Turkish"

Hiroshi Aoyagi (Nanzan University)

"On serialized verbs in Japanese and Korean

Session: 3, Chair: Abby Cohn"

Invited Speaker: Bruce Hayes (UCLA)

"How do constraint families interact? A study of variation in Tagalog, French, and Hungarian"

Yusuke Imanishi (MIT)

"Minimal vs. maximal truncation in the Kansai Japanese hypocoristics"

Session: 4, Chair: Draga Zec

Seongyeon Ko (Queens College)

"Towards a contrast-driven typology of the ALtaic vowel systems"

Samuel R. Bowman (Stanford University) & Benjamin Lokshin (Stanford University)

"Idiosyncratic transparency in Kazakh vowel harmony"

Yusuke Yoda (Kinki University)

"Phrasal or Phasal Coordination?-From the Evidence of Suspended Affixation"

Sunday, August 25

Session: 1, Chair: Jeff Runner

Invited Speaker: Guglielmo Cinque (Università Ca' Foscari Venezia)

"Word Order Typology: a change of perspective"

Tomoko Ishizuka (Tama University)

"Steps towards a minimalist analysis of Japanese no"

Kunio Nishiyama (Ibaraki University)

"The development of Japanese no: Grammaticalization, degrammaticalization, or neither?"

Session: 2, Chair: John Whitman

Yasuhiro Iida (Osaka University)

"On the "What as Why" Phenomenon in Japanese and Turkish"

Jaehoon Choi (University of Arizona)

"On Jussive Clauses in Korean"

Hsu-Te Cheng (University of Connecticut)

"Ellipsis in Disguise"

B．研究系の合同発表会

研究成果発表会 2014

国語研の柱である基幹型共同研究プロジェクトの中からいくつかを選び，その学術的成果（何を発見したか，何を作ったか）の概要を披露する発表会を開催した。

2014 年 2 月 2 日（日）一橋大学一橋講堂（学術総合センター 2 階）

開会の辞：国語研の現在（所長 影山太郎）

［口頭発表］

理論・構造研究系の基幹型研究

窪薗晴夫

「日本語レキシコンの音韻特性 ―ピッチアクセントの多様性―」

影山太郎

「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性 ―V-V 複合動詞の類型と自他交替―」

［共同研究プロジェクトのポスター展示とデモンストレーション］

理論・構造研究系

Timothy J. Vance

「日本語レキシコン ―連濁事典の編纂―」

横山詔一，ヴォロビヨワ・ガリーナ

「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用 ―非漢字系学習者向け教授法の研究紹介―」

時空間変異研究系

相澤正夫

「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明 ―『現代日本語の動態研究』の刊行を中心に―」

大西拓一郎

「方言の形成過程解明のための全国方言調査 ―方言分布の経年比較から何が見えてくるのか―」

言語資源研究系

小木曽智信

「通時コーパスの設計 ―日本語歴史コーパス 平安時代編の構築・公開―」

田中牧郎

「通時コーパスの設計 ―近代語コーパスの展開と活用―」

言語対照研究系

アンナ・ブガエワ

「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究 ―アイヌ語における名詞修飾―」

日本語教育研究・情報センター

野山 広

「多文化共生社会における日本語教育研究 ―定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究：日本語学習者に対する縦断調査結果を中心に―」

宇佐美洋

「コミュニケーションのための言語と教育の研究 ―もうひとつのコミュニケーション研究：ことばを解釈・評価する心的過程に着目して―」

研究情報資料センター

早田美智子

「日本語研究・日本教育文献データベース」

コーパス開発センター

浅原正幸

「Web を母集団とした超大規模コーパスの構築 ―収集と解析―」

［口頭発表］

時空間変異研究系の基幹型共同研究

木部暢子

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 ―喜界島・宮古島・八丈島合同調査から―」

真田信治

「日本語変種とクレオールの形成過程 ―接触言語学の現場から―」
言語資源研究系の基幹型共同研究
前川喜久雄
「コーパス日本語学の創成 ―コーパスを用いた日本語研究の推進方策と実績―」
「コーパスアノテーションの基礎研究 ―アノテーションの重ね合わせ技術を中心に―」
言語対照研究系の基幹型共同研究
ジョン・ホイットマン
「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究 ―東北アジア言語地域の位置付けに向けて―」
プラシャント・パルデシ
「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 ―理論的および応用的な成果―」
日本語教育研究・情報センターの基幹型共同研究
迫田久美子
「多文化共生社会における日本語教育研究 ―学習者コーパスと日本語教育研究―」
野田尚史
「コミュニケーションのための言語と教育の研究 ―日本語学習者の読解過程の解明に向けて―」

理論・構造研究系

○レキシコン・フェスタ
2014 年 2 月 1 日（国立国語研究所）
横山詔一，高田智和
「文字環境研究の源流：日下部漢字表の意義」
小磯花絵
「日本語話し言葉における句末音調の役割について」
ティモシー・J・バンス
「データベースによる連濁生起傾向の検討」
三井はるみ
「首都圏若年層の言語の地域差」
益岡隆志，丸山岳彦
「複文構文研究への取り組み ―コーパス言語学の観点を中心に―」
村杉恵子
「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」
ポスターセッション A
岸本秀樹，村杉恵子
「時制投射と副詞：主節不定詞現象との関わりにおいて」
瀧田健介，後藤 亘
“Case-Markers and Postpositions in Japanese: A View from Ellipsis”
儀利古幹雄，桑本裕二
「鳥取県倉吉市方言における名前のアクセントの変化」
松浦年男
“Presence or Absence of Accent Shift in Nagasaki Japanese”

松井理直
「VOT 分布のシミュレーションに関する予備的研究」
平田 秀
「三重県尾鷲市方言の単純動詞アクセントと‘第三の式’」
鑓水兼貴
「若者語の地理的社会的伝播」
浅井 淳
“Multistage Lenition in Rendaku Sequential Voicing”
徳弘康代
「漢字の汎用性調査及び漢字同定のための国際基準設定の提案」
ポスターセッション B
Koji Sugisaki，Keiko Murasugi
“Wh-islands in Child Japanese Revisited”
藤井友比呂
“Radical Argument Drop in the Null Subject Hierarchy”
平山真奈美
“A Preliminary Study on Boundary Effects in Vowel Devoicing in Japanese”
髙橋康徳
「上海語変調の音声的変化」
Clemens Poppe
“Tonal vs. Metrical Approaches to Japanese Accent: Two Case Studies”
石本祐一，小磯花絵
「「発話」で生じるイントネーション句単位の F0 変動」
アナスターシア・ドゥブロビナ
「首都圏の大学生の間にみられる新しい言語現象について」
堤 智昭，高田智和
「原本画像と翻字テキストの対照表示ビューワ」
赤瀬川史朗，影山太郎
「オンラインデータベース「複合動詞レキシコン」の英語・中国語・韓国語対訳版」

時空間変異研究系

○Japanese Language Variation and Change Conference 2014
2014 年 3 月 21 日（国立国語研究所）
招待講演：中山俊秀「危機言語時代の言語調査 ―なにをどのように記録すべきか―」
司会：木部暢子
ポスター発表：
峪口有香子，Abdunabi Ubul
「徳島県吉野川流域方言における音声の記録と保存 ―言語地理学的調査の一環として―」
高山林太郎
「高知市方言の形容詞の促・長・撥音挿入低起式形」
竹内はるか
「首都圏に通う大学生の二人称代名詞に対する印象と使用実態」

徳永晶子
「奄美沖永良部島方言の複数接尾辞」
山下里香
「コミュニティ教室における小中学生児童の「ですます体」スタイルの使用 ―「対人的」スタイルがが対「人」でなくなるとき―」
大沼敦子
「「国民諸君」から「国民のみなさま」へ～お客様化するワタシ達～歴代内閣総理大臣の所信表明演説に見る呼びかけ語の変化」
酒井雅史
「若年層の敬語運用の類型化の試み ―ロールプレイ会話データを用いて―」
白坂千里
「関西若年層の携帯メールの特徴 ―ロールプレイ調査における電話とメールの対照から―」
ワークショップ
日本語調査をデザインする ―やっててよかった，やっときゃよかったことばの調査―
司会：朝日祥之
相澤正夫
「多人数社会調査の立場から」
大西拓一郎
「方言分布調査の立場から」
金水 敏
「古典文献調査の立場から」
金田章宏
「八丈語の調査から」
ダニエル・ロング
「接触言語の調査から」
ディスカッション

言語資源研究系

○第 4 回コーパス日本語学ワークショップ
2013 年 9 月 5 日～ 6 日（国立国語研究所）
挨拶：前川喜久雄
口頭発表
佐々木文彦
「コーパスを利用した言葉の意味・用法の変化の研究 ―「敷居が高い」を例に―」
張 麗
「ニ格とデ格の交替について」
菅原 崇，浜野祥子
「コーパスに基づく日本語擬態語動詞の意味分析」
藤井聖子
「条件構文の談話標識化の諸相」
ポスター発表
李 惠正

「接続助詞「から」と「ので」に関する一考察 ―前件のモダリティとの共起を手掛かりにして―」
堀 一成，坂尻彰宏，石島 悌
「BCCWJ 教科書データより抽出した頻度情報に基づく日本語ライティング指導教材の作成」
田頭未希
「接続助詞「けど」の音調と意味用法に関する研究 ―挿入用法についての検討―」
間淵洋子
「『太陽コーパス』における漢語表記の多様性 ―コーパスの XML タグを利用した研究手法の試み―」
土屋智行，伝 康晴，小磯花絵
「会話コーパスの転記方式の相互変換 ―引き伸ばしに着目して―」
小磯花絵，伝 康晴
「弱境界における発話計画に関わる音声的・言語的特徴の分析」
石本祐一，土屋智行，小磯花絵，伝 康晴
「会話コーパスの転記方式の相互変換 ―言語･音響特徴を用いた会話分析方式の音調マーカーの導出―」
茂木俊伸
「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析 ―「マークする」を例として―」
李 楓
「現代日本語における汎用的漢語サ変動詞の抽出とその内部構成の検討」
森川結花，小山宣子，浜田 秀
「「一方」という形式に見られる「する」と「やる」の差異について」
田中牧郎
「文体から見た『今昔物語集』の語彙 ―『日本語歴史コーパス 平安時代編』と比較して」
冨士池優美，河瀬彰宏，野田高広，岩崎瑠莉恵
「『今昔物語集』のテキスト整形」
近藤明日子
「『近代女性雑誌コーパス』の小説会話部分に現れる一・二人称代名詞の計量的分析」
小木曽智信，市村太郎，鴻野知暁
「近世口語資料の形態素解析の試み」
沈 晨
「日本語連用形名詞の自立性の段階について」
石本祐一，小磯花絵
「日本語話し言葉コーパスを用いた対話音声のイントネーション句の分析」

口頭発表

岡﨑友子
「中古における接続語の使用傾向について」
坂野 収
「「ガ／ノ」交替現象についての一考察 ―古代・現代コーパスを対照して―」
池田幸恵，須永哲矢
「「五国史」宣命のコーパス化」
髙橋圭子，東泉裕子
「漢語名詞の副詞用法～『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『太陽コーパス』を用いて」

佐野大樹，István VARGA，鳥澤健太郎，橋本 力，川田拓也，呉 鍾勲，大竹清敬
「事象の活性化と不活性化を把握する言語資源の構築とその応用 ―災害時における問題報告と支援情報のマッチングを例に―」
石川慎一郎
「テキスト関連属性と助詞選択：計量的アプローチに基づく探索的研究 ―主語・主題を導く「は」と「が」をめぐって―」
高松 亮
「文節係り受け木の根の構造について」
山田昌裕
「〈名詞句＋係助詞〉の格」
ポスター発表
中溝朋子，坂井美恵子，金森由美，大岩幸太郎，刈谷丈治
「日本語学習者のための名詞と修飾語のコロケーション検索プログラムの開発とその使用例」
小椋秀樹
「外来語語末長音の表記のゆれについて」
浅原正幸，森田敏生
「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』の連続値データ型」
今田水穂
「日本語名詞述語文の意味関係アノテーション」
Irena SRDANOVIČ
「コロケーションとシンタクス ―形容詞と名詞のコロケーションを対象に―」
森 秀明
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』「図書館書籍」の生年代別分布は何を表しているのか ―「デナイ」「デハナイ」「ジャナイ」の使用割合から見た一考察―」
柏野和佳子，中村壮範
「現代日本語書き言葉における非外来語のカタカナ表記事情」
矢野 信
「言語資料としての「判決文」の分析にまつわる問題点」
丸山岳彦
「現代日本語の従属節に現れるモダリティ形式の分布」
小野寺喜行，新納浩幸
「クラスタリングを利用した能動学習による語義曖昧性解消の領域適応」
吉田拓夢，新納浩幸
「語義曖昧性解消の領域適応における Misleading データの存在と検出」
Elga Laura STRAFELLA，松本 裕治
「日伊コロケーション辞書の作成を目指す『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からのコロケーションの検出と分析」
浜田 秀
「NDL Search によるジャンル名の分析」
阿保きみ枝
「社会科教科書における教科特徴動詞の用法 ―教科書コーパスと図書館コーパスの比較を通して―」

保田 祥，立花幸子，柏野和佳子，丸山岳彦
「「ベテランは足を保護する」が語りかけるとき」
山口昌也
「多義複合動詞の語義構造の分析」
矢野 信
「コーパスを活用した法文データの分析に関する問題点」
山崎 誠
「同一見出し語の出現間隔の分布と文体差」
指定討論・全体討論

○第5回コーパス日本語学ワークショップ
2014年3月6日～7日（国立国語研究所）
挨拶 前川喜久雄
口頭発表
王 軒
「色彩語メタファー表現に関する研究 ―「バラ色」と「灰色」を例にして―」
須永哲矢
「形態素解析辞書「中古和文 UniDic」を利用した古典学習教材の作成」
臼田泰如，島本裕美子，久保 圭，荒牧英治
「闘病記からわからないこと，わかるかもしれないこと ―闘病記コーパスを用いた患者像の一致についての考察―」
朱 炫姝
「動詞「教える」と共起する授受表現について」
ポスター発表
浅原正幸，池本 優，森田敏生
「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』の連続値データ型（2）―読み時間の表示―」
吉田拓夢，新納浩幸
「外れ値検出手法を利用した Misleading データの検出」
小野寺喜行，新納浩幸
「領域間距離を利用した能動学習による語義曖昧性解消の領域適応」
菊池裕紀，新納浩幸
「uLSIF による重み付き学習を利用した語義曖昧性解消の領域適応」
佐々木悠人，古宮嘉那子，小谷善行
「トピックモデルと概念辞書による日本語の語義曖昧性解消」
Bor HODOŠČEK
「コーパスのメタデータを用いた日本語におけるレジスターのモデル化」
Wahyu Purnomo，古宮嘉那子，小谷善行
「SVM を用いたインドネシア語連体従属接続詞の判定システム」
古宮嘉那子，奥村 学，小谷善行
「合議による語義曖昧性解消の領域適応のための確信度の調整」
山崎舞子，森田 一，古宮嘉那子，小谷善行
「CRF による Web コーパスからのアニメタイトルに対する訳語の自動抽出」

鈴木佳奈，山本真理，鈴木亮子，伝 康晴
「遡及的に構成される発話連鎖の諸特徴」
保田 祥
「コーパスから取得した用例で対象物が認識可能であるのか」
小西 光，中村壮範，田中弥生，浅原正幸，今田水穂，山口昌也，前川喜久雄，小木曽智信，山崎 誠，丸山 岳彦
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正作業の進捗」
浅井拓也，菊池英明，前川喜久雄
「自発モノローグにおける息継ぎ音自動アノテーションの試み」
山口昌也
「形容詞用例データベースの構築」
佐藤理史，夏目和子
「新しい日本語辞書定義文型の策定に向けて」
横野 光，星野 翔
「統計的現代語訳モデルを用いたセンター試験古文問題解答」
八木 豊，Bor HODOŠČEK，阿辺川武，仁科喜久子
「日本語作文推敲支援システム「ナツメグ」における誤用検出手法の評価」
柏野和佳子，中村壮範
「BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報検索ツールによるテキスト分析」
石本祐一，小磯 絵
「独話音声と対話音声の発話末の F0 変化」

口頭発表

浅原正幸，今田水穂，保田 祥，小西 光，前川喜久雄
「Web を母集団とした超大規模コーパスの開発 ―収集と組織化―」
新納浩幸，國井慎也，佐々木稔
「語義曖昧性解消を対象とした領域固有のシソーラスの構築」
山本 健
「複雑ネットワークの視点による二字熟語の構造について」
狩野芳伸
「Kachako におけるコーパスアノテーションの重ね合わせ」

ポスター発表

松吉 俊，浅原正幸，飯田 龍，森田敏生
「拡張 CaboCha フォーマットの仕様拡張」
山崎 誠
「言語単位と文の長さが品詞比率に与える影響」
森 秀明
「言語は経済に連動して変化する」
朴 俌徑
「形容詞による属性叙述表現の構造に基づく意味分析」
冨士池優美，岩崎瑠莉恵
「『今昔物語集』の捨て仮名」
小野正樹，朱 炫姝，Dehipitiya Surangi DILUSHA，李 国玲，Suvanakoot PATCHARAPHAN

「動詞「きく」のコロケーションについて ―WEB コーパスと日本語母語話者・上級日本語学習者の主観的判断から―」

近藤明日子

「『太陽コーパス』の口語会話部分に現れる動詞の待遇表現の計量的分析 ―聞き手に対する尊敬待遇表現を中心に―」

中平詩織

「二つの文末形式「～感じだ」と「～感じがする」について」

木田真理，柏野和佳子

「「書き言葉的」として指導する必要のある語の分析 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して―」

趙 海城

「「N を通じて」と「N を通して」について」

張 麗

「感情動詞におけるニ格とデ格の交替について」

立山智絵

「教科書コーパスにおける教科別特徴語」

田中牧郎

「『今昔物語集』における文体対立語 ―巻 12 と巻 27 の語彙比較による―」

長谷川守寿

「BCCWJ のタグ情報の修正について」

東泉裕子，髙橋圭子

「文末表現から発話冒頭の談話標識的表現へ」

小木曽智信，神田龍之介，近藤明日子

「BCCWJ における敬語形式の使用実態」

野田高広

「『法華百座聞書抄』のテンス・アスペクト形式：『今昔物語集』との比較」

間淵洋子

「『太陽コーパス』の漢字表記語に対する熟字ルビについて」

市村太郎

「近代雑誌資料における程度副詞類の使用状況」

矢野 信

「最高裁判所判決の文体特徴の経年変化」

指定討論・全体討論

言語対照研究系

○合同研究発表会　NINJAL Typology Festa 2014

2014 年 2 月 22 日～ 23 日（国立国語研究所）

ニコラス・エヴァンス

“Experiencer Objects Constructions and Transitivity in Nen”

Session 1

白井聡子

“Analysis of intransitive-transitive verb pairs in rGyalrong”

岸本秀樹

“On Japanese verbs of finding and catching”

ポスター発表

Session 2

ダニエラ・カルヤヌ

“From existence to experience: Four verbs of occurring in Romanian”

ラリサ・ライスロ

“Transitivity in Nganasan”

Session 3

プラシャント・パルデシ

“A Geo-typological database of transitivity pairs: What is it and what does it do?”

ピーター・フック , プラシャント・パルデシ

“[children's playing photographs] vs. [playing children's photographs]: Mismatched prenominal participial phrases in Marathi, Hindi-Urdu, Korean & Japanese”

アンナ・ブガエワ , ジョン・ホイットマン

“Noun modification and noun complementation in Northeast Asia”

マリアンヌ・ミスン

“Transitivity and Information Flow”

アンドレイ・マルチュコフ

“Constraining nominalizations: functional and structural factors in interaction”

Session 4

エカテリーナ・グルズジェワ

“Clausal nominalization as a complementation strategy in Nivkh”

長崎 郁

“Relativization, nominalization, and main clause use of the attributive/nominalized forms of verbs in Kolyma Yukaghir”

Session 5

風間伸次郎

“Nominal Predicates in Tungusic languages Diachronic analysis on nominal predicates -focusing on -ča in Tungusic languages-”

江畑冬生

“Polyfunctionality of verbal endings in Turkic”

松本 曜

“Typology of motion event descriptions: Manner, Path and Deixis across and within languages”

C．プロジェクトの発表会

共同研究プロジェクト等の主催で，公開研究発表会や学術シンポジウム等を，日本各地を会場として多数開催している。

Ⅰ．共同研究プロジェクト主催のシンポジウム・ワークショップ

シンポジウム

○シラバス作成を科学にする ―日本語教育に役立つ多面的な文法シラバスの提案―

2014 年 2 月 22 日（一橋大学 国立・東キャンパス 2 号館）

基調講演Ⅰ

庵 功雄

「文法シラバスの作成を科学する」

パネル発表

岩田一成

「口頭表現出現率から見た文法シラバス」

中俣尚己

「生産性から見た文法シラバス」

森 篤嗣

「日本語能力試験から見た文法シラバス」

田中祐輔

「既存テキストから見た文法シラバス」

基調講演Ⅱ

山内博之

「文法シラバスの現場への導入を科学する」

Ⅱ．各プロジェクトの研究発表会

理論・構造研究系

○日本語レキシコンの音韻特性

プロジェクトリーダー　窪薗晴夫

2013 年 6 月 23 日（国立国語研究所）

松井理直（大阪保健医療大学）

「無声化母音・阻害音有声性の知覚的手がかりと摩擦促音の生起」

Donna Erickson（昭和音楽大学･上智大学）, Yoshiho Shibuya（金沢医科大学）, Atsuo Suemitsu（北陸先端科学技術大学院大学），Mark Tiede（Haskins Laboratories）

“Comparison of American and Japanese English speakers’ articulation of Phrasal Stress: Some observations”

2013 年 9 月 27 日（しいのき迎賓館 セミナールーム）

姜 英淑（松山大学）

「韓国語麗水市蓋島（けど）方言のアクセント」

遠藤光暁（青山学院大学）

「中国語諸方言における声調変化」

Bob Ladd (University of Edinburgh)

“Individual differences in pitch perception, and their possible relevance for language typology”

2013 年 11 月 22 日（神戸市外国語大学）

荒河 翼（広島大学大学院）

「種子島西之表市東部方言の 2 型アクセント体系」

三村竜之（室蘭工業大学）

「デンマーク語における副次強勢の起源に関する一考察」

○日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性

プロジェクトリーダー　影山太郎

2013 年 9 月 6 日（慶応義塾大学 日吉キャンパス）

岸本秀樹（神戸大学），上原 聡（東北大学）

「「語彙カテゴリーと統語機能」」

小野尚之（東北大学）

「N ヲスル構文における名詞の事象性と個体性」

秋田喜美（大阪大学）

「中国語と日本語における V-V 複合動詞の考察」

中谷健太郎（甲南大学）

「テ系動詞構文の構造と意味」

○文字環境のモデル化と社会言語科学への応用

プロジェクトリーダー　横山詔一

2013 年 12 月 26 日（国立国語研究所）

横山詔一（国立国語研究所）

「異体字選好の国際比較研究」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「外国ルーツ児童の読み能力：テスト指示文の影響」

銭谷真人（早稲田大学大学院生）

「現代の「変体仮名」」

○日本語レキシコン－連濁事典の編纂

プロジェクトリーダー　Timothy J. Vance

2013 年 5 月 18 日（会津大学産業イノベーションセンター）

ティモシー・J・バンス（国立国語研究所）

「連濁プロジェクトの中間報告」

北川善久（インディアナ大学）

“How Rendaku Was Made “Harder”in Ha-gyoo“

○言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約

プロジェクトリーダー　村杉恵子（南山大学）

2013 年 5 月 18 日（南山大学名古屋キャンパス）

後藤 亘（三重大学）

「ある削除の理論：非構成素削除にたいするその影響」
高橋久子（三重大学）
「前 / 後置詞句内の階層構造と名詞句削除」
斎藤 衛（南山大学）
“Case and labeling in a language without ϕ-feature agreement”
2013 年 12 月 21 日～ 22 日（国立国語研究所）
藤井友比呂（横浜国立大学）
「日本語における補文分類に関するノート」
多田浩章（福岡大学）
「日本語における 2 種類の状態派生について」
岸本秀樹（神戸大学）
「付加詞と日本語の階層構造」
宮本陽一（大阪大学）
「N' 削除の比較統語論」
瀧田健介（三重大学）
「統語研究の成果と今後の方向性について」
高橋大厚（東北大学）
「項省略の比較統語論」
村杉恵子（南山大学）
「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約」
高野祐二（金城学院大学）
“Minimality for Merge”
斎藤 衛（南山大学）
「日本語 wh 句の不定演算子分析」
杉崎鉱司（三重大学）
「日本語獲得と普遍文法：wh 疑問文と削除現象を中心に」

○会話の韻律機能に関する実証的研究
プロジェクトリーダー　小磯花絵
2013 年 6 月 7 日～ 8 日（国立情報学研究所）
『日本語話し言葉コーパス』のコア（約 45 時間，50 万語）を対象とした RDB（以下 CSJ-RDB）の講習会（初級編・中級編）を開催した。

時空間変異研究系

○消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究
プロジェクトリーダー　木部暢子
2013 年 6 月 29 日（国立国語研究所）
（科研費基盤研究（A）「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」（研究代表者：狩俣繁久）との共催）
ワークショップ「日本の消滅危機言語のグロスを考える」
柴谷方良（ライス大学）
「言語記述における用語とグロスについて」

下地理則（九州大学）
「グロス付けにおける具体的な方策と問題点」
木部暢子（国立国語研究所）
「九州方言のグロス付けとその問題点」
2013 年 8 月 27 日（九州大学箱崎キャンパス）
発表テーマ：簡易記述文法についての報告 ―動詞，形容詞のグロス付けの方法を中心に―
仲原 穣（琉球大学非常勤）
「久米島真謝方言の簡易文法」
西岡 敏（沖縄国際大学）
「沖縄首里方言の簡易文法 ―動詞・形容詞を中心に―」
狩俣繁久（琉球大学）
「沖縄名護市幸喜方言の簡易文法 ―動詞・形容詞の文法記述を中心に―」
金田章宏（千葉大学）
「八丈方言の簡易文法 ―動詞・形容詞の文法記述を中心に―」
木部暢子（国立国語研究所）
「鹿児島方言の簡易文法 ―動詞・形容詞を中心に―」
田窪行則（京都大学）
「池間西原方言の簡易文法 ―動詞・形容詞を中心に―」
2013 年 11 月 2 日～ 3 日（国立国語研究所）
発表テーマ：危機方言を記述する ―記述の枠組みとグロス付け（本土方言向け）―
趣旨説明：木部暢子（国立国語研究所）
下地理則（九州大学）
「琉球語共同研究におけるグロスづけの試みの紹介と問題点の概観」
木部暢子
「方言の記述の枠組みとグロス付け ―鹿児島方言―」
新田哲夫（金沢大学）
「方言の記述の枠組みとグロス付け ―石川県白峰方言―」
大槻知世（東京大学大学院生）
「方言の記述の枠組みとグロス付け ―青森県津軽方言―」
全体討論 1「方言の記述の枠組みについて」
全体討論 2「方言の例文にグロスを付ける」
2013 年 12 月 22 日～ 23 日（ハロー貸会議室品川）
発表テーマ：危機方言を記述する ―記述の枠組みとグロス付け―
狩俣繁久（琉球大学）
「記述文法の可能性と不可能性 ―火山噴火避難の硫黄鳥島の方言から考える」
柴谷方良（ライス大学）
「言語記述における用語とグロスについて，その 2：分析とグロス」
田窪行則（京都大学）
「宮古語形態論 ―池間方言の動詞形態論を中心に」
又吉里美（岡山大学）
「沖縄語津堅方言の記述文法 ―動詞・形容詞を中心に―」
山田真寛（広島大学研究員）

「与那国語の動詞形態論を中心とした記述文法」
中川奈津子（京都大学大学院生），タイラー・ラウ，田窪行則（京都大学）
「琉球八重山語白保方言の文法概要」
2014 年 3 月 24 日（東北大学川内南キャンパス）
『日本言語地図』データベースの構築と公開：LAJDB ワークショップ
報告・発題：熊谷康雄（国立国語研究所）
討論者：小林 隆（東北大学），澤木幹栄（信州大学），澤村美幸（和歌山大学），竹田晃子（国立国語研究所特任助教），井上文子（国立国語研究所）

○方言の形成過程解明のための全国方言調査
プロジェクトリーダー　大西拓一郎
2013 年 7 月 27 日（国立国語研究所）
福嶋秩子（新潟県立大学）
「奄美徳之島における否定の意思を示す形式をめぐって」
大西拓一郎（国立国語研究所）
「方言分布の経年比較の中間報告」
2013 年 12 月 21 日（コラッセふくしま）
公開研究発表会（シンポジウム）全体テーマ「東北方言の特徴と形成」
半沢 康（福島大学）
「東北地方の方言伝播 ―見かけ時間データを手がかりにして―」
大橋純一（秋田大学）
「東北方言音声の変化の諸相」
小林 隆（東北大学）
「東北方言の特質と形成に関する試論」

○多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明
プロジェクトリーダー　相澤正夫
2014 年 1 月 25 日（国立国語研究所）
朝日祥之（国立国語研究所）
「「埋もれた声」から日本語の変遷を構築する」
塩田雄大（NHK 放送文化研究所）
「NHK アナウンサーのアクセントの現在 ―現行のアクセント辞典との「ずれ」を中心に―」

○日本語の大規模経年調査に関する総合的研究
プロジェクトリーダー　井上史雄
2014 年 3 月 18 日（国立国語研究所）
阿部貴人（国立国語研究所非常勤研究員），米田正人（国立国語研究所名誉所員），前田忠彦（統計数理研究所）
「第 4 回鶴岡調査 ―20 年間隔 4 回の調査で分かったこと―」
佐藤亮一（国立国語研究所名誉所員），米田正人（国立国語研究所名誉所員），阿部貴人（国立国語研究所非常勤研究員），水野義道（京都工芸繊維大学），佐藤和之（弘前大学）
「鶴岡方言における俚言のアクセント ―馴染み度との関係に着目して―」

井上史雄（国立国語研究所客員教授）
「社会言語学の枠組みと岡崎敬語」
鑓水兼貴（国立国語研究所非常勤研究員）
「岡崎敬語調査反応文の形態素解析」
柳村 裕（国立国語研究所非常勤研究員）
「岡崎における敬語の「丁寧さ」と「てる」の増加」
丁 美貞（首都大学東京）
「岡崎敬語調査における条件表現「と」「たら」「なら」「ば」の分析」

○日本語変種とクレオールの形成過程
プロジェクトリーダー　真田信治
2013 年 8 月 31 日（国立国語研究所）
朝日祥之（国立国語研究所）
「オホーツク海方言の形成と特性」
真田信治（国立国語研究所客員教授），簡月真（国立東華大学）
「宜蘭クレオールの音韻と語法」
卓 若媚（国立東華大学大学院生）
「宜蘭アタヤル語への日本語からの借用語」
水野義道（京都工芸繊維大学）
「中国東北部における残存日本語について」
全 永男（延辺大学）
「中国延辺地域における高年層日本語話者」
張 守祥（佳木斯大学）
「戦争体験者の文学作品における言語接触」
今村圭介（首都大学東京大学院生）
「旧南洋群島の日本語話者のスタイルシフト」
ダニエル・ロング（首都大学東京）
「パラオ国アンガウル島における日本語使用」
鳥谷善史（天理大学非常勤講師）
「残存日本語音声データ公開に向けて」

○日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究
プロジェクトリーダー　金水 敏
2013 年 9 月 2 日～ 3 日（国立国語研究所）
金水 敏（国立国語研究所客員教授）
「日本語疑問文の問題点」
外池滋生（青山学院大学）
「演算子 ―変項構造と WH 疑問文」
井上 優（麗澤大学）
「疑問表現の諸問題」
江口 正（福岡大学）
「間接疑問節をとる述語の類型と項構造」

金水 敏（国立国語研究所客員教授）
「疑問文調査票の検討」

○日本語文法の歴史的研究
プロジェクトリーダー　青木博史
2013 年 9 月 28 日（国立国語研究所）
福沢将樹（愛知県立大学）
「体言型アスペクトに関する諸問題」
宮地朝子（名古屋大学）
「江戸・東京語のダケの歴史的展開」
2014 年 3 月 9 日（成城大学）
竹内史郎（成城大学），岡崎友子（東洋大学）
「ソレデ，ソシテ，ソレガ / ヲ，ソコデについて ―接続詞の捉え方―」
小柳智一（聖心女子大学）
「「じもの」考 ―上代の特殊な語法―」

○方言談話の地域差と世代差に関する研究
プロジェクトリーダー　井上文子
2013 年 9 月 15 日（関西大学千里山キャンパス）
井上文子（国立国語研究所），松田美香（別府大学），日高水穂（関西大学）
「ロールプレイ会話による方言談話の収録と分析概要」
酒井雅史（大阪大学大学院生）
「ロールプレイ会話における丁寧語使用と談話展開」
森 勇太（関西大学）
「ロールプレイ談話に見られる主導権の交替とその地域差」

○近現代日本語における新語・新用法の研究
プロジェクトリーダー　新野直哉
2013 年 6 月 23 日（ユニコムプラザさがみはら）
上村健太郎（明海大学大学院生）
「新語・流行語の使用の経年変化 ―新聞記事とインターネット検索における使用実態から―」
梅林博人（相模女子大学）
「否定呼応と言われた副詞の実態 ―古川ロッパの「とても」「てんで」を中心に―」

言語資源研究系
○コーパスアノテーションの基礎研究
プロジェクトリーダー　前川喜久雄
2013 年 12 月 11 日（国立情報学研究所）
浅原正幸（国立国語研究所），保田 祥（国立国語研究所 PD フェロー），小西 光（国立国語研究所非常勤研究員），今田水穂（国立国語研究所 PD フェロー），前川喜久雄（国立国語研究所）
「BCCWJ-TimeBank」

○コーパス日本語学の創成

プロジェクトリーダー　前川喜久雄

2013 年 6 月 7 日（国立情報学研究所）

CSJ-RDB 講習会（初級編）

2013 年 6 月 8 日（国立情報学研究所）

CSJ-RDB 講習会（中級編）

2013 年 7 月 21 日（国立国語研究所）

山崎 誠（国立国語研究所）

「テキストの一貫性と計量語彙論的属性との関係」

服部 匡（同志社女子大学）

「コーパスに基づく日英対照通時研究の可能性」

荻野綱男（日本大学）

「外来語のゆれを WWW で調べる」

○通時コーパスの設計

プロジェクトリーダー　近藤泰弘

2013 年 7 月 28 日（国立国語研究所）

小木曽智信（国立国語研究所），冨士池優美（国立国語研究所非常勤研究員），中村壮範（国立国語研究所非常勤研究員）

「日本語歴史コーパス 平安時代編」デモと解説

田中牧郎（国立国語研究所）

「『今昔物語集』巻 12 の語彙の考察 ―形態素解析の試行データの分析―」

Stephen Wright Horn (Faculty of Oriental Studies, University of Oxford), Bjarke Frellesvig (Faculty of Oriental Studies, University of Oxford)

"The Oxford Corpus of Old Japanese and Differential Object Marking in Old Japanese"

近藤泰弘（国立国語研究所客員教授）

「日本語歴史コーパスの利用方法の開発」

○日本語教育のためのコーパスを利用したオンライン日本語アクセント辞書の開発

プロジェクトリーダー　峯松信明

OJAD 講習会：講演「OJAD とそれを用いた音声指導」

2013 年 7 月 13 日（名古屋大学）

2013 年 8 月 3 日（北海道大学）

2013 年 8 月 10 日（熊本県立大学）

2013 年 8 月 31 日（金沢大学）

2013 年 11 月 9 日（国際教養大学）

○パラ言語情報および非言語情報の研究における基本概念の体系化

プロジェクトリーダー　森 大毅

2013 年 9 月 3 日（国立情報学研究所）

森 大毅（宇都宮大学），中村 真（宇都宮大学），高梨克也（京都大学），前川喜久雄（国立国語研究所）

「分野横断的な文献へのタグ付けに基づくパラ言語・非言語情報の基本概念体系化の試み」

○多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化

プロジェクトリーダー　伝 康晴

2013 年 6 月 7 日（国立情報学研究所）

CSJ-RDB 講習会（初級編）

2013 年 6 月 8 日（国立情報学研究所）

CSJ-RDB 講習会（中級編）

2013 年 10 月 20 日（国立情報学研究所）

菊池英明（早稲田大学）

「発話様式に基づくコーパス推薦を目指して」

鈴木亮子（慶應義塾大学）

「いわゆるゼロについて：反応の動詞表現を中心に」

2014 年 2 月 23 日（国立情報学研究所）

ことば・認知・インタラクション（内容は p.95 に掲載）

言語対照研究系

○述語構造の意味範疇の普遍性と多様性

プロジェクトリーダー　プラシャント・パルデシ

2013 年 7 月 27 日（新潟大学五十嵐キャンパス）

入江浩司（金沢大学）

「現代アイスランド語の動詞の自他交替の概要」

櫻井映子（大阪大学・東京外国語大学非常勤講師）

「リトアニア語の自他交替：逆使役を中心に」

千葉庄寿（麗澤大学）

「現代フィンランド語の動詞派生の複雑性と構文パターンの関係について」

江口清子（大阪大学 非常勤講師）

「ハンガリー語の自他動詞とヴォイス」

大島 一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員）

「コーパスから見たハンガリー語の自他動詞」

2013 年 11 月 9 日（富山大学五福キャンパス）

大塚行誠（東京外大 AA 研学振 PD）

「ティディム・チン語における自他交替」

桐生和幸（美作大学）

「メチェ語の他動性にまつわる現象：形態的派生と格表示の観点から」

松瀬育子（慶應義塾大学非常勤講師）

「ネワール語における自他動詞対 ―民話テキストの動詞分類と考察―」

吉岡 乾（東京外大 AA 研学振 PD）

「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」

西岡美樹（大阪大学非常勤講師）

「日本語を通して観たヒンディー語の語彙的･統語的他動性 ―複合述語 N ／ A ＋ kar-naa「する」に焦点をあてて―」

萬宮健策（東京外国語大学）

「スィンディー語の受動動詞」

Prashant Pardeshi（国立国語研究所），赤瀬川史朗（Lago 言語研究所）
「有対自他動詞の地理類型論的なデータベース」開発の中間報告

○日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究
プロジェクトリーダー　ジョン・ホイットマン
2013 年 7 月 6 日～ 7 日（国立国語研究所）＜アイヌ語班＞
アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）
「アイヌ語班プロジェクト概要と成果」
アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）
「アイヌ語の動詞分類 ―データベースに基づいた研究の一例―」
中川 裕（千葉大学）
「アイヌ語における動詞連続」
小林美紀（千葉大学）
「V-V 型のアイヌ語動詞」
アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）
「アイヌ語における名詞修飾構文」
佐藤知己（北海道大学）
「アイヌ語における証拠性とモダリティの融合現象」
高橋靖以（北海学園大学 / 藤女子大学 / 札幌学院大学）
「アイヌ語における証拠性の範疇について」
丹菊逸治（北海道大学）
「サハリンにおけるアイヌ語とニヴフ語の「東西」方言差」
2013 年 7 月 29 日（早稲田大学国際会議場）＜音韻再建班＞
早田輝洋（九州大学名誉教授）
「初期満洲語文献にあらわれた唇子音について」
上野善道（国立国語研究所客員教授）
「Serialization と metathesis」
Bjarke Frellesvig（オックスフォード大学 / 国立国語研究所客員教授）
“Issues in the diachronic phonology of the onset consonants of Japanese”
高橋康徳（国立国語研究所プロジェクト PD フェロー）
「上海語の事例から見た変調（tone sandhi）の通時変化」
John Phan（日本学術振興会外国人特別研究員 国立国語研究所）
“Initial Devoicing in Tonogenesis: the case of Mường Chỏi (A Language of Northern Vietnam)”
2013 年 11 月 2 日～ 3 日（国立国語研究所）＜アイヌ語班＞
アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）
「Handbook of the Ainu language について：前回アンケート結果から」
白石英才（札幌学院大学）
「フットから見たニヴフ語とアイヌ語の借用語彙」
田村雅史（北海道立アイヌ民族文化研究センター）
「アイヌ語白糠方言の接続助詞 tek の用法」
高橋靖以（北海道大学）

「アイヌ語十勝方言における人称表示について」
遠藤志保（千葉大学）
「アイヌ英雄叙事詩における言語的特徴」
奥田統己（札幌学院大学）
「アイヌ語における「目的格」の優勢」
2013 年 11 月 16 日（筑波大学）＜形態統語論班＞
佐々木冠（札幌学院大学）
「日本語方言における連体・終止合流の諸相」
中澤良太（筑波大学大学院生），柳田優子（筑波大学）
「名詞化と分詞 ―現代英語の過去分詞 -ed/-en の観点から」
呉人 惠（富山大学）
「コリャーク語における名詞化：名詞化接尾辞 -giNEn, -jon, -jolqEl を中心に」
金 銀姫（横浜国立大学大学院生）
「中期朝鮮語と朝鮮語の一方言の延辺語における主格・属格交替について」
江畑冬生（新潟大学）
「統語機能から見たチュルク諸語の動詞屈折形式」
2013 年 12 月 23 日（国立国語研究所）＜音韻再建班＞
Pittayawat Pittayaporn（タイ・チュラロンコーン大学）
“The sound of proto-Tai tones”
Trần Trí Dõi（ベトナム・ハノイ大学）
“The historical origin of the current initial nasal consonants [m, n, ɲ, ŋ] in Vietnamese”
清水政明（大阪大学）
“Phonological Reconstruction of Ancient Vietnamese Using Chu Nom Materials”
平子達也（京都大学大学院生 / 日本学術振興会特別研究員）
「平安時代語アクセントに関する諸問題についての再検討」

○空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究
プロジェクトリーダー　松本 曜
2013 年 9 月 12 日（上智大学四谷キャンパス）
松本 曜（神戸大学）
「様態，経路，ダイクシスの使用頻度と経路表現位置類型」
吉成祐子（岐阜大学）
「イタリア語における様態，経路，ダイクシスの使用頻度と経路表現位置類型」
2013 年 9 月 19 日（関西大学千里山キャンパス）
松本 曜（神戸大学）
「様態，経路，ダイクシスの使用頻度と経路表現位置類型」
古賀裕章（慶應義塾大学）
「様態，ダイクシスの頻度」
江口清子（大阪大学非常勤講師）
「ハンガリー語における様態，経路，ダイクシスの使用頻度と経路表現位置類型」
守田貴弘（東洋大学）
「様態の背景化と前景化」

日本語教育研究・情報センター

○多文化共生社会における日本語教育研究

プロジェクトリーダー　迫田久美子

2013 年 11 月 10 日（国立国語研究所）

李 在鎬（筑波大学）

「テスト分析に基づく SPOT と J-CAT の比較」

木下藍子（国立国語研究所非常勤研究員），小西 円（国立国語研究所非常勤研究員）

「話し言葉縦断コーパス（C-JAS）とその活用」

小柳かおる（上智大学）

「教室習得研究の現状と課題 ―実証研究から明らかにする言語学習の認知的メカニズム」

2014 年 3 月 16 日（アイザック小杉文化ホールラポール）

第 4 回移民コミュニティの言語生活研究会　テーマ：「射水市でともに生きる」

ファシリテーター：福永由佳，中河和子

ワールドカフェ「射水市でともに生きる」

○コミュニケーションのための言語と教育の研究

プロジェクトリーダー　野田尚史

2013 年 7 月 28 日（国立国語研究所）

柳田直美（一橋大学），森本郁代（関西学院大学）

「大学留学生と日本人学生の協同学習による対話能力育成カリキュラムの開発 ―留学生と日本人学生の話し合いにおける両者の評価の観点の分析―」

當銘美菜（早稲田大学大学院生）

「保育園における保育士の評価実践が意味するもの」

野原ゆかり（お茶の水女子大学）

「ロールプレイ縦断データにみる日本人男性の言語運用と意識」

2014 年 2 月 15 日（しいのき迎賓館 セミナールーム A）

野田尚史（国立国語研究所）

「日本語学習者の読解困難点・読解技術の調査方法

桑原陽子（福井大学）

「初級日本語学習者の読解困難点・読解技術」

吉本由美（広島国際学院大学）

「中級日本語学習者の読解困難点・読解技術」

花田敦子（久留米大学）

「上級日本語学習者の読解困難点・読解技術」

○学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築

プロジェクトリーダー　山内博之（実践女子大学）

2013 年 5 月 27 日（国立国語研究所）

カノックワン・ラオハブラナキット・片桐（チュラロンコン大学）

「タイ人日本語学習者の産出データから母語別日本語教育を考える」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「テスト指示文が回答傾向へ及ぼす影響」

2013年9月17日（国立国語研究所）

岩田一成（広島市立大学）

「名大会話コーパスから考える文法シラバス」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「日本語能力試験から見た文法シラバス」

2013年12月8日（実践女子大学）

田中祐輔（東洋大学）

「既存テキストから見た文法シラバス ―戦後日本語教科書の変遷と現在―」

劉 志偉（首都大学東京）

「日本語学習者から見た文法シラバス ―（上）超級の理解レベルのための文法シラバスに着目して―」

渡部倫子（広島大学）

「日本語教師の主観判定による初級文法項目の必要度」

2014年3月8日（タイ・チュラロンコン大学）

韓 暁（広島大学大学院生）

「シャドーイングにおける準備活動が遂行成績に与える影響」

徐 芳芳（広島大学大学院生）

「日本語上級学習者における同音異義語の意味検索過程」

花村博司（大阪府立大学大学院生）

「日本語の雑談会話における話題のつながりと境界づけ ―母語話者と非母語話者の話題転換はどこが異なるのか―」

松下光宏（大阪府立大学大学院生）

「コミュニケーションのための終助詞「もの」の用法 ―日本語母語話者の使用実態から―」

阿部 新（名古屋外国語大学）

「世界各地の日本語学習者の文法学習と語彙学習についてのビリーフ ―ノンネイティブ教師と比較して―」

居關友里子（筑波大学大学院生）

「口頭発表における文末表現 ―論文における表現との比較から―」

中俣尚己（京都教育大学）

「文法項目と実質語のコロケーション ―文法コロケーションハンドブックがもたらすもの―」

柳田直美（一橋大学）

「議論の場における学習者の前置き表現使用に関する考察 ―母語別の使用実態の分析から―」

渡部倫子（広島大学）

「初級文法項目に対する日本語教師のビリーフ」

澤田浩子（筑波大学）

「談話を補文化する名詞の習得 ―実質語の用法から機能語の用法への転換―」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「意味判別における文法記述の効果の計量化 ―ナガラ節の意味判別を例として―」

劉 志偉（首都大学東京）

「日本語学習経験者から見た語彙シラバス ―超級を目指すために―」

○日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究
プロジェクトリーダー　柳町智治（北星学園大学）
2013 年 7 月 7 日（北星学園大学）
戸江哲理（日本学術振興会特別研究員 / 奈良女子大学）
「子育て支援サークルと会話分析」
2014 年 2 月 22 日（大阪大学中之島センター）
初鹿野阿れ（名古屋大学），岩田夏穂（大月短期大学）
「「からかい発話」の特徴と分類 ―からかいのターゲットと展開―」
舩橋瑞貴（早稲田大学大学院生）
「口頭発表にみられる修復関連行動の対照分析」
義永美央子（大阪大学）
「日本語教育におけるピア・ラーニング研究のメタスタディ」
柳町智治（北星学園大学），森 純子（ウィスコンシン大学マディソン校）
「徒弟的学びの場面におけるモノ性と相互理解」

D．NINJAL コロキウム

日本語・言語学・日本語教育のさまざまな分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院生のみならず一般にも公開。原則として月 1 回，国立国語研究所で開催している。2013 年度は下記 12 件を開催した。

○第 34 回　2013 年 5 月 28 日
鳥飼玖美子（立教大学特任教授 / 国語研客員教授）
「日本の英語教育政策の問題 ―「グローバル人材育成」という幻想」
○第 35 回　2013 年 6 月 11 日
富岡 諭（米国 デラウェア大学）
「慣例的含みとしての疑問文」
○第 36 回　2013 年 7 月 2 日
Foong Ha YAP，玉地瑞穂（香港理工大学）
「動詞「言う」の連体形から終止構造への変化：日本語の係り結び構造の盛衰への示唆」
○第 37 回　2013 年 7 月 23 日
中島和子（カナダ トロント大学名誉教授，国語研外来研究員）
「多言語環境に育つ児童生徒の 2 言語関係と継承語教育への意義」
○第 38 回　2013 年 9 月 10 日
曾 淑娟（台湾 中央研究院語言学研究所）
「音声の生成と知覚：連続音声中のトーンを例に」
○第 39 回　2012 年 9 月 26 日
J.Marshall UNGER（米国 オハイオ州立大学 / 国語研客員教授）
「社会問題を解決する国字政策」
○第 40 回　2013 年 11 月 26 日
Susan FISCHER（ニューヨーク市立大学大学院センター非常勤）
「日本語教育の潮流」

○第 41 回　2013 年 12 月 10 日
林 史典（聖徳大学）
「日本漢字音と日本語音韻史」
○第 42 回　2013 年 12 月 19 日
Larry HYMAN (University of California, Berkeley)
“Issues in the Representational Analysis of Syntagmatic Tone Systems”
Carlos GUSSENHOVEN (Radboud University Nijmegen)
“On Prominence and Stress”
○第 43 回　2014 年 1 月 31 日
Mark ARONOFF（ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校）
“Semantics and Morphological Categories”
○第 44 回　2014 年 2 月 4 日
Heiko NARROG（東北大学 / 国語研客員准教授）
「モダリティー ―類型論的・通時的視点から」
○第 45 回　2014 年 3 月 4 日
Emma GENIUŠIENĖ（ロシア科学アカデミー・サンクトペテルブルグ言語学研究所 / ヴィルニウス大学名誉教授）
“A typology of reflexive and reciprocal constructions: with reference to Japanese, Ainu and Nivkh”

E．NINJAL サロン

国語研の研究者（共同研究員を含む）を中心として，各々の研究内容を紹介することによって情報交換を行う場である。外部からの聴講も歓迎している。2013 年度は第 87 回から第 106 回までを開催した。

○第 87 回　2013 年 4 月 9 日
小川晋史（時空間変異研究系 PD フェロー）
「琉球諸語の統一的表記法」
保田 祥（コーパス開発センター PD フェロー）
「テキストが供給可能な情報の研究」
○第 88 回　2013 年 4 月 16 日
中北美千子（日本語教育研究・情報センター PD フェロー）
「接触場面における日本語学習者の待遇表現運用」
黄 賢暻（理論・構造研究系 PD フェロー）
「プロソディーと情報構造の相互作用」
○第 89 回　2013 年 4 月 23 日
今田水穂（コーパス開発センター PD フェロー）
「オントロジー体系を用いた名詞述語文の意味記述」
高橋康徳（理論・構造研究系 PD フェロー）
「上海語の変調体系に見られる多層性」
○第 90 回　2013 年 5 月 7 日

河瀬彰宏（コーパス開発センター非常勤研究員）
「計量的方法論による日本民謡の文化的特徴の抽出」
○第 91 回　2013 年 5 月 14 日
丸山岳彦（言語資源研究系）
「自発的な話し言葉に現れる挿入構造の分析」」
○第 92 回　2013 年 5 月 21 日
平本美恵（シンガポール国立大学），朝日祥之（時空間変異研究系）
「ハワイ日系移民コミュニティにおける代名詞のバリエーション」
○第 93 回　2013 年 6 月 18 日
高田智和（理論・構造研究系）
「米国議会図書館本『源氏物語』写本の書誌」
○第 94 回　2013 年 6 月 25 日
籠宮隆之（研究情報資料センター特任助教）
「聴覚補助器の性能を評価するためのパラ言語情報聴取試験の開発」
○第 95 回　2013 年 7 月 9 日
田中牧郎，山崎 誠，小磯花絵（コーパス開発センター）
「コーパス開発の実際 ―国語研の将来構想の議論のために―」
○第 96 回　2013 年 7 月 16 日
南部智史（非常勤研究員），朝日祥之，相澤正夫（時空間変異研究系）
「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について ―札幌と富良野の大規模データを利用して―」
○第 97 回　2013 年 9 月 17 日
イレーナ・スルダノヴィッチ（外来研究員 スロベニア・リュブリャーナ大学）
「日本語コーパスに基づく形容詞と名詞のコロケーション」」
○第 98 回　2013 年 10 月 1 日
乙武香里（言語資源研究系 PD フェロー）
「形容詞過去形述語文とエヴィデンシャリティー ―現代日本語共通語の場合―」
○第 99 回　2013 年 10 月 15 日
窪薗晴夫（理論・構造研究系）
「鹿児島方言の疑問イントネーション」
○第 100 回　2013 年 11 月 5 日
前川喜久雄（言語資源研究系）
「日本語自発音声における final lowering の生起領域」
○第 101 回　2013 年 11 月 19 日
小山内優子（言語対照研究系非常勤研究員）
「中期朝鮮語における 2 つの補文節について」
○第 102 回　2013 年 12 月 3 日
浅原正幸，今田水穂（コーパス開発センター PD フェロー），保田 祥（コーパス開発センター PD フェロー），小西 光（コーパス開発センター非常勤研究員），前川喜久雄（コーパス開発センター）
「Web を母集団とした超大規模コーパスの開発 2013 年度進捗報告」
○第 103 回　2014 年 2 月 18 日
ボル・ホドシチェク（外来研究員 / 日本学術振興会外国人特別研究員）
「コーパスによる日本語のレジスターモデルの構築について」

○第 104 回　2014 年 2 月 25 日
エルガ・ストラフェッラ（外来研究員 / 日本学術振興会外国人特別研究員）
「日伊コロケーション辞書を目指す現代日本語におけるコロケーションの検出と分析」
○第 105 回　2014 年 3 月 11 日
保田 祥（コーパス開発センター PD フェロー），柏野和佳子（言語資源研究系），立花幸子（技術補佐員），丸山岳彦（言語資源研究系）
「語りかける書きことばの表現」
○第 106 回　2014 年 3 月 25 日
今田水穂（コーパス開発センター PD フェロー）
「日本語名詞述語文への意味情報付与と言語研究へのフィードバック」

F．その他

人間文化研究機構連携研究の催し物，関係学会等と共催している催し物。

○「日本語レキシコンの音韻特性」研究発表会 兼 第 27 回日本音声学会全国大会
2013 年 9 月 29 日（金沢大学角間キャンパス）
9:30 ～ 12:15　共同研究会 兼 第 27 回日本音声学会全国大会 公開講演
Bob Ladd (University of Edinburgh)
“Singing in tone languages: Phonetic and structural effects”
13:45 ～ 16:00　共同研究会 兼 第 27 回日本音声学会全国大会 公開シンポジウム
上野善道（国立国語研究所）
「総論と各論（喜界島・与論島方言）」
窪薗晴夫（国立国語研究所）
「甑島方言の 2 型アクセント」
新田哲夫（金沢大学）
「越前海岸の N 型アクセント」

○「日本語レキシコンの音韻特性」研究発表会 兼 日本言語学会第 147 回大会
2013 年 11 月 24 日（神戸市外国語大学）
ワークショップ『標準語との接触による方言アクセントの変化』
企画・司会：窪薗晴夫，コメンテーター：上野善道
窪薗晴夫（国立国語研究所）
「鹿児島方言におけるアクセントの変化」
松浦年男，佐藤久美子（北星学園大学 / 長崎外国語大学）
「長崎方言におけるアクセントの変化」
田中真一（神戸大学）
「大阪方言における外来語アクセントの変化」

○ことば・認知・インタラクション
2014 年 2 月 23 日（国立情報学研究所）
主催：科研費基盤研究（B）「発話単位アノテーションに基づく対話の認知・伝達融合モデルの構築」

国立国語研究所共同研究「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」
国立情報学研究所共同研究「実場面インタラクション理解のための非談話行動アノテーション手法の開発と談話・非談話行動の連鎖分析」
土屋智行（国立国語研究所）
「会話における発話末の機能表現：定型・韻律・モダリティの観点から」
定延利之（神戸大学）
招待講演：「発話の文法」
天谷晴香（東京大学）
「食卓会話のための食事動作調整 ―発話に伴うジェスチャーと食事撤回のタイミング―」
横森大輔（日本学術振興会特別研究員 / 名古屋大学）
「「やっぱ（り）」にみる話し手の態度表示と相互行為プラクティス」
○シンポジウム「大規模災害と人間文化研究」
「災害に学ぶ ―歴史文化情報資源の保存と再生―」
2014 年 1 月 25 日（津田ホール）
日髙真吾（国立民族学博物館）
「被災地と連携したミュージアム活動 ―被災文化財を保全する」
葉山 茂（国立歴史民俗博物館）
「災害から始まる博物館の連携の可能性 ―気仙沼市におけるとりくみを事例に」
西村慎太郎（国文学研究資料館）
「救出した歴史資料から見る歴史の再発見 ―茨城を事例に」
青木 睦（国文学資料館）
「災害現場で実践する被災文書の保存と活用」
パネルディスカッション
パネリスト：日髙真吾，葉山 茂，西村慎太郎，青木 睦
司会：小池淳一（国立歴史民俗博物館）

7 センター・研究図書室の活動

研究資料情報センター

研究者の共同利用に供するため，日本語学・言語学・日本語教育学に関する国内外の各種研究情報・研究資料を調査・収集している。

・「日本語研究・日本語教育研究文献データベース」に文献情報を定期的に追加するとともに（4 月・9 月・1 月の年度内 3 回合計 3,754 件），「雑誌『国語学』全文データベース」及び国立大学の学術リポジトリとのリンクを開始した。
・「国立国語研究所刊行物データベース」に収録する過去の刊行物の電子化（PDF 画像作成），目次情報のテキスト化を行い，検索機能強化のための準備を行った。
・「雑誌『国語学』全文データベース」に論文本文の PDF 画像を追加した。
・研究図書室所蔵の日本語史研究資料のデジタル画像を公開した（『明六雑誌』，『古今文字讃』，『聖遊郭（雪月花）』，『傾城買二筋道』，『河東方言箱枕』，『潮来婦誌』の 6 点）。
・データベース 2 件（「日本語自然会話書き起こしコーパス（旧名大会話コーパス）」「外国人学習者の日本語誤用例集「寺村誤用例集データベース」」）の受け入れを行った。
・「よくある「ことば」の質問」に Q&A を 9 件追加公開した。
・『国立国語研究所論集』第 5 号（5 月）・第 6 号（11 月），『国語研プロジェクトレビュー』第 4 巻第 1 号（6 月）・第 4 巻第 2 号（10 月）・第 4 巻 3 号（2 月）を刊行した。
・研究資料室収蔵資料の現状調査を開始した。
・国語研の一般公開 2013 にあわせて，展示室の展示替えを行った。
・Web サイトの管理・運営を行った。

コーパス開発センター

コーパス開発センターでは，日本語言語資源の整備計画である KOTONOHA 計画に従って，国内外の研究者の共同利用に供するため，各種言語資源の開発，整備，公開を進めている。開発に際しては言語資源研究系との間に密接な協力関係を維持しているが，センター独自で「超大規模コーパスプロジェクト」も実施している。

・「超大規模コーパス」プロジェクトでは，2012 年 10 月～ 2013 年 9 月までに四半期ごとに 1 億 URL のクローリングを実施，四半期ごとに 300 億語規模のコーパスを構築し，形態論情報付与を実施した。また文字列検索機能を実装した。全般的に当初計画どおりに進捗している。研究成果の一部を PACLIC などの国際会議で発表した。
・2013 年 3 月より『日本語歴史コーパス』（CHJ）平安時代編（短単位・長単位）の『中納言』によるオンライン公開を開始した（契約数は下記参照）。
・2013 年 10 月『明六雑誌コーパス』をアップデートし，原本画像参照機能を追加した（Ver1.1）。
・形態素解析用辞書「UniDic」をアップデートし，「近代文語 UniDic」Ver.1.4，「中古和文 UniDic」Ver.1.4 を公開した。
・『中納言』による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のオンライン検索は新規契約（2013 年 4 月から 2014 年 3 月まで）が 722 件あり，通算で 2000 件を超えた。同じく『中納言』による『日本語歴史コーパス』平安時代編（短単位・長単位）の新規契約数は 123 件。
・『中納言』の機能強化を実施した。検索条件指定の利便性向上が主要な内容。
・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD 版の新規契約数は 51 件（通算 241 件）。『日本語話し言

葉コーパス』DVD 版の新規契約数は 59 件。

・コーパス利用技術の普及を目標とした講習会を開催した。CSJ-RDB 版 講習会（2013 年 6 月），『中納言』BCCWJ 講習会（2013 年 8 月，2014 年 2 月），『中納言』CHJ 講習会（2014 年 1 月），ChaKi.NET 講習会（2013 年 8 月，2014 年 2 月）。

・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界情報に問題があることが以前から判明しているので，これの修正計画をたて，作業に着手した。作業終了は 2014 年度を予定している。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で，日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に，日本語教育，言語学など，関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

2013 年度はカードキーによる入退室の管理及び照明の人感センサーを整備し，所内教職員に対して夜間・休日開館を開始した。また，閲覧室に新着コーナーを設け，新着雑誌・図書を利用しやすい環境に整えた。

・開室日時：月曜日～金曜日　9 時 30 分～ 17 時
（土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室）

・主なコレクションには，東条操文庫（方言），大田栄太郎文庫（方言），保科孝一文庫（言語問題），見坊豪紀文庫（辞書），カナモジカイ文庫（文字･表記），藤村靖文庫（音声科学），林大文庫（国語学），輿水実文庫（国語教育），中村通夫文庫（国語学）などがある。

・「国立国語研究所 蔵書目録データベース」をウェブ検索できる。

・図書館間文献複写サービス（NACSIS-ILL）により，所属機関の図書館を通して複写を申し込み，郵送で受け取ることができる。

所蔵資料数（2014 年 4 月 1 日現在）

	図書	雑誌
日本語	120,740 冊	5,256 種
外国語	30,137 冊	522 種
計	150,877 冊	5,778 種

※視聴覚資料など 7,630 点を含む

Ⅲ

国際的研究協力と社会貢献

Ⅲ 国際的研究協力と社会貢献

1 国際的研究協力

国語研全体の研究テーマである「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」をグローバルな観点から推進するため，国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

オックスフォード大学との提携

日本語のコーパス（言語の実態を把握するための電子化された大規模言語資料）の整備・構築を進めている国語研では，現代語だけではなく，歴史的な日本語のコーパスの構築も進めている。現在，イギリス･オックスフォード大学の日本語･日本語学研究センターでも古代語コーパス構築のプロジェクトが進行中であり，両研究所は互いに知見を提供し合い，この困難な事業をより効率的に進めるために学術的な協力関係を結んでいる。これにより，汎用性の高いコーパスを世界レベルで提供できることが期待されている。

マックスプランク研究所との提携

ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所（言語学部門）が展開している世界諸言語における動詞の項交替プロジェクトに，国語研は日本語の調査・分析について協力している。国際会議，シンポジウムをマックスプランク研究所および国語研で開催し，互いの研究者の交流のもとに研究を進めている。

アメリカ議会図書館との研究連携

アメリカ議会図書館アジア部日本課の協力により，同館が所蔵する『源氏物語』の翻字を進め，全54巻の本文データのウェブ上での公開を継続している。また，「桐壷」，「須磨」，「柏木」の3巻については，同館から提供を受けた画像データの公開も国語研で行っている。

台湾中央研究院語言學研究所との研究連携

アジアとの連携を強化していく手始めとして，2014年3月7日に台湾中央研究院語言學研究所と研究連携協定を締結した。次年度以降「Filled pauseの音声学的特徴」をテーマとする共同研究の実施など，連携による活動を開始する。

国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため，NINJAL国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に，海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している。

英文日本語研究ハンドブック刊行計画

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードするDe Gruyter Mouton（ドゥ・グロイター・ムートン社　ベルリン／ボストン）からの申し出により，国語研の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定による第一弾として，2014年から，日本語および日本語言語学の研究に関する包括的な英文日本語研究ハンドブック，Handbooks of Japanese Language and Linguisticsシリーズ（全11巻予定）を順次刊行する。このシリーズは，それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し，現在における最先端の研究状況をまとめ

るとともに，今後の研究方向にも示唆を与えるもので，国語研関係者（専任教員および客員教員，諸大学の共同研究員）だけでなく，各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し，国語研が中心となって編集を行う大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく，日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに，日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良（ライス大学 教授）Masayoshi Shibatani (Rice University)

影山太郎（国立国語研究所 所長）Taro Kageyama (Director-General, NINJAL)

シリーズの構成

全巻英文，各巻 600 ～ 700 ページ

1. *Handbook of Japanese Historical Linguistics*
   Edited by Bjarke Frellesvig (University of Oxford/NINJAL), Satoshi Kinsui (Osaka University/NINJAL) and John Whitman (NINJAL)
2. *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*
   Edited by Haruo Kubozono (NINJAL)
3. *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*
   Edited by Taro Kageyama (NINAL) and Hideki Kishimoto (Kobe University)
4. *Handbook of Japanese Syntax*
   Edited by Masayoshi Shibatani (Rice University/NINJAL), Shigeru Miyagawa (MIT/NINJAL) and Hisashi Noda (NINJAL)
5. *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*
   Edited by Wesley Jacobsen (Harvard University) and Yukinori Takubo (Kyoto University/NINJAL)
6. *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*
   Edited by Prashant Pardeshi (NINJAL) and Taro Kageyama (NINJAL)
7. *Handbook of Japanese Dialects*
   Edited by Nobuko Kibe (NINJAL) and Tetsuo Nitta (Kanazawa University)
8. *Handbook of the Ryukyuan Languages*
   Edited by Patrick Heinrich (Dokkyo University), Shinsho Miyara (formerly, University of the Ryukyus) and Michinori Shimoji (Kyushu University/NINJAL)
9. *Handbook of Japanese Sociolinguistics*
   Edited by Fumio Inoue (Meikai University/NINJAL), Mayumi Usami (Tokyo University of Foreign Studies) and Yoshiyuki Asahi (NINJAL)
10. *Handbook of Japanese Psycholinguistics*
    Edited by Mineharu Nakayama (Ohio State University/NINJAL)
11. *Handbook of Japanese Applied Linguistics*
    Edited by Masahiko Minami (San Francisco State University/NINJAL)

海外の研究者の招聘

海外の研究者を専任や客員教員（2013 年度新規 4 名）として招へいすると同時に，研究プロジェ

クトに共同研究員として多数の参画を得ている。また，海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究を行う，外来研究員（2013 年度新規 5 名）や特別共同利用研究員（2013 年度新規 4 名）として受け入れている。

各国のオーラルヒストリー資料の書き起こしおよびデータのデジタル化

日本語を第二言語として習得した人々のことばを収集し，日本語変種の本格的な記述作業を行うことにより第二言語の状況と変容の事象を取り上げて研究対象とするため，ハワイ大学マノア校オーラルヒストリーセンター，ハワイ日本文化センター，UCLA Charles E. Young Research Library，ブラジルサンパウロ人文学研究所，米国サクラメント市歴史センター，カナダバンクーバー日系プレイス等が所蔵するオーラルヒストリー資料の書き起こし及びデータのデジタル化に関して覚書締結の準備を進めている。

2　社会貢献

消滅危機方言の調査・保存・分析

2009 年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語（話者が非常に少なくなってきた言語）には，日本国内の 8 つの言語（方言）が含まれている。国語研ではこれらの諸方言を集中的に記録し，言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって，世界の危機言語研究に貢献すると同時に，方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには，その言語を大量に収集し，分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を，大量かつ体系的に収集し，それを詳細に検索できるようにしたものを，「コーパス」といい，国語研では日本語コーパスの整備を進めており，英語等の主要なコーパスと肩を並べる 1 億語規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を 2011 年に全面的に公開した。これにより，用法や表記の揺れの実態が端的に把握できる等の利便性を，研究者のみならず，日本語（国語）教師，日本語学習者，マスコミなど多方面に提供している。さらに，100 億語規模の超大規模現代日本語コーパスの設計・構築も進行中である。

多文化共生社会における日本語教育研究

近年，在日外国人や留学生の増加にともなって日本語学習に対するニーズが拡大･多様化している。様々な言語的・文化的背景を持つ人びとが生活する現代社会においては，それにふさわしい日本語教育や学習の在り方に関する探究がますます大切になっている。国語研は，第二言語（外国語）としての日本語のコミュニケーション能力の教育・習得に関する実証的研究によって，国内外における日本語教育・学習の内容と方法の改善や，異文化摩擦などの社会的問題の解決に資する成果を提供している。

地方自治体との連携

○地方自治体の協力を得て，研究成果を分かり易く説明する NINJAL セミナーを各地で開催した。（内容は p.104 に掲載）

○立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書による活動

・2013. 7.20　子ども向け一般公開イベント「ニホンゴ探検」において，歴史民俗資料館職員による所蔵品の展示及び説明を行った。
・2013.11.23　歴史民俗資料館において，理論・構造研究系准教授 高田智和による講演会「立川の板碑 文字に込められた想い」を開催した。

訪問者の受入

NINJAL 職業発見プログラム

2013.7.4　仙台第一高等学校
2013.8.1　兵庫県立兵庫高等学校
2013.10.16　島根県立三刀屋高等学校
2013.10.22　横浜翠嵐高等学校
2013.11.6　開智学園一貫部・高等学校

見学・研修・視察

2013.5.28　文部科学省関係機関職員研修生実地研修
2013.7.26　人間文化研究機構新規採用職員研修
2013.8.8　立川市教育委員会言語教育研修
2013.10.11　国土交通省入札監視委員会
2013.10.29　文部科学省研究振興局学術機関課

学会等の後援

・第 4 回立川文学賞　2013.6-2014.5
　主催者：立川文学賞実行委員会
・第 2 回全養協セミナー　2013.11.17
　主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会
　開催地：千駄ヶ谷日本語教育研究所高田馬場校
・日本語ボランティアシンポジウム 2013「日本語ボランティア 現在・過去・未来」 2013.12.7
　主催者：公益財団法人名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク，
　開催地：名古屋国際センター
・平成 25 年度日本語教育能力検定試験　2013.10.27
　主催者：公益財団法人日本語教育支援協会
・第 5 回産業日本語研究会・シンポジウム　2014.2.27
　主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），言語処理学会，一般財団法人日本特許情報機構
　開催地：東京大学情報学環・福武ホール

一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や, 他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく, 広く一般の方々に知っていただくとともに，社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点からフォーラムを開催している。

〇第 7 回「近代の日本語はこうしてできた」
　2014 年 3 月 30 日（一橋大学一橋講堂 学術総合センター）

講演

1．「「標準語」制定を求めた時代の動き」
　清水康行（日本女子大学）

2．「“新しい女”の誕生とことば」
　小林千草（東海大学）

3．「漢語が日本語に溶け込むとき」
　田中牧郎（国立国語研究所）

4．「新しい世界のことばとしての漢字表現」
　齋藤希史（東京大学）

5．「近代日本語における識字とメディア」
　土屋礼子（早稲田大学）

パネルディスカッション
　清水康行，小林千草，田中牧郎，齋藤希史，土屋礼子
　司会：小木曽智信（国立国語研究所）

NINJAL セミナー

各共同研究プロジェクトにおいて，その研究内容を様々な形で一般の方々に発表し，地域社会と触れ合う場として NINJAL セミナーを次のように実施した。

○自言語による古典語文献の読解
　2013 年 7 月 30 日（早稲田大学国際会議場）

○八丈方言の昔と今 ―全国危機方言サミット（仮称）に向けて―
　2013 年 11 月 9 日（東京都立八丈高等学校）

○久米島・島ことば調査のつどい
　2013 年 12 月 4 日（久米島博物館）

○TUG2013 チュートリアルを日本語で聞く会
　2014 年 2 月 8 日（国立国語研究所）

人間文化研究機構関係　公開講演会・シンポジウム

○人間文化研究機構第 21 回公開講演会・シンポジウム「海を渡った日本語」
　2013 年 9 月 1 日（一橋大学一橋講堂 学術総合センター）

○大規模災害と人間文化研究「災害に学ぶ ―歴史文化情報資源の保全と再生―」
　2014 年 1 月 25 日（津田ホール）

国語研の一般公開

国語研が行う「日本語・言葉の研究」について楽しみながら触れることができる一般公開イベントを開催した。（「立川体験スタンプラリー」対象イベント）

2013 年 10 月 19 日（国立国語研究所）

プログラム

・ワークショップ「ことばの実験」：声の解析などゲーム感覚で楽しめる実験を体験
・国語研ツアー：建物内のガイド，貴重資料の公開
・展示・映像上映：日本語について国語研が追い続けてきた研究成果がわかる企画展

児童・生徒向けイベント

職業発見プログラム

中学生や高校生向けに，言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて，学問のたのしさや素晴らしさを知ってもらうためのプログラム。（受入校は，p.103 に掲載）

ジュニアプログラム（小学生向け）

小学生が「ことばっておもしろい」と感じてくれるようなプログラムを実施する。

○日本語の書きわけ教室「漢字・カタカナ・ひらがなのヒミツ」

2013 年 7 月 25 日（江戸川区子ども未来館）

対象：小学 4 ～ 6 年生

講師：丸山岳彦（言語資源研究系准教授）

ニホンゴ探検 2013 ―1 日研究員になろう―

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し，「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるプログラムが人気のイベント。

2013 年 7 月 20 日（国立国語研究所）

プログラム

・ことばのミニ講義

「ことばはゆれる」丸山岳彦（言語資源研究系准教授）

「ことばのパズル」野田尚史（日本語教育研究・情報センター教授）

・にほんごかかりうけゲーム

・辞書引きコーナー

・にほんごスタンプラリークイズ

・れきみんワークショップ

・ことばシアター

3　大学院教育と若手研究者育成

（1）連携大学院：一橋大学大学院言語社会研究科

2005 年度から，一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は，日本語教育学，日本語学，日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。その中で，国立国語研究所は日本語学の分野を担当している。

（2）特別共同利用研究員制度

国語研では，国内外の大学の要請に応じて，日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国語研の設備，文献等の利用や，国語研の研究者から研究指導を受けることができる制度である。（2013 年度新規 4 名受入）

（3）NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を，第一線の教授陣によって，大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で，若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国語研の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ，年数回，全国各地で実施している。2013 年度は第 13 回及び第 14 回を実施した。

受講対象：原則として，大学院生レベル

・大学院生（修士課程または博士課程に在籍する者）
・修士課程または博士課程を修了後，原則として 6 年未満の者
・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
・大学院進学を目指す学部学生等

○第 13 回　2014 年 3 月 10 日（大阪市内）
「方言の注釈と表記」
講師：下地理則（言語対照研究系客員准教授）

○第 14 回　2014 年 3 月 29，30 日（藤女子大学）
「生成文法理論から見た日本語史」
講師：ジョン・ホイットマン（言語対照研究系教授）

講習会

○『日本語話し言葉コーパス』コア RDB 講習会 初級編 中級編
2013 年 6 月 7 日～ 8 日（国立情報学研究所）

○『ChaKi.NET』講習会（関西地区）
2013 年 8 月 7 日（アプローズタワー 13 階貸会議室）

○『中納言』講習会
2013 年 8 月 8 日（TKP ガーデンシティ京都）

○『日本語歴史コーパス 平安時代編』講習会
2014 年 1 月 25 日（国立国語研究所）

○『中納言』講習会
2014 年 2 月 23 日（国立国語研究所）

○『ChaKi.NET』講習会
2014 年 2 月 24 日（国立国語研究所）

（4）優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自ら行うことで研究者としての自立性を向上させ，若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクト PD フェロー）を設け，公募により積極的に採用している。（2013 年度在籍者 8 名，内新規採用 3 名）

Ⅳ

教員の研究活動と成果

影山　太郎（かげやま たろう）国立国語研究所 所長

1949 生

【学位】Ph.D.（言語学）（南カリフォルニア大学，1977）

【学歴】大阪外国語大学英語学科卒業（1971），大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了（1973），南カリフォルニア大学大学院言語学科博士課程修了（1977）

【職歴】神戸学院大学（1973-1974），大阪大学（1978-1987），関西学院大学（1987-2009；2009 年より名誉教授），パリ第 7 大学（招聘教授，2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構教授・日本語研究機関設置準備室長（2009.4），国立国語研究所 所長（2009.10）

【専門領域】言語学，形態論，語彙意味論，統語論

【所属学会】日本言語学会，日本語学会，日本語文法学会，日本英語学会，関西言語学会，アメリカ言語学会（complimentary life member）

【学会等の役員・委員】日本言語学会 顧問（前会長）・評議員，日本語学会 評議員，日本英語学会 評議員，関西言語学会 運営委員，特定非営利活動法人言語資源協会（GSK）理事，日本国際教育支援協会 理事，文化審議会国語分科会 委員

【受賞歴】

1994　第 22 回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，著書『文法と語形成』）

1980　市河賞（財団法人語学教育研究所，著書『日英比較 語彙の構造』）

1973　東京言語研究所言語学懸賞論文賞（東京言語研究所，論文「場所理論的見地から」『言語の科学 5』）

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」：リーダー

日本語の語形成とレキシコンの諸特性の中で際立って特徴的な 4 つの性質（属性叙述，動詞の自他交替，複合動詞，語形成と統語・意味との係わり）について研究チームごとに 1 ～ 3 の活動を行った（属性叙述チームは 2011 年に研究成果を論文集として出版し，形式上活動を終えた）。

1．「動詞の自他交替」チーム

2013 年 8 月に NINJAL 国際シンポジウム「日本語の自他と項交替（Valency Classes and Alternations in Japanese）」を開催したが，その招待講演をベースとする論文集 *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*, ed. by Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen（Berlin: De Gruyter Mouton と契約済み）の執筆・編集作業を進めた。

2．「複合動詞」チーム

①日本語の動詞連用形＋動詞型複合動詞に関する共同研究の成果（研究発表会で発表し査読を経た大学院生の論文を含む）を影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端 ―謎の解明に向けて―』（451 頁，ひつじ書房，2013.12）として出版した。現代日本語だけでなく中古日本語，韓国語・中国語・トルコ語との対照，第二言語習得などの諸領域を含む研究論文 13 篇および本共同研究で開発したオンライン辞書「複合動詞レキシコン」（2014.3）と従来の見過ごされていた古い研究文献（Charles K. Parker: *A Dictionary of Japanese Compound Verbs*, 1939）の紹介を含む。

②2012 年に公開した 2700 語超のオンラインデータベース「複合動詞レキシコン（開発版）」に英語，簡体中国語，繁体中国語，韓国の対訳を新たに追加するとともに，英語使用者が利用できるよう

に英文ページを構築し，「複合動詞レキシコン（国際版）」として一般公開した。

③2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム「日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎」（NINJAL International Symposium “Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages”）の成果をヨーロッパの出版社から刊行するための準備に着手した。

３．「語形成と意味・統語」チーム

Masayoshi Shibatani and Taro Kageyama (Series Editors) Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズの 1 巻として，Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* の執筆・編集を進めた。

【研究業績】

《著書・編書》

影山太郎（編）

『複合動詞研究の最先端 ―謎の解明に向けて―』，ひつじ書房，2013.12.

《論文・ブックチャプター》

影山太郎

「語彙的複合動詞の新体系」，影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端 ―謎の解明に向けて―』，pp.3-49. ひつじ書房，2013.12

Taro Kageyama

“Post-syntactic compounds and semantic head-marking in Japanese”, Bjarke Frellesvig and Peter Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics 20*, pp.363–382. Stanford: CSLI. 2013.11.

《データベース類》

影山太郎，神崎享子

「複合動詞レキシコン（*Compound Verb Lexicon*）」国際版（英語，簡体中国語，繁体中国語，韓国語対訳付き）http://vvlexicon.ninjal.ac.jp/ 国立国語研究所，2014.3.

《その他の出版物・記事》

影山太郎

「〈著書紹介〉影山太郎編『レキシコンフォーラム No.6』（ひつじ書房）」，『国語研プロジェクトレビュー』4（2），pp.154-155. 2013.10.

【講演・口頭発表】

Taro Kageyama

“Mysteries of Verb-Verb complexes in Japanese”, NINJAL International Symposium 2013: Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages, 国立国語研究所，2013.12.14.

Taro Kageyama

“Noun incorporation-like phenomena in Japanese: At the crossroads of polysynthesis and agglutination”, International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages, 国立国語研究所，2014.2.21.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NINJAL 国際シンポジウム「日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎」（NINJAL International Symposium “Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages”）（言語対照研究系との共同による企画・運営）2013.12.14-15.

窪薗　晴夫（くぼぞの はるお）理論・構造研究系 教授，研究系長

1957 生

【学位】Ph.D.（言語学）（エジンバラ大学，1988）

【学歴】大阪外国語大学外国語学部卒業（1979），名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了（1981），名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退（1982），英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了（1986）

【職歴】南山大学外国語学部 助手（1982），同 講師（1984），同 助教授（1990），大阪外国語大学外国語学部 助教授（1992），カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員（フルブライト若手研究員）（1994-1995），マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員（1995），神戸大学文学部 助教授（1996），同 教授（2002），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授，研究系長（2010）

【専門領域】言語学，日本語学，音声学，音韻論，危機方言

【所属学会】日本音声学会，日本音韻論学会日本言語学会，関西言語学会，日本音響学会，日本語学会，Association for Laboratory Phonology

【学会等の役員・委員】日本言語学会 常任委員・評議員，日本音声学会 理事・企画委員長・評議員，日本学術会議 連携会員，理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員，台湾東呉大学 客員教授，市河三喜賞 審査委員，The Association for Laboratory Phonology, Executive Committee member, *Natural Language and Linguistic Theory* 編集委員，Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series (OUP), Advisory editor.

【受賞歴】

2013　国立国語研究所第 6 回所長賞

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

1997　金田一京助博士記念賞（金田一賞）

1995　市河三喜賞

1988　名古屋大学英文学会 IVY Award

1985　イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」：リーダー

本研究は促音とアクセントの 2 つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し，世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。促音とアクセントについて共同研究を推進し，次の成果を得た。

(1) 年度初めに今年度の重点テーマを「アクセント・トーンの変化」と定め，年間スケジュールとあわせてプロジェクトメンバーに周知した。この重点テーマを国際シンポジウム（3rd ICPP）スペシャルセッションおよび日本言語学会 147 回大会ワークショップのテーマとして設定し，プロジェクトの成果として多数の研究発表を行った。

(2) 年 5 回の研究成果発表会と国際シンポジウム（3rd ICPP）（計 11 日）を東京（3 回），西，北陸，東海の各地（各 1 回）で開催した。すべてを公開とした結果，第 1 ～ 3 回発表会だけで合計 246 名（うち共同研究員以外 150 名，61％）の参加を得た。また発表を公募とした結果，合計 78 件（全 5 回＋国際シンポジウム）の研究発表のうち 47 件（60％）が共同研究員以外（主に若手研究者）の発表であった。

(3) アクセントと促音に関する国際会シンポジウム（3rd ICPP）を実施し，国内外から合計 143 名（3 日間で延べ 304 名）の参加を得て，国内の研究成果（合計 25 件の発表，うちプロジェクトから 13 件（口頭 4 件＋ポスター 9 件）を英語で発信した。

(4) 前々年度に開催した国際ワークショップ（GemCon 2011）の成果を編集し，*Journal of East Asian Linguistics* 22 巻 4 号に特集号（Special issue on Japanese Geminate Obstruents）として公刊した。また前年度の重点テーマ（アクセント・トーンの中和）に関して合計 7 本の英文論文を取りまとめ，出版社との交渉に入った。さらに前年度に開始した *The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*（Mouton de Gruyter）については全 19 章の編集作業をほぼ完了し，2014 年度中に刊行される見通しを立てた。

(5) Oxford University Press のオンライン誌 *Oxford Bibliographic Online*（OBO）に Japanese Accent と題する英文論文を出版し，これまで海外に知られていなかった江戸末期～平成の優れたアクセント研究（約 80 点）を海外の研究者コミュニティーに向けて紹介した。

(6) 合計 5 回（計 8 日）の研究発表会と 3 日間の国際シンポジウムにおいて，合計 23 名の若手研究者（大学院生および非常勤）に発表の機会を提供し，うち 20 名に対し旅費の支援を行った。また国際シンポジウムでは全国の大学院生を多数アルバイトとして雇用し，参加のための旅費を支援した。

(7) アクセントおよび促音に関する研究を行っている若手研究者に対して調査旅費・成果発表旅費の募集（公募）を行い，合計 3 名の大学院生に対して旅費支援を行った。

人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1. 鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査：リーダー

前年度に続き，アクセント調査班と文法調査班に分かれて活動を行った。アクセント調査班は中甑島・平良集落においてアクセントの合同調査を実施し，文法調査班は敬語表現やモダリティーなどのテーマごとに調査を行った。また成果をデータ集，論文集として刊行すべく，その準備を始めた。

【研究業績】

《著書・編書》

三原健一，高見健一（編），窪薗晴夫，竝木崇康，小野尚之，杉本孝司，吉村あき子（著）
『日英対照 英語学の基礎』総 211 頁，くろしお出版，2013.

《論文・ブックチャプター》

Haruo Kubozono
"Japanese word accent", In *Oxford Bibliographies in Linguistics*. Mark Aronoff (ed.). New York: Oxford University Press, online, 2013.
http://www.oxfordbibliographies.com/view/document/obo-9780199772810/obo-9780199772810-0103.xml?rskey=PLDiK7&result=1&q=Japanese+Accent#firstMatch

窪薗晴夫
「自然条件とことばの変化 ―甑島方言を例に」木部暢子，小松和彦，佐藤洋一郎（編）『アジアの人びとの自然観をたどる』，pp.157-183. 勉誠出版，2013.

Haruo Kubozono
"Introduction to the special issue on Japanese geminate obstruents", *Journal of East Asian Linguistics* 22(4), pp.303-306. 2013.

Haruo Kubozono, Hajime Takeyasu and Mikio Giriko
"On the positional assymmetry of consonant gemination in Japanese loanwords", *Journal of East Asian Linguistics* 22(4), pp.339-371. 2013.

《その他の出版物・記事》

窪薗晴夫

「日英対照音韻論」,『ことばの科学研究』14, pp.3-5. ことばの科学会, 2013.

【講演・口頭発表】

窪薗晴夫

「日本語の音声と発音指導」, 台湾東呉大学講演会［招待講演］2013.4.8.

窪薗晴夫

"Word prosody in sentence perspectives", 國立清華大學語言學研究所コロキウム［招待講演］2013.4.9.

窪薗晴夫

"Question and vocative prosody in Japanese", ソウル大学言語学コロキウム［招待講演］2013.9.13.

窪薗晴夫

「甑島方言の2型アクセント」, 日本音声学会第27回全国大会公開シンポジウム「N型アクセントの諸相」（金沢大学）2013.9.29.

窪薗晴夫

「鹿児島方言におけるアクセントの変化」, 日本言語学会147回大会ワークショップ「標準語との接触による方言アクセントの変化」（神戸市外国語大学）2013.11.24.

窪薗晴夫

"Accent changes in Kagoshima Japanese due to dialect contact", 3rd International Conference on Phonetics and Phonology（国立国語研究所）2013.12.21.

窪薗晴夫

「日本語レキシコンの音韻特性 ―ピッチアクセントの多様性」, 国立国語研究所研究成果発表会2014（学術総合センター）2014.2.2.

窪薗晴夫

「日本語の音声構造と音声教育」, 別府大学公開講演会［招待講演］2014.2.15.

【研究調査】

・2013.7　鹿児島市薩摩川内市（鹿児島県）鹿児島方言のアクセント調査
・2013.9　甑島平良集落（鹿児島県）甑島方言のアクセント調査
・2014.2　鹿児島市, 薩摩川内市（鹿児島県）鹿児島方言のイントネーション調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・日本音声学会第27回全国大会公開シンポジウム「N型アクセントの諸相」（金沢大学）（企画･運営）2013.9.29.
・日本言語学会147回大会ワークショップ「標準語との接触による方言アクセントの変化」（神戸市外国語大学）（企画・運営）2013.11.24.
・3rd International Conference on Phonetics and Phonology（国立国語研究所）（企画・運営）2013.12.20-22.
・レキシコンフェスタ（国立国語研究所）（企画・運営）2014.2.1.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師（集中講義）

南山大学
台湾・東呉大学
・東京言語研究所理論言語学講座講師
・特別共同利用研究員の受入
オランダ・ユトレヒト大学
・博士論文審査（副査）
神戸大学，上智大学

Timothy J.Vance（ティモシー・J・バンス）

理論・構造研究系 教授，研究情報資料センター長（2013.10.1 ～）

1951 生

【学位】Ph.D.（言語学）（シカゴ大学，1979）

【学歴】ワシントン大学（セントルイス）卒業（1973），シカゴ大学大学院言語学科修士課程修了（1976 シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了（1979）

【職歴】ハワイ大学マノア本校 准教授（1988），コネチカット・カレッジ 准教授（1993），同 教授（1994），アリゾナ大学 教授（2000），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授（2010），研究情報資料センター長（2013.10）

【専門領域】言語学，音声学，音韻論，表記法

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，言語科学会，日本音声学会，日本音韻論学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 編集委員，日本音韻論学会 理事

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコン ―連濁事典の編纂」：リーダー

(1) 共同研究組織に適切なメンバーを 2 名加え，プロジェクトの最終目的である“連濁事典”の英語版（*Perspectives on Rendaku: Sequential Voicing in Japanese Compounds*）に集中し，ドイツの Mouton 社に提出する原稿の作成を始めた。

(2) プロジェクト共同研究員による査読付き論文 1 件が専門雑誌に掲載された。

(3) プロジェクト共同研究員が国際シンポジウムでプロジェクト関係の研究発表 8 件を行なった。

(4) 2 回（計 4 日）のプロジェクト打ち合わせ会を会津若松市（5 月 18 日～ 19 日）と金沢市（11 月 9 日～ 10 日）で開催し，英語版の各章の内容と書式を議論した。2 月 24 日～ 25 日に第 9 回音韻論フェスタを窪薗班（プロジェクト名：「日本語レキシコンの音韻特性」）と共催した。

(5) 12 月 20 日～ 22 日に国際シンポジウムを窪薗班と共催した（発表数：口頭発表 13 件＋ポスター発表 28 件）。連濁や有声性に関するセッションを設け，3 件の口頭発表と 3 件のポスター発表とにより連濁プロジェクトの活動について国内外に普及するように努めた。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Timothy J. Vance, Manami Hirayama and Mikio Giriko

“Transition to a two-type accent system in Tokyo Japanese? The behavior of surnames”, *Japanese/Korean Linguistics* 20, ed. by B. Frellesvig and P. Sells, pp.183-196. CSLI. 2013.7.

ティモシー・J・バンス，宮下瑞生，マーク・アーウィン，リチャード・W・ジョルダン

「紅花と河北町方言」,『アジアの人びとの自然観をたどる』, 木部暢子・小松和彦・佐藤洋一郎（編），pp.185-192. 勉誠出版，2013.11.

【講演・口頭発表】

Timothy J. Vance

“Benjamin Smith Lyman’s native variety of English”，日本英語学会国際春季フォーラム（東京大学）［招待講演］2013.4.

Timothy J. Vance

“Rendaku, reduplication, and mimetic vocabulary”, Paris Meeting on East Asian Linguistics (École des Hautes Études en Sciences Sociales, France) 2013.6.

Timothy J. Vance and Mark Irwin

"A rendaku database for Old Japanese", 21st International Conference on Historical Linguistics, (University of Oslo, Norway) 2013.8.

Timothy J. Vance

"The inexorable spread of 〈ou〉 in Japanese romanization", SCRIPTA 2013: The Evolution of Scripts (Seoul National University, Korea)［招待講演］2013.10.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・日本音韻論学会「2013 年度春期研究発表会」（企画・運営）2013.6.
・日本音韻論学会「音韻論フォーラム 2013」（企画・運営）2013.8.
・NINJAL 国際シンポジウム「ICPP3」（企画・運営）2013.12.
・関西音韻論研究会／東京音韻論研究会「第 9 回音韻論フェスタ」（企画・運営）2014.2.

【大学院教育・若手研究者育成】

・博士論文審査
東京大学（言語情報科学）（副査）2013.5.

横山　詔一（よこやま しょういち）

理論・構造研究系 教授，研究情報資料センター長（～ 2013.9.30）

1959 生

【学位】博士（心理学）（筑波大学，1991）

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業（1981），筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得（1983），筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学（1985）

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手（1985），国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員（1991），同 情報資料研究部 主任研究官（1995），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長（2001），同 研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国立国語研究所理論･構造研究系 教授（2009），研究情報資料センター長（2009.10-2013.9）

【専門領域】認知科学，心理統計，日本語学

【所属学会】日本心理学会，社会言語科学会，計量国語学会，日本語学会，日本教育工学会，行動計量学会

【学会等の役員・委員】大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所 運営委員，社会言語科学会 理事，計量国語学会 理事，社会言語科学会広報委員会 委員長，日本心理学会教科書作成委員会 副委員長，日本心理学会認定心理士認定基準作成 委員，筑波大学留学生センター 日本語・日本事情遠隔教育拠点事業 運営委員

【受賞歴】

2010　社会言語科学会 第 9 回徳川宗賢賞（優秀賞）

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

1997　日本教育工学会 第 11 回日本教育工学会論文賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」：リーダー

研究目的

日本語の文字表記について，文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に役立つ基礎研究をおこなう。文字環境のモデル化には，(1) 新聞・雑誌・書籍，市販辞書，文字コード規格，各種文字表などによって物的文字環境の実態を明らかにすること，(2) 文字表記を扱う人間の認知機構を精査すること，の双方向のアプローチが必須である。そこでは，文字政策，歴史的背景，出現頻度，接触意識，なじみ，好み，文字使用など，さまざまな要因を考慮しなければならない。たとえば，人間は日常生活において「出現頻度」の高い文字に高い確率で接触する。ある文字に対する「接触頻度」の高低によって，その文字に対する「接触意識」が生じ，それが「なじみ」，ひいては「好み」を形成し，社会的な「出現頻度」に影響を与えると考えられる。さらに，それらの要素以外に，未知の字を既知の字体との類似性判断によって渡りをつける一種の推論作用のほか，文字の規範意識によっても文字生活が影響される可能性がある。このような文字表記の使用実態と使用意識に対する基礎研究は，日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか，日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また，言語行動・意識のデータを解析するための理論等について，統計数理研究所との連携研究をおこなう。海外や理系分野の研究動向にも目を配り，言語変化研究のほか統計科学などにも貢献できる方法論を開拓する。その際に文字環境のモデル化研究で得られた知見を援用する。

研究成果

＜共同研究の国際的な推進＞

(1) JIS コードや Unicode など既存文字コードで表現できない仮名・漢字・表記符号について調査をおこなった。国際文字コード標準化活動（コンピュータの文字に関するもの）に関する国際会議（ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG, 2013 年 5 月の第 40 回香港会議, 2013 年 11 月の第 41 回東京会議）に高田智和が出席し，古典籍等の未符号化文字（漢字）について，各国の文字符号専門家から専門的知識の提供を受けた。

(2) ベトナムのハノイ大学で開催された国際シンポジウムにヴォロビヨワ＝ガリーナ（共同研究員）と横山詔一が招待されて基調講演をおこない，共同研究プロジェクトの成果の一部を紹介・解説した。これが契機となってハノイ大学とのネットワークが新たに形成された。また，ハノイ国家大学外国語大学からもヴォロビヨワ＝ガリーナ（共同研究員）は招待を受け，共同研究プロジェクトにかかる研究発表をおこなった。

(3) 国立台湾大学に横山詔一と高田智和が招待され，共同研究プロジェクトの成果を紹介・解説したほか，異体字選好実験の予備調査を実施した。共同研究プロジェクトの成果に関する紹介･解説は，現地の大学院生や大学教員を対象に（学部生も参加可能）講義形式でおこなわれた。受講者数は約 130 名。

＜共同研究の学際的な推進＞

(1) 統計数理研究所との連携により，言語行動・意識のデータを解析するための理論等について，言語変化研究のほか統計科学などにも貢献できる方法論の開拓を目指して日本行動計量学会の特別セッションにおいて一連の成果発表をおこなった。担当は横山詔一。

＜電子化資料の基盤整備と共同利用＞

(1) 米国議会図書館アジア部との連携により「米国議会図書館『源氏物語』画像（桐壺･須磨･柏木）」を一般公開する（須磨・柏木を追加公開，2014 年 3 月）。そのために，原本画像と翻字本文を対照表示させるビュアーの拡張開発をおこなった。担当は高田智和。

(2) 研究情報資料センターとの連携により，研究図書室所蔵の日本語史研究資料（文字資料）のうち『明六雑誌』,『古今文字讃』,『聖遊郭（雪月花）』,『傾城買二筋道』,『河東方言箱枕』,『潮来婦誌』などの公開を行った。担当は高田智和。

＜地域社会への文化的貢献＞

(1) 地域社会への貢献として立川市歴史民俗資料館と国立国語研究所の共同企画で「立川の板碑 文字に込められた想い」という講演を高田智和が立川市歴史民俗資料館でおこなった。

(2) 立川市市民交流大学講座で高田智和が「変化する漢字文化」という講演をおこなった。

＜マスメデイアによる研究成果の紹介・解説＞

(1)『古今文字讃』に関する紹介が朝日新聞で報道された。

(2) 中国の新聞「泉州晩報」で立川市の板碑に関する記事が掲載された。

【研究業績】

《著書・編書》

高田智和，横山詔一（編）

『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』，261 頁，彩流社，2014.3.

《論文・ブックチャプター》

横山詔一

「文字の認知単位」,『講座日本語学・日本語教育』(3)，pp.419-430. 日本語学と日本語教育刊行委員会（韓国），査読なし，韓国語訳付き，2013.6.

《その他の出版物・記事》

横山詔一

「新刊寸感」,『日本語学』2013.6.

横山詔一

「新刊寸感」,『日本語学』2013.12.

【講演・口頭発表】

横山詔一

「国立国語研究所の言語生活研究」, 国立台湾大学大学院講演［招待講演］2013.6.

横山詔一, 中村 隆, 前田忠彦, 阿部貴人, 米田正人

「共通語化は予測可能か：山形県鶴岡市での 60 年間調査による検証」, 日本行動計量学会第 41 回大会特別セッション（東邦大学）2013.9.

米田正人, 阿部貴人, 前田忠彦, 横山詔一, 佐藤亮一, 水野義道, 中村 隆

「第 4 回鶴岡市における言語調査の結果概要：ランダム・サンプリング調査から」, 日本行動計量学会第 41 回大会特別セッション（東邦大学）2013.9.

中村 隆, 阿部貴人, 米田正人, 前田忠彦, 横山詔一

「「鶴岡市における共通語化の調査」データのコウホート分析（3）：ベイズ型コウホートモデル（XXIV）」, 日本行動計量学会第 41 回大会特別セッション（東邦大学）2013.9.

前田忠彦, 阿部貴人, 米田正人, 横山詔一, 中村 隆

「言語生活と方言使用の連関分析」, 日本行動計量学会第 41 回大会特別セッション（東邦大学）2013.9.

阿部貴人, 米田正人, 前田忠彦, 横山詔一, 中村 隆

「方言運用の新しいきざし：第 4 回調査の新規項目から見えてきたこと」, 日本行動計量学会第 41 回大会特別セッション（東邦大学）2013.9.

ヴォロビヨワ＝ガリーナ, 横山詔一

「非漢字系学習者の文字認知特性に適合した漢字伝授法の開発（基調報告）」,『ハノイ大学日本語学部紀要（第 2 回国際シンポジウム「ベトナムにおける日本語教育・日本研究：現在・過去・未来」論文集）』pp.42-57.［招待講演］2013.10.

ヴォロビヨワ＝ガリーナ, ヴォロビヨフ＝ヴィクトル, 横山詔一

「新常用漢字の意味的クラスター化と日本語教育の漢字教材開発への応用」, The Eighth International Conference on Practical Linguistics of Japanese（ICPLJ8）, 国立国語研究所 , 査読あり , 2014.3.

【研究調査】

・2013.6　台湾台北市, 文字環境調査（国立台湾大学の招待）

・2013.10　ベトナム国ハノイ市, 漢字環境調査（ハノイ大学の招待）

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NINJAL セミナー「TUG（TeX Users Group）2013 チュートリアルを日本語で聞く会」（企画・運営）2014.2.

【大学院教育・若手研究者育成】

・博士論文審査

政策研究大学院大学（副査）2014.3.

小磯　花絵（こいそ はなえ）理論・構造研究系 准教授

【学位】博士（理学）（奈良先端科学技術大学院大学，1998）

【学歴】千葉大学大学院行動科学研究科修士課程修了（文学）（1996），奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程修了（理学）（1998）

【職歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員（1996），国立国語研究所言語行動研究部 研究員（1998），同 主任研究員（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系准教授（2009）

【専門領域】コーパス言語学，談話分析，認知科学

【所属学会】日本認知科学会，社会言語科学会，言語処理学会，人工知能学会，音声学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 事務局長・理事

【受賞歴】

2002　情報処理学会山下記念研究賞

1996　人工知能学会大会論文賞

1996　人工知能学会研究奨励賞

【2013 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「会話の韻律機能に関する実証的研究」：リーダー

研究目的：

本研究の目的は，音声コーパスに基づく定量的分析を通して会話相互作用における韻律の特徴・機能を実証的に解明することである。会話における韻律の特徴や機能を検討する際，会話音声のみを分析対象とする従来の研究方法には限界がある。そこで本研究では，会話と独話を対象に，統語構造などの関係から各種韻律の傾向を分析・比較し，会話と独話の類似点・相違点などを明らかにした上で，会話における韻律機能を，会話固有の機能（話者交替や相槌など話者間の相互作用に関連する機能）と会話・独話を含む話し言葉一般に見られる機能（統語構造や談話構造など多様なレベルの情報の終了性・継続性に関する表示機能など）に分けて捉え直すことで，韻律の機能を総合的に解明する。また分析に利用する『日本語話し言葉コーパス』のうち対話関連情報を中心に一部拡張・修正した上で，各種情報を統合した RDB 形式のデータを構築して一般に公開する。

研究成果：

最終年度の成果取りまとめとして，シンポジウム「コーパスに基づく日本語自発音声の韻律研究の展開」（音声学会第 328 回研究例会，2013.12.7，日本大学）を企画し，①上昇調・上昇下降調などの複合句末境界音調の発言継続表示機能，②複合句末音調のピッチレンジ制御に関わる要因，③発話中の F0 に関わる主に統語的要因，および④分析の基盤として本プロジェクトが主体となり構築し 2012 年度末に一般公開した『日本語話し言葉コーパス』のリレーショナルデータベース（CSJ-RDB version 1.0）の設計について発表した。また CSJ-RDB の利用に関する講習会を 2 回開催した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

「日本語話し言葉における複合境界音調の役割」，『国語研プロジェクトレビュー』4（2），pp.110-117. 2013.

《国際会議録》

Hanae Koiso and Yasuharu Den

"Acoustic and linguistic features related to speech planning appearing at weak clause boundaries in Japanese monologs", *Proceedings of the 6th Workshop on Disfluency in Spontaneous Speech*, pp.37-40. 2013.8.

【講演・口頭発表】

石本祐一，小磯花絵
「日本語話し言葉コーパスを用いた対話音声のイントネーション句の分析」,『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.159-166.（国立国語研究所）2013.9.

土屋智行，伝 康晴，小磯花絵
「会話コーパスの転記方式の相互変換 ―引き伸ばしに着目して―」,『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.69-76.（国立国語研究所）2013.9.

小磯花絵，伝 康晴
「弱境界における発話計画に関わる音声的・言語的特徴の分析」,『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.77-84.（国立国語研究所）2013.9.

石本祐一，土屋智行，小磯花絵，伝 康晴
「会話コーパスの転記方式の相互変換 ―言語・音響特徴を用いた会話分析方式の音調マーカーの導出―」,『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.85-92.（国立国語研究所）2013.9.

小磯花絵
「『日本語話し言葉コーパス』CSJ-RDB の概要」，音声学会第 328 回研究例会（日本大学）2013.12.

小磯花絵
「句末境界音調の発言継続表示機能の検討」，音声学会第 328 回研究例会（日本大学）2013.12.

小磯花絵
「日本語話し言葉における句末音調の役割について」，理論・構造研究系プロジェクト研究成果合同発表会レキシコン・フェスタ（国立国語研究所）2014.2.

渡部涼子，小磯花絵
「五七調・七五調のリズム知覚に関する予備的研究」,『言語処理学会第 20 回年次大会予稿集』pp.574-577.（北海道大学）2014.3.

土屋智行，伝 康晴，小磯花絵
「発話の流暢性を踏まえた機能表現の抽出と分析」,『言語処理学会第 20 回年次大会予稿集』pp.19-22.（北海道大学）2014.3.

石本祐一，小磯花絵
「独話音声と対話音声の発話末の F0 変化」,『第 5 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』pp.181-188.（国立国語研究所）2014.3.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・CSJ-RDB 講習会初級編　2013.6.7.
・CSJ-RDB 講習会中級編　2013.6.8.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師
広島大学

高田　智和（たかだ ともかず）理論・構造研究系 准教授

1975 生

【学位】博士（文学）（北海道大学，2004）

【学歴】北海道大学文学部卒業（1999），北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了（2001），北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2005），同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006），同研究開発部門言語生活グループ 研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学，国語学，文献学，文字・表記，漢字情報処理

【所属学会】日本語学会，訓点語学会，計量国語学会，情報処理学会，日本言語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会電子情報委員会 委員長，計量国語学会 理事，情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員，情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員，国際符号化文字集合（UCS）JIS 改正原案作成委員会 委員，文字情報基盤ワーキンググループ 委員

【受賞歴】

2013　北海道大学文学部同窓会楡文賞

2010　情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

2007　日本規格協会標準化貢献賞

【2013 年度の研究成果の概要】

人間文化研究連携共同推進事業「米国議会図書館蔵『源氏物語』の原本画像公開用ツール開発」：代表者

研究目的

米国議会図書館から提供を受けた同館所蔵の『源氏物語』写本のデジタル画像（桐壺，須磨，柏木の 3 帖）を利用して，研究者だけでなく，大学等での日本古典学習者，古典を原本で読みたい一般社会人も想定ユーザーとして視野に入れ，原本画像と翻字本文との対照表示ビューワーを作成し，原本画像の Web 公開を行う。

研究成果

米国議会図書館蔵『源氏物語』画像（桐壺・須磨・柏木）http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/

人間文化研究連携共同推進事業「固有表現知識ベースデータ（人名データ）の作成」：代表者

研究目的

『古事類苑』や芳賀矢一『日本人名辞典』から日本史人名を収録した知識ベースを構築し，人間文化研究機構研究資源共有化システムの高度化を行う。

研究成果

『古事類苑』総索引から抽出した人名約 1,700 件について，芳賀矢一『日本人名辞典』から人名解説情報を加えた人名データを作成し，研究資源共有化システムの人名一覧公開の準備を行った。

研究促進プログラム「所蔵資料の共同利用化推進のための準備研究」：代表者

資産は資産であることを主張しなければ資産たり得ない。国立国語研究所の研究図書室及び研究資料室には，言語研究のための研究資産が保存･蓄積されている。本提案課題は，研究情報資料センターとの連携のもと，所蔵資料を共同利用資産とし，所蔵資料の利活用による共同研究への将来的な展開を図ることを目的とした準備研究を行うものである。

所蔵資料を共同利用資産とするためには，個別資料の学術的価値を各領域の専門研究者によって吟味することが必要不可欠である。しかし，現状の成員だけでは所蔵資料すべてを検討することはできない。本提案課題では，日本語史・日本語研究史などの専門研究者の参画を得て，資料検討のための組織基盤を構築する。

また，近時のデジタルアーカイブズは研究環境の向上に大きく貢献しているが，日本語研究者を主たるユーザーとしたデータ公開は存外に少ない。現在研究情報資料センターを中心に実施している所蔵資料の電子化事業について，着手資料の優先順位を策定するとともに，人文情報学研究者との協働により，電子画像と電子化テキスト（検索用インデックス）併用のデジタルアーカイブズのプロトタイプの設計を行い，日本語研究（特に日本語史及び日本語研究史）のデジタル環境の向上に寄与することを目指す。

研究成果

(1) 研究図書室蔵書（和本類）を資料論的見地から実査し，2014 年度及び 2015 年度にデジタル化を行う書目リストを作成した。

(2) 林大氏寄贈資料の簡易仮目録（箱単位）を作成した。簡易仮目録作成作業の過程において，JIS 漢字第一次規格の選字資料を発見した。また，林大氏寄贈資料中の橋本進吉博士講義資料の全貌をほぼ把握するに至った。

(3)『蜆縮涼鼓集』（元禄 8（1695）年刊，四つ仮名資料）と『物類称呼』（安永 4（1775）年刊，方言資料）を対象に，電子画像と電子化テキスト（検索用インデックス）併用のデジタルアーカイブズのプロトタイプの設計を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

高田智和，横山詔一編

『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』，彩流社，2014.3.

《論文・ブックチャプター》

高田智和

「字形・字体・字種と異体字」，『日本語学』32（5），pp.180-191. 2013.4.

高田智和，斎藤達哉

「米国議会図書館蔵『源氏物語』について ―書誌と表記の特徴―」，『国立国語研究所論集』6，pp.294-272. 2013.11.

高田智和

「《大字典》的汉字处理」，『敦煌学・日本学　续编』，pp.422-437. 上海辞书出版社，2013.11.

高田智和

「日本語学習者に対する漢字字形デザインの選好調査 ―台湾の学習者の場合―」，『JSL 漢字学習研究会誌』6，pp.44-53. 2014.3.

高田智和

「日本語学習者の漢字字形の選好」，『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』，彩流社，pp.220-233. 2014.3.

《データベース類》

・「米国議会図書館蔵『源氏物語』画像（桐壺・須磨・柏木）」（須磨・柏木を追加公開）
http://dglb01.ninjal.ac.jp/lcgenji_image/　2014.2.

・「日本語史研究資料（国立国語研究所蔵）」に下記 5 点を追加公開

・『明六雑誌』
http://db3.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=meirokuzassi　2013.7.
・『聖遊郭（雪月花）』
http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=hiziriyukaku　2013.11.
・『傾城買二筋道』
http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=hutasuzimiti　2013.11.
・『河東方言箱枕』
http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=hakomakura　2013.11.
・『潮来婦誌』
http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=itakobusi　2013.11.

《その他の出版物・記事》

高田智和
「訓点資料の電子化について」,『国語研プロジェクトレビュー』4（1），pp.36-42. 2013.6.

高田智和
「新刊・寸感」,『日本語学』32（11），pp.106-107. 2013.9.

高田智和
「コンピュータで書き表せる地名漢字」,『歴博』180，p.18，2013.9.

高田智和
「新刊・寸感」,『日本語学』33（3），pp.102-103. 2014.3.

【講演・口頭発表】

高田智和，堤 智昭，小木曽智信
「雑誌『国語学』全文データベースの改良と運用」，日本語学会 2013 年度春季大会（大阪大学）2013.6.

高田智和
「国立国語研究所のデジタルコンテンツ」（国立台湾大学日本語文学系）2013.6.

高田智和
「日本語学習者に対する漢字字形デザインの選好調査 ―台湾の学習者の場合―」，第 45 回 JSL 漢字学習研究会（慶應義塾大学）2013.6.

高田智和
「原本画像参照機能付き『明六雑誌コーパス』の開発」, 日本語学会 2013 年度秋季大会（静岡大学）2013.10.

高田智和，小助川貞次，堤 智昭，斎藤達哉，小木曽智信，小野 博
「古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビュアーの開発」，日本語学会 2013 年度秋季大会（静岡大学）2013.10.

近藤明日子，高田智和，小木曽智信，堤 智昭
「原本画像参照機能付き『明六雑誌コーパス』の開発」, 日本語学会 2013 年度秋季大会（静岡大学）2013.10.

高田智和
「碑文と漢字情報」，中，日，韓學術論壇“東亜文化與民俗，宗教”（華僑大学）2013.9.

高田智和
「日下部重太郎の「常用漢字等級表」と『国民字典』」，第 2 回国際シンポジウム「ベトナムにお

ける日本語教育・日本研究 ―過去・現在・未来―」（ハノイ大学）2013.10.

高田智和

「変化する漢字文化」，たちかわ市民交流大学（立川市女性総合センター）2013.11.

高田智和

「立川の板碑 ―文字に込められた思い―」（立川市歴史民俗資料館）2013.11.

田島孝治，高田智和

「ヲコト点の電子化と移点ツール」，漢字文献情報処理研究会第 16 回大会（花園大学）2013.12.

【研究調査】

・2013.7.31-8.1　東京国立博物館・東洋文庫　漢文加点資料調査
・2013.11.25　フランス国立図書館　敦煌文献調査
・2014.1.27　東京国立博物館　漢文加点資料調査
・2014.3.6-7　宮内庁書陵部・国立公文書館　漢文加点資料調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2013 人文科学とコンピュータの新たなパラダイム」（プログラム委員会委員）2013.12.
・NINJAL セミナー「TUG2013 チュートリアルを日本語で聞く会」（企画・運営）2014.2.

【その他の学術的・社会的活動】

・国語研の一般公開 2013 で『古今文字讃』を展示・解説。2013.10.

三井　はるみ（みつい はるみ）理論・構造研究系 助教

【学位】修士（文学）（東北大学，1986）

【学歴】東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程単位修得満期退学（1989）

【職歴】昭和女子大学 講師（1989），国立国語研究所 主任研究官（1997），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 助教（2009）

【専門領域】日本語学，社会言語学，方言文法

【所属学会】日本語学会，日本方言研究会，社会言語科学会，日本音声学会，日本語文法学会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会世話人，日本音声学会評議員

【2013 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」：リーダー

（1）2013 年 6 月 30 日に，プロジェクト成果公開サイト（http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/）を開設し，「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査」（Web 言語地図），「東京のことば研究者インタビュー」（文字起こし付き動画），「首都圏の言語に関する研究文献目録」（検索機能付き），「東京語アクセント資料 データ版」（検索機能付き），「研究成果」の五つのコンテンツを公開した。

（2）Urban Language Seminar 11（第 11 回国際都市言語セミナー，広島市文化交流会館，2013 年 8 月 17-18 日）において，首都圏言語に関するパネル発表を企画し，4 件の口頭発表と 2 件のポスター発表を行った。

（3）2014 年 2 月に，論文集『首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 首都圏言語研究の視野』（国立国語研究所共同研究報告 13-02）を，冊子体と pdf 版で刊行した。別冊として，吉田雅子・三樹陽介（編）『首都圏の言語に関する研究文献目録（稿）』（94pp.）を作成した。

【研究業績】

《著書・編書》

木部暢子，竹田晃子，田中ゆかり，日高水穂，三井はるみ
『方言学入門』，三省堂，2013.8.

《論文・ブックチャプター》

三井はるみ
「標準形からみた東京首都圏若年層の言語の地域差」，『首都圏の言語の実態と動向に関する研究成果報告書 首都圏言語研究の視野』（国立国語研究所共同研究報告 13-02），pp.1-18. 国立国語研究所，2014.2.

鑓水兼貴，三井はるみ
「首都圏若年層における非標準形使用意識の地理的分布」，『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書 首都圏言語研究の視野』（国立国語研究所共同研究報告 13-02），pp.1-18. 国立国語研究所，2014.2.

三井はるみ
「関西方言出自の共通語「～てほしい」の普及の背景」，『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書 首都圏言語研究の視野』（国立国語研究所共同研究報告 13-02），pp.153-16. 国立国語研究所，2014.2.

三井はるみ
「首都圏における在来方言の地域資源としての再生の一事例 ―多摩地域の「のめっこい」を例として―」，『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書 首都圏言語研究の視野』（国立

国語研究所共同研究報告 13-02)，pp.231-240. 国立国語研究所，2014.2

《データベース類》

・「首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査報告」(Web 版)，国立国語研究所共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」成果公開 Web サイト
http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/1_summary.html，2013.6.30 公開

・「東京のことば研究者インタビュー」(Web 版)，国立国語研究所共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」成果公開 Web サイト
http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/2_summary.html，2013.6.30 公開

・「首都圏の言語に関する研究文献目録」(Web 版)，国立国語研究所共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」成果公開 Web サイト
http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/3_summary.html，2013.6.30 公開

・「東京語アクセント資料」(Web 版)，国立国語研究所共同研究プロジェクト「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」成果公開 Web サイト
http://www.ninjal.ac.jp/shutoken/4_summary.html，2013.6.30 公開

《その他の出版物・記事》

三井はるみ
「首都圏の方言より：ズルコミ？ヨコハイリ？ ―首都圏のことばの地域差」，大修館書店「Web 国語教室」リレー連載「お国ことばの底力！」第 6 回
http://www.taishukan.co.jp/kokugo/webkoku/relay002_06.html，2013.10.10.

三井はるみ
「地域語の観点からみた首都圏の言語の実態と動向の一側面」，『国立国語研究所プロジェクトレビュー』4 (2)，pp.118-126. 2013.10.

三井はるみ
「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」プロジェクト成果公開サイト紹介」，『首都圏の言語の実態と動向に関する研究 成果報告書 首都圏言語研究の視野』(国立国語研究所共同研究報告 13-02)，pp.306-315. 国立国語研究所，2014.2.

岩橋清美，久野マリ子，シュテファン＝カイザー，御園生保子，三井はるみ，諸星美智直（司会）
「〔座談会〕江戸語・東京語から首都圏方言へ」，『國學院雑誌』115 (3)（通巻 1282 号)，pp.43-68. 2014.2.

【講演・口頭発表】

三樹陽介，三井はるみ
「「首都圏の言語に関する研究文献目録」紹介」，日本語学会 2013 年度春季大会（大阪大学）2013.6.2.

Harumi Mitsui, Kanetaka Yarimizu, Hiromi Kameda, Mario Kuno and Yukari Tanaka
“A Study of the geographical distribution of lexical variation among younger generation speakers in the Tokyo metropolitan area”, Urban Language Seminar 1（広島市文化交流会館）2013.8.17.

【研究調査】

・2013.4-5　東京都練馬区 方言分布調査
・2013.11　千葉県市原市 方言分布調査
・2014.3　鹿児島県鹿児島市・日置市 条件表現調査

【その他の学術的・社会的活動】

・「東京・首都圏の方言」，文部科学省研修生実地研修（国立国語研究所）2013.5.28.

・「東京のことば・多摩のことば」（西砂寿教室，西砂学習館［立川市］）2013.7.25.

・「多摩の方言」，放送大学東京多摩学習センター連続講演会「多摩を学ぶⅡ ―自然・文化・暮らし―」第 2 回（放送大学東京多摩学習センター［小平市］）2013.10.12.

・「方言から日本の魅力再発見」，足立区生涯学習センター教養講座（足立区生涯学習センター）2014.3.2.

木部　暢子（きべ のぶこ）時空間変異研究系 教授，研究系長，副所長

1955 生

【学位】博士（文学）（九州大学，1998）

【学歴】九州大学文学部文学科卒業（1978），九州大学大学院文学研究科修士課程修了（1980）

【職歴】純真女子短期大学 助手（1980），純真女子短期大学 講師（1981），福岡女学院短期大学 講師（1985），鹿児島大学法文学部 助教授（1988），同 教授（1999），同 副学部長（2004），同 学部長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授，研究系長，副所長（2010）

【専門領域】日本語学，方言学，音声学，音韻論

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，日本音声学会，西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議連携会員，日本語学会 理事，日本音声学会 評議員，日本方言研究会 世話人，奄美島唄保存伝承事業実行委員会委員長，第 63 回南日本文化賞選考委員

【受賞歴】

1990　新村出財団 研究助成

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：リーダー

研究目的：

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成されたか，という点でも注目される。

本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行う。

研究成果：

(1) 沖縄県久米島（沖縄語）の調査を 25 年 12 月 1 日（日）～ 4 日（木）に実施。

(2)『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究　八丈方言調査報告書』（国立国語研究所共同研究プロジェクト調査報告書，253pp. 2013.10.）刊行した。HP でも公開。

(3) 喜界島 5 地域の基礎語彙の音声データの整備。26 年度に HP で公開予定。

(4) 調査研究対象を琉球語，八丈語から本土方言へ広げ，宮崎県椎葉村で基礎語彙調査を実施。

(5) Mouton 社の Japanese Dialects の巻の執筆者を対象とした合同シンポジウム「危機方言を記述する ―記述の枠組みとグロス付け（本土方言向け）―」を開催。

(6) 中央資料庫の未公開談話音声データの整備。7 地点の音声，方言テキスト，共通語訳の整備。検索システムの試作版の作成。

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」：共同研究員

研究成果：

鹿児島のアクセント，イントネーションについて調査研究を行い，成果の一部を著書『そうだったんだ日本語　じゃっで方言なおもしとか』（岩波書店）の中で発表。

機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」総括班：共同研究員

研究成果：

(1) 木部暢子，小松和彦，佐藤洋一郎（編）『アジアの人びとの自然観をたどる』，350pp. 東京：勉誠出版（2013.11）を刊行。その中の「昔がたりにみる自然と文化 ―鳥の声の聞きなしと方言」を執筆。座談会 1「東アジア海の文化と歴史 ―地域を越えた普遍性と固有性」に参加。

(2) 佐渡の調査（2013 年 11 月 11 日～ 14 日）に参加し，市民向けシンポジウムで「ことばは文化 消えゆく方言について」の提言を行った。

(3) 連携研究の冊子『人と自然』7 号（2014.3 刊）に「「香」のことば」を執筆。

機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1-1.「昔がたりにみる自然観・自然思想の解明」：リーダー

研究目的：

各地に残る昔がたりには，人と自然の関わり方を題材にした話が多くある。また，各地の方言が消滅の危機にある現在，方言の語り自体が資料的に大きな価値を持っている。本研究は，日本各地の昔がたりを記録，保存すると同時にそれらの分析を通して，各地の自然観・自然思想について研究することを目的とする。なお，本研究でいう昔がたりは，定型的な昔がたりのほか，昔の生活や経験を方言で語ったものを含んでいる。

研究成果：

「鹿児島の昔ばなし」の分析を行った。

機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1-3.「鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査」：共同研究員

研究成果：

鹿児島県甑島平良でアクセント調査を行った。

機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」総括班：リーダー

研究目的：

東日本大震災から 2 年が経ち，地域は徐々に復興しつつある。そのような中，復興の精神的な支えとして，地域の歴史，文化，社会習慣，人と人とのつながりといった人間文化の役割が日に日に重要度を増している。人間文化研究機構の各機関では，震災以降，さまざまな復興支援活動を行ってきたが，地域の復興支援をより充実させるためには，各機関やグループが個々に活動を行うのではなく，これらを総合し，人間文化という大きな視点から支援活動を行う必要がある。このような背景を踏まえ，本プロジェクトは，震災以降，それぞれの機関やグループが行ってきた復興支援活動の成果に基づき，それぞれのグループの連携・協力を図ることにより，人間文化という大きな視点から地域の復興を支援すること，また，今後，起きると予想される大規模災害に対し，人間文化研究の立場からどう向き合うかについて検討することを目的とする。

研究成果：

(1) 2014 年 1 月 25 日に津田ホールで「災害に学ぶ ―歴史文化情報資源の保全と再生―東日本大震災から私たちは何を学んだか。歴史文化情報資源を未来に残すために」というテーマで，有形文化財の保全と再生に関する公開シンポジウムを開催。

(2) 24 年度に開催した公開シンポジウムの報告書，『平成 24 年度公開シンポジウム 関東地区 報告

書』,『平成 24 年度公開シンポジウム 関西地区 報告書』を作成。
(3) ホームページを整備。各班の「研究・活動の内容」「研究・活動の成果」「今後の予定」等の研究活動の情報を随時公開。

機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」 A2「方言と災害」: リーダー
研究目的:
本研究は,災害時における方言の役割や多言語社会に対応した言語支援のあり方について検討することにより,言語(方言)による地域社会支援の方法について,具体的なモデルを提示することを目的とする。そのために,災害緊急時に必要となる言語資料の整備,および地域社会に暮らす人々(移住者を含む)の連携の基盤となる,方言のデータの整備を行う。
研究成果:
(1) 震災報道に関する新聞記事のデータを収集。
(2) 2013 年 9 月 10 日に日本学術会議において開催された,やさしい日本語,及びやさしい日本語ニュースに関する講演の講師を紹介し,学術会議連携会員として講演に参加。
(3) 東北地方の方言談話資料の整備を行った。

連携研究「日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散」: 共同研究員
研究成果:
八丈語,奄美語の実態調査を行い,各方言の歴史について考察を行った。

【研究業績】
《著書・編書》
木部暢子,竹田晃子,田中ゆかり,三井はるみ
『方言学入門』,141pp. 三省堂,2013.9.
木部暢子,小松和彦,佐藤洋一郎(編)
『アジアの人びとの自然観をたどる』,350pp. 勉誠出版,2013.11.
(「昔がたりにみる自然と文化 ―鳥の声の聞きなしと方言」執筆担当)
木部暢子
『そうだったんだ日本語 じゃっで方言なおもしとか』,199pp. 岩波書店,2013.12.
《論文・ブックチャプター》
木部暢子
「「香」のことば」,『人と自然』7,pp.20-23. 昭和堂,2014.3.
《その他の出版物・記事》
木部暢子 編
『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 八丈方言調査報告書』,253pp. 国立国語研究所共同研究プロジェクト調査報告書(「八丈方言の語彙 ―1950 年調査との比較―」,pp.39-46 を担当)2013.10.
木部暢子
「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 鹿児島県沖永良部方言」,文化庁委託事業報告書『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究(八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言)』,pp.15-27. 2014.3.
木部暢子
「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 鹿児島県与論方言」,文化庁委託事業報告書『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究(八丈方言・国頭方言・沖縄方

言・八重山方言)』, pp.29-46. 2014.3.

木部暢子 編

『人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」平成 24 年度公開シンポジウム関西地区　報告書』, 58pp. 2014.3.31.

木部暢子 編

『人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」平成 24 年度公開シンポジウム関東地区　報告書』, 53pp. 2014.3.31.

【講演・口頭発表】

木部暢子

「日本語研究の現在」(中国湘潭大学)［招待講演］2013.4.21.

木部暢子, 中山俊秀, 下地理則, 大槻知世, かりまたしげひさ

日本語学会ワークショップ「テキストを使った方言研究から見えてくること ―危機方言の調査と記述」日本語学会春季大会（大阪大学）(代表, 及び「テキストを使ったイントネーションの研究 ―談話資料において話者の意図をどう扱うか」を担当）2013.6.1.

木部暢子

「鹿児島方言の「イテ」と「イタテ」」, 九州大学国語国文学会（九州大学）2013.6.8.

木部暢子

「言語地図の作成と利用（日本語の方言)」, SSLL2013（手話に関する国際ワークショップ 3)（国立民族学博物館）2013.9.28.

木部暢子

「ことばは文化　消えゆく方言について」, 連携研究「自然と文化」佐渡研究会「島の豊かさ　佐渡から考える新たな社会」第 3 部パネルディスカッション（金井能楽堂）2013.10.13.

木部暢子

「50 年前の八丈語と現在の八丈語」, 第 7 回八丈方言講座・国立国語研究所セミナー（都立八丈高等学校 視聴覚ホール）2013.11.9.

木部暢子

「奄美島唄フォーラム～島唄の魅力再発見　歌い継ぐ奄美の島唄」, 平成 25 年度奄美島唄保存伝承事業（奄美文化センター）2014.1.19.

木部暢子

「方言危機について ―方言の危機の背景―」, しまくとぅばシンポジウム「シマのことばの危機」平成 25 年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語･方言の実態に関する調査研究（八丈方言･国頭方言・沖縄方言・八重山方言)」報告会（沖縄県立博物館・美術館講座室）2014.2.23.

【研究調査】

・2013.9　鹿児島県甑島　アクセント調査
・2013.11　新潟県佐渡市　民俗文化調査
・2013.11　輪島市海士町　方言調査
・2013.12　沖縄県久米島町「危機方言」プロジェクト合同調査
・2014.1　鹿児島県大島郡与論町・和泊町・知名町　方言の危機の度合いに関する調査
・2014.3　鹿児島県大島郡和泊町　畦布方言劇の台本調査と方言音声の録音
・2014.3　鹿児島市　鹿児島方言調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第７回八丈方言講座･国立国語研究所セミナー「八丈方言の昔と今 ―全国危機方言サミット（仮称）に向けて―」（都立八丈高等学校 視聴覚ホール）（企画・運営）2013.11.9.

・「国立国語研究所セミナー　久米島・島ことば調査のつどい」（久米島博物館）（企画・運営）2013.12.4.

・公開シンポジウム「災害に学ぶ ―歴史文化情報資源の保全と再生 ―東日本大震災から私たちは何を学んだか。歴史文化情報資源を未来に残すために」（東京・津田ホール）（企画・運営）2014.1.25.

【その他の学術的・社会的活動】

・日本学術会議 言語・文学委員会 科学と日本語分科会（委員長）として，年３回，部会を主催。
2013.6.18, 9.10, 12.15.

・奄美島唄保存伝承事業実行委員会委員長として，年３回，会議を主催。
実行委員会 2013.7.2，企画検討ＷＧ会議 2013.10.29，実行委員会・合同ブロック会 2014.1.20.

・平成 25 年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）」（琉球大学）のメンバーとして，鹿児島県沖永良部方言，与論方言の危機の度合いと方言の伝承に関する調査を実施し，調査報告を作成。

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師
京都大学大学院文学研究科「言語学特殊講義」集中講義　2013.9.

・日本学術振興会特別研究員（２名）の受入

相澤　正夫（あいざわ まさお）時空間変異研究系 教授，副所長（～ 2013.9.30）

1953 生

【学位】修士（言語学）（東京大学，1980）

【学歴】東京大学文学部第 3 類（語学文学）言語学専修課程卒業（1977），東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了（1980），東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第 1 種博士課程単位取得退学（1984）

【職歴】国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員（1984），同 主任研究官（1990），同室長（1991），同言語体系研究部 部長（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長（2001），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授（2009），副所長（2009.10-2013.9）

【専門領域】社会言語学，音声学，音韻論，語彙論，意味論

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，社会言語科学会，日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員，日本音声学会 評議員，『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：リーダー

研究目的：

20 世紀前半から 21 世紀初頭（昭和戦前期から現在まで）の「現代日本語」，特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して，そこに見られる変異の実態，変化の方向性，すなわち「動態」を，従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明する。あわせて，現代日本語の的確な動態把握に基づき，言語問題の解決に資する応用研究を開拓する。

研究成果：

(1) プロジェクトの一環として開催した 12 回の公開共同研究発表会の成果物として，出版社おうふうから論文集『現代日本語の動態研究』（相澤正夫編）を 2013 年 10 月に刊行した。

(2)「言語変化の先端現象の把握」という観点から，世論調査型の全国調査として，2003 年前後に実施した外来語定着度調査を継承する 10 年後の経年調査を企画し，2014 年 2 月に実施した。

(3) 昭和戦前期の「SP 盤貴重音源資料」とその「文字化資料」を活用するサブ・プロジェクトを立ち上げ，研究会の開催により研究事例を蓄積して，論文集刊行に向けた準備を進めた。

【研究業績】

《著書・編書》

相澤正夫（編）

『現代日本語の動態研究』，おうふう，2013.10.

《論文・ブックチャプター》

相澤正夫

「第 11 章　言語福祉という視点 ―情報弱者を生まないために―」, 多言語化現象研究会（編）『多言語社会日本 ―その現状と課題―』，pp.159-173. 三元社，2013.9.

相澤正夫

「動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法の共存」，相澤（編）『現代日本語の動態研究』，pp.9-28. おうふう，2013.10.

《その他の出版物・記事》

相澤正夫
「新刊・寸感」,『日本語学』32（6），pp.114-115. 2013.5.
相澤正夫
「新刊・寸感」,『日本語学』32（13），pp.96-97. 2013.11.
相澤正夫
「〈著書紹介〉『現代日本語の動態研究』」,『国語研プロジェクトレビュー』4（3），pp.241-242. 2014.2.

【講演・口頭発表】

相澤正夫
「外来語を言い換えるとは ―理念と実践―」，大阪大学トークイベント「日本語を衆議する / 日本語で衆議する」第 3 回・公共空間の日本語を設計する（大阪大学）［招待講演］2013.7.
相澤正夫
「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明 ―『現代日本語の動態研究』の刊行を中心に―」，国立国語研究所研究成果発表会 2014（ポスター発表）（学術総合センター）2014.2.
相澤正夫
「多人数社会調査の立場から ―1980 年代の北海道におけるガ行鼻音―」, JLVC2014 ワークショップ「日本語調査をデザインする ―やっててよかった，やっときゃよかったことばの調査―」,『JLVC2014 予稿集』，pp.11-16.（国立国語研究所）2014.3.

【研究調査】

・2014.2 「カタカナ語の定着度調査」の企画・実施（実査は社団法人中央調査社に委託）

大西　拓一郎（おおにし たくいちろう）時空間変異研究系 教授

1963 生

【学位】修士（文学）（東北大学，1987）

【学歴】東北大学文学部卒業（1985），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1987），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学（1989）

【職歴】東北大学文学部 助手（1991），国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員（1990），同 主任研究官（1996），同 室長（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，日本音声学会，日本方言研究会，日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会 世話人，日本語学会 評議員

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：リーダー

方言分布の経年比較を通して，日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的とする研究である。日本の方言研究においては，過去 30 ～ 50 年にさかのぼることが可能な方言分布に関するデータが詳細な言語地図の形で蓄積されてきた。現在における日本全国の方言分布を把握するなら，このような過去に明らかにされてきた方言分布と比較することで，リアルタイムな時間軸上で方言分布の変動が把握できる。本プロジェクトでは，このことを実現させるために，全国の方言研究者が分担・協力しながら臨地調査によりデータを収集し，かつそのデータを共有する形で，全国方言の分布調査を進めているところである。リーダーとして，プロジェクト全体を統括し，また，共同研究者・調査協力者から送られてくるデータを精査して，データベース化を進めた。同時に，方言分布がどのようにしてできるのかに関する基本モデルを考察・構築し，国内外の学会・研究集会で発表を行った。全国調査は現在，進行中であるが，途中段階で得られたデータであっても，それをもとに現在の方言分布を言語地図の形で発表するとともに，過去の分布との比較を通した基本モデルの妥当性の具体的検証を進め，必要に応じたフィードバックを行うことで，モデルの強化につとめた。また，先行して刊行されている言語地図の書誌並びに地図項目データベースを公開した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「庄川流域における自然物主体敬語 ―方言分布から見る地域の思考・心情・生業」，『アジアの人びとの自然観をたどる』，勉誠出版，pp.127-155. 2013.11.20.

《データベース類》

・言語地図データベース　http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/ladp/index.html

《その他の出版物・記事》

大西拓一郎

「言語地図の作成ツール ―方言分布を把握するために―」，『日本語学』32（14），pp.162-172. 2013.11.15.

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「言語地理学とは何か」，中日理論言語学国際フォーラム，同志社大学［招待講演］2013.7.14.

大西拓一郎

「グロットグラムと方言分布情報の持つ線･面･時間と伝播の 問題」，台日言語地理学学術交流ワークショップ（台湾師範大学）［招待講演］2013.8.7.

大西拓一郎

「日本語における語彙変化のメカニズム」，台日言語地理学学術交流ワークショップ（台湾師範大学）［招待講演］2013.8.7.

大西拓一郎

「庄川流域の方言分布から見た自然との対話」，第 62 回砺波散村地域研究所･富山地学会合同例会，散村地域研究所（富山県砺波市）［招待講演］2013.11.17.

【研究調査】

言語地理学調査

・2013.9　長野県茅野市
・2013.10　長野県岡谷市
・2013.10　長野県下水内郡栄村
・2013.11　長野県北安曇郡小谷村
・2013.11　長野県中野市
・2013.11　長野県木曾郡木曽町
・2013.12　長野県佐久郡佐久穂町
・2013.12　長野県木曽郡南木曽町
・2014.1　長野県上伊那郡箕輪町

朝日 祥之（あさひ よしゆき）時空間変異研究系 准教授

1973 生

【学位】博士（文学）（大阪大学，2004）

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業（1997），エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了（1998），大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員（2004），同研究開発部門言語生活グループ研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】社会言語学，言語学，日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, Methods, Foundation for Endangered Languages，関西言語学会，日本言語政策学会，日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会

【受賞歴】

2010　第 9 回徳川宗賢優秀賞（社会言語科学会）

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：共同研究員

共同研究発表会で研究発表を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「日本語変種とクレオールの形成過程」：共同研究員

共同研究発表会で研究発表を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「紀伊半島海岸部居住者の方言認知 ―方言認知地図を用いて―」岸江信介，太田有多子，中井精一，鳥谷善史（編）『都市と周縁のことば　紀伊半島沿岸グロットグラム』，pp.335-356. 和泉書院，2013.5.

朝日祥之

「引用形式「ト」相当形式の使用実態 ―GAJ との比較から―」，岸江信介，太田有多子，中井精一，鳥谷善史（編）『都市と周縁のことば　紀伊半島沿岸グロットグラム』，pp.115-136. 和泉書院，2013.5.

Mie Hiramoto and Yoshiyuki Asashi

“Pronoun Usge of Japanese Plantation Immigrants in Hawai ‘i”, *NINJAL Research Papers* 6, pp.19-28. 国立国語研究所，2013.11.

朝日祥之

「北海道札幌市と釧路市で同時に実施された定点経年調査」，『新情報』101，pp.20-27. 新情報センター，2013.11.

朝日祥之，尾崎喜光

「北海道における方言使用の現状と実時間変化その 2：音韻・アクセント項目から見る」，『北海道方言研究会会報』90，pp.38-48. 北海道方言研究会，2013.12.

《国際会議録》

Mie Hiramoto, Hiroyuki Shiraiwa, and Yoshiyuki Asahi

"Dialect Contact and Pronoun Uses of Japanese Plantation Immigrants in Hawai 'i ", *Working Papers from NWAV Asia-Pacific 2*, pp.1-8. NWAV Asia-Pacific, 2013.4.

Yoshiyuki Asahi

"Real Time Change in Intra-speaker Variation: Evidence from Kushiro Japanese", *Working Papers from NWAV Asia-Pacific 2*, pp.1-8. NWAV Asia-Pacific, 2013.4.

《その他の出版物・記事》

朝日祥之

「書評」(「亡びゆく言語を話す最後の人々」, デイヴィッド ハリソン著, 原書房), 『北海道新聞』, 2013.5.26.

朝日祥之

「新刊・寸感」, 『日本語学』32 (8), pp.84-85. 2013.7.

朝日祥之

「新刊・寸感」, 『日本語学』33 (1), pp.88-89. 2014.1.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

"Does extremely high dialect contact really lead to simplification?: A comparative account of British and Japanese New Towns", International Conference of Language Variation in Europe 7, (Trondheim) 2013.6.27.

Yoshiyuki Asahi

"Old and New Ways of Japanese Urban Dialectology", Urban Language Seminar 11 (Hiroshima) [招待講演] 2013.8.17.

朝日祥之

「趣旨説明」(海を渡った日本語をみつめる), 人間文化研究機構第 21 回シンポジウム「海を渡った日本語」(一橋講堂) 2013.9.1.

朝日祥之

「ニヴフ語話者の日本語の特徴 ―「ギリヤークの昔話」から見る―」, 第 204 回北海道方言研究会例会 (札幌市北区民センター) 2013.9.8.

朝日祥之, 尾崎喜光

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その 2 ―音韻・アクセント項目からみる―」, 第 205 回北海道方言研究会例会 (札幌市北区民センター) 2013.11.10.

Yoshiyuki Asahi

"Kibei's ways of speaking three languages, Japanese, Ryukyuan and English: Evidence from Thomas Taro Higa", 112th American Anthropological Association, (Chicago) 2013.11.24.

Yoshiyuki Asahi

"The role of 'founders' and dialect levelling: evidence from Japanese around the world", Language Variation and Change Talk (University of York, UK) 2014.2.13.

Yoshiyuki Asahi and Mie Hiramoto

"Use of foreign-origin personal pronouns: Observations in overseas Japanese", Celebrating 50 years of Linguistics at UH Manoa Symposium (Honolulu) 2014.3.7.

Toyotomi Morimoto and Yoshiyuki Asahi,
"Japanese language school textbooks in California and São Paulo in the pre-war period compared: A textbook and linguistic analysis", CIES 2014, 2014.3.12.

【研究調査】

・2013.6,9,11, 2014.3　米国・ロサンゼルス市　UCLA，在外日本関連資料調査
・2013.8　　ブラジル・サンパウロ市　ブラジル日本移民史料館　在外日本関連資料調査
・2013.9,11　米国・ロサンゼルス市　全米日系人博物館　在外日本関連資料調査
・2013.10　　北海道札幌市，方言調査
・2013.12　　北海道北見市常呂町，方言調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・人間文化研究機構シンポジウム第 21 回「海を渡った日本語」（企画・運営）2013.9.

【その他の学術的・社会的活動】

・兵庫県立兵庫高校東京みらいフロンティアツアーで「神戸市のことばの多様性」について講演。

井上　文子（いのうえ ふみこ）時空間変異研究系 准教授

【学位】修士（文学）（大阪大学，1992）

【学歴】高知女子大学文学部国文学科卒業（1984），大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了（1992），大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退（1994）

【職歴】大阪大学文学部 助手（1994），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1995），同 主任研究官（1997），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門資料整備グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学，方言学，社会言語学

【所属学会】日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会，日本音声学会，日本語文法学会，日本言語学会，日本語教育学会

【2013 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「方言談話の地域差と世代差に関する研究」：リーダー

研究目的：

将来，方言談話の類型と変容に関する大規模な調査・研究を実施することを前提として，そのためのパイロット調査的な役割を果たすものである。重点地域において必要な諸データを得ること，次の点に関わる仮説や枠組みを明確にすることを目的とする。

1．方言談話の収集・分析を通じて，文法研究および談話分析の観点から，実際の文脈の中における言語事象の使用実態や機能を把握する。

2．地域間比較をおこない，方言談話の類型を記述する。

3．世代間比較をおこない，その変容の方向を明らかにする。

研究成果：

研究成果を国立国語研究所共同研究報告 13-04「方言談話の地域差と世代差に関する研究」成果報告書として刊行（http://hougen-db.sakuraweb.com/pdf/NINJAL_CRPR_13-04.pdf）するとともに，方言ロールプレイ会話データベース（ペア入れ替え式ロールプレイ会話及びリーグ戦式ロールプレイ会話）を公開した（http://hougen-db.sakuraweb.com/）。

【研究業績】

《データベース類》

・「方言ロールプレイ会話データベース」

《その他の出版物・記事》

井上文子

「方言ロールプレイ会話におけるコミュニケーション機能について」，『国語研プロジェクトレビュー』4-2，pp.127-135, 2013.10.

井上文子

『共同研究報告 13-04 方言談話の地域差と世代差に関する研究 成果報告書』，2014.3.

熊谷　康雄（くまがい やすお）時空間変異研究系 准教授

1955 生

【学位】修士（文学）（埼玉大学，1984）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業（1976），埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程言語文化論専攻修了（1984）

【職歴】国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1988），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1989），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1993），国立国語研究所 室長（1998），国立国語研究所情報資料部門 部門長（2001），大学共同利用機関法人国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，計量国語学会，社会言語科学会，日本行動計量学会，言語処理学会，情報処理学会，電子通信学会，American Dialect Society，International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：共同研究員

『日本言語地図』データベース（LAJDB）の整備を進めつつ，データベースの分析を進めた。データの整備に関しては,『日本言語地図』データベース（LAJDB）公開の第 1 段階として 28 項目について，原資料カードの画像と語の分布のコードデータからなるデータベース（LAJDB）を web 上に公開した。方言分布データ関する探索的分析，考察を進め，『日本言語地図』データベースの構築と計量的分析について成果の一部を学会発表し，また，方言分布に関する基礎的な考察の一部について原稿を執筆した。また，共同研究発表会のひとつとして，『日本言語地図』データベース（LAJDB）の基本，特徴，利用，公開等をトピックとして，『日本言語地図』データベースワークショップ』（2014.3 於東北大学）を開催した。

【研究業績】

《データベース類》

・日本言語地図データベース（『日本言語地図』データベースの web 公開）
（公開項目数 28, http://www.lajdb.org）2014.3.

《その他の出版物・記事》

熊谷康雄
「『日本言語地図』のデータベース化が開く新たな研究」,『国語研プロジェクトレビュー』4（1），pp.1-9. 2013.6.

【講演・口頭発表】

熊谷康雄
「『日本言語地図』の地点間方言類似度の視覚化：『日本言語地図』データベースの構築と計量的分析」，日本方言研究会第 97 回研究発表会（静岡大学）発表原稿集，pp.43-52. 2013.10.

新野　直哉（にいの なおや）時空間変異研究系 准教授

1961 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2010）

【学歴】東北大学文学部文学科卒業（1984），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1986），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1988）

【職歴】宮崎大学教育学部 助手（1988），同 講師（1989），同 助教授（1992），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1996），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門文献情報グループ 主任研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本近代語研究会，表現学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 編集委員，日本近代語研究会 運営委員

【受賞歴】

2011　国立国語研究所第 2 回所長賞

【2013 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」：リーダー

研究目的：

本研究は，近現代日本語の新語・新用法について，いつごろ，なぜ，どのように発生・拡大し，現在はどのような状況にあるのを，文献調査に加え，アンケート調査や統計的手法などを用いて明らかにしていく。また，言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し，言語の変異そのものの記述的研究に加え，これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

本研究で扱う現在進行中の変化は，古代語や中世語の言語変化の事例に対し，そのプロセスの観察や，背景にある言語意識の調査がリアルタイムで可能である，というメリットがある。その成果として，日本語史上の言語変化一般の研究に応用できるような理論を得ることを目的とする。以上の点で，本研究は，現在の時空間変異研究系のプロジェクトに不足している分野を補うものである。

研究成果：

2010 年 11 月に開始した本プロジェクトは，13 年度中は 6 月に相模原市で研究発表会を行った。さらに，10 月の日本語学会で，メンバー全員によるブース発表を行った。そして 2014 年 3 月には共同研究報告『近現代日本語における新語・新用法の研究』を刊行した。

【研究業績】

《著書・編書》

新野直哉 編

『国立国語研究所共同研究報告 13-03　近現代日本語における新語・新用法の研究』，国立国語研究所，2014.3.

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「“全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識 昭和 10 年代を中心に」，『表現研究』97，pp.1-10. 表現学会，2013.4.

新野直哉
「特集；ことばの「常識」「俗説」と日本語研究 ことばの迷信：“汚名挽回”・“野球”・“ムショ”」，『日本語学』32（6），pp.26-34. 明治書院，2013.5.
新野直哉
「慣用句“気がおけない”の「誤用」について」，相澤正夫編『現代日本語の動態研究』，pp.46-68. おうふう，2013.10.
新野直哉
「『青い山脈』（1947）の「全然同意ですな」について「変な軍隊用語」とは？」，新野直哉編『国立国語研究所共同研究報告』13-03　現代日本語における新語新用法の研究」，pp.6-21. 国立国語研究所，2014.3
新野直哉
「「平成二十三年度国語に関する世論調査」をめぐる新聞報道」，『言語文化研究』13，pp.35-45. 静岡県立大学短期大学部言語文化学会，2014.3.

《データベース類》
新野直哉，橋本行洋，梅林博人，島田泰子，鳴海伸一
「副詞“全然”に関する主要研究文献目録」，国研 web サイトで公開，2014.3.

《その他の出版物・記事》
新野直哉
「学界時評 国語」，『アナホリッシュ国文学』4，pp.244-245. 響文社，2013.9.
新野直哉
「国語学者浅野信の言語規範意識 昭和 10 年の「全然このお菓子好きだわ」について」，『国語研プロジェクトレビュー』4（2），pp.136-143. 国立国語研究所，2013.10.

【講演・口頭発表】
新野直哉，橋本行洋，梅林博人，島田泰子，鳴海伸一
「漢語副詞の受容と展開〈漢語の和化〉と否定との呼応」，日本語学会平成 25 年度秋季大会（静岡大学）2013.10.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】
・JLVC2014（Japanese Language Variation and Change conference2014）（企画・運営）2014.3.

【その他の学術的・社会的活動】
・2013.6　『日本経済新聞』，「職場の日本語　基本のキ」コメント掲載
・2013.10　日本経済新聞社編『謎だらけの日本語』（日本経済新聞社出版社）119，122-124，192 コメント掲載
・2014.1　共同通信が配信した，『河北新報』『新潟日報』などいくつかの地方紙，カナダの日本人コミュニティー向け新聞『バンクーバー新報』の記事「日本語は生きている」（新聞により別タイトルの場合あり）にコメント掲載

【大学院教育・若手研究者育成】
・大学院非常勤講師
目白大学大学院言語文化研究科

竹田　晃子（たけだ こうこ）時空間変異研究系 特任助教

1968 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2012）

【学歴】群馬県立女子大学文学部国文学科卒業（1992），東北大学大学院文学研究科日本語学専攻博士課程前期 2 年の課程修了（1996），東北大学大学院文学研究科日本語学専攻博士課程後期 3 年の課程単位取得退学（2001）

【職歴】日本学術振興会 特別研究員（PD）（2001-2004），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループ 非常勤研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 非常勤研究員（2009），同 特任助教（2012）

【専門領域】日本語学，方言学，社会方言学

【所属学会】日本語学会，日本文芸研究会，日本語文法学会，社会言語科学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 庶務委員（編集委員長補佐），社会言語科学会 事務局委員

【研究業績】

《著書・編書》

木部暢子，竹田晃子，田中ゆかり，日高水穂，三井はるみ

『方言学入門』，三省堂書店，2013.9.

《その他の出版物・記事》

竹田晃子

「東北北部の方言より・ジェジェジェ！ジャジャジャ！ ―驚くほどに繰り返す感動詞の世界」，大修館書店国語情報室・WEB 国語教室：リレー連載「おくにことばの底力！」第 5 回，2013.6.

大野眞男，竹田晃子（編），漁火の会（述）

『おらほ弁で語っぺし，語り継ぐために ―釜石「漁火の会」の語りの活動（被災地の言語文化資料）―』，文化庁委託事業報告書，2014.3.

小島聡子，竹田晃子

「岩手県における郷土教育資料の概要 ―方言に関する記述を中心に―」，文化庁委託事業報告書，2014.3.

前川　喜久雄（まえかわ きくお）

言語資源研究系 教授，研究系長，コーパス開発センター長，副所長（2013.10.1 ～）

1956 年生

【学位】博士（学術）（東京工業大学，2011）

【学歴】上智大学外国語学部フランス語学科卒業（1980），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了（1982），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退（1984）

【職歴】鳥取大学教育学部 助手（1984），同 講師（1987），国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1989），同 主任研究官（1992），同 室長（1994），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長（2001），同 言語資源グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授，研究系長，コーパス開発センター長（2009），副所長（2013.10-），一橋大学 連携教授（2005-）

【専門領域】音声学，言語資源学

【所属学会】ISCA，日本言語学会，日本音響学会，日本語学会，日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本音声学会 企画委員長，Phonetica Editorial board member

【受賞歴】

2012　日本音声学会優秀論文集「PNLP の音声的形状と言語的機能」，『音声研究』15（1）

2012　国立国語研究所第 4 回所長賞

2011　日本音声学会優秀論文賞「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」，『音声研究』14（2）

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：リーダー

本プロジェクトの目標は，コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行うことにある。

研究成果：

本年度も共同研究員ごとに，文節係り受け構造，節境界，時間表現，動詞項構造，述語境界など各種アノテーション作業を継続実施し，さらに各種アノテーションの自動重ねあわせを実現する試みを開始した。そのため一部の共同研究員には委託研究を実施した。さらに，言語処理学会学会誌『自然言語処理』の特集号「コーパスアノテーション―新しい可能性と共有化にむけての試み―」の編集を進めた。12 編の投稿論文から査読によって 9 編が採択され，21 巻 2 号（2014 年 4 月）として刊行予定である。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトの目標は，日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることにある。そのために一般からも応募可能な「コーパス日本語学ワークショップ」を年に 2 回開催している。

研究成果：

本年度開催の第 4 回では 46 件，第 5 回では 47 件の研究発表があり，約半数が一般からの応募であった。これとは別に，語彙・文法・表記の研究を中心とする専門家グループ，音声・対話に関する研究グループによる共同研究も実施しており，一部の共同研究員には委託研究を依頼した。本年度の成果物としては，朝倉書店より「講座日本語コーパス」第 1 巻『コーパス入門』を刊行したほか，日本音声学会の学会誌『音声研究』の特集「大規模コーパスを利用したデータ駆動型音声研究」の編集を進

めた。18 巻 1 号（2014 年度 4 月）として刊行を予定している。

【研究業績】

《著書・編書》

前川喜久雄（編），辻井潤一，投野由紀夫，徳永健伸，丸山岳彦，山崎 誠，小木曽智信，中村壮範，山口昌也（著）

『コーパス入門』，講座日本語コーパス第 1 巻，朝倉書店，2013.7.

《論文・ブックチャプター》

小西 光，浅原正幸，前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報アノテーション」，自然言語処理 20（2），pp.201-221. 2013.6.

保田 祥，小西 光，浅原正幸，今田水穂，前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」自然言語処理 20（5），pp.658-681. 2013.12.

《国際会議録》

Kikuo Maekawa

"Prediction of F0 height of filled pauses in spontaneous Japanese: A preliminary study", *Proc. DiSS 2013* (The 6th Workshop on Disfluency in Spontaneous Speech) (Stockholm) pp.41-44. 2013.8.25.

Kikuo Maekawa

"Notes on so-called inter-speaker differences in spontaneous speech: The case of Japanese voiced obstruent", *Proc. INTERSPEECH 2013* (Lyon) pp.3037-41. 2013.8.29.

【講演・口頭発表】

前川喜久雄

「日本語自発音声における final lowering の生起領域」，第 27 回日本音声学会全国大会予稿集 pp.61-65. 2013.9.

Kikuo Maekawa

"Development of spoken language corpora and the corpus-based analysis of spontaneous speech in Japan", Franco-Japanese Symposium, Sound data analysis and reference corpora (Paris) 2013.11.18.

Kikuo Maekawa

"Some results of corpus-based analyses of spontaneous Japanese", Talk at the SRPP meeting of Université Solbonne Nouvelle (Paris) 2013.11.22.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第 4 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2013.9.5-6.

・第 5 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2014.3.6-7.

・Franco-Japanese Symposium, Sound Data Analysis and Reference Corpora –Sharing Experiences-" (Paris) 2013.11.18-20.

【大学院教育・若手研究者育成】

・連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科連携教授

小木曽　智信（おぎそ としのぶ）言語資源研究系 准教授

1971 生

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学，2014）

【学歴】東京大学文学部第 3 類（語学文学）卒業（1995），東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文化研究専攻修了（1997），同 博士課程単位取得退学（2001），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了（2014）

【職歴】明海大学外国語学部 講師（2001），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学，自然言語処理

【所属学会】日本語学会，言語処理学会，情報処理学会，計量国語学会，日本語文法学会，近代語学会，東京大学国語国文学会

【受賞歴】

2013　Best Poster Award Gold Prize, PNC/ECAI & Jinmoncom (IPSJ SIG-SH) Joint Meeting (Akihiro Kawase, Taro Ichimura, Toshinobu Ogiso)

2011　国立国語研究所第 2 回所長賞

2011　情報処理学会山下記念研究賞

【2013 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「統計と機械学習による日本語史研究」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトの目的は，機械学習の手法をもちいて日本語通時コーパスの整備に必要となる各種の技術を開発すること，そして整備したコーパスを用いて統計的手法に基づく新しい方法による日本語史研究に取り組むことである。

研究成果：

濁点の自動付与や近代文語文・中古和文の形態素解析など，多様な日本語史資料に対するアノテーションのための研究を行った。開発したソフトウェアや言語資源は一般に公開するとともに，「日本語歴史コーパス 平安時代編」「明六雑誌コーパス」の構築に活用した。また，整備されたコーパスを用いて，コロケーション強度や多変量解析などの統計的手法に基づく新しい方法による日本語史研究に取り組み，論文として公表した。（本年度最終年度）

基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」：共同研究員

コーパス検索ツール「中納言」に「日本語歴史コーパス 平安時代編」の短単位・長単位データを格納し一般公開を行った。また，上記「統計日本語史」プロジェクトの成果を活かして，近世口語文の形態素解析，中古和文の長単位解析等に取り組んだほか，洒落本・狂言などの資料の構造化に関する研究を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

「コーパス日本語学ワークショップ」に参加して研究発表を行ったほか，コーパス検索ツール「中納言」の更新を行い，「中納言」講習会で講師として講演を行った。

また，朝倉書店より刊行した「講座日本語コーパス」第 1 巻『コーパス入門』の執筆を行った。

【研究業績】

《博士学位論文》

小木曽智信

「日本語通時コーパスのための形態論情報アノテーションの研究」，奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科，2014.3.

《著書・編書》

前川喜久雄，辻井潤一，投野由紀夫，徳永健伸，丸山岳彦，山崎 誠，小木曽智信，中村壮範，山口昌也

『講座日本語コーパス 1 コーパス入門』，朝倉書店，2013.7.

《論文・ブックチャプター》

岡 照晃，小町 守，小木曽智信，松本裕治

「統計的機械学習を用いた歴史的資料への濁点付与の自動化」，『情報処理学会論文誌』54（4），pp.1641-1654. 情報処理学会，2013.4.

小木曽智信

「中古仮名文学作品の形態素解析」，『日本語の研究』9（4）（通巻 255），pp.49-62. 日本語学会，2013.10.

小木曽智信

「コーパス作成の道具」，『日本語学』32（14），pp.78-93. 明治書院，2013.11.

小林雄一郎，小木曽智信

「中古和文における個人文体とジャンル文体：多変量解析による歴史的資料の文体研究」，『国立国語研究所論集』6，pp.29-43. 国立国語研究所，2013.11.

小木曽智信，小町 守，松本裕治

「歴史的日本語資料を対象とした形態素解析」，『自然言語処理』20（5），pp.727-748. 言語処理学会，2013.12.

《データベース類》

・日本語歴史コーパス平安時代編
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/

・明六雑誌コーパス Ver1.1
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/meiroku/

・近代文語 UniDic Ver.1.4（形態素解析用辞書）
http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic

・中古和文 UniDic Ver.1.4（形態素解析用辞書）
http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic

《その他の出版物・記事》

小木曽智信

「歴史的日本語資料のアノテーションと自動濁点付与」，『国語研プロジェクトレビュー』4（2），pp.144-150. 国立国語研究所，2013.10.

【講演・口頭発表】

高田智和，堤 智昭，小木曽智信

「雑誌『国語学』全文データベースの運用と改良」，日本語学会 2013 年度春季大会（大阪大学）2013.6.2.

小木曽智信，中村壮範，須永哲矢，冨士池優美，田中牧郎，近藤泰弘

「「日本語歴史コーパス 平安時代編」先行公開版デモンストレーション」，日本語学会 2013 年度

春季大会（大阪大学）2013.6.2.

岡 照晃，小町 守，小木曽智信，小木曽智信，松本裕治

「表記のバリエーションを考慮した近代日本語の形態素解析」, 人工知能学会全国大会（富山大学）2013.6.5.

小木曽智信，市村太郎，鴻野知暁

「近世口語資料の形態素解析の試み」，第 4 回コーパス日本語学ワークショップ，2013.9.5.

Toshinobu Ogiso

"Design and Compilation of the Corpus of Historical Japanese", International Workshop on TEI and Corpus of Historical Japanese（国立国語研究所）2013.9.17.

近藤明日子，高田智和，小木曽智信，堤 智昭

「原本画像参照機能付き『明六雑誌コーパス』の開発」, 日本語学会 2013 年度秋季大会（静岡大学）2013.10.27.

高田智和，小助川貞次，堤 智昭，斎藤達哉，小木曽智信，小野 博

「古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビュアーの開発」，日本語学会 2013 年度秋季大会（静岡大学）2013.10.27.

Akihiro Kawase and Toshinobu Ogiso

"The Current Situation and Role of TEI P5 as an XML Standard for the Corpus of Historical Japanese" International Symposium: Humanities Studies in the Digital Age and the Role of Buddhist Studies（東京大学）2013.11.17.

河瀬彰宏，市村太郎，小木曽智信

「TEI P5 に基づく近世口語資料の構造化とその問題点」，情報処理学会シンポジウム（人文科学とコンピューター）じんもんこん（PNC/ECAI 合同開催）（京都大学）2013.12.12.

小西 光，中村壮範，田中弥生，浅原正幸，今田水穂，山口昌也，前川喜久雄，小木曽智信，山崎 誠，丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正作業の進捗」，第 5 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2014.3.6.

小木曽智信，神田龍之介，近藤明日子

「BCCWJ における敬語形式の使用実態」，第 5 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2014.3.7.

鴻野知暁，小木曽智信

「見出し語の時代情報を付与した電子化辞書の構築」, 言語処理学会第 20 回年次大会（北海道大学）2014.3.18.

河瀬彰宏，市村太郎，小木曽智信

「『虎明本狂言集』における会話文の計量分析」，言語処理学会第 20 回年次大会（北海道大学）2014.3.19.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・国際ワークショップ･TEI と日本語歴史コーパス（「通時コーパスの設計」プロジェクト研究発表会）（企画・運営）2013.9.17.

・NINJAL フォーラム「近代の日本語はこうしてできた」司会（一橋大学一橋講堂）2014.3.30.

【その他の学術的・社会的活動】

・NINJAL 職業発見プログラム（横浜翠嵐高校受入）で講演。2013.10.22.

【大学院教育・若手研究者育成】

・講習会講師

現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」講習会（京都）2013.8.8.

日本語歴史コーパス「中納言」講習会（国立国語研究所）2014.1.25.

現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」講習会（国立国語研究所）2014.2.23.

・大学院非常勤講師

東京外国語大学大学院総合国際学研究科

柏野　和佳子（かしの わかこ）言語資源研究系 准教授

【学位】文学学士

【学歴】東京女子大学文理学部日本文学科卒業（1991）

【職歴】富士通株式会社システムエンジニア（1991-1998），情報処理振興事業協会（IPA）技術センター研究員（1991-1997），国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同研究開発部門言語資源グループ 主任研究員（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学

【所属学会】計量国語学会，言語処理学会，情報処理学会，人工知能学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会情報規格調査会学会試行標準 WG3 小委員会 主査，情報規格調査会学会試行標準専門委員会 委員

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：共同研究員

コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）の一つとして，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）に収録されている図書館サブコーパス（10,551 サンプル）の全サンプルに対して付与した文体情報のとりまとめを行った。特定の文体的特徴をもつテキストを検索し，形態論情報等を一覧できる Web アプリケーションとして文体情報検索ツールを構築した（柏野・中村 2014）。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から得られる辞書情報の分析研究を進めた。今年度は，非外来語のカタカナ表記の使用実態に着目し，BCCWJ の全収録語の自動解析から得られる，同一見出し語の表記別の頻度情報を用いてカタカナ表記頻度の多い非外来語の語彙表を作成した。さらに，カタカナ頻度の多い語を，カタカナ表記率，ひらがな表記率，漢字表記率，の三つの観点により捉え直した語彙表を作成した（柏野・中村 2013）。

【研究業績】

《著書・編書》

柏野和佳子，平本智弥

『なぜだろうなぜかしら 10 分でわかる！四字熟語』，実業之日本社，2013.6.

柏野和佳子，市村太郎，平本智弥

『なぜだろうなぜかしら よんだ 100 人の気持ちがよくわかる！百人一首』，実業之日本社，2013.8.

《論文・ブックチャプター》

柏野和佳子

「「コーパス」でさぐる和語や漢語のカタカナ表記の実態」，『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』，pp86-105. 彩流社，2014.3.

《その他の出版物・記事》

柏野和佳子

「書籍サンプルの文体を分類する」，『国語研プロジェクトレビュー』4（1），pp.43-53. 2013.6.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子，中村壮範

「現代日本語書き言葉における非外来語のカタカナ表記事情」，『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，pp.285-290. 2013.9.

柏野和佳子，中村壮範

「BCCWJ 図書館サブコーパスの文体情報検索ツールによるテキスト分析」，『第 5 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，pp.171-180. 2014.3.

【その他の学術的・社会的活動】

・国語研「ニホンゴ探検」で辞書引きコーナーを担当。2013.7.

・「学研教室 全国指導者研修会国語分科会」にて講演。2013.10.

田中　牧郎（たなか まきろう）言語資源研究系 准教授

1962 生

【学位】博士（学術）（東京工業大学，2014）

【学歴】東北大学文学部文学科（1985），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻（1987），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1989），東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程後期人間行動システム専攻修了（2014）

【職歴】国立国語研究所国語辞典編集室（1996），同 主任研究官（1999），同 室長（2000），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 主任研究員（2001），同 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009-2014.3）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会, 社会言語学会, 言語処理学会, 訓点語学会, 日本言語学会, 日本言語政策学会, 万葉学会，日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員，日本語学会『日本語学大辞典』編集委員 主任，言語処理学会 編集委員，日本医学会用語管理委員会 委員，朝日新聞社・ベネッセコーポレーション「語彙・読解力検定」語彙 選定委員，明治書院『日本語学』編集委員

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」：共同研究員

「通時コーパス」の設計と構築に関する研究, 及びこれを活用した日本語史研究を多角的に展開した。成果物としては,『日本語歴史コーパス 平安時代編』の公開，著書『近代書き言葉はこうしてできた』の刊行，論文「「『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応―語の文体的価値の記述―」の発表などがある。

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態」：共同研究員

言語問題の改善に関する研究，及び岡田コレクションによる近代日本語の研究を行った。成果物としては，論文「患者への説明に用いられる医療用語の類別と対応」,「分かりにくい医療用語の類型と語の性質」などの発表がある。

【研究業績】

《博士学位論文》

田中牧郎

「平安時代日本語の語彙の層」，東京工業大学，2014.3.

《著書・編書》

田中牧郎

『近代書き言葉はこうしてできた（そうだったんだ！日本語)』，岩波書店，2013.8.

《論文・ブックチャプター》

田中牧郎

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく語彙の分類 ―実用的な語彙研究のために―」,『講座 日本語学と日本語教育』，pp.263-274. 2013.6.

田中牧郎

「患者への説明に用いられる医療用語の類別と対応」,『これからの医療コミュニケーションへ向けて』（石崎雅人・野呂幾久子監修），pp.104-115，篠原出版社，2013.7.

田中牧郎
「分かりにくい医療用語の類型と語の性質」,『現代日本語の動態研究』(相澤正夫編), pp.172-193. おうふう, 2013.10.
田中牧郎, 山元啓史
「『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の同文説話における語の対応 ―語の文体的価値の記述―」,『日本語の研究』10 (1), pp.16-30. 2014.1.
《データベース類》
・『日本語歴史コーパス平安時代編』
《その他の出版物・記事》
田中牧郎
「外来語とその言い換え」,『日本語学』32 (4), pp.74-82. 明治書院, 2013.4.
田中牧郎
「『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』から見る近代語彙」,『国立国語研究所プロジェクトレビュー』4 (1), pp.18-27. 2013.6.

【講演・口頭発表】
田中牧郎
「『病院の言葉を分かりやすくする提案』における調査結果などから」,「痛み」治療を取り巻く課題と今後の方向性, 2013.7.8.
田中牧郎
「専門用語を分かりやすくする ―医療用語を例に―」, 大阪大学トークイベント「日本語を衆議する / 日本語で衆議する」第 3 回・公共空間の日本語を設計する, 2013.7.22.
田中牧郎
「文体から見た『今昔物語集』の語彙 ―『日本語歴史コーパス 平安時代編』と比較して―」, 第 4 回コーパス日本語学ワークショップ, 2013.9.5.
田中牧郎
「民法用語の分かりにくさとその対策」, 司法アクセス学会第 7 回学術大会, 司法アクセスと「ことば」―「ことば」の障壁を考える―, [招待講演] 2013.12.7.
田中牧郎
「分かりにくい医学用語を分かりやすく」, 平成 25 年度日本医学会分科会用語委員会, 2013.12.16.
田中牧郎
「『今昔物語集』における文体対立語 ―巻 12 と巻 27 の語彙比較による―」, 第 5 回コーパス日本語学ワークショップ, 2014.3.7.
田中牧郎
「情報弱者への情報提供のための語彙研究 ―言語問題としての取り組み―」, 第 33 回社会言語科学会研究大会シンポジウム「言語的マイノリティーへの情報保障」, [招待講演] 2014.3.15.
田中牧郎
「漢語が日本語に溶け込むとき」, 第 7 回 NINJAL フォーラム「近代の日本語はこうしてできた」, 2014.3.30.

【大学院教育・若手研究者育成】
・特別共同研究員 (オックスフォード大学大学院生 1 名) の受け入れ
・博士論文審査
明治大学文学研究科 副査

丸山　岳彦（まるやま たけひこ）言語資源研究系 准教授

1972 生

【学位】博士（学術）（国際基督教大学，2013）

【学歴】神奈川大学外国語学部英語英文学科卒業（1995），神戸市外国語大学大学院外国語学研究科日本語日本文化専攻修士課程修了（1997），神戸市外国語大学大学院外国語学研究科文化交流専攻博士課程単位取得退学（2000）

【職歴】株式会社 ATR 音声言語通信研究所 客員研究員（2000），国際電気通信基礎技術研究所 ATR 音声言語コミュニケーション研究所 研究員（2001），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学，コーパス日本語学

【所属学会】日本語文法学会，言語処理学会

【学会等の役員・委員】日本語文法学会学会誌委員

【受賞歴】

2006　言語処理学会第 12 回年次大会 優秀発表賞「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」（共著）

【2013 年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」：共同研究員

本年度はプロジェクトの最終年度であり，成果物として刊行する論文集『日本語複文構文の研究』の編集に携わった。第 3 部「コーパス言語学･語用論編」の編集担当として，掲載される論文をチェックし，当該分野における研究状況を見渡した解説論文を執筆した。本論文集は，2014 年 1 月に出版された。また，本研究プロジェクトの最終的な報告として，2 月 1 日（土）に国立国語研究所で開催された研究系合同発表会「レキシコンフェスタ」にて研究発表を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

前川喜久雄（編），辻井潤一，投野由紀夫，徳永健伸，丸山岳彦，山崎 誠，小木曽智信，中村壮範，山口昌也（著）

『講座 日本語コーパス 1 コーパス入門』，朝倉書店，2013.7.

益岡隆志，大島資生，橋本 修，堀江 薫，前田直子，丸山岳彦（編）

『日本語複文構文の研究』，ひつじ書房，2014.1.

《論文・ブックチャプター》

丸山岳彦

「第 5 章 日本語コーパスの発展」，『講座 日本語コーパス 1 コーパス入門』，pp.105-133. 朝倉書店，2013.7.

Maekawa Kikuo, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, Yasuharu Den

"Balanced corpus of contemporary written Japanese", *Language Resources and Evaluation*, 10.1007/s10579-013-9261-0, Springer, 2013.12.

丸山岳彦

「コーパス言語学・語用論の観点から見た日本語複文研究の動向と課題」，『日本語複文構文の研

究』，pp.385-398. ひつじ書房，2014.1.

丸山岳彦

「現代日本語の連用節とモダリティ形式の分布―BCCWJ に基づく分析」，『日本語複文構文の研究』，pp.399-425. ひつじ書房，2014.1.

《国際会議録》

Silber-Varod, Vered and Takehiko Maruyama

"The Linguistic Role of Hesitation Disfluencies: Evidence from Hebrew and Japanese", *Proceedings of DiSS 2013 The 6th Workshop on Disfluency in Spontaneous Speech*, pp.67-70. 2013.8.

Takehiko Maruyama

"Analysis of Parenthetical Clauses in Spontaneous Japanese", *Proceedings of DiSS 2013 The 6th Workshop on Disfluency in Spontaneous Speech*, pp.44-48. 2013.8.

【講演・口頭発表】

Takehiko Maruyama

"Corpus linguistics in Japan: Design and Compilation of Large-scale Corpora of Written and Spoken Japanese", Oxford University, Research Centre for Japanese Language and Linguistics (Invited) 2013.8.

丸山岳彦

「現代日本語の従属節に現れるモダリティ形式の分布」，『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』，pp.299-308. 2013.9.

保田 祥，立花幸子，柏野和佳子，丸山岳彦

「「ベテランは足を保護する」が語りかけるとき」，『第 4 回コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』，pp.345-354. 2013.9.

小西 光，中村壮範，田中弥生，浅原正幸，今田水穂，山口昌也，前川喜久雄，小木曽智信，山崎 誠，丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正作業の進捗」，『第 5 回コーパス日本語学ワークショップ 予稿集』，pp.127-136. 2014.3.

丸山岳彦

「ワークショップ 日本語コーパス入門」（神戸大学大学院人文学研究科）［招待講演］2014.3.

【その他の学術的・社会的活動】

・2013.7.　国立国語研究所「ニホンゴ探検 2013」で講演「ことばは ゆれる」

・2013.7.　江戸川区子ども未来館 子どもアカデミーで講演「日本語の書きわけ教室 ―漢字・カタカナ・ひらがなのヒミツ―」

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

政策研究大学院大学

山口　昌也（やまぐち まさや）言語資源研究系 准教授

1968 生

【学位】博士（工学）（東京農工大学，1994）

【学歴】東京農工大学工学部数理情報工学科卒業（1992），東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了（1994），東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了（1998）

【職歴】東京農工大学工学部 助手（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006），同研究開発部門言語資源グループ主任研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】情報学，知能情報学，科学教育・教育工学，言語学，日本語学

【所属学会】社会言語科学会，日本教育工学会，電子情報通信学会，日本語学会，言語処理学会，情報処理学会

【受賞歴】

2007　財団法人博報児童教育振興会 第 1 回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

2012 年度に行った萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「文脈情報に基づく複合的言語要素の合成的意味記述に関する研究」の成果のうち，複合動詞関連の研究を論文として発表した。また，プロジェクト期間中に構築していた「Web データに基づく形容詞用例データベース」を整備し，Web 上に公開した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

山口昌也

「複合動詞「～込む」と前項動詞の格関係」，複合動詞研究の最先端－謎の解明に向けて（影山太郎［編］），pp.185-212. ひつじ書房，2013.12.

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, Yasuharu Den

"Balanced corpus of contemporary written Japanese", *Language Resources and Evaluation* 48(2), pp.345-371. 2013.12.（オンライン版。紙媒体の出版は 2014 年度）

《データベース類》

・Web データに基づく形容詞用例データベース」を公開 2013.11.15. http://csd.ninjal.ac.jp/adj/

・全文検索システム『ひまわり』用に『Wikipedia』パッケージ http://www2.ninjal.ac.jp/lrc（全文検索システム『ひまわり』のページ内に掲載，『Wikipedia 日本語版』の 88 万記事を収録）2013.11.18.

《その他の出版物・記事》

山口昌也

「複合動詞用例データベースの構築と活用」，国語研プロジェクトレビュー 4（1），pp.61-69. 2013.6.

【講演・口頭発表】

北村雅則，大塚裕子，山口昌也

「相互教授型日本語ライティング授業における受講者による論理的な説明手法の分析」，日本教育工学会第 29 回全国大会予稿集，2013.9.

山口昌也

「多義複合動詞の語義構造の分析」，第 4 回日本語コーパスワークショップ予稿集，pp.355-360. 2013.9

山口昌也，北村雅則

「ライティング授業のための協同学習支援システムの構想」，「「評価」を持って街に出よう」シンポジウム予稿集，2014.2.

山口昌也

「形容詞用例データベースの構築」，第 5 回日本語コーパスワークショップ予稿集，pp.147-152. 2014.3.

小西 光，中村壮範，田中弥生，浅原正幸，今田水穂，山口昌也，前川喜久雄，小木曽智信，山崎 誠，丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正作業の進捗」，第 5 回日本語コーパスワークショップ予稿集，pp.127-136. 2014.3.

北村雅則，大塚裕子，山口昌也

「論理的な説明手法の獲得に向けた指導指標の設定」，言語処理学会第 20 回年次大会予稿集，2014.3.

松田真希子，森 篤嗣，川村よし子，庵 功雄，山本和英，山口昌也

「二格深層格の定量的分析」，言語処理学会第 20 回年次大会予稿集，2014.3.

山崎　誠（やまざき まこと）言語資源研究系 准教授

1957 生

【学位】修士（文学）（筑波大学，1983）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業（1980），筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第 5 学年中退（1984）

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員（1984），同言語体系研究部第一研究室 研究員（1988），同 主任研究官（1993），同 第一研究室 室長（1995），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員（2001），同研究開発部門第一領域長（2003），同研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

【所属学会】日本語学会，計量国語学会，言語処理学会，語彙研究会，日本語教育学会，社会言語科学会，情報知識学会，日本語文法学会，日本行動計量学会，情報処理学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会理事，言語処理学会 理事・編集委員

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

第 4 回，及び第 5 回コーパス日本語学ワークショップにおいて，「同一見出し語の出現間隔の分布と文体差」「言語単位と文の長さが品詞比率に与える影響」のタイトルでポスター発表を行った。また，プロジェクトの研究発表会において，「テキストの一貫性と計量語彙論的属性との関係」のタイトルで口頭発表を行った。また，2013 年度は前年に国際計量言語学会で口頭発表を行った “Quantitative analysis of the text structure using co-occurrence of words” を論文としてまとめ，同学会発行のプロシーディングスに “Quantitative Analysis of Text Structure Using Co-occurrence of Words” を掲載した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

山崎 誠

「新日本語学者列伝 見坊豪紀」，『日本語学』32（4），pp.84-91. 明治書院，2013.4.

山崎 誠

「語彙調査の系譜とコーパス」，『講座日本語コーパス 1 コーパス入門』所収，pp.134-158. 朝倉書店，2013.7

Makoto Ymazaki

“Quantitative Analysis of Text Structure Using Co-occurrence of Words”, *Methods and Applications of Quantitative Linguistics: Selected papers of the 8th International Conference on Quantitative Linguistics (QUALICO)* pp.96-104. 2013.7

山崎 誠

「形式語研究の方法論 ―定性的研究と定量的研究―」，『形式語研究論集』pp.1-18. 和泉書院，2013.10.

山崎 誠

「語彙研究に足りないもの ―語彙研究の発展のために―」，『語彙研究』11，pp.18-2. 語彙研究会，2014.3.

山崎 誠

「コーパスの普及と日本語･研究の動向」,『文化情報学』9（2）, pp.32-45. 同志社大学文化情報学会, 2014.3.

《辞書・辞典類》

『三省堂国語辞典 第七版』，三省堂，2014.1.

【講演・口頭発表】

山崎 誠

「同一見出し語の出現間隔の分布と文体差」，第 4 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2013.9.6.

山崎 誠

「語彙研究に足りないもの」，2013 年語彙研究会大会（愛知大学名古屋キャンパス）2013.9.7.

山崎 誠

「コーパスの普及と日本語研究の動向」，同志社大学文化情報学研究科共通シンポジウム（同志社大学京田辺キャンパス）2013.11.13.

山崎 誠

「言語単位と文の長さが品詞比率に与える影響」，第 5 回コーパス日本語学ワークショップ（国立国語研究所）2014.3.7.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第 4 回コーパス日本語学ワークショップの企画・運営　2013.9.5-6.

・第 5 回コーパス日本語学ワークショップの企画・運営　2014.3.6-7.

【その他の学術的・社会的活動】

・『中納言』講習会講師

TKP ガーデンシティ京都，2013.8.8.

国立国語研究所，2014.2.23

【大学院教育・若手研究者育成】

・連携大学院

一橋大学言語社会研究科 連携教授

・博士論文審査

一橋大学社会学研究科（副査）

John Bradford Whitman（ジョン ブラッドフォード ホイットマン）

言語対照研究系 教授，研究系長

1954 生

【学位】博士（言語学）（ハーバード大学，1985）

【学歴】Harvard University，Linguistics & Philosophy 卒業（1976），筑波大学文芸言語研究科修士課程修了（1980），Harvard University，Linguistics 博士課程修了（1985）

【職歴】ハーバード大学 助教授（1986），コーネル大学 助教授（1987），同 教授（2003），同 Chair（教授）（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 教授（2011），研究系長（2012）

【専門領域】言語学，歴史比較言語学，言語類型論，東洋言語学

【所属学会】日本言語学会，訓点語学会，アメリカ言語学会，国際韓国語学会

【学会等の役員・委員】*Cahiers de Linguistique - Asie Orientale*（パリ）編集委員，『言語研究』（韓国）編集委員，*Korean Linguistics*（オランダ Brill 社）副編集長

【受賞歴】

2011　国立国語研究所第 3 回所長賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」：リーダー

【研究業績】

《著書・編書》

John Whitman and Young-Key Kim-Renaud (special issue editor)

"Korean Historical Linguistics" (special issue), *Korean Linguistics* 15(2), 2013.

《論文・ブックチャプター》

John Whitman

"The prehead relative clause problem", in Klaus von Heusinger, Jaklin Kornfilt, and Umut Özge (eds.) *MIT Working Papers in Linguistics 67: Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics*, pp.361-380. Cambridge, Massachusetts: Massachusetts Institute of Technology. 2013

Andrew Joseph and John Whitman

"The diachronic consequences of the RTR analysis of Tungusic vowel harmony", in Klaus von Heusinger, Jaklin Kornfilt, and Umut Özge (eds.) *MIT Working Papers in Linguistics 67: Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics,* pp.159-176. Cambridge, Massachusetts: Massachusetts Institute of Technology, 2013.

Redouane Djamouri, Waltraud Paul and John Whitman

"Postpositions vs. prepositions in Mandarin Chinese: The articulation of disharmony", in Theresa Biberauer (ed.) *Theoretical Approaches to Disharmonic Word Order*, pp.74-105. Oxford: Oxford University Press, 2013.

Redouane Djamouri, Waltraud Paul and John Whitman

"Syntactic change in Chinese and the argument-adjunct asymmetry", In Cao Guangshun, H. Chappell, R. Djamouri, and T. Wiebusch (eds.) *Breaking down the barriers: Interdisciplinary studies in Chinese linguistics and beyond* [Language and Linguistics monograph series 50],

pp.577-594. Taipei: Academia Sinica, vol.2, 2013.

ジョン・ホイットマン

「「訓読」は漢字文化圏だけのものか」,『日本語学』32（13）, pp.26-41. 2013.

《その他の出版物・記事》

John Whitman

"Review of Lee, Ki-moon and Robert Ramsey A history of Korean Language", In *Korean Historical Linguistics* (special issue editor John Whitman, with Young-key Kim-Renaud), *Korean Linguistics* 15(2), pp.246-260. 2013.

ジョン・ホイットマン（編）

『日本語新発見：世界から見た日本語』, 国立国語研究所 NINJAL フォーラムシリーズ 3, 2013.

【講演・口頭発表】

John Whitman and Pittayawat Pittayaporn

"Going beyond history: Re-assessing genetic groupings in Southeast Asia (plenary panel)", 23rd Meeting of the Southeast Asian Linguistic Society (Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand)（パネルの主催者兼司会）2013.5.30.

ジョン・ホイットマン

「アジアとアフリカの言語地域」, 日本言語学会第 146 大会公開シンポジウム（茨城大学）（コメンテーター）2013.6.16.

John Whitman

"Accessing the cosmopolitan code in the Sinographic Cosmopolis", International Symposium on Learning 漢文 in Traditional Korea and Japan (Waseda University)［招待講演］2013.6.17.

John Whitman and Yohei Ono

"Diachronic Interpretations of Word Order Parameter Cohesion", DiGS XV (University of Ottawa, Ottawa, Canada)［招待講演］2013.8.1.

Waltraud Paul and John Whitman

"Topic prominence: A conspiracy approach", 8th Meeting of the European Association for Chinese Linguistics (INALCO, Paris, France) 2013.9.27.

Anna Bugaeva and John Whitman

"Deconstructing clausal noun modifying constructions", Japanese/Korean Linguistics 23 (Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, MA.）2013.10.12.

ジョン・ホイットマン, 小野洋平

「WALS（World Atlas of Linguistic Structures）の言語類型論的パラメーターの統計論的分析とその通時論的解釈」, 日本エドワード・サピア協会 第 28 回研究発表会（聖心女子大学）［招待講演］2013.10.26.

John Whitman

"Kundoku: What is it, and did anything like it exist in the medieval West?", Workshop on vernacular literacy in medieval Europe and East Asia (Centre for Antique, Medieval, and Pre-Modern Studies, National University of Ireland, Galway, Ireland) 2013.11.29.

John Whitman

"Bare stem V-V compounding in Korean,with reference to Japanese", NINJAL Intenational Symposium 2013 Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages (National Institute of

Japanese Language and Linguistics, Tokyo)［招待講演］2013.12.12.

ジョン・ホイットマン

「東北アジアの仏典訓読とラテン教典の読法 ―中世欧州の注釈文献と訓点・口訣資料の比較研究―」，国際シンポジウム「言語・文字の転回からみた『仏教』流伝」（早稲田大学総合人文科学研究センター）［招待講演］2013.12.21.

Prashant Vijay Pardeshi（プラシャント・ウィジャイ・パルデシ）

言語対照研究系 教授

【学位】博士（学術）（神戸大学，2000）

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了（1993），神戸大学大学院文化学研究科修了（2000）

【職歴】神戸大学文学部 講師（2005），同 人文学研究科 講師（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 教授（2011）

【専門領域】言語学，言語類型論，対照言語学

【所属学会】日本語文法学会，日本言語学会，関西言語学会，国際類型論学会（ALT）

【受賞歴】

2010　国立国語研究所第 1 回所長賞

2007　第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞：パルデシ・プラシャント , 桐生和幸 , 石田英明 , 小磯千尋（編）2007.『日本語―マラーティー語基本動詞用法事典』（428 ページ）。財団法人博報児童教育振興会 2005 年度第 1 回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書。

2000　The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to "*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*", Sage Publications. New Delhi, Thousand Oaks, & London. Paper title: "The Passive and Related Constructions in Marathi."

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」：リーダー

本プロジェクトは（A）言語類型論チーム，（B）心理言語学チーム，（C）基本動詞ハンドブック作成チームの 3 つのグループで構成される。2013 年度において，言語類型論チームでは今までの成果を論文集の形で取りまとめる作業を開始した。共同研究者から論文 25 編の寄稿があった。心理言語学チームではデータのコーディング，分析作業を続行した。基本動詞ハンドブック作成チームでは 17 見出しを公開する準備を整えた。

【研究業績】

《データベース類》

・NINJAL-LWP for BCCWJ(NLB）ver.1.20 公開（2013.6 公開）http://nlb.ninjal.ac.jp/
『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ)』出版サブコーパス新聞（PN）を除く BCCWJ 全データ対応

《その他の出版物・記事》

プラシャント・パルデシ

「温度を表す表現は万国共通か？」，人間文化研究機構・監修『HUMAN』5，pp.141-146. 平凡社，2013.12.

【講演・口頭発表】

プラシャント・パルデシ，赤瀬川史朗

「BCCWJ 検索ツール NLB 実習およびその研究・教育への応用」（札幌学院大学）2013.6.29.

Narrog Heiko and Prashant Pardeshi

"Modern Japanese transitivity pairs from a frequency perspective. Talk given at the

Department of Linguistics", The Max Plank Institute for Evolutionary Anthropology (Leipzig, Germany) 2013.8.21.

Prashant Pardeshi

"Noun modifying constructions in Marathi", Department of Linguistics (Deccan College Post-Graduate and Research Institute, Pune, India) 2013.9.17.

プラシャント・パルデシ

「認知言語学とコーパス研究を応用したネット版 日本語基本動詞ハンドブックの開発について」, 日本認知言語学会第 14 回全国大会シンポジウム「認知言語学とコーパス研究」(京都外国語大学) 2013.9.22.

Prashant Pardeshi

"Synchronic exploration in search of diachronic paths: A contrastive study of the grammaticalization of "PUT/KEEP" in Japanese and Marathi", Presented at the NINJAL INTERNATIONAL SYMPOSIUM 2013 MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, 2013.12.14-15.

Peter Hook and Prashant Pardeshi

"'Mouth-watering pakoras'and'Tooth-showing photos': Two kinds of syntactic-semantic mismatches in Marathi's prenominal participial phrases", Presented at the 30th South Asian Languages Analysis Roundtable (SALA Roundtable-30), Centre for Applied Linguistics and Translation Studies (School of Humanities, University of Hyderabad) 2014.2.6-8.

Prashant Pardeshi

"A Geo-typological database of transitivity pairs: Visualizing linguistic patterns and testing typological generalizations", Presented at the 30th South Asian Languages Analysis Roundtable (SALA Roundtable-30), Centre for Applied Linguistics and Translation Studies (School of Humanities, University of Hyderabad) 2014.2.6-8.

Prashant Pardeshi

"The typology of non-causative/causative verb alternations: From iconic to economic motivation." One day seminar on functional perspectives on language typology, Department of Linguistics, (Deccan College Post-Graduate and Research Institute, Pune, India) 2014.2.11.

Peter Hook and Prashant Pardeshi

「[[こどもの遊んでいる] 写真] or [[遊んでいるこどもの] 写真]」: Transferred prenominal participial phrases in Marathi, Hindi-Urdu, and Japanese Presented at the NINJAL Typology Festa 2013 (National Institute for Japanese Language and Linguistics) 2014.3.23-24.

Prashant Pardeshi

"A Geo-typological database of transitivity pairs: What is it and what does it do? ", Presented at the NINJAL Typology Festa 2013 (National Institute for Japanese Language and Linguistics) 2014.3.23-24

Prashant Pardeshi

"Two NINJAL Databases: a geo-typological database of transitivity alternations, and a database of Japanese verb-verb compounds" (Department of Linguistics, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig, Germany) 2014.3.24.

【研究調査】

・2012.3　Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Leipzig（Germany）にて資料収集

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・NINJAL Typology Festa 2013（企画・運営）2014.3.23-24.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師
　東京外国語大学
　亜細亜大学国際文化研究科

Anna Bugaeva（アンナ ブガエワ）言語対照研究系 特任准教授

1973 生

【学位】博士（文学）（北海道大学，2004）

【学歴】サンクト・ペテルブルグ大学東洋学部日本語科卒業（1996），北海道大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（2000），北海道大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程修了（2004）

【職歴】オーストラリア ラ・トローブ大学言語類型論センター 客員研究員（2007），早稲田大学高等研究所 助教（2008），同 准教授（2011），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 特任准教授（2012）

【専門領域】言語学，アイヌ語学，言語類型論

【所属学会】the Societas Linguistica Europaea(SLE), the Association for Linguistic Typology（ALT），日本言語類型論学会，言語類型論学会，日本言語学会，日本ロシア文学会

【受賞歴】

2013　大学共同利用機関法人人間文化研究機構人間文化研究奨励賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」（リーダー：John Whitman 教授）における「アイヌ語班」のリーダー

アイヌ語研究者約 10 名による研究グループを組織して共同研究を行い，論集（*Handbook of the Ainu Language*，HJLL シリーズ，De Gruyter Mouton から出版予定）としてまとめる計画を進めていた。2013 年度に主として言語類型論的な観点から意義をもつと考えられるトピックを選定し，目次と執筆者を決めるところまで進めた。[2013 年度にプロポザル，2014 年度に初原稿を完成させる。その後この論集を完成させ，さらにテキスト資料の作成を進める。]

「アイヌ語班」の 2 回の研究発表会（第 1 回：7 月 6-7 日，第 2 回：11 月 2-3 日；国立国語研究所）を開催し，以下のような活動を行った。

(a) アイヌ語諸方言における類型論的に興味深い現象に関する研究発表（特にテーマを定めずに行う）

(b) *Handbook of the Ainu Language* の構成についての議論および作業計画立案

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

アンナ・ブガエワ

「北海道南部のアイヌ語」児島康弘・長崎郁 訳『早稲田大学高等研究所紀要』6，pp.33-76. 早稲田大学，2013.3.

アンナ・ブガエワ

「アイヌ語における使役構文」，『北方言語研究』4，pp.127-147.（査読あり）北海道大学大学院文学研究科，2013.3.

《データベース類》

Anna Bugaeva

“Ainu Valency Patterns“，In Hartmann, Iren & Haspelmath, Martin & Taylor, Bradley (eds.) *Valency Patterns Leipzig*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology.（査読あり）http://www.valpal.info/languages/ainu　2013.10.

《その他の出版物・記事》

アンナ・ブガエワ

「アイヌ語は日本語に似たようなものか？」，第５回『日本語新発見 ―世界から見た日本語―』pp.29-36. 国立国語研究所 . 2013.6.

【講演・口頭発表】

アンナ・ブガエワ

「「父は並ぶもののない長者だった」―アイヌ語における関係節を用いた最上級表現―」，日本言語学会第 146 大会（『日本言語学会予言稿集』146，pp.34-39），茨城大学，2013.6.15.

ブガエワ・アンナ

「アイヌ語における名詞修飾構文」，日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェクト アイヌ語班第一研究会（国立国語研究所）2013.7.6.

アンナ・ブガエワ

「アイヌ語動詞分類 ―データベースに基づいた研究の一例」，日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェクト アイヌ語班第一研究会（国立国語研究所）2012.7.6.

Anna Bugaeva

“The dispersal of Ainu: on the innovative nature of Sakhalin Ainu dialects”, ALT 10 - adjacent workshop Language diversity and prehistory, MPI (Leipzig) 2013.8.19.

Anna Bugaeva and John Whitman

“Deconstructing clausal noun modifying constructions”, The 23rd Japanese/Korean Linguistics Conference, MIT (Cambridge USA) 2013.10.12.

Anna Bugaeva and Hiroshi Nakagawa

“V-V complexes in Ainu”, NINJAL International Symposium 2013. Misteries of Verb-Verb complexes in Asian languages (NINJAL, Tokyo) 2013.12.14.

アンナ・ブガエワ

「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究 ―アイヌ語における名詞修飾―」，国立国語研究所研究成果発表会 2014（一橋講堂学術総合センター）2014.2.2.

Anna Bugaeva

“Polysynthesis in Ainu”, NINJAL International Symposium on Polysynthesis in the World’s Languages (NINJAL, Tokyo) 2014.2.20.

Anna Bugaeva and John Whitman

“Noun modification and noun complementation in Northeast Asia”, NINJAL Typology Festa 2014 (NINJAL, Tokyo) 2014.2.22.

Anna Bugaeva

“The degree of polysynthesis in Ainu”，特別講演「言語類型論的に見たアイヌ語」（京都大学文学部）2014.3.6.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・国際シンポジウム「世界の言語における複統合性」（国立国語研究所）（企画・運営）2014.2.

・NINJAL Typology Festa 2（国立国語研究所）の（企画・運営アシスタント）2014.2.

【その他の学術的・社会的活動】

・Studia Linguistica Universitatis Iagellonicae Cracoviensis (SLing), Kyushu University Papers in Linguistics (KUPL) の査読者

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

一橋大学大学院言語社会研究科「日本語学講義Ⅰ」言語類型論．アイヌ語と日本語を中心に

石本　祐一（いしもと ゆういち）研究情報資料センター 特任助教

【学位】博士（情報科学）（北陸先端科学技術大学院大学，2004）

【学歴】宇都宮大学工学部卒業（1997），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了（2000），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】東京工科大学メディア学部 助手(2007)，同 助教(2009)，独立行政法人国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2010），情報システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員（2010），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2013），同 研究情報資料センター 特任助教（2013）

【専門領域】音響音声学，音声工学

【所属学会】日本音響学会，電子情報通信学会

【2013 年度の研究成果の概要】

萌芽・発掘型共同研究プロジェクト「会話の韻律機能に関する実証的研究」：共同研究員

研究成果：

自発発話の韻律的特徴を明らかにするために発話全体の基本周波数（F0）変動を調べ，発話末と F0 下降現象に関する知見を得た。その成果について，第 4 回および第 5 回コーパス日本語学ワークショップで報告した。また，本年度がプロジェクト最終年度であることから，日本音声学会研究例会においてシンポジウムを企画し，プロジェクト期間全体を通した成果について発表した。

独創・発展型共同研究プロジェクト「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」：研究協力者

研究成果：

会話コーパスの共有化に必要となる転記方式の相互変換を実現するための糸口として，日本語話し言葉コーパスに付与されている言語・音響情報から会話分析研究で用いられている音調マーカーの導出を試みた。その成果について，第 4 回コーパス日本語学ワークショップで報告した。

【研究業績】

《国際会議録》

Yuichi Ishimoto, Mika Enomoto and Hitoshi Iida
"Prosodic changes pre-announcing a syntactic completion point in Japanese utterance", *Proceedings of Interspeech 2013*, pp.788-792. (Lyon) 2013.8.

【講演・口頭発表】

石本祐一，土屋智行，小磯花絵，伝 康晴
「会話コーパスの転記方式の相互変換 ―言語・音響特徴を用いた会話分析方式の音調マーカーの導出―」，第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集，pp.85-92.（国立国語研究所）2013.9.

石本祐一，小磯花絵
「日本語話し言葉コーパスを用いた対話音声のイントネーション句の分析」，第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集，pp.159-166.（国立国語研究所）2013.9.

藤本雅子，石本祐一，前川喜久雄
「イタリア語の単子音，重子音の音響特徴」，日本音響学会 2013 年秋季研究発表会講演論文集，pp.429-430.（豊橋技術科学大学）2013.9.

石本祐一，榎本美香

「話者移行に関わる発話末付近の韻律変化の実験的検証」，日本音響学会 2013 年秋季研究発表会講演論文集，pp.457-458.（豊橋技術科学大学）2013.9.

石本祐一

「「発話」に見られる F0 変動」，日本音声学会第 328 回研究例会（日本大学）2013.12.

石本祐一，小磯花絵

「独話音声と対話音声の発話末の F0 変化」，第 5 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集，pp.181-188.（国立国語研究所）2014.3.

石本祐一，榎本美香

「韻律情報を活用した発話単位の認定 ―自動ラベリングに向けて―」，日本音響学会 2014 年春季研究発表会講演論文集，pp.439-440.（日本大学）2014.3.

大石康智，亀岡弘和，小野順貴，石本祐一，松井知子，板橋秀一

「トピック遷移 PLSA に基づくメルスペクトログラム生成モデルを用いた多言語音声分類手法の評価」，日本音響学会 2014 年春季研究発表会講演論文集，pp.483-484.（日本大学）2014.3.

籠宮　隆之（かごみや たかゆき）研究情報資料センター 特任助教

【学位】博士（学術）（神戸大学，2008）

【学歴】東京都立大学人文学部史学科卒業（1995），東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻修士課程修了（1999），神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士課程修了（2008）

【職歴】国立国語研究所 非常勤職員（1999-2005），独立行政法人産業技術総合研究所 特別研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所研究情報資料センター 特任助教（2013）

【専門領域】音声科学

【所属学会】日本音声学会，日本音響学会，社会言語科学会，International Speech Communication Association

【学会等の役員・委員】日本音声学会 評議員，日本音声学会 広報委員，日本音声学会 庶務委員，日本音声学会 音声学普及委員，社会言語科学会 企画委員

【2013 年度の研究成果の概要】

国語研研究推進プログラム　フィージビリティスタディ「脳機能計測による言語研究手法の検討と習得」：リーダー

近年，脳機能計測を用いた研究により，言語の知覚や生成に関する新たな知見が数多く得られている。国語研で進められている研究課題に関しても，脳機能計測を導入すれば，新たな展開が期待できる。しかし，現在の国語研では，脳機能計測や脳科学に関するノウハウが集積されていない。そこで，本研究課題では，国語研で行われている言語研究を脳機能計測と結びつけるべく，脳機能計測に豊富な経験を持つ産業技術総合研究所（産総研）健康工学研究部門との共同研究を立案した。本年度のプログラムでは，主に国語研の研究者が脳機能計測の手法を学ぶという立場から，これまで国語研で実施されてきた心理学的手法を用いた研究を，脳機能計測を用いてより実証的に研究することを目指した。具体的な実験テーマは，1）発話末予測に関わる韻律の知覚に関する脳反応，2）文字の形態論的要素と選好基準，の 2 点を掲げた。これらの実験テーマは，現在国語研で推進されている研究というだけでなく，音声呈示実験と視覚呈示実験という異なる実験手法という面も備えており，幅広く言語研究における実験的手法に応用できるものである。上記の実施計画に基づいて，本年度は発話末予測実験，および文字形態論実験の二つの研究テーマの具体的な実施方法を検討した。

発話末予測実験では，「発話末の予測に関わる要素は韻律が重要なのか，もしくは言語形式が重要なのか」を探る実験デザインを策定した。幾つかの実験プランの中から，MEG による脳機能計測で扱いやすい実験プランを選定した。この実験プランに用いる音声刺激や回答方法を検討し，具体的な実験デザインを策定した。

文字形態論実験では，「JIS コードの包摂などにも用いられている『字形』『字体』の違いは認知的に意味があるのか」の検討を中心とする研究計画を立案した。これらの実験にふさわしい呈示刺激となる文字の選定を行い，予備実験を実施するための準備を行った。

これらの実験デザインの検討するため，共同研究先の産業技術総合研究所の中川誠司氏を国語研に招き，ミーティングを開催した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Seiji Nakagawa, Chika Fujiyuki and Takayuki Kagomiya

“Development of a bone-conducted ultrasonic hearing aid for the profoundly deaf: Evaluation

of sound quality using a semantic differential method", *Japanese Journal of Applied Physics*, pp.07HF06:1-6. 2013.6.

《国際会議録》

Seiji Nakagawa, Chika Fujiyuki, Yuko Okubo, Takuya Hotehama and Takayuki Kagomiya
"Development of a novel hearing-aid for the profoundly deaf using bone-conducted ultrasonic perception: Assessments of the modulation type with regard to articulation, intelligibility, and sound quality", *Proceedings of Meetings on Acoustics*, Vol. 19, pp.050089:1-9. (Montreal, Canada) 2013.6.

Takayuki Kagomiya and Seiji Nakagawa
"Evaluation of bone-conducted ultrasonic hearing-aid regarding transmission of phonetic features", *Proceedings of Meetings on Acoustics*, Vol.19, pp.060169:1-7. (Montreal, Canada) 2013.6.

Seiji Nakagawa, Chika Fujiyuki, Yuko Okubo, Takuya Hotehama and Takayuki Kagomiya
"Development of a novel hearing-aid for the profoundly deaf using bone-conducted ultrasonic perception: Evaluation of Transposed Modulation", *Proceedings of the 35th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC'13)*, pp.3574-3577. (Osaka, Japan) 2013.7.

Takayuki Kagomiya and Seiji Nakagawa
"Evaluation of a bone-conducted ultrasonic hearing aid in vocal emotion transmission", *Proceedings of Interspeech 2013*, pp.2267-2271. (Lyon, France) 2013.8.

【講演・口頭発表】

佐野俊文，檀はるか，水谷 勉，籠宮隆之，皆川泰代，渡辺英寿，檀一平太
「言語処理におけるオノマトペ特有な神経応答の同定」，『日本生体磁気学会誌』26（1），pp.190-191. 第 28 回日本生体磁気学会（新潟県新潟市）2013.6

籠宮隆之
「聴覚補助器の性能を評価するためのパラ言語情報聴取試験の開発」,『日本人間工学会聴覚コミュニケーション第 7 回研究会資料』7 (1), 日本人間工学会聴覚コミュニケーション第 7 回研究会（東京都新宿区）pp.17-24.［招待講演］2013.9.

籠宮隆之，中川誠司
「聴覚補助器評価用パラ言語情報伝達性能テストの人工内耳シミュレータを用いた検証」，『日本音響学会 2014 年春季研究発表会講演論文集』，pp.657-658. 日本音響学会 2014 年春季研究発表会（東京都文京区）2014.3.

【研究調査】

・科研費『聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能を評価するための尺度の構築』（代表者：籠宮隆之）の助成により，補聴器や人工内耳などを装着した際に，話者情報や感情情報などがどの程度正確に伝達できるかを評価するための研究を推進した。

・科研費『聴覚音声支援のための聴知覚特性の解明と信号処理開発』（代表者：入野俊夫，和歌山大学）の助成により，人工内耳の性能の変化によって音声情報伝達特性がどのように変化するのかをシミュレーション実験により調査した。

【その他の学術的・社会的活動】

・「国語研の一般公開」講師，2013.10.19.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科

名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科

淺原　正幸（あさはら まさゆき）コーパス開発センター 特任准教授

1975 生

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学，2003）

【学歴】京都大学総合人間学部基礎科学科卒業（1998），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了（2001），奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了（2003）

【職歴】奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教（2004），大学共同利用機関法人国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授（2012）

【専門領域】自然言語処理

【所属学会】情報処理学会，言語処理学会

【受賞歴】

2014　吉川克正，浅原正幸，松本裕治
言語処理学会論文誌『自然言語処理』2014 年論文賞，「Markov Logic による日本語述語項構造解析」

2011　Yanyan Luo, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto
Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering, “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”

2010　Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto
The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine), “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”

2008　岩立将和，浅原正幸，松本裕治
言語処理学会第 14 回年次大会 優秀発表賞，「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」

2003　浅原正幸
平成 15 年度情報処理学会 山下記念研究賞，「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【2013 年度の研究成果の概要】

プロジェクト「超大規模コーパス」においては，2012 年度に計画した収集・組織化・利活用・保存の 4 つの部分タスクの概要について 2013 年 9 月に国際会議 PACLING で発表した。収集においては，計画に基づいて 2012 年 10 月～ 2013 年 9 月の間に 3 か月ごとに 4 回のペースで 1 億 URL のバルク収集を実施した。今後 1 年ごとに収集する URL を変更していく。組織化においては，Web 上に多い定形表現やコピーサイトの問題を，文の異なりを得ることにより緩和する方法を提案した。現在のところ 3 か月ごとに約 10 億文，約数百億形態素の収集を行っている。収集と組織化についての進捗を 2014 年 3 月に第 5 回コーパス日本語学ワークショップにて発表した。

共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」においては，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間表現・事象表現・時間的順序関係のアノテーションを進め，言語処理学会論文誌『自然言語処理』に 3 本の論文が採録され，1 本は論文賞を受賞した。

科研費「言語コーパスに対する読文時間付与とその利用」においては，小規模で被験者実験を行い読み時間付与の方法論について検討を行った。またデータの可視化について検討を行い，コーパスコンコーダンサ ChaKi.NET に対する読み時間の可視化機能を追加した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

小西 光，浅原正幸，前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報アノテーション」,『自然言語処理』20 (2), pp.201-222. 言語処理学会，2013.6.

吉川克正，浅原正幸，前川喜久雄

「Markov Logic による日本語述語項構造解析」,『自然言語処理』20 (2), pp.251-272. 言語処理学会，2013.6.

保田 祥，小西 光，浅原正幸，今田水穂，前川喜久雄

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」,『自然言語処理』20（5），pp.657-682. 言語処理学会，2013.12.

《国際会議録》

Masayuki Asahara and Kikuo Maekawa

"Design of a Web-scale Japanese Corpus", *Proceedings of Conference of the Pacific Association for Computational Linguistics* (PACLING-2013),（CD-ROM）（慶応義塾大学）2013.9.

Masayuki Asahara, Sachi Yasuda, Hikari Konishi, Mizuho Imada and Kikuo Maekawa

"BCCWJ-TimeBank: Temporal and Event Information Annotation on Japanese Text", *Proceedings of The 27th Pacific Asia Conference on Language Information and Computation* (PACLIC-27), pp.206-214.（国立政治大学，台北）2013.11.

《データベース類》

・BCCWJ-TimeBank: https://github.com/masayu-a/BCCWJ-TimeBank

【講演・口頭発表】

浅原正幸，森田敏生

「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』の連続値データ型」，第 4 回コーパス日本語学ワークショップ，pp.249-256.（国立国語研究所）2013.9.

林 正頼，高村大也，浅原正幸，奥村 学

「日本語文処理の負荷に関する計算言語学的研究」，日本認知科学会第 30 回大会，pp.6-11.（名古屋大学）2013.9.

保田 祥，浅原正幸，前川喜久雄

「何が記述してあればテキストの示している対象物がわかるのか」，日本認知科学会第 30 回大会，pp.370-379.（名古屋大学）2013.9.

浅原正幸，池本 優，森田敏生

「コーパスコンコーダンサ『ChaKi.NET』の連続値データ型 (2) ―読み時間の表示―」, 第 5 回コーパス日本語学ワークショップ，pp.39-48.（国立国語研究所）2014.3.

小西 光，中村壮範，田中弥生，浅原正幸，今田水穂，山口昌也，前川喜久雄，小木曽智信，山崎 誠，丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正作業の進捗」，第 5 回コーパス日本語学ワークショップ，pp.127-136.（国立国語研究所）2014.3.

浅原正幸，今田水穂，保田 祥，小西 光，前川喜久雄

「Web を母集団とした超大規模コーパスの開発 ―収集と組織化―」, 第 5 回コーパス日本語学ワークショップ，pp.189-198.（国立国語研究所）2014.3.

松吉 俊，浅原正幸，飯田 龍，森田敏生
「拡張 CaboCha フォーマットの仕様拡張」，第 5 回コーパス日本語学ワークショップ，pp.223-232.（国立国語研究所）2014.3.
吉川克正，浅原正幸，飯田 龍
「BCCWJ-TimeBank を対象とした時間的順序関係の推定」, 言語処理学会第 20 回年次大会論文集,（on the web）（北海道大学）2014.3.

迫田　久美子（さこだ くみこ）日本語教育研究・情報センター 教授，センター長

【学位】博士（教育学）（広島大学，1996）

【学歴】広島女学院大学文学部英米文学科卒業（1973），広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻修士課程修了（1992），広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻博士後期課程修了（1996）

【職歴】広島大学教育学部 講師（1996），同 助教授（1998），広島大学大学院教育学研究科 助教授（2001），同 教授（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授，センター長（2012）

【専門領域】日本語教育学，第二言語習得研究，誤用分析，日本語教授法

【所属学会】日本語教育学会，国立大学日本語教育協議会，日本言語学会，第二言語習得研究会，AATJ（American Association of Teachers of Japanese）

【学会等の役員・委員】日本語教育学会国際連携委員会 委員長，文化審議会国語分科会 委員，文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 委員，外務省「海外における日本語の普及促進に関する有識者懇談会」委員，国際交流基金「国際交流基金の運営に関する諮問委員会」委員，2013 年度国際交流基金賞選考委員会 委員，2013 年第 54 回外国人による日本語弁論大会 審査委員長

【受賞歴】

2003　日本語教育学会奨励賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究 ―学習者の言語環境と日本語の習得過程に関する研究―」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトの目的は，第二言語習得研究，対照言語学，社会言語学，心理言語学，コーパス言語学等の幅広い学問領域の連携により，多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐるさまざまな問題について，実証的な研究を行うことである。

研究成果：

(1) 共同研究員ごとに，日本語学・対照言語学・社会言語学的観点からの日本語の第二言語習得研究をはじめ，語彙研究や定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究を継続して実施した。

(2) 異なる 7 つの母語の日本語学習者の国際的なコーパス構築のための海外調査を 10 ヵ国（トルコ・ロシア・オーストリア・オーストラリア・ニュージーランド・タイ・インドネシア・台湾・イギリス・アメリカ）で実施し，約 470 名のデータを収集した。

(3) 3 月には，毎年米国で開催される日本語実用言語学国際会議 The International Conference on Practical Linguistics of Japanese（ICPLJ）を誘致，国立国語研究所で開催し，口頭発表 36 件，ポスター発表 30 件が実施され，2 日間で延べ 412 名の参加者を得た。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Srdanović, I. and Kumiko Sakoda

“Analysis of learner’s production of adjectives using the Japanese language learner’s corpus C-JAS: the case of *takai*”, *Acta Linguistica Asiatica*, 3(2), pp.9-24. 査読あり , 2013.

【講演・口頭発表】

迫田久美子

「学習者はなぜ間違うのか？」，2013 年度国際交流基金主催公開講演会（中国：大連外国語大学）

［招待講演］2013.4.13.

迫田久美子

「データから何がわかるか？」，2013 年度国際交流基金主催公開講演会（中国：北京日本学研究センター）［招待講演］2013.4.16.

迫田久美子

「コミュニケーションのための日本語教育研究」，2013 年度国際交流基金主催公開講演会（北京師範大学）［招待講演］2013.4.22.

迫田久美子

「学習者中心の日本語教育」, 2013 年度インドネシア国際研究集会, インドネシア日本語教育学会,（インドネシア：パジャジャラン大学）［招待講演］2013.10.2.

迫田久美子

「学習者中心の日本語教育」, 第 1 回中国中南地域における日本語教育と研究シンポジウム（中国: 湖南大学日本研究センター）［招待講演］2013.10.5.

迫田久美子

「書くことと話すことの違い ―学習者コーパスに見る言語運用―」，第 8 回日本語実用言語学国際会議，The Eighth International Conference on Practical Linguistics of Japanese（ICPLJ8），パネルセッション「コーパスと日本語教育研究」（国立国語研究所）［招待講演］2014.3.23.

【研究調査】

以下，10 か国で日本語学習者の発話データ収集調査を実施した。

・2013.5.20-25　モスクワ（ロシア）モスクワ市教育大学
・2013.5.28-6.2　ウィーン（オーストリア）ウィーン大学
・2013.6.10-14　イスタンブール（トルコ）ボアジチ大学
・2013.7.8-12　バンコク（タイ）タマサート大学
・2013.8.26-30　シドニー（オーストラリア）ニューサウスウェールズ大学
・2013.9.4-10　オークランド（ニュージーランド）オークランド大学
・2013.12.19-23　台北（台湾）東呉大学
・2013.12.23-26　バンドン（インドネシア）インドネシア教育大学
・2014.2.17-21　フェニックス（アメリカ）アリゾナ州立大学
・2014.3.17-24　オックスフォード（イギリス）オックスフォードブルックス大学

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・合同研究プロジェクト公開研究発表会（国立国語研究所）（企画・運営）2013.11.
・NINJAL 国際シンポジウム「第 8 回日本語実用言語学国際会議 The Eighth International Conference on Practical Linguistics of Japanese（ICPLJ8）」（国立国語研究所）（企画・運営）2014.3.22-23.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師
　北京日本学研究センター春学期　2013.4.1-30
　東北大学大学院文学研究科　2013.6.25-28
　東京外国語大学大学院　2014.1.6-9
・外来研究員の受入・指導
　博報財団国際日本研究フェローシップ

野田　尚史（のだ ひさし）日本語教育研究・情報センター 教授

1956 生

【学位】博士（言語学）（筑波大学，1999）

【学歴】大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業（1979），大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了（1981），大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退（1981）

【職歴】大阪外国語大学国語学部 助手（1981），筑波大学文芸・言語学系 講師（1985），大阪府立大学総合科学部 講師（1991），同 助教授（1993），同 教授（1999），大阪府立大学人間社会学部 教授（2005），大学共同利用機関法人人間文化研究機構日本語教育研究・情報センター 教授（2012）

【専門領域】日本語学，日本語教育学

【所属学会】日本語学会，日本語教育学会，日本言語学会，日本語文法学会，社会言語科学会，言語処理学会，計量国語学会，日本語用論学会，関西言語学会，ヨーロッパ日本語教師会，American Association of Teachers of Japanese

【学会等の役員・委員】日本語学会 理事・評議員，日本語教育学会 学会連携委員長，日本言語学会 評議員，日本語文法学会 評議員，日本語用論学会 外部査読委員，言語系学会連合 運営委員長

【受賞歴】

2006　第 4 回日本語教育学会奨励賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」：リーダー

研究目的：

研究の目的は，次の 3 つであった。

(1) コミュニケーションを重視した日本語教育を行うために必要なことを明らかにする。

(2) 日本語教育研究の中でも特に研究が不足している日本語学習者の読解過程を明らかにする。

(3) 世界の言語研究に貢献できる日本語研究を行う。

研究成果：

(1) コミュニケーションを重視した日本語教育を行うために必要な研究の成果としては，第 5 回スペイン日本語教師会総会・研修会で「コミュニケーションのための日本語教育」という講演を行い，平成 25 年度創価大学日本語日本文学会秋季大会で「日本語教育における文法の役割」という講演を行った。また，関西言語学会第 38 回大会のシンポジウムで「日本語教育における文法のあるべき姿」という発表を行った。

(2) 日本語学習者の読解過程についての研究の成果としては，ヨーロッパ日本語教育シンポジウムで AJE フォーラムを行い，それを「日本語学習者の読解過程 ―教師が考えているのとは違う学習者の実態―」（『ヨーロッパ日本語教育』18）にまとめた。また，第 8 回日本語実用言語学国際会議のパネルセッションで「読んで理解する過程の解明―読解コーパスの開発―」という発表を行い，第 4 回アジア太平洋研究スペインフォーラムで「上級日本語学習者と日本のレストランのウェブサイト」という発表を行った。

(3) 世界の言語研究に貢献できる日本語研究の成果としては，『世界に向けた日本語研究』（開拓社）という共著書を出版した。また，日本言語学会第 147 回大会のシンポジウムで「世界の言語研究に貢献できる日本語文法研究とその可能性」という発表を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

遠藤喜雄（編），小川芳樹，岸本秀樹，高野祐二，野田尚史，西山國雄，仁田義雄，前田雅子，益岡隆志，森山卓郎，山木戸浩子（著）

『世界に向けた日本語研究』，開拓社，2013.11.

《論文・ブックチャプター》

野田尚史，桑原陽子，フォード丹羽順子，藤原未雪

「日本語学習者の読解過程 ―教師が考えているのとは違う学習者の実態―」，『ヨーロッパ日本語教育』18，pp.37-38. ヨーロッパ日本語教師会，2014.3.

《その他の出版物・記事》

野田尚史

「2012 年日本語教育国際研究大会（ICJLE2012）報告　基調シンポジウム　講評」，『日本語教育』154 号，pp.19-20. 日本語教育学会，2013.4.

【講演・口頭発表】

野田尚史

「読んで理解する過程の解明 ―読解コーパスの開発―」，パネルセッション「コーパスと日本語教育研究」，第 8 回日本語実用言語学国際会議（国立国語研究所）［招待講演］2014.3.

野田尚史

「コミュニケーションのための日本語教育」，第 5 回スペイン日本語教師会総会・研修会（国際交流基金マドリード日本文化センター）［招待講演］2014.3.

Minoru Shiraishi, Hisashi Noda and Yoko Kuwabara

“Estudiantes de japonés de nivel avanzado y webs sobre restaurantes de Japón”，4.º FORO ESPAÑOL DE INVESTIGACIÓN EN ASIA-PACÍFICO (Universidad de Granada) 2014.3.

野田尚史

「日本語とスペイン語のとりたて表現」，『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 11 回研究会（東京外国語大学）［招待講演］2013.12.

野田尚史

「動詞基本形研究から総合的な有標・無標研究への期待」，シンポジウム「動詞基本形を考える」，日本語文法学会 第 14 回大会（早稲田大学）［招待講演］2013.11.

野田尚史

「世界の言語研究に貢献できる日本語文法研究とその可能性 ―「する」言語と「なる」言語，高コンテクスト言語と低コンテクスト言語の再検討を中心に―」，シンポジウム「日本語研究とその可能性 ―音韻・レキシコン / 語彙・文法を中心に―」，日本言語学会第 147 回大会（神戸市外国語大学）［招待講演］2013.11.

野田尚史

「日本語教育における文法の役割」，平成 25 年度創価大学日本語日本文学会秋季大会（創価大学）［招待講演］2013.11.

野田尚史

「日本語教育における文法のあるべき姿」，シンポジウム「外国語教育における文法のあるべき姿」，関西言語学会第 38 回大会（同志社大学）［招待講演］2013.6.

【研究調査】

日本学術振興会の専門研究員として次の地域の言語学・言語教育学分野に関する学術研究動向を調査。

・2013.9　スペイン

・2014.3　アメリカ合衆国

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第 17 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（マドリード・コンプルテンセ大学），AJE フォーラム「日本語学習者の読解過程 ―教師が考えているのとは違う学習者の実態―」（企画・運営）2013.9.

【その他の学術的・社会的活動】

野田尚史

「コミュニケーションのための日本語教育文法」，第 20 回ヤマガタヤポニカ日本語教師研修講座（山形市男女共同参画センター）［招待講演］2014.3.

野田尚史

「著者との対話：『日本語教育のためのコミュニケーション研究』」，第 23 回アクラス研修（アクラス日本語教育研究所）［招待講演］2013.10.

野田尚史

「コミュニケーションのために文法を見直そう」, 日本語ボランティア･ブラッシュアップ講座（横浜市国際交流協会なか国際交流ラウンジ）［招待講演］2013.9.

野田尚史

「ことばのパズル」（ことばのミニ講義），ニホンゴ探検 2013（国立国語研究所）2013.7.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

東京大学大学院人文社会系研究科

大阪府立大学人間社会学研究科

宇佐美　洋（うさみ よう）日本語教育研究・情報センター 准教授

【学位】博士（日本語学・日本語教育学）（名古屋外国語大学，2012）

【学歴】東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（1997）

【職歴】新潟大学留学生センター 講師（1997），国立国語研究所日本語教育センター第三研究室 研究員（1999），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同 主任研究員（2004），同 日本語教育基盤研究センター評価基準グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 日本語教育研究・情報センター准教授（2010）

【専門領域】評価論，言語能力論，日本語教育

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，待遇コミュニケーション学会，PAC 分析学会

【学会等の役員・委員】日本語教育学会 評議員，同 学会誌委員，同 調査研究推進委員，同 国際連携委員，社会言語科学会発表賞 選考委員，特定非営利活動法人日本語検定委員会 審議委員

【受賞歴】

2011　日本語教育学会第 9 回日本語教育学会奨励賞

2011　日本語教育学会第 6 回日本語教育学会林大記念論文賞

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員（「社会における相互行動としての「評価」研究」を担当）

本年度も，社会における相互行為の中で行われている評価の多様性を，量的・質的手法によって明らかにする試みとともに，評価における価値観の変容に関する調査，また自らの価値観の内省を促す研修（ワークショップ）手法の開発・実施・改良を行った。こうした新しい理念に基づく評価研究は所外研究者からの関心を広く集めるに到っており，2013 年 10 月には待遇コミュニケーション学会からの招聘により講演を行った。

2014 年 2 月には，シンポジウム「「評価」を持って街に出よう」を企画運営し，講演･ワークショップの他，所内外の共同研究者および若手研究者からの公募発表も含め，計 23 件のポスター発表を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

宇佐美洋

『「非母語話者の日本語」は，どのように評価されているか ―評価プロセスの多様性をとらえることの意義』，ココ出版，2014.2.

《論文・ブックチャプター》

宇佐美洋

「「やさしい日本語」を書く際の配慮・工夫の多様なあり方」，庵・イ・森 編『「やさしい日本語」は何を目指すか』，ココ出版，pp.219-236. 2013.10.

宇佐美洋

「自己と向き合うための評価研究：個人の能力を伸ばす教育から，コミュニティ全体のパフォーマンスを向上させる教育へ」，『接触場面における言語使用と言語態度 ―接触場面の言語管理研究』11，pp.87-98. 千葉大学大学院人文社会科学研究科，2014.2.

宇佐美洋

「自らの評価価値観を内省するための活動 ―評価の個別性を尊重するところから始まる新しい教育観―」,『ヨーロッパ日本語教育』18, pp.199-204. 2014.3.

【講演・口頭発表】

宇佐美洋

「理解・産出・場・評価 ―価値観交錯のダイナミズムを読み解く―」, 待遇コミュニケーション学会 2013 年秋季大会（早稲田大学）［招待講演］2013.10.

宇佐美洋

「「やさしく伝える」ための様々な工夫」, 一般社団法人アクラス日本語教育研究所 2 月研修（アクラス日本語教育研究所）［招待講演］2014.2.

宇佐美洋

「街なかで行われている「評価」をとらえる:ひととひとをつなぐために」, シンポジウム「「評価」を持って街に出よう」（政策研究大学院大学）2014.2.

【研究調査】

・横浜市中区, 鶴見区において, ボランティア日本語支援者に対するロールプレイ・インタビュー調査（対話相手に対する評価, 自己評価のあり方とその変容についての縦断調査）2013.10 ～ 2014.3.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・調査研究推進委員会日本語教育研究推進セミナー「競争的研究資金申請書の対策講座」, 公益社団法人日本語教育学会（関西外国語大学）（企画・運営）2013.10.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

東京大学大学院（客員准教授）

・論文指導

政策研究大学院大学 国際交流基金日本語国際センター 日本言語文化研究プログラム（副査）

野山　広（のやま ひろし）日本語教育研究・情報センター准教授

1961 生

【学位】修士（文学）（早稲田大学, 1988), 修士（日本語応用言語学）（モナシュ大学, 1995), 修士（教育学）（早稲田大学，1996）

【学歴】早稲田大学卒業（1985），早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了（1988），豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了（1995），早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了（1996），早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学（2001）

【職歴】文化庁文化部国語課専門職員（日本語教育調査官）（1997），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員（2004），同 領域長（2005），同 整備普及グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員（2009），同 准教授（2010）

【専門領域】応用言語学，日本語教育学，社会言語学，多文化・異文化間教育，言語政策・計画研究

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，異文化間教育学会，移民政策学会，ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】日本語教育学会 理事（大会委員会副委員長，学会連携副委員長），移民政策学会 理事（企画委員），異文化間教育学会常任 理事（研究委員会副委員長），日本語プロフィシェンシー研究会 副会長（地域の日本語教育研究担当），港区国際化推進プラン検討委員会 委員長

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員（2013 年 4 月～）

研究目的：

本プロジェクトでは，主として旧国語研の日本語教育基盤情報センターで実施した縦断調査（約 2 年半）及び独創・発展型共同研究プロジェクト「定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究（リーダー）」（約 3 年）で得られた（合計 5 年間の）日本語学習者会話データの分析や新たなデータの収集・整備，分析を言語習得研究や言語生活研究の観点・手法を用いて行いつつ，データベースを整備，蓄積している。そのことで，多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者の日本語習得，言語生活の実態をより的確に捉えることが主な目的である。また，日本語学習を必要とする定住者が抱えている諸課題にできるだけ応えようとするためには，どのようなアプローチをすればいいのか，その研究方法の基盤を築くことも目的の一つである。

研究成果：

(1) 日本語学習者会話データの分析やフォローアップインタビュー結果については，その成果の一部をヨーロッパ日本語教育シンポジウムのパネル発表，異文化間教育学会の口頭発表，OPI 国際シンポジウム（香港中文大学）口頭発表，「シンポジウム「評価」を持って街に出よう ―ひととひととをつなぐための評価研究―」ポスター発表, 第 8 回日本語実用言語学国際会議での口頭発表（共同）として発表した。

(2) その他，縦断調査の結果や，学習者の言語生活に関する調査からみえてきた成果については，「地域日本語教育とコーディネーターの重要性 ―共生社会の構築に向けて」という論文や，「地域に定住する外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的研究」というプロジェクトレビューという形で報告した。また, 一般社団法人アクラス日本語教育研究所 5 月研修での招待講演，第 24 回 CATJ 大会（米国 イースタンミシガン大学）での招待講演やパネル発表，そしてバイリン

ガル・イマージョン教育関係者への研修（米国 ポートランド州立大学）の中で発表した。

(3) 日本語学習者会話データの分析や新たなデータの収集･整備に関しては，5年間の縦断データ（文字化データ）の公開に向けて，データベースの整備と最終的なチェック等を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野山 広，川口義一，鎌田 修

「地域の日本語教室とコミュニティをどう繋ぐか ―対話とプロフィシェンシーという観点から―」，『ヨーロッパ日本語教育』18，pp.271-276. ヨーロッパ日本語教師会，2014.3.

《その他の出版物・記事》

野山 広

「地域日本語教育とコーディネーターの重要性 ―共生社会の構築に向けて」加賀美常美代 編著『多文化共生論 ―多様性理解のためのヒントとレッスン』，pp.124-148. 明石書店，2013.5.

野山 広

「地域に定住する外国人の日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的研究」，『国語研プロジェクトレビュー』4（2），pp.100-109. 国立国語研究所，2013.10.

野山 広

「国立国語研究所『分類語彙表』の紹介」，『国語教育』770，pp.74-75. 明治図書出版，2014.2.

【講演・口頭発表】

野山 広

「地域日本語教育の展開と複言語・複文化主義」，一般社団法人アクラス日本語教育研究所5月研修（アクラス日本語教育研究所）［招待講演］2013.5.

野山 広

「日系ブラジル人生徒の日本語習得と言語生活に関する縦断研究 ―集住地域Aにおける5年間の縦断調査の結果から―」，異文化間教育学会年次大会（日本大学）異文化間教育学会，2013.6.

野山 広，川口義一，鎌田 修

「地域の日本語教室とコミュニティをどう繋ぐか ―対話とプロフィシェンシーという観点から―」，第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（スペイン マドリード・コンプルテンセ大学）パネル発表の企画・発表，ヨーロッパ日本語教師会（AJE），2013.9.

野山 広

「日本におけるバイリンガル教育の現状と今後の展望」パネル発表（桶谷仁美，田中ゆき子，Ted Delphia），「アメリカにおける日英双方向イマージョンプログラム～理論，実践，そして，これから～」（米国 イースタンミシガン大学）2013.10.

野山 広

「日本の多言語・多文化化の現状と地域における日本語教育の展開 ―複言語・複文化主義的な学習支援の現場から見えてくること―」，第24回CATJ大会（米国 イースタンミシガン大学）［招待講演］2013.10.5.

野山 広

「日本語と英語等：バイリンガル教育の最新事情」，バイリンガル・イマージョン教育関係者研修（米国 ポートランド州立大学）［招待講演］2013.11.8.

野山 広

「定住外国人の日本語会話習得と言語生活に関する縦断研究 ―OPIの枠組みを活用した5年間の

縦断調査の結果から―」，OPI 国際シンポジウム（香港中文大学）香港中文大学・香港大学・日本語プロフィシェンシー研究会共催，2013.11.

野山 広

「地域に定住する外国人に対する形成的フィールドワークの課題と可能性 ―日本語会話能力と言語生活環境の実態に関する縦断的調査結果を踏まえて―」，「シンポジウム「評価」を持って街に出よう ―ひととひととをつなぐための評価研究―」，ポスター発表（政策研究大学院大学）2014.2.

野山 広，今村圭介

「日本語学習者のスピーチスタイルの形式的特徴 ―定住外国人に対する縦断調査と KY コーパスの OPI データを踏まえて―」，口頭発表（共同），第 8 回日本語実用言語学国際会議（国立国語研究所）2014.3.

【研究調査】

・2013.5　群馬県大泉町において，OPI（Oral Proficiency Interview）の枠組みを活用した，日本語学習者の会話力，言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査

・2013.9　秋田県能代市において，OPI（Oral Proficiency Interview）の枠組みを活用した，日本語学習者の会話力，言語生活等に関する縦断調査

・2014.3　秋田県能代市において，OPI（Oral Proficiency Interview）の枠組みを活用した，日本語学習者の会話力，言語生活等に関する縦断調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese（国立国語研究所）（企画・運営等）2014.3.

【その他の学術的・社会的活動】

・西東京市，浜松市，札幌市，北見市，町田市等の地域研修等で，研修担当講師（講演）を担当。

・「外国人児童生徒に対する日本語教育」，2013 年度東京都教育委員会夏季教員研修担当講師（東京都教職員研修センター立川分室）2013.8.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

政策研究大学院大学

・論文指導

放送大学大学院（客員教授）（主指導）

福永　由佳（ふくなが ゆか）日本語教育研究・情報センター 研究員

【学位】修士（日本語教育）（ウィスコンシン大学，1993）

【学歴】金沢女子大学文学部英米文学科卒業（1991），ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了（1993）

【職歴】国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員（2009）

【専門領域】日本語教育学，社会言語学，リテラシー，個人・社会の多言語性

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，移民政策学会，日本質的心理学会，日本言語政策学会

【2013 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員（2010 年 4 月～）

在日外国人を，日本語を含む複数の言語の使用者として再定義し，彼らの言語選択と社会文化的・心理的要因との関連を明らかにするために，社会言語学，第二言語習得，バイリンガリズムを中心とした関連する言語（教育）の先行研究を精査しデータベース作成を継続した。また，既存調査データの再分析を行い，在日外国人の言語使用の特徴について統計的な分析を継続した。

特に，多言語使用者として在日パキスタン人コミュニティに着目し，成人男性，成人女性，若年層といった年齢や社会的役割の異なる対象に対してインタビュー調査を実施し，さらに彼らを取り巻く社会文化的要因（パキスタン人移民に対する日本人の意識，エスニックビジネス，地域社会との関連等）について日本人住民を含めたインタビュー調査と言語景観調査を行い，多様な質的データの収集を行った。これらの成果は，「多言語使用者の言語観―なぜひとはことばを使い分けるのか―」（シンポジウム「評価」を持って街に出よう―ひととひととをつなぐための評価研究―」, 2014 年 2 月），「在日外国人の言語能力から見る日本の多言語状況」（第 8 回日本語実用言語学国際会議，2014 年 3 月）で発表した。調査地域への社会貢献として，富山県射水市の在日外国人住民および日本人住民と協働し，ワールドカフェ「射水でともに生きる－」（「移民コミュニティの言語生活研究会」第 4 回，2011 年 3 月）を開催した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「日本語学校」, 多言語現象研究会（編）『多言語社会日本 ―その現状と課題』, pp.273-275. 三元社, 2013.9.

福永由佳

「書評 角知行著『識字神話をよみとく』」,『社会言語学』 XⅢ，pp.211-219.「社会言語学」刊行会, 2013.11.

福永由佳

「ひと，ことばの多様化と共生の実現への挑戦 ―アメリカの移民言語教育政策から学ぶこと―」, 富谷玲子，彭 国躍，堤 正典（編）『グローバリズムに伴う社会変容と言語政策』，pp.193-223. ひつじ書房，2014.3.

《その他の出版物・記事》

福永由佳

「外国人との共生　考える ―小杉で言語生活研究会」，北日本新聞 19 面，2014.3.22.

【講演・口頭発表】

福永由佳

「言語資産としての外国人児童生徒」，2013 年度立川市夏季教員研修（国立国語研究所）2013.8.

福永由佳

「移民の親と子と社会を結ぶ識字プログラム ―National Center for Family Literacy の挑戦」，「パネルセッション：「家族支援」という視点からの初期日本語教育―ニューカマーがコミュニティの構成員として自立するために」，2013 年度日本語教育学会秋季大会（関西外国語大学）2013.10.

福永由佳

「多言語使用者の言語観 ―なぜひとはことばを使い分けるのか―」,「シンポジウム「評価」を持って街に出よう ―ひととひととをつなぐための評価研究―」（政策研究大学院大学）2014.2.

福永由佳

「在日外国人の言語能力から見る日本の多言語状況」，8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese（国立国語研究所）2014.3.

【研究調査】

・2013.3.15-3.17

富山県射水市内：在日パキスタン人男性の配偶者らによるイスラーム勉強会の観察および言語使用意識に関するインタビュー調査。

・2014.1.10-1.12

富山県射水市内：在日パキスタン人親子の言語使用・習得に関するインタビュー調査および言語景観調査。

・2013.11.29-12.2

射水市役所，射水警察署，射水市南太閤山コミュニティセンターほか：パキスタン人コミュニティと日本人住民との共生，行政の外国人住民対応等に関するインタビュー調査および資料収集。外国人を対象とした地域日本語教室の見学およびインタビュー調査。射水市内の言語景観調査。

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese（国立国語研究所）（企画・運営）2014.3.

【その他の学術的・社会的活動】

・第 4 回移民コミュニティの言語生活研究会（代表：福永由佳，トヤマ・ヤポニカとの共催）（アイザック小杉文化ホール ラポール）（企画・運営）2014.3.16.

V

資　料

V 資　料

1 運営会議

運営会議規程

・委員は 20 名以内，内過半数は所外の学識経験者。
・所内委員は，副所長，研究系長，センター長，その他所長の氏名する教授又は客員教授 若干名。
・会議は所長の求めに応じ，議長がこれを招集する。
・委員の過半数の出席がなければ議事を開き，議決することができない。
・会議の議事は出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは議長の決するところによる。
・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会，人事委員会，名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
・議長は，必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

2013 年度の開催状況

○第 1 回　2013 年 4 月 17 日（メール会議）

審議事項

1．前回議事概要（案）について
2．「大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所特任助教募集要項」（案）について
3．その他

○第 2 回　2013 年 7 月 5 日　13：30 ～ 15：20（八重洲富士屋ホテル）

審議事項

1．前回議事概要（案）について
2．人事関連事項について
　・研究教育職員の選考について
3．業務・組織の将来展開について

報告事項

1．平成 24 事業年度に係る業務の実績に関する報告書について
2．平成 24 年度業務の実績に係る外部評価報告書について
3．平成 26 年度概算要求（案）について
4．その他
　・国立国語研究所の活動状況について

○第 3 回　2013 年 9 月 24 日　13：30 ～ 14：50（八重洲富士屋ホテル）

審議事項

1．前回議事概要（案）について
2．人事関連事項について
　・特任助教の選考について
3．日本語教育研究・情報センターの組織に関する検討について

報告事項

1．その他

・研究教育職員人事について
・国立国語研究所の活動状況について
終了後，将来構想に関する懇談会を開催

○第 4 回　2013 年 10 月 16 日（メール会議）
審議事項
1．前回議事概要（案）について
2．議長の選出について
3．その他

○第 5 回　2014 年 2 月 10 日　10：30 ～ 13：00（八重洲富士屋ホテル）
審議事項
1．副議長の選出について
2．前回議事概要（案）について
3．人事関連事項について
・「大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所研究教育職員募集要項」（案）について
・人事委員会の設置について
・客員教員の選考について
・所長候補者選考の日程について
報告事項
1．日本語教育研究・情報センターの組織に関する検討について
2．大学共同利用機関の機能強化について
3．平成 25 事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について
4．平成 26 年度計画（案）について
5．平成 26 年度予算について
6．研究教育職員の割愛について
7．研究教育職員の研究休職について
8．その他
・国立国語研究所の活動状況について
終了後，将来構想に関する懇談会を開催

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会（2013 年度開催なし）
所長候補者選考委員会規程
・委員会の任務は，被推薦者名簿の作成，適任者名簿の作成，その他所長選考に必要な予備的事項に関することを行う。
・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。
・委員の任期は 1 年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。

・委員の過半数の出席がなければ議事を開き，議決することができない。
・委員会の議事は，出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは議長の決するところによる。
・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

(2) 人事委員会

人事委員会規程

・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する，研究所外の者若及び研究所内の者若干名で組織する。
・委員の任期は1年とし，再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
・委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは委員長の決するところによる。
・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

人事委員会審議状況

2013年2月22日（2012年度第5回：メール会議），2013年6月17日（第1回）
日本語教育研究・情報センター准教授として石黒圭氏を運営会議に推薦
（2013年7月5日開催の運営会議で採用決定）

2013年2月22日（2012年度第5回：メール会議），2013年9月12日（第2回）
研究資料情報センター 特任助教として石本祐一氏を運営会議に推薦
（2013年9月24日開催の運営会議で採用決定）

(3) 名誉教授候補者選考委員会（2013年度開催なし）

名誉教授称号授与規程

・研究所の教授として10年以上勤務し，学術研究上特に功績があった者。
・研究所の教授としての勤務年数が前号の規定に満たないが，学術研究上特に顕著な功績があった者。
・研究所の所長又は副所長として，研究所の運営に関し功績が特に顕著であった者。
・名誉教授の選考は，研究所の運営会議において行う。

2 評価体制

国立国語研究所では，効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し，その評価結果を適切に業務運営に反映させるため，自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため，外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では，2013年度の「研究系・センターの実績」，「組織・運営」，「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し，外部評価委員がその専門的立場から検証を行った。

自己点検・評価委員会

この委員会では，自己点検・評価の基本的な考え方の作成，自己点検・評価の実施，評価結果の公

表及び活用に関すること，外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2013 年度は 10 回開催した。

外部評価委員会

外部評価委員会規程

・委員会は，自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること，研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること，共同研究プロジェクト等の評価に関すること，その他評価に関することについて審議する。
・委員会は 10 名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
・委員の任期は 2 年とし，再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
・委員会は，委員の過半数が出席しなければ，議事を開き，議決をすることができない。委員会の議事は，出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。
・委員会は，必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。
・外部評価の実施は，研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は，評価の結果を所長に報告するものとする。

平成 25 年度業務の実績に関する評価の実施について

1．評価の実施の趣旨

年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成 25 年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価を行い，その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。

2．評価の実施方法

評価は書面審査で行う。研究所が作成した，平成 25 年度の計画及びその実施状況が記入された「25 年度業務の実績報告書」(「研究系・センターの実績」,「組織・運営」,「管理業務」) の内容を検証。

平成 25 年度業務の実績にかかる外部評価委員会開催状況

○平成 25 年度外部評価委員会（第 2 回）

2014 年 2 月 2 日　17：30 ～ 18：00（学術総合センター）

議事

1．前回議事概要（案）確認
2．平成 25 年度業務の実績に関する評価について
　・共同研究プロジェクト
　・研究系・センターの実績
3．その他（報告）

○平成 26 年度外部評価委員会（第 1 回）

2014 年 5 月 15 日　10：30 ～ 12：30（トラストシティカンファレンス・丸の内）

議事

1．前回議事概要（案）確認

２．平成 25 年度業務の実績に係る評価結果の確認について

報告

１．平成 26 年度計画について

共同研究プロジェクトの評価

・基幹型共同研究プロジェクト

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて，外部評価委員会委員による書面審査を行った。

・領域指定型，独創・発展型，萌芽・発掘型共同研究プロジェクト

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて所内評価委員による書面審査を行った。

・2013 年度終了プロジェクト（6 件）

「研究成果報告書」に沿って所内ヒアリング（2014 年 2 月 27 日開催）による評価を実施した。

3　広報

○国語研 Web サイト　http://www.ninjal.ac.jp/

各種催し物，データベース等，国語研の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで，幅広いコンテンツを紹介

○国立国語研究所要覧 2013/2014

国語研の特色や研究系・センターの活動，共同研究プロジェクト等の紹介冊子

○国立国語研究所リーフレット 2013/2014

○ NINJAL 英文リーフレット

○国語研からの御案内（メールマガジン）

シンポジウム，コロキウム等のイベント，データベース紹介，職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信している。月 2 回発行。

4　所長賞

功績顕著な職員に対し，所長からその功績をたたえ表彰を行い，研究所の活性化に資することを目的とするもので，学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし，原則として年 2 回行う。

○第 7 回所長賞：2013 年度前期（2013 年 4 月 1 日～ 2013 年 9 月 30 日）

・山崎 誠（言語資源研究系 准教授）

〈単著〉

A Frequency Dictionary of Japanese: Core Vocabulary for Learners を英国 Routledge 社より頻度辞書シリーズの 1 冊として刊行した（投野由紀夫，前川喜久雄と共著）。日本語書き言葉，話し言葉均衡コーパスを利用し，日本語教育者・学習者に利便性の高いものとなった。

・田中牧郎（言語資源研究系 准教授）

〈単著〉

『近代書き言葉はこうしてできた』を 2013 年 8 月に岩波書店より刊行。大正期までの総合雑誌『太陽』をデータベース化し，言葉の変化を数量的に明らかにした。

・保田 祥（コーパス開発センター プロジェクト PD フェロー）

〈学会発表賞受賞〉

社会言語科学会研究大会における優れた口頭発表，ポスター発表に対し授与される研究大会発表賞を，第 31 回大会（2013 年 3 月 統計数理研究所・国立国語研究所）において，「繰り返しにおける独話の変化」(田中弥生, 荒牧英治と共同発表)により受賞した。(研究大会発表賞第 9 回, 9 月)

・小西 光（コーパス開発センター プロジェクト非常勤研究員）

〈論文〉

言語処理学会誌『自然言語処理』に，論文「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報アノテーション」（小西光 筆頭著者，浅原正幸，前川喜久雄と共著）が掲載された。20（2）pp.201-222.

○第 8 回所長賞：2013 年度後期（2013 年 10 月 1 日～ 2014 年 3 月 31 日）

・木部暢子（時空間変異研究系長 教授）

〈単著〉

『じゃっで方言なおもしとか』を 2013 年 12 月に岩波書店より刊行。方言の，共通語にはない多様な論理の表現を紹介した。

・相澤正夫（時空間変異研究系 教授）

〈著書〉

著書（編書）『現代日本語の動態研究』を 2013 年 10 月におうふうより刊行。共同研究プロジェクトの成果物として,「現代日本語」の「動態」に関わる多彩な「研究」を論文集としてまとめた。

・三樹陽介（時空間変異研究系 プロジェクト非常勤研究員）

〈単著〉

『首都圏方言アクセントの基礎的研究』を 2014 年 2 月におうふうより刊行。東京周辺で話されていることばのアクセントの実態と動態を調査・分析し首都圏方言の特徴を明らかにした。

・儀利古幹雄（理論・構造研究系 プロジェクト PD フェロー）

〈論文〉

学術専門誌 *Journal of East Asian Linguistics* に, 論文 “On the positional asymmetry of consonant gemination in Japanese loanwords” (Haruo Kubozono, Hajime Takeyasu, Mikio Giriko) (Vol.22, Issue4, pp.339-371. 2013) が掲載された。

・竹村亜紀子（理論・構造研究系 元プロジェクト PD フェロー）

〈論文〉

学術専門誌 *Journal of East Asian Linguistics* に, 論文 “Geminate judgments of English-like words by Japanese native speakers：differences in the borrowed forms of “stuff”and “tough”” (Itsue Kawagoe, Akiko Takemura) (Vol.22, Issue4, pp.307-337. 2013) が掲載された。

5 研究教育職員の異動（2013 年度中の異動者）

2013.4.1	特任助教	籠宮隆之	採用	
2013.9.30	副所長	相澤正夫	任期満了	
2013.9.30	センター長	横山詔一	任期満了	（研究情報資料センター）
2013.10.1	副所長	前川喜久雄	兼任	
2013.10.1	センター長	ティモシー・バンス	兼任	（研究情報資料センター）
2013.10.1	特任助教	石本祐一	採用	
2014.3.31	研究系長	ジョン・ホイットマン	兼任解除	
2014.3.31	准教授	田中牧郎	辞職	

Ⅵ

外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 25 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

平成 26 年 6 月 20 日

はじめに

2009（平成 21）年 10 月 1 日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に加わった国立国語研究所は，日本語の特質の全貌を解明することによって人間文化に関する理解と洞察を深めるとともに，研究成果や関連する研究文献情報を広く社会に発信・提供することで研究者コミュニティおよび一般社会に多様な寄与をすることを使命としています。この目的を達成するため，創設（1948 年）以来の伝統的な研究手法と最新の言語学的観点とを融合させた大規模な理論的・実証的共同研究を国内外の大学・研究機関と展開し，出版物および各種の電子成果物を通して研究成果を世界に発信しています。

このたび 2013（平成 25）年度の研究所における活動全般について，外部評価委員会による評価を実施しました。８名の外部有識者・専門家で構成される外部評価委員会には，大規模な共同研究を行っている理論・構造研究系，時空間変異研究系，言語資源研究系，言語対照研究系，日本語教育研究・情報センター，コーパス開発センターの６つの研究組織における研究活動だけでなく，情報発信，社会貢献，組織運営，管理業務など諸活動全般についても，所内の自己点検・評価に基づいて外部評価をしていただくよう依頼しました。その結果が本報告書にまとめられました。いずれの項目も，高い評価をいただいた部分と，改善を要すると指摘された部分があります。国語研の教職員は，この報告書で示された評価結果を真摯に受け止め，新年度以降の運営に活かすことによって研究活動のより一層の充実を図っていく所存です。外部評価委員の皆様の多大な御尽力に対して，心から御礼を申し上げます。

平成 25 年 6 月
国立国語研究所長
影山　太郎

目　　次

１．評価結果報告書 ……1
　１．平成 25 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果……2
　２．平成 25 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果 ……29

２．資料 ……40
　１．国立国語研究所外部評価委員名簿 ……41
　２．国立国語研究所平成 25 年度業務の実績に関する評価の実施について ……42
　３．基幹型共同研究プロジェクト一覧 ……43
　４．国立国語研究所外部評価委員会規程 ……44
　５．国立国語研究所平成 25 年度外部評価委員会（第 2 回） ……45
　　国立国語研究所平成 26 年度外部評価委員会（第 1 回） ……46

１．評価結果報告書

平成 25 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

平成 26 年 2 月 2 日　　国立国語研究所平成 25 年度外部評価委員会（第 2 回）
平成 26 年 5 月 15 日　　国立国語研究所平成 26 年度外部評価委員会（第 1 回）

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長　樺山　紘一

平成 25 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果

国立国語研究所（以下「国語研」という）の研究組織は４つの研究系と２つのセンター，すなわち「理論・構造研究系」,「時空間変異研究系」,「言語資源研究系」,「言語対照研究系」および「日本語教育研究・情報センター」,「コーパス開発センター」から構成されている。第２期中期目標・中期計画では,「４研究系において「日本語レキシコンの総合的研究」,「消滅危機方言の調査・保存・分析」,「現代語および歴史コーパスの構築と応用」,「日本語の言語類型論的特質の解明」などの基幹プロジェクトを全国的・国際的に展開し世界諸言語の中での日本語の特質を多角的に研究する」とある。平成 25 年度の外部評価においては，上述６つの研究組織で実施されている基幹型共同研究およびそれに準ずる超大規模コーパスの開発に対して，(1)共同研究の推進，(2)研究実施体制，(3)共同利用の推進，(4)国際化，(5)研究成果の発信と社会貢献，(6)若手研究者育成の６つの観点から評価を行った。

評価は６名の外部評価委員が担当し，次の結論を得た。まず，理論・構造研究系，時空間変異研究系，言語対照研究系，日本語教育研究・情報センターについては，自己点検評価のとおり「計画（目標）どおりに実施した」と評価した。次に，言語資源研究系，コーパス開発センターについては，自己点検評価の「計画(目標)どおり実施した」に対して,「計画（目標）を上回って実施した」と評価するのが妥当であると判断した。

ここでは，(1)から(6)までの項目評価に対する概要を述べ，個別の研究系とセンターに関する評価の詳細は「各研究系・センターの評価」に記載する。

(1)共同研究の推進については，４研究系，２センターのすべてが平成 25 年度の計画を十分達成していると評価する。

(2)研究実施体制についてはプロジェクトリーダーがリーダーシップを取り，共同研究員もその研究で必要とされる国内外の優秀な研究者を厳選し，シンポジウム，研究会の開催もそれぞれのプロジェクトで非常に活発に行っていることを高く評価する。またこれらの事業の遂行には多大な経費が必要であるが，競争的外部資金の利用，シンポジウムなどは他の組織との協賛などにより開催経費を捻出する運営の工夫がされている点を高く評価する。

(3)共同利用の推進についてはすでに種々のコーパスやデータベースの利用が普及しつつあるが，現在進行中のプロジェクトが完了し，コーパスやデータベースが一層充実した時点においては，さらに多くの研究者および一般市民にとって有益な情報として利用されることを期待している。

(4)国際化については，日本語研究のための多くの若手外国人研究者を受け入れて育成に貢献している一方，海外の第一線の言語学者，日本語教育研究者などと研究交流を行うことで，新しい研究の展開が芽生えていることが窺える。特に従来の「国語学・日本語学」という領域が外に開かれるためには，日本語を母語とする研究者とそうでない研究者との研究交流の場が重要であるが，本研究所はその役割を果たしている。

(5)研究成果の発信と社会貢献については，本研究所が現代および過去の日本語に関する学術資料・情報を国内外の研究者に提供し，共同利用を可能にしていることが認められた。海外の著名な出版社から研究所教員による多数の著書が英語によって刊行され，また今後も刊行されていく予定であることは

特記すべきことである。

(6)若手研究者育成については，PD フェロー等のさまざまな取り組みによってその任は十分果たしていると認められた。

以上の評価を踏まえて，次のように総括する。

国語研の各研究系・センターは，日本語および日本語教育に関連する国内外他機関の優秀な研究者との連携を密にして，研究会，シンポジウムを活発に行った。特に日本語および他の諸言語を類型論の視点によって観察し，日本語の本質を理論的に極めるという基幹研究，実証的方法として学際的な分野の研究者の知識を集結した大規模コーパス収集，共同利用にも資するためのアノテーションに関する研究と分析，種々のコーパスの公開，危機方言に関する調査分析，データの保存，また全世界の学習者を対象とした日本語教育推進のための言語習得研究およびコーパス構築など，国語研にしてはじめて可能な国家的事業を推進していることは高く評価される。また，活発に開催された研究会やシンポジウムを通して，所員および共同研究員が互いに刺激を与えあう中で研究方法の新展開を見出しているケースもあり，今後，研究の成果が日本語教育・国語教育などを含め一般社会へ一層還元されることが期待される。

さらに加えれば，今後若手研究者受け入れが徐々に増加することを予想すると，メンター制度確立を模索すること，若手育成のためのロールモデルを検討することで，将来を担う研究者を輩出することも国語研に課せられる課題と思われる。

担当：仁科 喜久子

各研究系・センターの評価

理論・構造研究系

研究系長：窪薗 晴夫
テーマ：日本語レキシコンの総合的研究

平成 25 年度の計画（目標）
「日本語レキシコンの総合的研究」を総合研究テーマとして，世界的に見て日本語に特徴的と思われる音声・音韻現象並びに語彙の形態的・意味的・文法的特性の整理・分析を行い，現代日本語のレキシコン（語彙）の諸相について理論・実証の両面から共同研究を推進する。また，プロジェクト間の連携を図るため，研究系合同の研究発表会を開催するとともに，複数のプロジェクトが連携して国際シンポジウムを実施する。
平成 25 年度研究活動の実施状況
（1）共同研究の推進 ①研究成果発表会の開催：プロジェクトごとに2～5回の研究成果発表会を開催し，あわせて若手研究者に研究発表の場と発表旅費を提供した。②理論・構造研究系合同発表会：前年度に引き続き公開の研究成果合同発表会を開催した（2014.2.1. 国語研）。今年度は「レキシコン・フェスタ」と題して開催し，Mark Aronoff氏による基調講演および6件の口頭発表，17件のポスター発表により，今年度の研究系の研究成果を研究者コミュニティに向けて発信した。また同時にプロジェクト間の連携を図った。③研究成果の取りまとめ：共同研究の成果としてプロジェクトごとに英文刊行物の編集作業を進めた。*The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*（Mouton社），*Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*（Mouton社）（以上，基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」，略称「日本語レキシコン」）。*The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*（Mouton社），*Tonal Change and Neutralization*（Mouton社，審査待ち）（以上，基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」，略称「語彙の音韻特性」）。*A Rendaku Encyclopedia*（Mouton社）（基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコン―連濁事典の編纂」，略称：「連濁事典」）。④国際シンポジウムの開催：「日本語レキシコン」と言語対照研究系の共催によりNINJAL国際シンポジウム（Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages, 2013.12.14-15, 国語研）を開催し，2日間で延べ232名の参加者を得た。「語彙の音韻特性」と「連濁事典」の2プロジェクト合同で国際シンポジウム(The 3rd International Conference on Phonetics and Phonology, 2013.12.20-22. 国語研)を開催し，3日間で延べ304名の参加者を得た。 **（2）研究実施体制** 研究成果発表会やデータベース作成を国内学会（日本言語学会，日本音声学会）や国内外の研究機関（Max Planck 進化人類学研究所，統計数理研究所・調査科学センター等）と合同して行い，研究所外の研究組織・学会とのさらなる連携を図った。また，プロジェクトごとに科研費や人間文化研究機

構連携研究の予算と組み合わせて事業を実施し，経費の有効利用を図った。

（３）共同利用の推進

①研究成果発表会および出版物の公開：研究成果発表会を公開し，プロジェクトメンバー（共同研究員）以外の研究者にも参加および発表の機会を提供した。また刊行物（後述）において若手発表者に執筆の機会を提供した。②研究文献リストの更新：プロジェクトごとに作成・公開している研究文献リスト（複合動詞，アクセント，促音他）を更新した。③米国議会図書館アジア部との連携：米国議会図書館アジア部との連携により「米国議会図書館『源氏物語』画像（桐壺・須磨・柏木)」を一般公開する（須磨・柏木を追加公開，2014.3）ために，原本画像と翻字本文を対照表示させるビュアーの拡張開発を行った(基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」(略称「文字と社会言語学」))。④日本語史研究資料の公開：研究情報資料センターとの連携により，研究図書室所蔵の日本語史研究資料（文字資料）のうち『明六雑誌』,『古今文字讃』,『聖遊郭（雪月花)』,『傾城買二筋道』,『河東方言箱枕』,『潮来婦誌』などの公開を行った（「文字と社会言語学」)。

（４）国際化

①国際シンポジウムの開催：大規模な国際シンポジウムとして，NINJAL国際シンポジウム（Mysteries of verb-verb complexes in Asian Languages，2013.12.14-15. 国語研，参加者延べ232名）(「日本語レキシコン」と言語対照研究系の共催)，と国際シンポジウム(The 3rd International Conference on Phonetics and Phonology，2013.12.20-22. 国語研，参加者延べ304名）(「語彙の音韻特性」と「連濁事典」合同)（いずれも英語使用）を開催し，アジア，アメリカ，ヨーロッパ等から多様な参加者を得た。②研究成果の国際発信：Oxford University Pressからの委嘱により，日本語に関する国内外の重要な研究を世界に紹介する論文2篇（「日本語レキシコン」プロジェクトリーダーによる“Word Formation in Japanese”及び「語彙の音韻特性」プロジェクトリーダーによる“Japanese Accent”）をオンライン誌*Oxford Bibliographies Online*(OBO)に掲載した。また，「語彙の音韻特性」の研究成果の一部を国際的ジャーナル*Journal of East Asian Linguistics* 第22巻4号特集号(Special Issue on Japanese Geminate Obstruents)として刊行した。③マックスプランク進化人類学研究所との研究協力により，*Valency Patterns Leipzig (ValPal) Online Database* を試験公開した（「日本語レキシコン」，2013.11)。④英語による論文集の編集作業（後述(5)）⑤海外学会・研究機関等における講演等：台湾東呉大学，台湾国立精華大学，韓国ソウル大学（窪薗)，ベトナム・ハノイ大学（横山)，国立台湾大学（横山，高田)，国際文字コード標準化活動に関する国際会議ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG（「文字と社会言語学」)。

（５）研究成果の発信と社会貢献

①研究成果合同発表会：前年度に引き続き公開の研究成果合同発表会を開催した（2014.2.1. 国語研)。今年度は国際化の一環として，レキシコン研究の第一人者であるMark Aronoff教授を基調講演者として迎え，「レキシコン・フェスタ」と題して開催した。この基調講演に加え，合計6件の口頭発表と17件のポスター発表により，今年度の研究系の研究成果を研究者コミュニティに向けて発信した。また同時にプロジェクト間の連携を図った。②研究会・シンポジウム等の発信：発表会・シンポジウム開催に際しては，研究所ホームページやメールマガジンでの広報に加え，開催通知ポスターを諸学会・研究会のメーリングリストに流して，開催情報を広く研究者コミュニティに伝えた。③2012年度に試験公開したオンラインデータベース「複合動詞レキシコン」に英語，中国語（繁体字，簡体字)，

韓国語の対訳を付けるとともに英語版のトップページを作り，国際的発信力と外国人学習者の利便性を強化した。④*Oxford Bibliographies Online*：これまで海外に知られていなかった基本文献を含め，日本語研究に関する江戸時代から現代までの国内外の重要文献を海外の研究者コミュニティに向けて紹介するために，Oxford University Pressのオンライン誌*Oxford Bibliographies Online*（OBO)に次の英文論文を執筆した。Word Formation in Japanese（「日本語レキシコン」），Japanese Accent（「語彙の音韻特性」)。⑤論文集の刊行：次の成果物を刊行した。 影山太郎（編)『複合動詞研究の最先端 ―謎の解明に向けて―』ひつじ書房（「日本語レキシコン」)，Haruo Kubozono（ed.）*Journal of East Asian Linguistics* 第22巻4号 Special issue on Japanese Geminate Obstruents（「語彙の音韻特性」)。⑥論文集の編集：プロジェクトごとに次の刊行物（論文集）について編集作業を進めた。*The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*（Mouton社，「日本語レキシコン」），*Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond*（Mouton社，「日本語レキシコン」），*The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*（Mouton社，「語彙の音韻特性」），*Tonal Change and Neutralization*（Mouton社，「語彙の音韻特性」），*A Rendaku Encyclopedia*（Mouton社，「連濁事典」)。
⑦Proceedings of the 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference：バンス教授を中心に，前年度に研究系が支援・開催した第22回Japanese Korean Linguistics Conference（JK22，2012.10.12-14. 国語研）のプロシーディングズ編集を行った。2013年12月に編集作業を終え，2014年度中に海外の出版社（CSLI）から刊行予定。⑧地域社会への貢献：立川市歴史民俗資料館＆国立国語研究所共同企画講演「立川の板碑 文字に込められた想い」（於立川市歴史民俗資料館，「文字と社会言語学」)，立川市市民交流大学講座講演「変化する漢字文化」（「文字と社会言語学」)。

（6）若手研究者育成

PD フェロー2 名を新規雇用し，研究費の援助やセミナーでの発表指導を通じてその育成に努めた。各プロジェクトが主催した研究発表会と国際シンポジウムにおいて，多数の若手研究者（大学院生および非常勤）に発表の機会を提供し，また旅費の支援を行った。若手研究者に刊行物（上記(5)）への執筆の機会を提供した。アクセント・促音の研究を行っている若手研究者に対して旅費（調査旅費・成果発表旅費）の支援を行った。国際シンポジウムにおいて日本全国の大学院生にアルバイト募集の呼びかけを行い，多数の大学院生に参加旅費の支援を行った。影山太郎（編)『レキシコンフォーラム No.6』（ひつじ書房，2013.6）に，若手研究者のための特集「日本語レキシコン入門」(8 篇)を寄稿した（「日本語レキシコン」)。

自己点検評価	計画（目標）どおりに実施した。

平成 25 年度の評価

《評価結果》

年度計画（目標）どおりに実施した。

「世界的に見て日本語に特徴的な現象」に着目することは，日本語を地域的，類型的に相対化する意味で，いわば単独の言語を視野に置く「国語学」から脱皮して，一般言語学的視野の高みを目指すことである。これは単に特定理論に基づく研究を深める以上に，長期的には日本の国語学研究者の意識を変革するための重要な貢献となり得る難事業であり，それだけに一朝一夕にできることではない。また日本語のみならず，日本周辺の諸言語の研究も活気づけるという意義もあり，共同研究の国際化

の点でも，その高い「志」を評価したい。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

共同研究の推進として，①研究成果発表会の開催，②研究成果合同発表会，③研究成果の取りまとめ，④国際シンポジウムの開催を行っている。成果取りまとめとしてのドイツ・Mouton 社による複数の出版物は広く世界的に流布するものであり，複数の国際シンポジウムとともに国際化に貢献している。これらの国際シンポジウムは多数の参加者があり，例年の定着した魅力ある会議となっていることが推察できる。

世界的に見て日本語に特徴的と思われる音声・音韻現象並びに語彙の形態的・意味的・文法的特性の整理・分析を行うことが本研究系の目標である。音声・音韻現象には連濁，アクセント，促音の研究があり，語彙に関しては複合語，特に複合動詞の研究がある。どちらの分野においても，日本語単独についての研究としては，国内には長期にわたる膨大な研究の蓄積がある。その意味で，両分野の研究文献リストのデータベース化と公開は，共同研究の推進の基礎資料を整備する点で，地味ながら他の大学，研究機関あるいは個々の研究者ではできない共同研究拠点ならではの事業であり，高く評価する。

（２）研究実施体制

研究系全体では海外研究者を含む100名を超える有能な共同研究員を擁し，国内の言語学会，日本音声学会，海外の研究機関との合同研究会を行っている。データベースの構築を計画し，その遂行のためにプロジェクトが獲得した競争的外部資金も用いるなど運用を工夫している点が高く評価できる。研究系長は４グループの基幹研究のプロジェクトリーダーとして研究系全体の事業に関わる経費運用，人事における適切な措置をしている点が高く評価できる。

（３）共同利用の推進

米国議会図書館アジア部と連携して，「米国議会図書館『源氏物語』画像（桐壺・須磨・柏木)」を一般公開した（須磨・柏木を追加公開，2014.3)。これにともない，原本画像と翻字本文を対照表示させるビュアーの拡張開発を行った。また，研究情報資料センターとの連携により，研究図書室所蔵の日本語史研究資料（文字資料）のうち『明六雑誌』,『古今文字讃』,『聖遊郭（雪月花)』,『傾城買二筋道』,『河東方言箱枕』,『潮来婦誌』などの公開を行ったことは，一般の人々にも関心のある有意義な活動であり，研究の基礎となる資源の共有化として考えられる。『源氏物語』の画像，翻字対照表示，文字資料公開も同様に重要である。プロジェクトごとの研究文献リスト公開は共同利用の支援となっている。

（４）国際化

(1)で述べたように本研究系は海外との交流が盛んであり，国際シンポジウムの開催，英語による研究成果の刊行，海外研究教育機関での講演・講義が頻繁に行われていることは国際化推進の上で高く評価できる。総説で述べたように日本語を地域的，類型的に相対化する意味で，いわば単独の言語を視野に置く「国語学」から脱皮して，一般言語学的視野の高みを目指す重要なステップと言える。

（５）研究成果の発信と社会貢献

研究成果発表を公開形式で行い，レキシコン研究の第一人者の招待講演としたことで，多数の参加

者を得た。成果の発信にはメールマガジンでの宣伝をするなど広報活動にも工夫が見られる。刊行物としては影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端 ―謎の解明に向けて―』（ひつじ書房）をはじめ国内外向けの著書が多数あり，各プロジェクトの成果をまとめた論文集が国内外向けに複数編纂されたこと，更には昨年度公開したオンライン辞書「複合動詞レキシコン」に英語，中国語，韓国語対訳を付け外国人学習者の利便性を高めたことも評価できる。また，立川市における歴史民俗資料館との共同企画展示，市民講座での講義など地域社会への貢献も国語研としての重要な役割を果たしたものと評価する。

（６）若手研究者育成

PDフェロー，若手非常勤職員，大学院生などに国際会議や研究発表会で発表，研究誌執筆の機会を与えるという教育的な支援のみならず，旅費などの経済的支援も行っている点が評価できる。

時空間変異研究系

研究系長：木部 暢子

テーマ：日本語の地理的・社会的変異及び歴史的変化

平成 25 年度の計画（目標）
「日本語の地理的・社会的変異及び歴史的変化」を総合研究テーマとして，消滅危機方言の調査，方言分布の解明のための全国調査，現代日本語の動態に関する研究，海外における日本語変種に関する研究，大規模経年調査データの分析，日本語の歴史的変化に関する研究を実施する。また，プロジェクト間の連携を図るため，合同研究会を開催する。
平成 25 年度研究活動の実施状況
（1）共同研究の推進 ①実施プロジェクトは次の通りである。(1) 基幹型共同研究プロジェクト:「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」(略称「危機方言」),「方言の形成過程解明のための全国方言調査」(略称「全国分布」),「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」(略称「現代日本語の動態研究」),「日本語変種とクレオールの形成過程」(略称「海外の日本語変種」，2013 年 9 月終了),「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」(略称「大規模経年調査」),「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」(略称「日本語疑問文」) (2) 独創・発展型共同研究プロジェクト:「日本語文法の歴史的研究」(略称「文法史」)。②今年度の特徴：2012 年度の外部評価委員の指摘を受けて，「文字と社会言語学」（代表者：横山）と「大規模経年調査」（代表者：井上史雄）の関係を整理し，2013 年 10 月から経年調査に関する研究を「大規模経年調査」（井上史雄代表）に一本化した。日本語の歴史的変化に関するプロジェクト「日本語疑問文」（代表者：金水）をスタートさせた。③言語調査の実施：沖縄県久米島合同調査（「危機方言」），全国 500 地点の方言分布調査（「全国分布」），外来語定着度に関する全国調査（「現代日本語の動態研究」）等の調査を実施した。④報告書の刊行：『八丈方言調査報告書』（「危機方言」），『現代日本語の動態研究』おうふう（「現代日本語の動態研究」），*The Japanese Language in Palau*（「海外の日本語変種」），『岡崎敬語調査資料集 1～3』（「大規模経年調査」）等の報告書を刊行した。⑤海外での発表：台湾師範大学文学院（「全国分布」），インドネシア・ジャカルタ大学，スペイン・バルセロナ大学，中国・広州外語外貿大学，中国・アモイ大学，ベトナム・ハノイ国家大学，韓国・新羅大学，スリランカ・コロンボ，インド・ニューデリー等（以上「大規模経年調査」）で研究成果を発表した。⑥歴史的変化に関する研究の新設：歴史的変化に関するプロジェクト「日本語疑問文」（金水敏代表）を新設した。⑦LVC2014「日本語調査をデザインする」の開催：研究系の合同研究発表会，JLVC2014「日本語調査をデザインする」を 2014 年 3 月 21 日に開催した（招待講演：東京外国語大学中山俊秀氏），ポスター発表 8 件（若手研究者公募），ワークショップ提言者 5 名)。 **（2）研究実施体制** ①共同研究員の増員：プロジェクトの再編成に伴い，「大規模経年調査」では大幅増員，「危機方言」では 10 名の増員，「現代日本語の動態研究」では 5 名の増員を行った。②研究経費の有効活用：研究経費を徐々に調査から調査データの整理・分析・成果公表へ移行させている（(3)参照)。

（３）共同利用の推進

①各種調査研究データの整理・蓄積・公開：主なものに，八丈調査（2013年）の査報告書の刊行・ホームページでの公開（2013.10），琉球方言音声の公開へ向けての整備（4月公開予定），『日本言語地図』の原資料のデータベースの整備（以上「危機方言」），全国400地点の調査データのデータベース化，言語地図項目書誌データベースのウェブでの公開（以上「全国分布」），「ＳＰ盤貴重音源資料」の文字化資料公開の準備，世論調査型の全国調査の各種データの整備と公開の準備（以上「現代日本語の動態研究」），『岡崎敬語調査資料集1～3』の刊行（2013.11，2014.1），山形県鶴岡市における共通語化調査のデータベースの一部の出版（統計数理研究所と共同）（以上「大規模経年調査」）がある。②研究会等の開催：各プロジェクトとも，年に2～5回の公開研究会発表会を開催している。主なものをあげる。本土方言・琉球方言に共通する方言の記述の枠組みの確立のための公開研究発表会3回，本土向けの公開シンポジウム「危機方言を記述する ―記述の枠組みとグロス付け（本土方言向け）―」，国語研の所蔵する方言資料を一般公開するための日本言語地図DBに関する研究会（以上「危機方言」），全国500地点の調査データの活用のための研究発表会，公開シンポジウム「東北方言の特徴と形成」（コラッセ福島）（以上「全国分布」）等。

（４）国際化

①海外の研究者との連携：フランス，ニュージーランド各１名（「危機方言」），アメリカ１名（「現代日本語の動態研究」）が共同研究員として参加。台湾の研究者との共同研究（台湾東部宜蘭県のクレオール語の解明，「海外の日本語変種」）。外国人研究者４名が沖縄県久米島の調査に参加（「危機方言」）。プロジェクトリーダーがOxford大学を訪問し，VSARPGプロジェクトの上代日本語コーパスの利用についての打ち合わせ（「日本語疑問文」）。②海外への研究成果の発信：台日言語地理学学術交流ワークショップ（台北）で研究成果を発表（「全国分布」）。スペイン（マドリード，ビルバオ），インド，スリランカ，シンガポール，中国（広州），韓国（釜山）などで海外の研究者向けの講演と特別授業を実施（「大規模経年調査」）。『喜界島方言調査報告書』の英訳の作成（「危機方言」）。

（５）研究成果の発信と社会貢献

①ホームページでの情報発信：『喜界島方言調査報告書』，『南琉球宮古方言調査報告書』，『八丈方言調査報告書』を公開（「危機方言」）。『日本言語地図』の原資料のデータベースの整備・公開。言語地図項目書誌情報を http://fpjd.net/ で公開。プロジェクトの内容を発信するブログを開設（以上「全国分布」）等。②学術雑誌，学界等での公開：主なものに，著書：木部暢子『そうだったんだ日本語 じゃっで方言なおもしとか』岩波書店。田窪行則編『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』くろしお出版。沢木幹栄，中島由美，福嶋秩子，岡村隆博『徳之島方言辞典作成の試み』徳之島方言の会。相澤正夫編『現代日本語の動態研究』おうふう。論文：上野善道「与論島方言のアクセント資料」『南島文化』36。金田章宏「危機言語としての八丈方言」『日本語学』32(10)，pp.48-60。Shigehisa Karimata “The Representative, Negative, Past, Continuative Forms of Miyako Verbs”，琉球大学国際沖縄研究所『国際沖縄研究』7. 青木博史「文法史」木田章義編『国語史を学ぶ人のために』世界思想社 等がある。③一般社会向けシンポジウム，セミナー等の開催：第7回八丈方言講座・NINJALセミナー「八丈方言の昔と今 ―全国危機方言サミット(仮称)に向けて―」（2013.11.9. 八丈町，八丈町教育委員会と共催）。NINJALセミナー「久米島・島ことば調査のつどい」（2013.12.4. 久米島町，久米島町教育委員会と共催）（以上「危機方言」）。公開シンポジウム「東北方言の特徴と

形成」（2013.12.21. コラッセ福島）（「全国分布」）。「「外来語」と「病院の言葉」を分かりやすくする提案」（トークイベント「日本語を衆議する／日本語で衆議する」2013.7.22. 大阪大学）（「日本語の動態研究」）。「台湾に生まれた日本語系クレオール語」（人間文化機構第21回公開講演会・シンポジウム，2013.9.1. 一橋講堂）（「海外の日本語変種」）。 **（6）若手研究者育成** ①若手研究者のプロジェクトへの参加：11名の大学院生・PDが沖縄県久米島の合同調査に参加，25年度春季日本語学会のワークショップ「テキストを使った方言研究から見えてくること ―危機方言の調査と記述―」（2013.6.1. 大阪大学）に大学院生1名がパネリストとして発表（以上「危機方言」）。②チュートリアル教育：3月に大阪で，チュートリアル「方言の注釈と表記」を開催した。③プロジェクト研究員の採用：PD1名（「危機方言」），非常勤研究員4名（「危機方言」，「大規模経年調査」）を新規採用。④学振PDの受入：「危機方言」では，学振PD2名を受け入れた。	
自己点検評価	計画（目標）どおりに実施した。

平成25年度の評価

《評価結果》

年度計画（目標）どおりに実施した。

それぞれのプロジェクトによって，報告書の刊行，海外での発表，研究会の開催，ホームページでの情報発信などの取り組みに若干の偏りがあるものの，研究系全体としてはバランスよく行われている。

研究系全体として，研究経費を，調査から調査データの整理・分析・成果公表へと移行させている点も，年次計画にそった妥当な措置である。今後の活動においては，各プロジェクトリーダーの，なお一層のリーダーシップが期待されるとともに，より効果的な公表のあり方を検討されることが望まれる。

すでに，研究系全体として有機的に連携することが模索されていることがうかがえるが，時間と空間の両軸を視野に入れてことばを追究する研究系として，言語や方言の「時空間変異」という共同課題の探究に向けてプロジェクト間の有意義な情報交換が行われることを期待したい。

《評価項目》

（1）共同研究の推進

昨年度の外部評価の指摘により共同研究推進体制が改組された。特に「文字と社会言語学」（代表者：横山詔一）と「大規模経年調査」（代表者：井上史雄）の関係を整理し，2013年10月から経年調査に関する研究を「大規模経年調査」に一本化したことは英断であり，今後の研究推進の上で高く評価される。また歴史的変化に関するプロジェクト「日本語疑問文」（代表者：金水 敏）を新設したこと，JLVC2014「日本語調査をデザインする」を開催したことなども新しい時空間変異研究を示唆するものとして今後の展開が期待される。

（2）研究実施体制

「大規模経年調査」，「危機方言」，「現代日本語の動態研究」のプロジェクトでは共同研究員の大幅な増員を行って体制を再編成した点，および各プロジェクトともに研究経費を徐々に調査から調査デ

ータの整理・分析・成果公表へ移行させている点は妥当な措置として評価できる。

研究系の合同研究発表会である JLVC は，プロジェクトを横断する企画として有効に機能している。

歴史的変化に関するプロジェクト「日本語疑問文」を新規に設置した点も，「通時コーパスの設計」プロジェクトで構築したコーパスの妥当性等を検証しつつ行う実践的なプロジェクトとして，評価できる。

（３）共同利用の推進

過去の調査研究データの整理・蓄積・公開として，「危機方言」プロジェクトの八丈調査（2012 年）の調査報告書の刊行・ホームページでの公開，「全国分布」プロジェクトの言語地図項目書誌データベースのウェブ上での公開，「大規模経年調査」プロジェクトにおける『岡崎敬語調査資料集 1～3』の刊行はすでに実施されており，共同利用に資するものと評価できる。一方，「危機方言」プロジェクトにおける喜界島調査（2010 年）の基礎語彙音声，琉球方言音声，『日本言語地図』の原資料のデータベースの整備・公開，「全国分布」プロジェクトにおける全国 400 地点の調査データのデータベース化，「現代日本語の動態研究」プロジェクトにおける「ＳＰ盤貴重音源資料」の文字化資料，世論調査型の全国調査などの公開の準備，「大規模経年調査」プロジェクトにおける山形県鶴岡市における共通語化調査のデータベースの一部の出版などは 2013 年度中ないしは 2014 年度初めに予定されており，早急な共同利用の実現が待たれる。

各プロジェクトにおける研究活動の中で，国立国語研究所の所蔵する方言資料を一般公開するための日本言語地図 DB に関する研究会（「危機方言」），全国 500 地点の調査データの活用のための研究発表会(「全国分布」)等は共同利用推進に貢献するものとして評価できる。

（４）国際化

海外学会等での講演や研究発表，英語による出版，海外研究者との連携等，国際的な発信も積極的に行われている。「現代日本語の動態研究」，「危機方言」，「海外の日本語変種」の各プロジェクトにおいて欧米ならびに台湾の共同研究者を得て研究を推進し，国際化に努めている点が評価できる。また，「大規模経年調査」プロジェクトでは中国および東南アジア諸国，スペインなどにおいて研究成果を発表し，国際化に貢献している。特に，同じ地域において海外の研究者向けの講演と特別授業を実施したことは地道な国際的啓蒙活動として高く評価できる。また「危機方言」プロジェクトの『喜界島方言調査報告書』の英訳の作成も貴重な日本語方言研究についての国際的情報発信として評価できる。

（５）研究成果の発信と社会貢献

八丈島や南琉球など消滅の危機にある方言の音声データを精力的に収集する作業は，まさに時間との闘いでもあり，時空間変異つまり歴史的・場所的変異を探究する当研究系ならではの貴重で重要な調査活動である。また，方言の意義の啓蒙的活動も評価できる。

山形県鶴岡市等の方言の「大規模経年調査」は，これまでの国語研の地域方言大規模調査の成果を踏まえて，より統合的な調査の推進を目指したものであり，世界的にも有数の研究である。その成果の普及活動がホームページ，トークイベントなどを通して開始されている点は評価できるが，ホームページでの資料公開を含め今後の活動のさらなる進展が期待される。

（６）若手研究者育成

大学院生，ポストドクター，非常勤研究員などの若手研究者の調査や，方言調査のワークショップへの参加，若手研究員の採用等，若手研究者の育成も適切に行われている。

言語資源研究系

研究系長：前川 喜久雄

テーマ：現代語および歴史コーパスの構築と応用

平成 25 年度の計画（目標）
「現代語および歴史コーパスの構築と応用」を総合研究テーマとして，「コーパス日本語学の創成」「コーパスアノテーションの基礎研究」「通時コーパスの設計」の 3 共同研究を実施する。あわせて一般からも応募可能なコーパス日本語学の公開ワークショップを開催する。共同研究の成果の一部として，講座「日本語コーパス」の出版を開始する。
平成 25 年度研究活動の実施状況
（1）共同研究の推進 ①「現代語および歴史コーパスの構築と応用」を研究系全体の総合研究テーマとして，「コーパス日本語学の創成」（略称「コーパス日本語学」），「コーパスアノテーションの基礎研究」（略称「アノテーション」），「通時コーパスの設計」（略称「通時コーパス」）の 3 共同研究プロジェクトを実施している。②コーパスの構築に関しては，研究系全員がコーパス開発センターに併任して，コーパス開発業務にも携わっている（詳しくはセンターの実績参照）。③「コーパス日本語学」の活動の一環として，一般からも応募可能なコーパス日本語学の公開ワークショップを年 2 回開催している。今年度は第 4 回を 2013 年 9 月，第 5 回を 2014 年 3 月に開催した。④共同研究の成果の一部として，講座『日本語コーパス』（全 8 巻，朝倉書店）の出版を進めている。2013 年 7 月に第 1 巻を刊行し，現在は第 2 巻及び第 3 巻の編集を進めている。 **（2）研究実施体制** ①所外の共同研究者数は「コーパス日本語学」が 37 名，「アノテーション」が 16 名，「通時コーパス」が 19 名である。「コーパス日本語学」には日本語学全体の，「アノテーション」には自然言語処理領域の，「通時コーパス」には日本語の歴史研究の研究者が参加している。②基本的には 3 プロジェクトとも独立に年数回の研究会（公開または非公開）を開催しているが，年 2 回のコーパス日本語学ワークショップを研究発表の場として共有することで，3 プロジェクトのメンバー交流を実現している。③「通時コーパス」では㈱小学館をはじめとする出版社と古典資料の著作権処理等について協力関係を構築している。 **（3）共同利用の推進** ①「コーパス日本語学」では，コーパス日本語学ワークショップを開催することで，コーパス日本語学に関する成果発表と意見交換の場を一般に広く提供している。毎回 50 件ほどの発表の約半分が共同研究者以外の研究者であり，参加者数も異なりで 180～220 名程度あるので，実質上の学会機能を提供している。予稿集は PDF 化してダウンロード可能としている。②「アノテーション」で作成した各種アノテーションデータ（文節係り受け，述語項構造，動詞項構造，日本語フレームネット，拡張固有表現，時間表現，レル・ラレルの意味，述語境界など）は，プロジェクト終了までにマニュアルとともに一般に公開する。③「通時コーパス」で構築した平安時代和文の形態素解析済データを『日本語歴史コーパス』（CHJ，先行公開版）として試験的に一般公開している。「アノテーション」で実施し

た研究動向の調査報告をホームページで公開している。

（４）国際化

①BCCWJの解析を研究テーマとする外来研究員を2名海外（スロベニアおよびイタリア）から受け入れている。いずれも日本学術振興会による派遣であり，厳しい選抜を経て自力で資金を獲得した優秀な若手研究者である。②オックスフォード大学と共同で通時コーパスに関する研究発表会を開催した。またオックスフォード大学の研究者を招き，International Workshop on TEI and Corpus of Historical Japaneseを開催した（2013.9.17. 非公開）。

（５）研究成果の発信と社会貢献

①『講座日本語コーパス』の刊行を継続している。②言語処理学会の学会誌『自然言語処理』の特集号「コーパスアノテーション ―新しい可能性と共有化にむけての試み―」を編集し，来年度早々に査読論文十数編からなる特集号を刊行する予定である。③日本音声学会の学会誌『音声研究』の特集「大規模コーパスを用いたデータ駆動型音声研究」を編集し，来年度前半の刊行を予定している。④コーパス開発センターと連携して，コーパス検索ツール『中納言』による BCCWJ の検索講習会を年２回開催したほか，同じく『中納言』による CSJ の検索講習会も開催した。⑤昨年度には Routledge 社より A Frequency Dictionary of Japanese を刊行した。CSJ および BCCWJ を利用した日本語頻度辞書である。その他，言語資源研究系のメンバーがこの 2 年間に筆頭もしくは単著で発表した研究書・啓蒙書が 4 冊ある。⑥今年度の発表論文数は，「コーパス日本語学」が 29 篇（国際誌査読有 1 篇，国内査読有 13 篇，国際会議予稿集 8 篇），「アノテーション」が 4 篇（国内査読有３篇，国際会議予稿集１篇。ほかに 2014 年 4 月刊行予定の査読論文が 4 本ある），「通時コーパス」が 16 篇（国内査読有 8 篇，国債会議予稿集 1 篇）であった。3 プロジェクトのいずれにおいても，論文発表数，査読論文の比率ともに顕著に上昇している。

（６）若手研究者育成

①コーパス日本語学ワークショップは若手の発表の場としても機能している。毎回 50 件前後の発表のうち，10 件前後が大学院生による発表，20 件前後が非常勤職にある若手研究者による発表である。②海外から外来研究員（ポスドク）2 名を受け入れている（(4)参照）。③大学共同利用機関への移管後 4 年半の間に言語資源研究系に属する研究者 4 名が博士号を取得した。（2013 年度は 2 名）

自己点検評価	計画（目標）どおりに実施した。

平成 25 年度の評価

《評価結果》

年度計画（目標）を上回って実施した。

年度当初の計画に対して，活発な研究活動，歴史コーパスの公開，若手の育成などが顕著であった。コーパス日本語学ワークショップを開催してコーパス日本語学を強く牽引し，またアノテーション，通時コーパスに関しても大きな進展を見せたのに加えて，共同利用の推進，国際化，研究成果の発信と社会貢献，若手研究者育成に関しても大きく貢献している。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

共同研究を推進する上で，「コーパス日本語学ワークショップ」を継続的に運営していることは高く

評価できる。「コーパス日本語学の創成」（略称「コーパス日本語学)」,「コーパスアノテーションの基礎研究」（略称「アノテーション」),「通時コーパスの設計」（略称「通時コーパス」）という３つのプロジェクトの共同研究員の研究交流の場であるとともに，共同研究員およびそれ以外からの発表者も多数参加している。このワークショップは年２回行われることで,「実質上の学会機能」を果たしており，新しい学問領域を文字通り創設するものとして高く評価される。

コーパス構築においては，本プロジェクトの研究員全員がコーパス開発センターと併任しており，センター専任の研究者と連携して，設計から実装のすべて過程に関わることで，効率的な作業を可能にしている。

共同研究の成果として，講座『日本語コーパス』（全８巻）の刊行がすでに開始しており，残る巻の刊行も着々と進んでいる。この講座本には，言語学者，自然言語処理研究者などの学際的な分野の共同研究者が執筆をしており，言語学，言語処理，教育工学を含む言語教育など多くの分野から新しい分野の研究として注目を集めている点が評価される。

（２）研究実施体制

研究系の３つのプロジェクト「コーパス日本語学」,「アノテーション」,「通時コーパス」のうち２つのプロジェクト「コーパス日本語学」,「アノテーション」のリーダーを同じ研究者がつとめ，さらに研究系長がコーパス開発センター長を兼任していること，研究系全員がコーパス開発センターに併任してコーパス開発業務に携わっていることなどによって，研究系全体の連携が十分になされている。コーパス開発の全体が見渡せるリーダーをいただくことにより，言語資源研究系のみならず国語研全体のコーパス開発の支援も可能であり，その実施のあり方が高く評価される。

「通時コーパス」では，出版社が保有する古典資料の著作権における協力体制を構築し，コーパス構築上，最も困難とされる著作権および資金的な問題を解決している。また今後の通時コーパスの進展に資することが多いことなど併せて高く評価される。

（３）共同利用の推進

「コーパス日本語学ワークショップ」は広い範囲からの発表者，参加者を集めており，成果発表と意見交換の場を関連分野の研究者に提供することに成功している。また，予稿集が PDF 化されてウェブ上からダウンロードできることは，国内外の研究者にとってコーパス日本学の重要な研究情報源となっている。

また各種コーパス・アノテーションデータの公開は言語学，言語処理研究者にとって有用な研究資源となっており，さらに様々な研究の展開につながるものとして期待される。今回試験的に公開された平安時代和文の形態素解析済みデータは文学研究者にとっても画期的な研究方法の変化をもたらす可能性が高いものであり，日本語歴史コーパス全体の実現も期待される。

これらのデータは現時点で，日本語学，第二言語習得などの教育において国語研のコーパス及び「少納言」,「中納言」を用いた論文掲載が「日本語学」,「計量国語学」,「日本語教育」など多くの学術雑誌に見られる。本年度に公開が始まった「日本語歴史コーパス」は文学研究者にとって画期的な研究方法の変化をもたらすものとして研究利用が期待される。

（４）国際化

「現代日本語書き言葉コーパス」（略称「BCCWJ」）を研究対象とする日本学術振興会（JSPS）招聘外来研究者を複数受け入れている。若手の研究者を指導することは，国語研の成果が海外に広く普及す

る萌芽ともなるものとして高く評価できる。また，「歴史コーパス」プロジェクトが欧米における古典研究の古い歴史を持つ Oxford 大学と共同研究を行っている点は評価に値する。Oxford 大学は British National Corpus 構築にも深く関わり，コーパス構築及び利用のノウハウのあることから，研究交流することは非常に意義があるといえる。海外出版社からの著作出版，研究員が積極的に国際学会に出向いて発表するなど，国際化への取り組みも活動的に行われている点が高く評価できる。

（５）研究成果の発信と社会貢献

講座『日本語コーパス』の編集・刊行を継続しているのをはじめ，書籍，論文，学会誌（言語処理学会『自然言語処理』および日本音声学会『音声研究』）の特集号などによる研究成果の発信は非常に活発に行われており，高く評価できる。

コーパス検索の講習会の開催やデータの公開などは一般にも貢献するところが大きい。

言語資料研究系は，コーパス開発センターと表裏一体の関係にあることから，特に成果発信は丁寧に行われている。

（６）若手研究者養成

(1)で述べた「日本語コーパスワークショップ」においては多数の大学院生および若手非常勤研究員による発表の機会を与えることにより，研究所内部だけでなく広く国内若手研究者の育成にも寄与している。また，(4)に述べたように国内外のポスドクを受け入れることで研究者養成に貢献している。

言語対照研究系

研究系長：ジョン・ホイットマン

テーマ：世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明

平成 25 年度の計画（目標）
「世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明」を総合研究テーマとして，言語類型論的観点から見た述語構造，言語地域として捉えた東北アジア諸言語の比較研究を実施する。また，プロジェクト間の連携を図るため合同研究発表会を開くとともに，国際シンポジウムを開催する。
平成 25 年度研究活動の実施状況
（1）共同研究の推進 ①「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」（略称「述語構造」）では，述語における「自動詞・他動詞」の現れ方について 40 言語のデータを含むデータベースを構築した（2014 年 4 月公開予定）。また，論文集としてパルデシ・ナロック・桐生（編）『他動性の本質 ―日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』（2014 年 6 月刊行予定）を準備中である。研究発表会は 2 回（新潟大学，富山大学）開催し，2014 年 2 月 22 日～23 日には言語対照研究系の合同研究発表会 NINJAL Typology Festa で研究発表とポスター発表を行った。②「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」（略称「東北アジア言語地域」）アイヌ語班（リーダー：アンナ・ブガエワ特任准教授）を組織し，研究発表会を 2 回（国語研）行った。「形態統語論班」と「音韻再建班」は 4 回の研究発表会，2 回の国際ワークショップ・シンポジウムを行った（2013 年 5 月 30 日にはタイ・チュラロンコン大学にて第 23 回東南アジア言語学会の plenary session，2013 年 8 月 23～24 日には米コーネル大学にて 9th Annual Workshop on Altaic Formal Linguistics）。更に 2014 年 2 月 20 日～21 日に欧米の著名な言語類型論専門家 8 人と国内の研究者 10 人を招へいし，国際シンポジウム International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages（世界の言語における複統合性）を国語研で開催した。他に，Workshop on Altaic Formal Linguistics の成果として，プロジェクトメンバーの論文 4 件を含む *MIT Working Papers in Linguistics* の特集号を編集中である。形態統語論班では，出版計画を John Benjamins 社の言語類型論学シリーズ *Typological Studies in Language* に提出する予定である。音韻再建班では，John Benjamins 社の学術雑誌 *Korean Linguistics* にメンバー3 人の論文を含む特集号 *Korean Historical Linguistics* を刊行した（2014.2）。 **（2）研究実施体制** ①研究成果発表会やデータベース作成を国内学会（日本言語学会，コーパス日本語学ワークショップ），国際学会（Workshop on Altaic Formal Linguistics，Japanese/Korean Linguistics）や海外の研究機関（Max Planck 進化人類学研究所，タイ・チュラロンコン大学，米・コーネル大学等）と共同で行い，研究所外の研究組織・学会とのさらなる連携を図った。2013 年 12 月には「アジア諸語における複合動詞」に関する国際シンポジウムを理論・構造研究系と合同で開催した。言語対照研究系の 2 度目の合同研究発表会，NINJAL Typology Festa 2014 を 2014 年 2 月 22～23 日に開催した（参加 109 名）。②外国の研究機関や人間文化研究機構連携研究の予算と組み合わせて事業を実施し，経費の有効利用を図った。

（３）共同利用の推進

①研究成果発表会および出版物の公開：研究成果発表会を公開し，プロジェクトメンバー（共同研究員）以外の研究者，特に大学院生にも参加および発表の機会を提供した。また刊行物（後述）において若手発表者に執筆の機会を提供した。*MIT Working Papers in Linguistics* の WAFL の特集号には声をかけた大学院生の発表論文が含まれる。②データベース・インタフェースの使用学習：NINJAL-Lago Word Profiler for BCCWJ (NLB)の講習会を札幌学院大学で行った。③データベース公開（予定）：上記(1)で言及した世界の約 40 言語の自他動詞のデータベース（Geo-typological database of transitivity pairs）を 2014 年 4 月から公開予定。④データベース増補：「述語構造」プロジェクトで作成した基本動詞ハンドブックの見出しを増補し 2014 年 4 月に公開予定。

（４）国際化

①海外の研究者との共同活動：「述語構造」には 4 名，「東北アジア言語地域」には 6 名の外国人研究者が共同研究員として参加している。両プロジェクトのリーダーは，海外の研究者と共同で研究発表・論文刊行・海外ジャーナル特集号共編等を行った。2013 年度の共同研究発表会ではヴェトナム・タイ・米国の研究者がそれぞれ 1 名発表した。2013 年度の客員教授として，アンガー教授（米オハイオ州立大学）を迎えた。②海外研究機関との連携：タイ・チュラロンコン大学，米・コーネル大学と共同で国際ワークショップ・会議を開催したほか，ドイツ・Max Planck 進化人類学研究所，英・オックスクスフォード大学東洋学部（Oriental Institute），フランスの東洋言語学研究所（CRLAO）と共同研究を実施した。③海外への研究成果の公表：「東北アジアの言語地域」のメンバー4 人は Workshop on Altaic Formal Linguistics で研究発表し，*MIT Working Papers in Linguistics* の特集号で論文を刊行する予定である。両プロジェクトのリーダーおよび特任准教授が海外の学会や研究機関で合計 7 件の口頭発表を行った。「東北アジアの言語地域」の研究成果として，音韻再建班のメンバーが John Benjamins 社の学術雑誌 *Korean Linguistics* の特集号 *Korean Historical Linguistics* で研究論文を発表した。④海外の研究者の招聘：「東北アジアの言語地域」では，2014 年 2 月 20～21 日に開催した国際シンポジウム International Symposium on Polysynthesis in the World's Languages（世界の言語における複統合性）に世界的に著名な言語類型論の専門家を 8 名招聘し，国内の言語類型論の専門家との交流を促した。言語対照研究系の合同研究発表会である NINJAL Typology にも海外の発表者を 5 名招聘した。

（５）研究成果の発信と社会貢献

①研究成果合同発表会：言語対照研究系の合同研究発表会 Typology Festa 2014 を開催した（海外の発表者 5 名，口頭発表 15 件，ポスター発表 11 件）。②研究会・シンポジウム等の発信：発表会・シンポジウム開催に際しては，研究所ホームページやメールマガジンでの広報に加え，開催案内を諸学会・研究会のメーリングリストに流して，情報を広く研究者コミュニティに伝えた。③論文集の刊行：次の成果物を刊行した。John Whitman & Young-Key Kim-Renaud (eds.) *Korean Linguistics* 15(2): Special Issue on Korean Historical Linguistics(John Benjamins 社)(「東北アジアの言語地域」), Esra Predolac & Andrew Joseph (eds.) Proceedings of the 9th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL9). *MIT Working Papers in Linguistics* 69 号(「東北アジアの言語地域」)。④論文集の編集：プロジェクトごとに下記論文集の編集作業を進めた。*The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Mouton 社)（「述語構造」), *The Handbook of Japanese Historical Linguistics* (Mouton

社）（「東北アジア言語地域」），*Nominalizations as a Source of Main Clause Grammar*（John Benjamins 社）（「東北アジア言語地域」）。 **（６）若手研究者育成** 日本学術振興会の外国人特別研究員と博報財団の外国人訪問教員を受け入れ，非常勤研究員を 3 人雇用し，言語学会・国語研のサロンなどで発表させ，研究系や研究所の研究活動に参加させた。PD フェローを雇用した。	
自己点検評価	計画（目標）どおりに実施した。

平成 25 年度の評価

《評価結果》

年度計画（目標）通り実施した。

「世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明」を総合研究テーマとして，言語類型論的観点から見た「述語構造」，言語地域として捉えた「東北アジア地域」の２プロジェクトがあり，それぞれにおいて優れた成果を挙げた。本年度は「東北アジア地域」に「アイヌ語班」が新設されたことは国語研における組織編成としても特記すべきことであり，今後の活動に期待する。合同研究発表会，国際シンポジウムを開催し，共同研究の推進，研究実施の体制，共同利用の推進，国際化，研究成果の発信において，いずれも高い目標を掲げ，その目標をほぼ計画通りに実施している点で，高く評価できる。「類型論」の構成は外国人研究者が多いのが特色であり，日本語母語研究者が気づかない着想で，興味深い研究を推し進めている。研究系長のリーダーシップの下，海外との交流も活発であり，刺激を与え合いながら研究を進展させていることが認められた。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

言語対照研究系の３件の共同研究プロジェクトにおいて活発な研究活動が継続的に行われていると評価する。「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」では，自動詞・他動詞のデータベース公開は国際的に利用可能なデータベースであることにより，共同利用の推進の点でさらなる発展が期待される。「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」では３つの班がそれぞれ興味深い研究を進展させており，海外の研究者との連携や海外での成果発信がなされている。

また，複統合性に関する国際シンポジウムは，国際的な共同研究であるだけでなく，対照研究の観点から，日本語の複合動詞，さらには動詞複合体を「複統合性」というより広い類型論的視座から鳥瞰するという，方法論上の新しさにおいて高く評価する。また，「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」プロジェクトの下にアイヌ語班を結成したことはアイヌ語の共同研究の組織化に初めて国語研として着手した点で研究実施の体制，国内外の共同研究の推進の上で注目される。

（２）研究実施体制

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」においてその卓越した成果が，専門書の刊行・学会誌への掲載・学会等での口頭発表・データベースの公開など，多様な媒体によって成果の発信がなされている。また，「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」では３つの班がそれぞれ興味深い研究を進展させており，海外の研究者との連携や海外での成果発信がなされている。

（３）共同利用の推進

データベース・インタフェースの使用学習：NINJAL-Lago Word Profiler for BCCWJ (NLB)の講習会を札幌学院大学で行っており，利用者への啓蒙的サービス活動として評価できる。自動詞・他動詞のデータベース公開（「述語構造」）は国際的に利用可能なデータベースであることにより，共同利用の推進の点でさらなる発展が期待される。

（４）国際化

言語対照研究系は研究系長を始め外国人研究員が多いことから，研究系自体が国際化されているといえる。国際的な人脈などのメリットを活かし，国内においては研究成果発表会，国際学会を海外の研究機関と合同で開催していることは高く評価できる。また海外で著名な研究者を多数招聘し，講演を実施した。これらに関わる経費は外国研究機関との協賛などによって支出の工夫を行っているなど努力が評価できる。また，Mouton 社，John Benjamins 社など海外の著名出版社から多数の著作物を出版している点も国際化に貢献している。

（５）研究成果の発信と社会貢献

「述語構造」において，専門書の刊行・学会誌への掲載・学会等での口頭発表・データベースの公開など，多様な媒体によって卓越した成果の発信がなされている。今後は各プロジェクトの刊行物の編集が順調に行われ，研究成果が広く知られることが望まれる。

（６）若手研究者育成

日本学術振興会の外国人特別研究員，博報財団国際日本研究フェローシップ外国人研究者の受け入れ，奨励研究員，特別研究員（PD フェロー）の雇用などにより多数の若手研究者を擁し，研究活動を通して研究者育成に貢献している。

日本語教育研究・情報センター

センター長：迫田 久美子

テーマ：日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価

平成 25 年度の計画（目標）
総合研究テーマ「日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価」の下に「多文化共生社会における日本語教育研究」と「コミュニケーションのための言語と教育の研究」の２つの基幹型共同研究プロジェクトを実施する。「多文化共生」プロジェクトでは，学習者の言語生活をめぐる諸問題を言語学他の多角的アプローチで追究する。「コミュニケーション」プロジェクトでは，書き言葉・話し言葉の両面において理解と産出のプロセス及び評価方法の研究を実施する。また，大規模な学習者コーパスの構築に着手するとともに，国内外の研究者との連携を強化するための研究会やシンポジウムを実施する。
平成 25 年度研究活動の実施状況
（１）共同研究の推進 ①「多文化共生社会における日本語教育研究」（略称「多文化共生」）では，多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に関しては，2013 年 5 月～2014 年 3 月にかけて，海外 10 地域のデータを収集し，学習者コーパスに基づく習得プロセスの研究について，中国やインドネシアの大学や学会の講演で成果の一部を発表した。また，定住外国人の言語使用と言語環境の研究に関しては，継続調査が実施され，国内および海外の学会で成果を発表した。また，学習者コーパスの研究については，2014 年 3 月 22～23 日，第 8 回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ8）を開催し，「コミュニケーション」プロジェクトと合同で，「コーパスと日本語教育研究」をテーマにパネルセッションを企画し，成果を発表した。シンポジウムで発表された学習者コーパスに関連する研究を中心に論文集の出版を検討する。②「コミュニケーションのための言語と教育の研究」（略称「コミュニケーション」）では，初級から上級レベルまでの非母語話者の読解過程の調査を進め，国内外でその内容や成果について発表した。また，評価研究の面では，「評価プロセスモデル」の理論をまとめた『「非母語話者の日本語」は，どのように評価されているか ―評価プロセスの多様性と普遍性をとらえる試み―』を刊行（2014.2）した。③学習者コーパスに関しては，12 の異なる言語を母語とする海外の日本語学習者のコーパスプロジェクトでは，19 地域のうち，2013 年度は， ロシア，オーストリア，トルコ，タイ，台湾，インドネシア，アメリカ，イギリス，ニュージーランド，オーストラリア 10 地域 7 言語の調査を実施し，約 500 名分の発話および約 400 名分の作文を収集した（「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」）。また，定住外国人の言語使用と言語環境のプロジェクトの 5 年分の縦断調査のデータはデータベースとして公開予定（2014.4）である。また，学習者コーパスの作成，分析ツールの講習会を行ったり，データに基づいた文法シラバスの作成を行ったりして，学習者コーパスやデータの日本語教育研究への活用が少しずつ具現化しつつある。 **（２）研究実施体制** 国内外の新たな共同研究者の増員により，研究の充実を図った。具体的には，国内では，橋本ゆかり氏（横浜国立大学 第二言語習得）や中東靖恵氏（岡山大学 社会言語学），海外では Ahmad Dahidi

氏（インドネシア教育大学 日本語教育）や川村宏明氏（米国フィンドレー大学，文化人類学）が加わり，研究領域の拡大を図っている。また，海外の各地で実施されている調査においても，各地の調査担当を担う研究者や海外研究協力者と共にデータ収集の方法，データ分析など，公開研究発表会（7回）を行って，各研究の成果を発表した。

（３）共同利用の推進

研究にかかわる資料は，メーリングリストで共有化を図り，公開研究会を行い，研究成果を広く公開し，共同研究者以外の研究者にも研究参加の機会を開いている。具体的には，「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」(2013.5.27，9.17，12.8)，「コミュニケーションのための言語と教育の研究」(2013.7.28，2014.2.15)「多文化共生社会における日本語教育研究」(2013.11.10)「「評価」を持って街に出よう」(2014.2.23) を行った。また，「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」では，プロジェクトのホームページを作成し，研究会情報の公開を発信，「学習者コーパスの構築と日本語の第二言語習得研究」では，データ収集調査の進捗状況や調査方法などの情報発信をするために，ホームページを作成中である。定住外国人の多言語使用に関する研究では，移民研究，バイリンガリズム，言語変化等に関する文献や論文を国内外から幅広く収集し，文献リストを作成した。

（４）国際化

海外の学会での成果発表をはじめとし，海外における調査，フィールドワークを実施している。具体的には，学会ではヨーロッパ日本語教育シンポジウム (2013.9)，OPI 国際シンポジウム (2013.11)，DiSS 2013: The 6th Workshop on Disfluency in Spontaneous Speech (2013.8) で成果発表を行った。プロジェクトリーダーは中国（湖南大学，北京師範大学，北京日本学研究センター，大連外国語大学），インドネシア（インドネシア日本語教育学会），スペイン（スペイン日本語教師会），シンガポール（シンガポール教育省）で招待講演を行った。

日本語教育研究・情報センターが中心となり，NINJAL 国際シンポジウムとして第 8 回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ8）を開催した（2014.3.22-23. 国語研，参加者延べ 412 名）また，中国（北京日本学研究センター），カナダ（トロント大学），スロベニア（リュブリアナ大学）から外来研究員を受け入れ，共同研究を行った。

（５）研究成果の発信と社会貢献

(3)でも述べたが，研究成果の発信および，進捗状況の公開のためにホームページを作成中である。研究成果をそれぞれの専門領域の学会誌や学術誌に発表するとともに，国内で公開講演会を開催し，ヨーロッパの学会でもフォーラムを開催した (2013.9)。成果の活用による社会貢献として，関西言語学会，横浜市国際交流協会，アクラス日本語教育研究所，日本言語学会，山形市男女共同参画センター，待遇コミュニケーション学会，日本語教育学会のプログラムなどで招待講演を行った。作業中の *The Handbook of Japanese Applied Linguistics* (Mouton 社) に本センターの教員 2 名が論文を執筆した。

（６）若手研究者育成

若手研究者育成のため，非常勤研究員の指導を行った。博報財団第 8 回国際日本研究フェローシップにより，スロベニアから若手の外来研究員を受け入れ，共同研究論文を発表した。また，2014 年 2 月 23 日開催の「「評価」を持って街に出よう」シンポジウムでは，所内外の若手研究者（学生・非常

勤研究員等）にも広く参加を呼びかけ，全 23 件の発表のうち，ほぼ半数の 11 件が若手研究者による発表となった。	
自己点検評価	計画（目標）どおりに実施した。

平成 25 年度の評価

《評価結果》

年度計画（目標）どおり実施した。

日本語教育研究・情報センターという新体制が始まってそれほど時を経過していないにもかかわらず，センター長のリーダーシップと精力的な活動で，新体制が形を成してきたことは高く評価される。本センターは総合研究テーマ「日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価」の下にある「多文化共生社会における日本語教育研究」と「コミュニケーションのための言語と教育の研究」の２つの基幹型共同研究プロジェクトにおいては，国内外の優秀な共同研究者を擁し，第二言語習得過程の学問的な探求を行うとともに，学習者コーパスという，母語ではない言語コーパスの構築に挑戦している。このような広範囲なプロジェクトは国語研にしてはじめて可能な構想である。今日に至るまでに本研究所が構築してきた母語による話し言葉コーパス，書き言葉コーパス，歴史コーパスに並ぶコーパスとしての学習者コーパス構築は，重要かつ必須な国の事業として位置づけられる。時間はかかると思われるが完成を期待するものである。

《評価項目》

（１）共同研究推進

「多文化共生」班の海外での学習言語調査では，多くの国内外の研究協力者を得て，海外 19 地域，12 言語にわたる日本語学習者の日本語会話力のデータを収集蓄積した。これにより，国外の日本語教育研究者にとっては日本からの情報発信を身近に受けて，研究を推進できるという刺激的な研究環境に恵まれたといえる。「コミュニケーション」班は今年度から活動が本格化し，日本語学習者の読解力のあり方をデータベース化する「読解コーパス」の開発に向けて，話し言葉・書き言葉・評価の各分野における国内外の専門家を共同研究者とした。これにより従来ほとんど実証的に研究されてこなかった学習者の読解過程の解明に資するものとして次年度以降の研究の発展に期待が持てる。

日本語学習者の言語能力評価の新しい観点の提起も，習得した言語能力によって何ができるか（can-do-statement） に評価軸を移す世界的な傾向に則って，さらに実践的な方向を目指すものとして評価できる。

（２）研究実施体制

国内外に第二言語習得，社会言語学，文化人類学などの若手の共同研究者を増員し，研究領域の拡大と充実を図っている点が評価できる。なお，学習者コーパス構築が大きいテーマであることから，言語資源研究系の今日までに培われたノウハウおよびコーパス開発センターの技術の支援を得るための体制についても検討が必要である。

（３）共同利用の推進

公開研究会を行い，研究成果を広く公開し，共同研究者以外の研究者にも研究参加の機会を開いている点が評価できる。「学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構

築」では，プロジェクトのホームページを作成し，研究会情報などを公開・発信している。定住外国人の多言語使用に関する研究では，移民研究，バイリンガリズム，言語変化等に関する文献や論文を国内外から幅広く収集し，文献リストを作成し，共同利用に資している。「学習者コーパスの構築と日本語の第二言語習得研究」では，データ収集調査の進捗状況や調査方法などの情報発信をするために，ホームページを作成中である。日本語教育研究・情報センターは新体制によって新たな構想で始まったばかりであり，大規模なデータの収集および蓄積のためには時間を要するが，極めて有意義なデータであり，データ集約とその公開・情報発信が待たれる。

（４）国際化

現在継続されている科学研究費補助金による研究プロジェクトには多数の外国人研究者および外国在住の日本人研究者が参加している。また，日本語教育研究・情報センターが中心になってNINJAL国際シンポジウム「第８回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ8)」を国語研で開催し，海外から多数の参加者を得たことは特記すべき事業であった。従来は，海外の大学との留学生交流などはあっても，海外の日本語教育研究者と国内の研究機関との研究交流は必ずしも活発とは言えなかった。本センターの研究プロジェクトにおいて各国にある日本語教師会の主要なメンバーとも研究連携が取れるようになるなど，新しい展開の兆しが見られる点は十分評価できる。定住外国人の日本語学習推進という点においては，韓国，台湾などの近隣諸国での先進的な試みと国際的に連携する方向性を目指すことも重要であり，今後の課題として期待したい。

（５）研究成果の発信と社会貢献

研究成果の発信および，進捗状況の公開化のためにホームページを作成している。研究成果はそれぞれの研究領域の学会誌や学術誌に投稿，掲載されており，公開講演会を開催，研究成果の発表を行っている。また，欧州の学会でのフォーラム(2013.9)，例年米国で開催される国際会議の招致(2014.3)などにより研究の推進と成果の活用による社会貢献を進めている。また本センター教員は国内外の学会・日本語教育機関において招待講演を依頼され，センターにおける研究内容について講義するなどによって社会貢献を果たしたものと評価する。

（６）若手研究者育成

若手研究者のプロジェクト共同研究者としての受け入れ，公開研究会への参加呼びかけ，主催シンポジウム（「「評価」を持って街に出よう」等）における若手研究者の研究発表の促進，センター内部での若手研究者を交えた「勉強会」の開催，博報財団国際日本研究フェローシップによる若手外国人研究者の受け入れ，当該研究者との国際的な学術論文誌への共著論文の発表等によって，本センターでは，若手研究者の育成への配慮が適切になされていると評価する。

コーパス開発センター

センター長：前川 喜久雄

平成 25 年度の計画（目標）
『日本語話し言葉コーパス』及び『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の公開を継続するとともに，超大規模コーパスのためのデータ収集を進める。新規に平安時代和文作品の歴史コーパスを試験公開するほか，既公開のデータベースを更新する。
平成 25 年度研究活動の実施状況
（1）共同研究の推進 ①超大規模コーパスのクローリング技術を確定し，現在，3箇月 1 億URLのペースでクローリングを繰り返している。これによって当初目的であった100億語相当のテキスト収集を達成した。②超大規模データの文字列検索技術について検討を進め，テストデータによる検索環境を構築した。③クローリングによって得られたテキストのレジスター推定問題を念頭において，各種統計手法について予備的な検討を進めた。④『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界認定に問題が発見されたので，認定基準を再検討し，現在，アノテーション修正作業を実施中である。⑤形態論情報検索インターフェース『中納言』の機能改善を実施する。大幅な検索速度の向上を見込んでいる。⑥「通時コーパスの設計」プロジェクトと連携して『日本語歴史コーパス・平安時代編』を10作品から14作品に増補し，長単位解析情報を付与し2014年3月に一般公開を行った。⑦「通時コーパスの設計」プロジェクトと連携して『明六雑誌コーパス』に原本画像参照機能を追加した。 **（2）研究実施体制** コーパス開発センター専任の特任准教授 1 名，ポスドク 2 名にくわえ，言語資源研究系の教授 1 名，准教授 5 名，理論・構造系准教授 1 名がセンターに併任している。さらに実務担当者として，派遣社員 1 名（DB 開発担当），プロジェクト非常勤研究員 9 名，技術補佐員 10 名を雇用して業務にあたっている。非常勤研究員，技術補佐員の経費は，センターの予算以外に，「コーパス日本語学の創成」，「コーパスアノテーションの基礎研究」，「通時コーパスの開発」等の 3 基幹型プロジェクトの予算と科学研究費からの援助も得ている。 **（3） 共同利用の推進** ①『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) の公開を継続した。2013 年 1 月から 12 月にかけての新規契約数は 53 件であった。公開から 9 年を経た CSJ に対して現在も毎週 1 本程度の申し込みがあるのは，このコーパスが日本語音声の情報処理的研究において事実上の標準データとなっていることを示すものである。②『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) の公開を継続した。2013 年 1 月から 12 月にかけての新規契約数は，DVD 版が 52 件，『中納言』による検索ライセンスの契約（無償）が 647 件であり通算で 2000 件を突破した。同期間における『少納言』による BCCWJ 検索セッション数は約 7 万件であり，年間では 10 万件を大幅に上回る予定である。『中納言』ライセンスの契約数，『少納言』の検索セッション数ともに依然増加傾向にある。③2012 年 12 月に公開した『日本語歴史コーパス』(CHJ) 先行公開版の『中納言』による検索ライセンス契約（無償）は通算 152 件であった。 ④CSJ-Core の RDB 版を公開した。

（4）国際化

特記すべき事項はないが，日本学術振興会の派遣によるポスドクが BCCWJ コアのパラレルコーパス化実験に参加していること，英国の研究者から BCCWJ を商業利用したいとの申し込みがあったこと等を報告しておく。

（5）研究成果の発信と社会貢献

①コーパス開発センター独自のホームページを構築し，言語資源系の研究プロジェクト群と連携しながら，データおよびマニュアル類をオンライン公開している。今年度は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の構築過程で作成したマニュアル類 15 冊と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の語彙表データを公開した。②「コーパス日本語学の創成」プロジェクトと連携して，『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用した研究を網羅した研究文献リストを公開した。前者には和文 510 件，英文 191 件，後者には和文 393 件，英文 66 件の情報が含まれている。③コーパス日本語学ワークショップの予稿集もすべてダウンロード可能である。④ ホームページのビジター数は 1 日あたり 50～230 件，平均 150 件程度である。

センターホームページ：http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/

（6）若手研究者育成

超大規模コーパス関係で PD フェロー2 名を雇用して，コーパスを利用した新しい日本語研究の可能性を開拓させている。プロジェクト非常勤研究員，技術補佐員らも各種コーパスの開発作業を通してコーパスによる日本語研究のノウハウを身につけて，この領域を担う次世代の研究者層を形成しつつある。コーパス日本語学ワークショップでは毎回，非常勤研究員，技術補佐員らによる研究が多数発表されている。その業績をもって 2014 年度より中央大学文学部の准教授に採用予定の非常勤研究員がいる。コーパス検索ツール（『中納言』および『茶器』）の講習会を毎年開催している。今年はいずれのツールについても東京と関西で 1 回ずつ開催したほか，『中納言』による CHJ の検索についても別途講習会を開催した。講習会と同時にコーパス利用上のトラブルについての相談にも応じている。

自己点検評価	計画（目標）どおりに実施した。

平成 25 年度の評価

《評価結果》

年度計画（目標）を上回って実施した。

言語資源研究系における研究成果に対して，コーパス開発センターはその成果を応用したコーパス収集・編集加工・一般利用者のための運営サービスを担っていることから，多方面の研究者との連携による共同研究は必須であり，研究系長がセンター長を兼務していることで研究推進が効率的に成果を促進していると考える。センターと言語資源研究系が表裏一体で活動することで，センター所属の研究員も言語資源研究系の研究活動に加わることができ，研究成果を挙げキャリアアップする道が用意されている点がよい。このプロジェクトでは，文理融合の作業が多く，研究系長のリーダーシップが重要であるが，プロジェクト内の調整運営も良好であると評価する。

《評価項目》

（１）共同研究推進

本センターは言語資源研究系の基礎研究と連携して，日本語研究に関わる研究者のために超大規模コーパス，通時コーパスなどの各種言語資源を開発している。本年度は自然言語処理の専門家によるクローリング技法を用いた 100 億語のデータ収集が行われ，それに伴う検索の高速化や統計処理を用いた研究開発が進められている。また，言語学専門家によるアノテーション付与など学際的な研究者の共同研究による利用方法について検討が行われている。このような開発プロセスそのものがコーパス日本語の研究の蓄積となり，日本におけるこの分野をリードする研究基盤として重要かつ価値ある貢献となっている。さらに『通時コーパス』プロジェクトとの連携で，『日本語歴史コーパス・平安時代編』の一部公開するなど多くの成果を上げていることが高く評価できる。

（２）研究実施体制

(1)に述べたように言語学者(コーパス言語学，音声学，意味論，構文論)，自然言語処理の専門家などの学際的な研究体制を構成している。センターの実務作業には多くの人材と費用が係ると推測するが，研究系人員の兼任，外部競争資金などによる経費充当により非常勤人員の雇用などによって融通をしているなど運営の工夫が評価できる。

（３）共同利用の推進

無料ウェブ公開による「少納言」は 10 万件アクセス，ライセンス契約による「中納言」は 2000 件（初年度から現在までの通算）という数字は『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) を含め本センターが継続公開しているコーパスが広範囲にわたって利用されていることを示している。利用者が順調に伸びていることは，利用の促進のための講習，相談を行っていることに加え，恒常的な維持努力の成果として高く評価できる。

（４）国際化

本センターの業務目的の性質上，直接国際化の活動は難しいように思われるが，「少納言」，「中納言」を利用している海外で日本語学研究者には便宜を与えている。さらに今後は歴史コーパスをウェブ上で公開することにより，海外の文学・言語学研究者の研究に益することができる。世界に波及する優れた日本語コーパスを提供するためには，適正な形態素解析や優れたアノテーション付与が必要である。国語研は優れた言語処理研究者と，深い言語知識のある研究員の協力が得られる環境にあることが他にない優位性をもっている。先進的なコーパス開発のノウハウをもつ欧米の研究機関との若手研究者の交換研修，海外での利用者ための海外講習会などにより利用者拡大のための活動の推進をすることも検討されたい。

（５）研究成果の発信と社会的貢献

国語研ホームページから辿るのはややわかりにくいが，開発センターホームページ上では公開コーパスにアクセスし易くよく整理されている。コーパスの他にも現在までに出版したコーパス構築に関わるマニュアル本，「現代日本語書きことばコーパス」語彙表，研究文献リスト，「コーパス日本語ワークショップ」予稿集を公開し，随時追加ないし更新しており，多数のビジターが存在することからコーパス研究の有益な情報源となっているものと評価できる。また，(4)でも述べたように「話し言葉コーパス」，「少納言」，「中納言」，「歴史コーパス」を公開運用することで，日本国内のみならず世界中の研究者に対して貢献しているといえる。

（6）若手研究者育成

PD フェロー，プロジェクト非常勤研究員，技術補佐員らが各種コーパスの開発作業を通してコーパスによる日本語研究のノウハウを身につけて，この領域を担う次世代の研究者層を形成しつつあることは，コーパス日本語学を創成していく上でも重要なこととして高く評価する。また，コーパス検索ツールの講習会を複数回開催し，コーパス利用上のトラブルについての相談にも応じるなど大学院生をはじめとする若手研究者への啓蒙的な普及活動にも貢献していることは評価できる。

平成 25 年度「組織・運営」,「管理業務」に関する評価結果

【組織・運営】

Ⅰ．教育研究等の質の向上の状況に関する目標を達成するためにとるべき措置

１． 研究に関する目標を達成するための措置

（１） 共同研究の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

4つの研究系と日本語教育研究・情報センターにおいてそれぞれ総合研究テーマを定め，従来の基幹型プロジェクトをその傘の下に位置づけて，次のとおり実施する。なお，研究系・センターにとらわれない萌芽・発掘型共同研究及び外部の研究者をプロジェクトリーダーとする領域指定型共同研究も実施する。

【実績】

4 研究系及び日本語教育研究･情報センターにおいて,それぞれの総合研究テーマによる大規模な「基幹型」共同研究プロジェクト 17 件（新規 2 件，継続 15 件）を実施した。加えて研究系にとらわれず将来的に新しい研究領域の創成が期待される「萌芽・発掘型」5 件（継続），独創性に富む斬新な研究課題を扱う「独創・発展型」3 件（継続），一般公募の外部研究者をリーダーとする「領域指定型」7 件（継続）の各種プロジェクトを実施した。その成果は，シンポジウム，国際会議，研究成果発表会，論文集の刊行やデータベース公開により国内外に積極的に発信した。また，共同研究の成果を方言や一般向け入門書（6 冊）や辞書（1 冊），専門家向け出版物（9 冊）として刊行するとともに,『国語研プロジェクトレビュー』,『国語研論集』の刊行により発信した。

※各研究系・センターの計画と実績については,「各研究系・センターの評価」を参照

（２） 研究実施体制に関する目標を達成するための措置

【計画】

全国的・国際的研究拠点としての機能を強化するため，言語系学会連合との協力関係を深めるとともに，海外における英文成果刊行や新たな国際的研究連携の構築を促進する。また，大学共同利用機関として発足し第1期目であることから,「2年目の検証」を経た4年目の総括として，基幹型共同研究プロジェクトの学術的成果を広く研究者コミュニティに披露する研究発表会を行う。年度内に終了する中小規模のプロジェクトについては，評価を行った後，最新の学術動向，研究者コミュニティの意見等も踏まえながら翌年度からの新展開プロジェクトを策定する。

【実績】

研究拠点としての機能を強化するため，学術的成果を広く研究者コミュニティに披露するための基幹型プロジェクト研究成果発表会 2014（2014.2.2，於学術総合センター，参加者 121 名）を開催するとともに，運営会議外部委員，外部評価委員，言語系学会連合に所属する主な学会の代表者等と現在及び将来の国語研の研究活動に関する意見交換会を実施した。

第三期中期計画における共同研究等に関して，運営会議等において意見・要望を聴取するとともに，所内に将来計画委員会を設置し，検討を進めた。所長リーダーシップ経費により，2012～2013 年度に終了した中小規模プロジェクトのリーダーを念頭において第三期に向けてのフィージビリティスタディを所内で募集し，実施した。

（３） 共同利用の基盤整備等共同利用の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

１）ウェブ関係を担当する委員会を設置し，各種の情報をわかりやすく提供できるようにウェブサイトを改修する。

２）『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の公開を継続するとともに，超大規模コーパスのためのデータ収集を進める。

３）新規に時代和文作品の歴史コーパスを試験公開するほか，既公開のデータベースを更新する。

４）各種研究調査成果・資料等の収集・整理を引き続き進めるとともに，既存研究資料・成果物の利用促進のため，言語学や日本語学関係の諸学会と連携しながらウェブ化及び情報発信を行う。

【実績】

１）情報発信委員会の下に研究資料・データベース部会とウェブサイト部会を設けるとともに，特任助教 2 名を雇用して，研究情報資料センターの機能強化を行った。次年度に実施するウェブサイトリニューアルの準備を進めた。

２）『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の公開を継続した。100 億語を超える超大規模現代日本語コーパスについては，データ収集を終了し，このデータに対応可能な形態素解析技術と検索技術の開発を進めた。

３）将来的に上代から近代までをカバーする「日本語歴史コーパス」の第 1 弾として『平安時代編』を構築し，2012 年度の先行公開版を経て完成版を公開した。「現代日本語書き言葉均衡コーパスオンライン検索システム『NINJAL-LWP for BCCWJ』」，「明六雑誌コーパス」，「UniDic」など既公開のデータベース，ソフトウェアを更新した。

４）日本語研究・日本語教育文献データベース，雑誌『国語学』全文データベース等のデータ追加を行った。アメリカ議会図書館所蔵『源氏物語』（須磨・柏木）及び研究図書室所蔵の日本語史研究資料「古今文字讃」，「明六雑誌」等の画像公開を行った。

また，言語系学会連合との包括協定により，ウェブサイト公開前の文献情報データベースのデータ提供と，研究図書室の文献コピー無料化を開始した。

５）歴史コーパス開発等のため，実践女子大学と研究連携協定を締結した。(2014.2.28)

（４） 国際化に関する目標を達成するための措置

【計画】

１）2012 年度に締結した欧州の出版社との提携に基づき，包括的な日本語研究ハンドブックシリーズ（英文）の海外出版に向けて執筆・編集を進めるほか，日本語研究の成果を積極的に英文で海外に発信する。

２）アジアの言語学研究機関との研究協力を検討する。

３）NINJAL 国際シンポジウムを開催するとともに，海外に拠点を持つ国際会議を誘致する。

４）海外の大学・博物館・資料館・史料館と連携し，その収蔵する日本語関連音声資料の書き起し・電子化を実施する。新たな音声資料の発掘調査を継続的に実施する。

５）これまで日本人研究者にあまり知られていない日本語関係の外国語文献を論文及び研究発表により紹介する。

【実績】

１）Mouton 社の英文日本語研究ハンドブックシリーズ中，琉球語，音声学・音韻論，心理言語学の 3 巻について内部レビューによる論文原稿を完成し，言語学専門のネイティブスピーカーによる英文校閲を行った。その他の巻についても，論文執筆，英語翻訳，内部レビューなどの編集作業を進めた。

２）従来のヨーロッパの研究機関に加えアジアとの連携を強化するため，台湾中央研究院語言學研究所と研究連携協定を締結した。(2014.3.7)

３）NINJAL 国際シンポジウムとして，共同研究に基づく「Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages」(2013.12.14-15. 於国語研，参加者延べ 232 名）と，海外国際会議を誘致した「ICPLJ8 (8th International Conference on Practical Linguistics of Japanese) (2014.3.22-23. 於国語研，参加者延べ 412 名）を開催した。加えて，理論・構造研究系の国際シンポジウム「The 3rd International Conference on Phonetics and Phonology」(2013.12.20-22. 於国語研，参加者延べ 304 名)を開催した。

４）全米日系人博物館，ハワイ日本文化センター，UCLA Charles Young Research Library，ブラジル日本移民資料館等が所蔵するオーラルヒストリー資料の書き起こし及びデータのデジタル化に関して覚書の締結に向けた検討を継続した。

５）これまで国内外の専門家にほとんど知られていなかった世界初の日本語複合動詞辞書（英文，Charles Kenneth Parker (1939) *A Dictionary of Japanese Compound Verbs*. Maruzen）の紹介記事を，共同研究の論文集『複合動詞研究の最先端 ―謎の解明に向けて―』(ひつじ書房）に掲載し，現代的意義と問題点を解説した。

６）所員の国際的活動を促すため，所長リーダーシップ経費により，短期海外研修（2 件）を実施した。

（５） 研究成果の発信と社会貢献に関する目標を達成するための措置

【計画】

１）日本語研究及び日本語教育研究に関する研究情報データベースを定期的にアップデートする。

２）「危機方言」調査資料及び従来から研究所が所蔵する方言談話資料をデータベース化する。

３）各地において一般市民向けの講演会（NINJALセミナー）を開催する。また，「方言と震災」に関するシンポジウムを開催する。

【実績】

１）日本語研究及び日本語教育研究に関する，「日本語研究・日本語教育文献データベース」，「蔵書目録データベース」等を定期的にアップデートした。

２）2010年に調査を行った喜界島方言（奄美語）5地域の基礎語彙550語について音声付きデータベー

スを整備し，公開の準備を進めた。方言コーパスの構築に向けて，国語研が所蔵する30年前の方言緊急調査の自然談話データのうち15地点の音声データ，方言テキスト，共通語テキストの整備を行った。また，共通語検索システムの試作版を作成した。 ３）対象別の各種プログラムを実施した。 ○一般向け ・八丈町と共催でNINJALセミナー「八丈方言の昔と今 ―全国危機方言サミットに向けて―」（2013.11.9. 於八丈町，参加者108名） ・沖縄県久米島町と共催でNINALセミナー「久米島方言調査の集い」（2013.12.4. 於久米島町，参加者95名） ・国語研の活動について紹介する「国語研の一般公開」（2013.10.19. 於国語研，参加者385名） ・優れた研究成果を広く一般に発信するNINJALフォーラム「近代の日本語はこうしてできた」（2014.3.30. 於学術総合センター，参加者311名） ・2012年度に締結した立川市歴史民俗資料館との総合協力に関する合意書に基づく共同企画事業として，「ニホンゴ探検」での歴史民俗資料館による所蔵資料の展示・説明，歴史民俗資料館での国語研教員によるセミナー ・機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」の総括班として，シンポジウム「災害に学ぶ ―歴史文化情報資源の保全と再生―」（2014.1.25. 於東京津田ホール） ○小学生対象 ・NINJAL ジュニアプログラム「ニホンゴ探検 2013」（2014.7.20. 於国語研，参加者 248 名） ・江戸川区こども未来館での出張授業「漢字・カタカナ・ひらがなのヒミツ」（2014.7.25. 於江戸川区こども未来館，参加者17名） ４）1 階展示室の展示テーマを「方言」とし，方言地図や方言調査カード，研究に用いた機器類などの所蔵資料を分かり易く展示し，内容を一般見学者向けにリニューアルした。	
自己点検評価	計画（目標）どおり実施した。

《評価結果》

年度計画（目標）を上回って実施した。

平成 25 年度計画は，ほぼ計画通り順調に実施されている。「２年目の検証（※）」を経たのちの研究活動は，当初中だるみが懸念されたが，実際には緊張感を維持して，好ましい成果を得たものと考えられる。それの実例として，2014 年 2 月に行われた「基幹型プロジェクト研究成果発表会」をあげたい。これは奏功すれば国語研の構成員による活動成果のみならず，当該分野の関連研究者を結集し連携関係を築いて，飛躍的な成果をもたらすであろう絶妙の機会である。外部評価委員として，同発表会に臨席し聴講したが，なによりも想定を超える参加者数と，報告・討論の密度に強い印象を受けた。かつての国立機関時代には考えられなかったはずの状況であり，新生の研究所のアクティビティに大きな期待を抱かせるものとなった。運営等にはさらに改善を加える余地もあり，今後の活動を注視したい。同発表会において発表のあった基幹型共同研究 10 件と，ポスター展示・デモンストレーションのあった同型共同研究およびその他の研究については，優れた成果が確認された。なおまた，超大規模コーパスのデータ収集，研究情報発信等，全般に期待通りの成果が上がっている。

※「２年目の検証」:「独立行政法人に係る改革を推進するための文部科学省関係法律の整備等に関する法律」には，国会での修正によりその附則に「国は，移管後二年を目途として当該業務を担う組織及び当該業務の在り方について検討を加え，その結果に基づいて所要の措置を講ずるものとする。」と定められた。文部科学省から国として検討を行うにあたり，人間文化研究機構に大学共同利用機関としての国立国語研究所の検証を求める依頼があった。人間文化研究機構が行った調査・分析結果を受けて，文部科学省及び文化庁が検討結果をとりまとめ，国語に関する学術研究の中核である大学共同利用機関として適切なものであるとの結論が出された。

２．教育に関する目標を達成するための措置

（１） 大学院教育への協力に関する目標を達成するための措置

【計画】

一橋大学との連携大学院プログラムに引き続き協力するほか，他大学との新たな連携大学院の検討に積極的に取り組む。

【実績】

一橋大学との連携大学院プログラムに関わる協定書の見直しを行うとともに，他大学との連携大学院の検討を進めた。

（２） 若手研究者育成に関する目標を達成するための措置

【計画】

2012 年度に拡充した特別共同利用研究員制度により，国内外の大学院生の研究指導を行う。また，フィールド調査その他をテーマとする NINJAL チュートリアルを開催し，国語研のリソースを十分に活用した若手研究者育成を行う。

【実績】

１）2012 年度に拡充した特別共同利用研究員制度により，国内外の大学院生の研究指導を行った（5 名受入（内新規海外 3 名））。

２）大学院生に最新の知見を教授する NINJAL チュートリアルを 2 回開催した。
第 13 回 :「方言の注釈と表記」(2014.3.10. 於 TKP 大阪梅田駅前ビジネスセンター（大阪市），参加者 14 名），第 14 回 :「生成文法理論から見た日本語史」(2014.3.29-30. 於藤女子大学（札幌市），参加者 12 名）

３）日本語書き言葉均衡コーパス，日本語歴史コーパス等の形態論情報検索ウェブインターフェースの使い方講習会等を 7 回開催した。

４）若手研究者を共同研究プロジェクトに参加させ研究者として自立させる指導を行う PD フェローを公募により 7 名雇用した（新規 3 名）。

自己点検評価	計画（目標）どおり実施した。

《評価結果》

年度計画（目標）どおり実施した。

平成 25 年度計画は，ほぼ計画通り順調に実施されている。一橋大学以外の大学との連携大学院の検討を進めていること，特別共同利用研究員制度による大学院生の受け入れ，NINJAL チュートリアルを大阪・札幌で開催したことなど，大学院教育への協力，若手研究者育成への取り組みも進展しつつある。ただし，国語研にとって教育への参画は，従来の経緯からみてハードルも高く，将来性のある取

り組みの展開は，依然として困難を含むことも否定できない。大学院教育における一橋大学との連携については，従来の事情に囚われないような発想を試みて，より密度を向上させるよう努力を続けてほしい。

【総合評価】

人間文化研究機構に加入したのち「２年目検証」において，当初の総合的活動の目標を達成した旨，公式に認定された。危惧されたいくつもの困難は，おおむね克服，回避されたものと考えられる。このことは，当事者・関係者の多大な努力の結果であり，高く評価したい。このことを，組織・運営や管理業務の側面に限定して論じた場合，専門的研究活動の質的向上に資するような組織のあり方についての多様な工夫が要請されるわけであり，今後いっそうの創意ある取り組みを行ってほしい。ことに，これまでややもすれば，「国語」ということで研究・運営にあって「内向き」志向に囚われがちであったことから転換し，グローバル時代に適した対外的交流・連携に向けて，大きく舵を切ることが必要であろう。いずれにしても，日本語に関する全国的，国際的研究拠点となるべく，真剣な努力が続けられている。使命が異なるので比較は難しいが，研究所の過去と現在を知る人は，その間における所員・職員の努力に等しく敬服し，目標の達成度を高く評価することだろう。短期的成果のみにこだわらず，大きな将来構想の下，今後も弛まぬ努力を続けてほしい。

【管理業務】

Ⅱ．業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

１．組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】 各機関においては，外部有識者の参加を得て，運営会議及び各種委員会を開催するとともに，機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】運営会議において，研究教育職員の選考について審議したほか，研究所の将来計画について委員に意見照会を行った。国際的研究連携の多様化を図る必要があるとの意見を踏まえ，台湾中央研究院語言学研究所との研究協力協定を締結した。また，外部評価委員会からのプロジェクト間の連携を有機的に展開すること，立川断層への一層の防災対策を講じること，との指摘を受け，プロジェクトの一部組換えを実施し，立川防災館での実地訓練に職員を参加させ，寝袋や発電機を新たに備えた。

【計画】機構長のリーダーシップのもとで，法人としての一体的な運営を推進するため，機構長裁量経費を確保し，戦略的・重点的に取り組むべき事業等について資源配分を行う。また，各機関においても，機関の長のリーダーシップのもと，戦略的・重点的に取り組むべき事業等について資源配分を行う。

【実績】所長のリーダーシップのもと，職員の海外短期研修（2 件），研究所の将来を見据えたフィージビリティスタディ等の研究促進プログラム（9 件）を実施した。研究情報資料センターの情報発信力強化のため，特任助教２名（データベース担当，ウェブサイト担当）を配置した。（機構長裁量経費により１名，所内措置により１名）

【計画】事務職員・技術職員の採用は，競争試験または選考試験によることとし，競争試験については，

国立大学法人等職員統一採用試験により計画的に実施する。また，機構本部，各機関及び国立大学法人等との積極的な人事交流を行う。人材養成においては，機構のプロパー採用職員の養成と資質向上を主眼とし，研修プログラムの充実を図りながら法人主催の研修を計画的に実施する。また，他法人と連携した研修の実施についても検討する。

【実績】国立大学法人等職員統一採用試験により１名を採用した。一橋大学（転出２名，転入２名）東京学芸大学（転出１名，転入１名）との人事交流を実施した。省庁及び大学等主催の各種研修に職員を参加させ，資質向上を図った。非常勤研究員規程を改正し，3 種類の職種を統一したほか，客員教員に係る時給単価を統一し，処遇の適正化と業務処理の効率化を行った。

【計画】育児休業等の仕事と家庭の両立支援制度について，24 年度に決定した新たな制度や取組みも含めて職員への周知や啓発を継続的に行う。また，男女共同参画委員会において，女性教職員のニーズを把握しながら勤務環境の改善や有能な女性教職員の採用等の取組みに資する今後の課題と方策を検討する。

【実績】育児休業取得要件及び妊婦健診受診時の職務専念義務免除の手続きの周知を行った。新たに 2 名（全 3 名）の職員が育児休業を取得した。

２．事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】効率的なサービス提供が見込まれる業務について外部委託を行うなど，事務の合理化を図る。

【実績】契約職員（情報担当）の退職に伴い，ネットワーク管理業務を専門業者に外部委託し，ネットワーク管理の継続性の確保を図った。業務の効率化と経費節減のため，ペーパーレス会議システムの導入を決定した。研究図書室の開室時間をブックディテクションシステムにより，18時から22時まで延長し，研究支援体制の強化を図った。

自己点検評価	計画（目標）どおり実施した。

《評価結果》

年度計画（目標）どおり実施した。

平成 25 年度計画は，ほぼ計画通り順調に実施されている。国際的研究連携の多様化を図るため，台湾の研究所との機関間協定を締結したが，同研究所の意欲的，積極的な国際活動を考慮にいれるとき，従来の国語研の活動にとって，研究面はもとよりのこと，業務運営の面からも重要なインパクトを与えることになりうるものと期待される。今後，こうした方向性をより活発化させてほしい。人事交流は，それ自体が目的化しないよう，効果を検証しながら進めてほしい。女性所員および職員の研究条件・職場環境についても，引き続きその実態を注視していってほしい。

Ⅲ．財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

１．外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】各機関において，外部研究資金の募集状況等をウェブサイトや電子メールなど複数の方法により周知するとともに，科学研究費助成事業への申請，ルール等についての説明会の実施等により競争的研究資金の積極的獲得に努める。

【実績】文部科学省主催の科学研究費公募要領等説明会に担当者を出席させ，所内の質問等に迅速に対応できるようにした。所内では科学研究費の一層の獲得に向けて申請者が研究計画・方法について，他の研究分野を含む研究者から意見を聞く科研費申請準備会議を実施した。申請数，採択件数，金額とも増加し，新規採択は前年度の 8 件から 20 件になった。

２．経費の抑制に関する目標

【計画】（１）人件費の抑制：

教育研究の質の維持・向上に配慮しつつ，適切な人員配置等により，人件費の抑制を図る。

【実績】毎週水曜日昼休み中に定時退勤日の所内放送を流し，計画的に業務を進めることで定時の退勤を促し超過勤務の削減を図った。契約職員の任期満了退職に伴い，後任補充をパートタイム職員とし，経費を削減した。昨年度に引き続き人件費抑制を継続した。

【計画】（２）管理的経費の抑制：

中期計画に掲げる管理的経費の抑制を着実に推進するため，一般管理費については，21 年度決算額を基準として，特殊な要因を除き概ね４％の経費を抑制する。このため，以下に掲げる取組等を進める。支出契約については，費用対効果の見極めや仕様書内容の見直しを行う。教職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図り，省エネ機器の導入などによる経費の抑制に努める。施設・設備の運転状況・点検結果などから，老朽化状況を的確に把握するとともに整備計画書を見直し，その計画により最適な維持管理を行い修繕経費の抑制に努める。

【実績】一般競争以外の年間業務委託契約（6 件）について見積合わせ公告（ウェブサイト，掲示）を行い，競争性を確保して 1,852 千円の経費削減を図った。4 階テラス部分にグリーンカーテンを設置した。また，節電のポスターを掲示し，教職員に対し省エネ意識の啓発を図った。建物管理業務を専門業者に外部委託したことにより，過去の修理歴，故障履歴を費用とともに記録・把握させ，計画的に予防保全を実施し，経費の抑制に努めた。

自己点検評価	計画（目標）どおり実施した。

《評価結果》

年度計画（目標）どおり実施した。

「外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標」に関しては，科学研究費補助金の採択件数が前年度の８件から 20 件へと飛躍的に増加したことが高く評価される。経費の抑制についても努力の跡が認められる。

Ⅳ．自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

１．評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】各機関において自己点検・評価等を実施し，組織運営の改善に活用する。

【実績】24 年度実績に関する外部評価委員会による，プロジェクト間の連携を有機的に展開することの意見を踏まえ，25 年度にプロジェクトの一部組換えを実施した。

また，立川断層に対する防災対策を一層充実させるようにとの指摘を受け，職員を立川防災館における災害時に取るべき行動や人命救助の方法について学ぶ体験学習に参加させたほか，食料，水，寝袋の備蓄や発電機の整備を行った。

25 年度実績も，研究系・センター，組織・運営，管理業務について外部評価を実施する予定で，指摘事項には次年度以降対応していく。

２．情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】各国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を，機構及び各機関のウェブサイト等に掲載し，広く一般に公開する。

【実績】

○外部評価委員会による平成 24 年度基幹型共同研究プロジェクト及び組織運営に関する評価結果報告書を国語研ウェブサイト及び 2012 年度年報に掲載した。

○大学共同利用機関として発足後は作成できていなかった年報について，研究所の活動全般を記した『国立国語研究所年報 2012 年度』を刊行し，関係機関への送付，ウェブサイトへの掲載を行った。

○優れた研究成果を広く一般に発信する NINJAL フォーラム「近代の日本語はこうしてできた」（2014.3.30，於学術総合センター，参加者 311 名），一般の方に研究所を公開し，国語研の活動について紹介する「国語研の一般公開」（2013.10.19，参加者 385 名）を開催した。

○共同研究の成果の発信として，

・共同研究の成果の発信として，方言や近代書き言葉についての一般向け入門書（6冊）辞書(1冊)を刊行した。NINJALフォーラム「グローバル社会における日本語のコミュニケーション ―日本語を学ぶことはなぜ必要か―」の内容を冊子「NINJALフォーラムシリーズ」として図書館に寄贈，ウェブ上で公開した。

・共同研究プロジェクトを展望する『国語研プロジェクトレビュー』(年3回)，研究成果の公表及び所内若手研究者育成を目的とする論文集『国立国語研究所論集』(年2回）をオンライン版と冊子体で刊行した。

・日本語学習者や大人も楽しめる子供向けの「こくごけん・こどもパンフレット」をウェブ上で公開した。

○メールマガジンを月 2 回発行し，国語研が開催するシンポジウム，講演会や講習会，データベースの公開等の情報について発信した。

自己点検評価	計画（目標）どおり実施した。

《評価結果》

年度計画（目標）どおり実施した。

平成 25 年度計画は，計画通り順調に実施されている。また，自己点検に関わる委員会の業務は，適切な情報収集も行っており，当外部評価委員会としても有益な判断材料を提供されている。

Ⅴ．その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置を達成するための措置

１． 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】各機関においては，施設整備計画に基づき，研究施設等の適正な維持・管理に努めるとともに，既存施設の有効活用を図る。また，各機関に日常管理の基となる管理標準を整備するとともに省エネ機器等の施設整備を図り，省エネを推進する。施設設備の使用状況の点検評価を行い，施設の有効活用に努める。

【実績】研究環境の充実を図るためパーティションを撤去して図書室の拡充を図った。また，特任助教採用に伴い既存居室を改修し新たに研究室を設けるなど施設の有効活用に努めた。建物内の講堂前，図書コピー室等の共用部分に人感センサーを設置し省エネとなるよう改修を行った。グループウエアからの施設予約を活用し共用スペースの有効活用を図った。

２．安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】「機構における危機管理体制」に基づき，安全で快適な職場環境の維持・確保に努める。また，機構及び外部機関の主催する危機管理に関する研修会等へ職員を積極的に参加させる。

【実績】情報公開・個人情報保護制度の運用に関する研修会（総務省），関東地区行政管理・評価セミナー（総務省），関東・甲信越地区国立大学法人等安全管理協議会（東京外国語大学），苦情相談実務研修会（日本人事行政研究所），公正採用選考人権啓発推進員研修会（立川公共職業安定所），メンタルヘルス講習会（立川労働基準監督署），4 機構合同個人情報保護研修に職員を参加させ，危機管理に努めた。

【計画】労働安全衛生法等を踏まえ，安全衛生環境整備及び防災対策等の対応を実施する。また，職員等の安全確保や防災意識の向上のため，防災訓練等を実施する。定期健康診断の実施及び外部専門医等の協力を得て，職員の安全と健康の確保に努める。

【実績】安全衛生管理委員会による「職場の設備に関するアンケート」を実施し，職員から要望のあった駐輪場の改修を行った。職員の防災意識向上のため立川防災館において，災害時に取るべき行動や人命救助の方法についての体験学習に参加させた。立川病院健康医学センターでの職員定期健康診断，毎月の産業医による健康相談，所内でのインフルエンザ予防接種，常備薬品の購入を行い，職員の健康管理に努めた。

【計画】情報セキュリティポリシーのもとに機構本部及び各機関が定める情報セキュリティ対策基準並びに情報セキュリティ実施手順について，必要に応じて，見直しを行う。

【実績】サイボウズ・メールアカウント管理について説明会を開催した。アカウントの発行等について取り決めをし，併せて申請窓口を一本化することにより，情報セキュリティの統一が図られた。情報セキュリティ対策基準について，情報システム・セキュリティ委員会にて不正発生時の連絡体制の見直し等を開始した。

３． 適正な法人運営に関する目標

【計画】国立大学法人法その他関係法令及び本機構の諸規程に基づき，適正な業務運営を行うため，法令遵守等に関する研修を実施し意識啓発を行う。また，研究活動における公的研究費の不正使用防止

計画に基づき，教職員に対し説明会を実施するなど外部資金の取り扱い等における不正行為の防止に努める。さらに教員等個人に対しての寄付金については，各機関において取扱いの周知徹底を図り，不適切な経理の防止に努める。 **【実績】**法令遵守等に関する研修として，情報公開・個人情報保護制度の運用に関する研修会（総務省），公文書管理研修Ⅰ（国立公文書館），人間文化研究機構法令遵守研修，公正採用選考人権啓発推進員研修会（立川公共職業安定所），4機構合同個人情報保護研修等に職員を参加させ，適正な業務遂行能力の向上に努めた。 綱紀粛清，職員倫理について専任及び特任教員に会議で説明するとともに有期雇用職員も含め，全職員に書面で周知した。また，寄附金の取扱いに関する服務規律の遵守についても専任及び特任教員に会議で説明するとともに，有期雇用職員も含め全職員に書面で周知した。研究活動における公的研究費の不正使用防止については，科研費申請準備会議において説明し，新規採用の研究者には採用時に個別に説明した。また，旅費執行についてグループウエアに掲載することにより適正な経費執行に対する意識啓発を行った。	
自己点検評価	計画（目標）どおり実施した。

《評価結果》

年度計画（目標）どおり実施した。

平成25年度計画は，ほぼ計画通り順調に実施されており，研究機関の管理業務にとって必要な範囲内における改善に取り組んでいる。計画目標に即して，ほぼ満足できる水準にあるが，いっそうの改革のスピードアップに取り組んでほしい。安全管理については，昼間の入館時のセキュリティチェックがなされていないので検討してほしい。

【総合評価】

国語研の立川移転が完了してのち，この新しい環境に適合すべく努力が払われてきており，周囲の研究機関とのあいだで経験・情報の交流も実をあげはじめていることを，評価したい。管理業務に関しては，人事・施設，財務・評価等にわたって真摯な取り組みが行われている。近い将来において，これらの実績をもとに，国立の研究所による協同の研究環境創成に向けて，新機軸を打ちだすような意欲を期待したい。すでに筑波地区の諸機関が先行する成果を残していることも参考にして，諸方向を考えることができるはずである。近時，理系の分野に研究規律，研究倫理に関する不祥事が目立つことから，分野が異なるとは言え，予防措置が検証されるよう希望する。

担当：樺山 紘一
林　史典

２．資　　料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

◎ **樺山　紘一**　印刷博物館館長，東京大学名誉教授，元国立西洋美術館館長
専門：フランス中世史

○ **林　　史典**　聖徳大学言語文化研究所長，筑波大学名誉教授，元筑波大学副学長
専門：日本語史

仁科 喜久子　東京工業大学名誉教授
専門：日本語教育，コーパス言語学

門倉　正美　横浜国立大学名誉教授，日本語教育学会副会長
専門：日本語教育

後藤　　斉　東北大学大学院文学研究科教授
専門：コーパス言語学

渋谷　勝己　大阪大学大学院文学研究科教授，日本学術会議連携委員
専門：日本語方言

早津 恵美子　東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
専門：日本語文法，意味論

峰岸　真琴　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
専門：東南アジア言語学

任期：平成 24 年 10 月 1 日～平成 26 年 9 月 30 日（2 年）

◎委員長　　○副委員長

国立国語研究所 平成25年度業務の実績に関する評価の実施について

1． 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では，年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成25年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価を行い，その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施した。

2． 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した，平成25年度の計画及びその実施状況が記入された「25年度業務の実績報告書」（「研究系・センターの研究活動」，「組織・運営」，「管理業務」）の内容を検証した。

「研究系・センターの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。

	点検項目	観　点
研究	共同研究の推進	・当該年度の目標はどの程度達成されたか。
	研究実施体制	・共同研究員の適切な配置など，研究組織が工夫されているか。 ・プロジェクトリーダーのリーダーシップのもとに研究が実施されているか。 ・経費が適切かつ有効に活用されているか。
	共同利用の推進	・研究データの整理・蓄積・公開が適切に行われているか。 ・研究会等が適切に開催されているか。また，共同研究員以外の研究者へ研究参加の機会が開かれているか。
	国際化	・海外の研究者や研究機関との連携が行われているか。 ・海外への研究成果の公表が行われているか。
	研究成果の発信と社会貢献	・プロジェクトのHPを開設するなど，研究成果の発信を積極的に行っているか。 ・研究成果が学術雑誌，学界等に公開され，研究水準が国内外において評価されているか。 ・研究成果を社会貢献に結びつけているか。
教育	大学院教育への協力	
	若手研究者育成	・若手研究者のプロジェクトへの参加など，若手研究者の育成に工夫がなされているか。

※「点検項目」は，第二期中期目標・中期計画の「研究機構の教育研究等の質の向上に関する目標」に基づく。「観点」は，それを実施するために必要と思われる事項を自己点検・評価委員会が検討し，定めたものである。

基幹型共同研究プロジェクト一覧

研究系センター	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・構造	日本語レキシコンの音韻特性	語彙の音韻特性	窪薗晴夫
	日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	日本語レキシコン	影山太郎
	文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	文字と社会言語学	横山詔一
	日本語レキシコン―連濁事典の編纂	連濁事典	Timothy J.VANCE
時空間変異	消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	危機方言	木部暢子
	方言の形成過程解明のための全国方言調査	方言分布	大西拓一郎
	多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	現代日本語の動態	相澤正夫
	日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	大規模経年調査	井上史雄
	日本語変種とクレオールの形成過程	海外の日本語変種	真田信治
	日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	日本語疑問文	金水　敏
言語資源	コーパスアノテーションの基礎研究	アノテーション	前川喜久雄
	通時コーパスの設計	通時コーパス	近藤泰弘
	コーパス日本語学の創成	コーパス日本語学	前川喜久雄
言語対照	日本列島と周辺諸言語の類型論的･比較歴史学的研究	東北アジア言語地域	John B.WHITMAN
	述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	述語構造	Prashant PARDESHI
日本語教育	多文化共生社会における日本語教育研究	多文化共生	迫田久美子
	コミュニケーションのための言語と教育の研究	コミュニケーション	野田尚史

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日
国語研規程第 7 号

（趣旨）
第１条　この規程は，国立国語研究所組織規程第７条の規定に基づき，国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

（任務）
第２条　委員会は，次の各号に掲げる事項について審議する。
（１）自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
（２）研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
（３）共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
（４）その他評価に関すること。

（組織）
第３条　委員会は，１０名以内の委員をもって組織する。
２　委員は，研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

（任期）
第４条　委員の任期は２年とし，再任を妨げない。ただし，委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は，前任者の残任期間とする。

（委員長）
第５条　委員会に委員長を置き，委員の互選により決定する。
２　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。
３　委員長に事故あるときは，あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

（議事）
第６条　委員会は，委員の過半数が出席しなければ，議事を開き，議決をすることができない。
２　委員会の議事は，出席した委員の過半数で決し，可否同数のときは，議長の決するところによる。

（意見の聴取）
第７条　委員会は，必要に応じて委員以外の者に出席を求め，意見を聴取することができる。

（外部評価の実施等）
第８条　外部評価の実施は，研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。
２　委員会は，評価の結果を所長に報告するものとする。

（庶務）
第９条　委員会の庶務は，管理部総務課において処理する。

（その他）
第１０条　この規程に定めるもののほか，外部評価の実施に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附　則
この規程は，平成２１年１０月１日から施行する。

国立国語研究所 平成 25 年度外部評価委員会（第 2 回）議事次第

日　時：平成 26 年 2 月 2 日（日）17：30～18：00

場　所：学術総合センター2 階会議室 202

議　事：

1．前回議事概要（案）確認

2．平成 25 年度業務の実績に関する評価について

・共同研究プロジェクト

・研究系・センターの実績

3．その他（報告）

・平成 24 年度業務の実績に関する外部評価委員会からの指摘事項への対応について

・人間文化研究機構の平成 24 年度に係る業務の実績に関する評価結果について

国立国語研究所 平成 26 年度外部評価委員会（第 1 回）議事次第

日　時：平成 26 年 5 月 15 日（木）10:30～12:20

場　所：トラストシティカンファレンス・丸の内 RoomB

議　事

確認

２．第二期中期目標・中期計画・平成 25 年度業務の実績に係る評価結果の確認について

３．その他

報　告

１．第二期中期目標・中期計画・平成 26 年度計画について

国立国語研究所　年報　2013年度

2014年12月20日　発行

編集・発行
大学共同利用機関法人　人間文化研究機構
国立国語研究所
〒190-8561　東京都立川市緑町10-2
TEL：042-540-4300　　FAX：042-540-4333
http://www.ninjal.ac.jp/

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所